
とある忍術の火影忍軍

ぎんぎらぎん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある忍術の火影忍軍

【コード】

N5119M

【作者名】

ぎんぎらぎん

【あらすじ】

科学と魔術と忍術が交差する時、物語は始まる

人物紹介（烈火の炎）（前書き）

烈火を知らない方に優しく、真面目に書き直しました。
徐々に増やしていきます！

人物紹介（烈火の炎）

花菱烈火

【容姿】

ツンツンした前髪と、左頬の絆創膏が特徴的。ルックスはそれなりに評価されている。身長、体重ともに高校生男子の平均くらいだと思われる。

【性格】

一言で説明するなら、典型的な主人公タイプ。忍者に強い憧れを持つ。また、基本的にフェミニストで女とは闘いたがらない（風子のような例外も存在する）。ただ、それは男尊女卑から来るものではなく、女であっても心の強い相手は認める器量を持つ。

人殺しはよしとせず、敵であっても助けられる場合が多々ある。筋金入りの頑固者で、自分の信ずる道を進み続ける。それが、紅麗を始めとする多くの人間を変えてきた。

【能力】

火影忍軍七代目頭主であり、究極の炎『八竜』を操る。

崩なだれ：壱式。

一番最初に取得した竜。大きな瞳と長いヒゲが特徴的。炎を球状にして撃つ、遠距離型。数は1〜複数と際限なく増やせると思われる。大きさも自由自在。

碎羽さいは：弐式。

崩と同時期にやや遅れて取得した竜。刃のような一本角で、顔の両側に四つずつの眼を持つ。

炎を自身の角のような形に変化させる。また、炎が効かない相手にも刃として最低限の効果がある。

原作でもっとも多く使用された。

焰群ほむら：参式。

対空海戦、烈火の心意気に惹かれて自ら力となる。十字に開く嘴の
ような口をしている。

炎をムチのように変化させ、腕に巻き付けてパンチの破壊力増加、
単純にムチとしての遠距離攻撃、と応用力が高い。

刹那：肆式。

幻獸朗が烈火の八竜を奪おうとした時、誤って呼び起こした。のっ
ぺらぼうのようだが、本来は一ツ目の竜。八竜の中で最も残忍。

能力は、その眼を見た相手を焼き尽くす一瞬の炎『瞬炎』。視覚的
情報に惑わされることはないため、百発百中。しかし、その性質状
味方を巻き込む危険性もある。

円：伍式。

対音遠戦、音遠を死なせたくないという烈火の気持ちに呼応して現
れる。

額に第三の眼を持つ。

三つ以上の火玉で面を為し、結界を生み出す。かなり強固で、正攻
法で破るのは困難を極めるが、頂点である火玉を攻撃されると脆い
一面を持つ。

墨：陸式。

火車丸に八竜を真似られ、戦意を喪失した烈火に謎かけをして立ち
直らせる。

爛れた皮膚でトサカが生えている。

烈火がイメージした形に炎を変化させる。囮として使われることが
多いが、攻撃能力も備わっている。

虚空：漆式。

？謎のジジイ？として、決戦前の烈火たちの前に姿を現し、火影メ
ンバーに助言を与えた。八竜では唯一、烈火の封印から自由に逃れ
ることが出来る。

一ツ目の竜で、手には自身の攻撃の核となる珠を持つ。

珠を口で構えてレーザー砲のような一撃を放つ。攻撃までの隙は大
きいが、威力は絶大で、崩との合成技では東京ドームクラスの建物

を全壊させた。もちろん、烈火の炎では一番の破壊力を誇る。

裂神^{れっしん}：捌式。

八竜の長で、その正体は烈火の父・桜火。生前は気さくな人物で、皆から慕われていた。

後ろに伸びた二本の角と、鬣が特徴。

召喚の際には、他の七匹の竜を同時に呼び出すという特別な条件がある。

能力は、死者の魂を炎に変え、使役すること。また、特殊な才能を持つ者を炎にした際は、その能力を炎に反映させられる。

佐古下柳

【容姿】

サラサラの茶髪の少女。背中に届くロングヘア！。

お嬢様育ちということもあり、大人しげでかわいらしい顔立ち。

【性格】

基本的に天然で幼いところがある。

世間知らずで、高校生なのに『デート』の意味を知らなかった。心優しく、敵の治療をしたり、天堂地獄の呪いで死ねなくなった盗賊のために涙を流すこともあった。また、どんな仕打ちを受けても、友達は絶対に裏切らない。

守られるだけの自分にジレンマを感じ、烈火たちの力になれることを喜ぶなど、友達想いで芯が強い。

【能力】

手を翳すと、生き物のケガや病気を治すことができる。

血液型が同じなら、自分の血で輸血することも可能。

霧沢風子

【容姿】

サイドが長めのショートヘアで、額にバンダナを巻いている。スタイルがいい。

【性格】

烈火の幼馴染みであるがゆえ、彼の影響を大きく受けており、筋の通らないことは大キライ。

男勝りで、遊園地よりも雀荘、競馬場を好む。

烈火、土門に比べれば常識的な方。

仲間想いで優しい性格ではあるが、一方で「困ってる人全員を救えるワケがない」など、ドライな考えも持っている。

【魔導具】

風神：右腕に装着する手甲のような形。

虚空の遺した最高傑作。その力は絶大で、単純な威力のみでなく、次元の壁を破ることも可能。意思を持つ魔導具でもある。

石島土門

【容姿】

腐乱犬フランケンのアダ名の通り、いかつい外見。さらにはモヒカンに鼻ピアスと、かなりインパクトがある。

【性格】

体のわりに臆病で、思い込みも激しい。しかし、火影メンバーの中で最も強い精神力の持ち主で、『縛呪』による精神破壊に打ち勝った。

裏武闘殺陣の激戦で皮剥けた。風子に惚れており、何回もアタックしている。でもフラれ続けている。

幼女（+背の低い女性）にやたらとモテる。

【魔導具】

土星の輪：自身の筋力を極限まで高める。シンプルだが、ゆえに土門との相性がいい。

ちなみに本来は指輪だが、土門は鼻ピアスとして使用。

鉄丸：ビー玉サイズの魔導具で、飲み込むことで効果を発揮。術者の体を鉄に変える。物理的・精神的攻撃を両方シャットアウトする最強の防御魔導具。
土星の輪との相性もいい。

水鏡凍季也

【容姿】

女のようにキレイな顔立ちで、水色の髪も柳より長い。そのためよく女扱いされる。【性格】
火影の中で最も冷酷だと自負しており、実際、負けを認めた相手の腕を斬り落とすなどの行為も見られた。また、非常に計算高く、時として自分の命をも勘定に入れた策を取ることも。

毒舌で、主に土門に辛辣な言葉をかける。

火影のブレイン的存在でもある。

【魔導具】

閻水：剣の柄。液体であれば水でもガソリンでも刃とすることが出来る。

さらには、状態変化も操り、気体、液体、固体と自由に姿を変える。水鏡はそれを利用した『氷紋剣』を使う。

小金井薫

【容姿】

年齢の割に背が低い。俗に言うシヨタで、通っていた中学校では親衛隊ができるほどの人気を誇っていた。

【性格】

天真爛漫。外見相応に穏やかで、同時に生意気でもある。しかし、己の浅はかさのせいで仲間が負傷した際は、そのせいで闘いが手につかなくなっただほど責任感が強い。

諭え殺し合いであつても鬪いを楽しむことができ、相手が落とした武器を拾わせるなど、余裕を持って鬪う。また、それが彼の強さの秘訣であり、上述したように焦りがある場合は実力を十分に発揮できない。

【魔導具】

鋼金暗器：薙刀のような形の武器。しかし、それは六つある顔の一つでしかなく、他にも様々な武器に変形する。

紅麗

【容姿】左目から頬にかけての大きな火傷の跡がある。

登場時から終盤までに髪がかなり伸びた（他に髪が伸びたと明確にわかるのは柳と水鏡くらい）。

【性格】

残虐非道。人を殺すことに躊躇いを覚えず、味方であつても容赦なく制裁を下す。

烈火が生まれたことで母親共々虐げられた過去を持ち、そのため烈火を深く憎んでいた。

しかし根は優しい人間であり、志半ばに死した紅や磁生を炎にして共に歩むことを決め、人質となった義母のために仇敵とも言える森光蘭に従い続けた。

生い立ち、考え、鬪い方など、烈火とは正反対であり、『烈火の炎』におけるメインテーマの一つを担う存在である。

【能力】

死者を炎に換える。型は不死鳥。

この能力で前述の紅や磁生、空の面々を炎にした。

人物紹介（烈火の炎）（後書き）

これからもたまにキャラ追加するのでどうぞよろしく！

其之零・序章（前書き）

初の連載、クロスものです！設定の矛盾、理論の破綻等至らない点が多くあると思いますが、どうか目を瞑ってやって下さい！
それではどうぞお楽しみ下さい！

其之零：序章

『学園都市』 面積は東京の3分の2を占め、230万人（うち八割は学生）もの人間が住む巨大都市。23の学区に分けられるその街の第七学区に『窓のないビル』は存在する。

現在、その建物の中で2人の人間が対話していた。一人は緑色の手術衣を着て、弱アルカリ性培養液に満たされたピーカーに逆さに浮かんでいる。

「感謝するよ。極上の“原石”を三人も提供して貰えるのだからな」
“男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも”見える人間、アレイスター「クロウリーは笑みを浮かべる。

「構わぬよ。ただ儂のする事に手出しをしなければな」
アレイスターの向かいに立つのはかなりの年齢であろう老人。長く立派な白髭をたくわえたその姿は、まさに人々が抱く『仙人』のイメージそのままであった。

「フム…。私としては君たちの持つその“力”にも興味があるのだが…？」
「ククク…この力は貴様の知る“魔術”でも“科学”でもない“忍術”、さらにその中でも“最強”で“最恐”で“最凶”のそれじゃ。貴様も迂闊に手を出せまい？」

老人もその顔を凶悪で醜悪な笑みで歪ませる。

「この力があれば我等の野望も叶うに違いない。そんなものを簡単にはくれてやらんよアレイスター」

老人の名は幻獣朗。“二つの意味”でここに存在するはずのない人間だった。

其之零：序章（後書き）

以後もなるべく早めに更新していきたいと思いますが、行き当たりばったりで書いているので遅くなることも多々あると思いますので、あまり期待しないで待つて頂けると嬉しいですよ。

感想も頂ければ嬉しいです。

どうぞ宜しくお願いします！！

其之壱：消失

8月の下旬、太陽に焼かれるアスファルトの上を、学生服姿の五人の男女が歩いていった。

「やってられつかあー！」

うだるような暑さを吹き飛ばさんとするかのように、ツンツン頭の少年・花菱烈火は叫んだ。

「ぬわんで夏休みだつてのに学校行かないかんのぢやあー！」

「しょうがないよ。今までさんざんサボっちゃったんだから」

吠える烈火を宥めるのは、彼の恋人である佐古下柳。

「柳さんの言う通りだ猿。留年したくなければ文句を言つな猿」

「んだと固羅水鏡いー！つーかなんで2年のテーマがここにいったよー！」

「僕だつて好きで来たんじゃない。先生に監視を頼まれたんだ。放つておくとお前とこのゴリラは絶対に来ないからな」

そう言う水鏡凍季也。その右手はモヒカン頭の大男を引っ張っている。

「イヤダ…勉強イヤダ…補習イキタクナイ…」

ブツブツと呟いているその男の名は石島土門。一部から“鬼”と呼ばれる程の男だが、今やその威厳は欠片もない。

「グチグチ言ってるんじゃないよ土門！後でナデナデしたげるからキビキビ歩きな！」

そう言つて土門をたしなめる少女、霧沢風子。彼女もまた、烈火・土門と共に地元では問題児として有名である。

ギャーギャーと騒ぎながら学校へと向かう五人。しかしその顔はどこか楽しそうでもあった。

今から遡ること三ヶ月前。烈火と柳の出会いから、彼らの運命は大きく動いた。

火影、魔導具、麗、裏武闘殺陣、天堂地獄 学校で授業を受けていても絶対に耳にすることはないのである。彼らはこれら全てと深く関わって来た。殺人のプロと殺し合った。ついさつきまで普通に喋って動いていたひとが、時に首をはねられ、時に胴体が千切れ死ぬ場面 普通の高校生ならばお目にかかることはないような、いや、“お目にかかりたくない”ような場面に何度も出くわした。

それでも彼らは逃げることなく運命に立ち向かった。そうしてついに、史上最悪の魔導具・天堂地獄を打ち破り、“火影”を滅ぼした。自分たちの平和を、自らの手で掴みとった。

そうして手に入れた“平穏な生活”を今彼らは満喫している。“高校生として当たり前”の平和を。

しかし、運命は彼らに平穩を許さない

最初に気付いたのは烈火だった。

ピシリ、という氷が碎けるかのような音と同時に、空間に亀裂が入る。亀裂はどんどん広がり、やがて大きな穴となる。そうして、吸い込む。傍にいる五人を。

「逃げるおーっ！！」

烈火が叫ぶが時既に遅く、最初に水鏡が、次に風子が、土門が、次々とその穴へ吸い込まれていく。

「柳いーっ！」

「烈火あーっ！」

かろうじて柳の手を掴む。しかしそんなことは全く、何の抵抗にもならず、二人とも穴へと飲み込まれた。

五人を飲み込んだ大穴は、満足したかのように消え去った。

烈火達が大穴に飲み込まれる“400年前”、二人の兄弟も同様に大穴へと飲み込まれた。
名を紅麗と薫というその二人もまた、“争い”を終え、“平穩”を求め暮らしていた。

運命は、彼ら七人をまた連れて行く。“平穩”とはかけ離れた“非
日常”の世界へと…。

其之哉・出現（前書き）

やうと二語目…

其之貳：出現

ドソツ、と紅麗は背中からコンクリートの地面に叩きつけられた。ここは廃ビルか何かだろうか。目の前には今にも崩れそうに感じるほどボロボロの天井が広がっている。

「……っ！」

声にならない呻き声が聴こえる。隣を見ると弟の薫が頭を押さえながらゴロゴロと悶えていた。おそらく頭から落ちたのだろう。

「大丈夫か？薫」

声をかけると涙目の薫がこちらを向き問いかけてくる。

「あ、兄者。ここって何処なの？」

「わからん。だが……」だが大穴に飲み込まれた時のあの感覚には覚えがある。紅麗は今までに二回“あれ”を体験している。時を渡る火影忍軍の秘術“時空流離”を。

だがおかしい。それは絶対にあり得ないのだ。

あの時、“もう一人の弟”が天童地獄を破壊した。それと同時に火影は滅びた。火影の遺した全ての“力”と一緒に。

だから“あり得ない”。もしあれが時空流離ならそれはつまり……

そこで紅麗の思考は途切れた。否、左腕を内側から焼くような痛みによって“途切れさせられた”。

「がっ……！？はあっ……！！」

急に左腕を押さえながら苦しみ出した紅麗に薫は心配そうな声をかける。「兄者！？大丈夫なの！？兄者あ……！」

患部であろう左腕を確認しようとするが「あっっ！？」人間の体とは思えない熱さに思わず手を引っ込める。

その間にも紅麗の左腕はブスブスと焼け焦げていく。

「ぐっ……っ……！こ……れは……！？」

“これ”は紅麗も知らない感覚だ。だが症状に見覚えはある。“もう一人の弟”と初めて闘ったとき、自分と“弟”の間にあった大き

な差。それを覆すため“弟”は封印を解いた。火影“炎術士”の証ともいうべき手甲の封印を。

その時“弟”の体が発していた“異変”にいまの症状は酷似している。それはすなわち、火影と共に消滅した紅麗の“力”が復活したということを示している。

ならば絶対に封印を解いてはならない。ここが何処かはわからないが、周りに人がいない保証がなく、しかも弟がすぐ側にいる今、紅麗の力の源である“あれ”を逃がすのは危険すぎる。

激痛に抗いながらも彼の頭は驚くほど冷静に働き、この結論を導き出した。

しかし…

「がああああ！！」苦しみからのがれようとするかのような紅麗の咆哮が響く。紅麗の限界は近かった。（くっ…これまでか…？）

諦めかけたその時、

「早くこれをつける！」

声と同時に紅麗の目の前に一つの腕輪が投げられる。カランという音と共に自分の前に落ちるその腕輪は紅麗のよく知るもの。紅麗の炎の型、“不死鳥”を抑制する封印の腕輪だ。

「薰っ…それを…左…腕につ！」

「…あっ！う、うん！」

言われて薰は紅麗が支える左腕に、触れないように注意しながらなんとか腕輪を嵌める。

途端に紅麗の左腕を襲っていた激痛が引いていく。

「はっ…はあっ」

「危なかったな。あと少しで間に合わなくなるトコだった」

余裕の生まれた紅麗の目が声の主の姿を捉える。

その男は金髪にサングラスを掛け、さらには素肌のアロハシャツという、ガラの悪いボクサー崩れのような出で立ちだった。

「…助かった。感謝する」

男に礼を言う紅麗。だが、

「貴様は何者だ？何故この腕輪を持っていた？そしてここは一体どこだ？」

油断はできない。目の前の飄々とした男は怪しい。怪しすぎる。

「オイオイ、そんないつぺんに質問するなよ。まあいい。オレの名は土御門。その腕輪はある人物に預かった。そしてここは“学園都市”だ」

そしてそして、と土御門と名乗るその男は続ける。

「一緒に来てもらう。アレイスターがお待ちかねだ」
ニヤリと笑いながら土御門は告げた。

其之参：召集と再会（前書き）

更新遅くなつてすみません!!

其之参：召集と再会

「アレイスター？誰だそりゃ？」

今にも崩れそうな廃ビルの中で、烈火は目の前に立つ金髪サンングラスの男、土御門元春に尋ねた。

「ソイツが俺たちをここに呼びやがったのか？」

土門も続けて質問する。

「ヤレヤレ……。さっきの男といい、今日の客人はせっかちさんばかりみたいだな。詳しい話を聞きたけりゃ俺に着いてくるんだな」土御門は若干ウンザリしたように言った。

（さっきの男……？）

自分たち以外にも同じような境遇の者がいるのか？と水鏡は思考する。

この男とおそらくそのバツクについてであろう組織の目的……、それはおそらく、今烈火の服の裾を掴んで怯えている少女、佐古下柳の持つ“治癒の力”だろう。

“あの力”は得体が知れない。森光蘭は“あれ”を利用し、不老不死を得ようとしていた。さらに“あれ”には魔導具などの発する“陰”の力を打ち消すことも可能だと聞いたことともある。

そういった意味で“治癒の力”は底が知れない。無限の可能性を秘めているのだ。それを利用せんとする輩が森以外にいても、なんら不思議ではない。

しかし、もしそうならば土御門のいう“あの男”とは一体何故ここへ呼ばれたのか。可能性としては柳と同じく“治癒の力”を持っていることが挙げられる。“あの力”のルーツは不明だ。柳以外に“あれ”を使える者がいる可能性は十分にある。

（だが……）だが不可解な点はまだ“4つ”ある。

1つ、自分たちを飲み込んだ大穴の正体。

1つ、烈火に現れた異変。

1つ、それを鎮めた、土御門の持ってきた手甲。

烈火には、ここへ来る前と来た後の外見的变化が2つある。右腕に嵌められた手甲と両腕に刻まれた8つの漢字である。

ここに着いた直後、烈火は右腕を押さえながら苦しみ出した。そして彼の両腕に浮かび上がる8つの漢字。

それらが示すのは 炎術士のみ許された力、その源、“八竜”の復活であった。

苦しむ烈火を何とか鎮めようと柳は自らの力を使った。しかし、八竜の持つ強大すぎる炎を抑えきることは彼女には荷が重かった。その危機を救ったのが封印の手甲を持って現れた土御門である。そして土御門は烈火たちの幾つかの問いに答え、ここは学園都市第七学区であること、アレイスターという人間が烈火たちを呼んでいることを伝えた。そうして今に至るわけである。

(……まあいい)

水鏡は思考を止める。

この男の言うアレイスターとやらの下へ行けばもっとハッキリした情報を得ることが出来る。答えを出すのはそれからでも遅くはない。今大切なのは、柳を、このいたいけな少女を守ることだ。

そう考え、水鏡は辺りに注意を払うことに専念した。あと1つの不可解な点。この空間に“いるだけ”で感じる奇妙な感覚。魔導具を使ったときと同じような感覚への疑問を残して……

「ここだ」

土御門に連れられてやって来たのは1つの大きな建物。だがその建物には建物に必ずあるはずの窓も、通気孔も、出入口すらもない。烈火、風子、土門の三人が土御門に蹴りを見舞った。

「なめてんのかコノヤロー！」「バカにしてんじやないよ！」「ぶつ殺すぞテメー！」

「ギヤアアアアア！？ちよっと待って！説明するから！」

ゲシゲシ蹴られ続ける土御門が耐えきれず悲鳴を上げる。さっきま

での余裕は微塵も感じられない。

「ちよ……ちよつと可哀想だよお」

見かねた柳が止めに入った。

「チツ……柳に感謝しやがれ！」「次ふざけたらマジで殺すよ！」

「二度となめたマネすんじやねえぞ！」

悪態をつきながら渋々足を離す三人。

「いやー助かったぜい！お礼に今度食事でもどうかにやー？」

「きゃん！？」

解放された喜びにうちひしがれながらガシツと柳の両手を握る土御門。直後、「めづぱ！？」彼の顔面に烈火の足がめり込んだ。

「テメエやつぱ死ね！今死ね！何が『にやー』だ気持ちワリーんだよー！」

再び烈火から蹴りの応酬をくらうこととなってしまった。

「さて、おふざけはこのぐらいにするか」

再び柳によつて烈火から救い出された土御門が真面目な雰囲気で切り出す。だが敗戦ボクサーのように悲惨なことになっているその顔のせいどころか締まらない。

「お前らが入るのはこの建物で間違いない」

「……あ？」「」

再度足を構える烈火たち。それを見た土御門が取り乱しながら説明する。

「ま、待て待て！これは本当だ！」

「ならどうやって入るんだ？まさか壁を壊して入るわけではないだろっ」

水鏡が尋ねる。

「入ってみればわかる」

「勿体ぶつてんじやねえぞ固……羅？」

土御門に掴みかかろうとした烈火の手は空を切る。土御門が避けたのではない。烈火が“移動”したのだ。

目の前に広がるのは今までと全く違う風景。

中央に存在するビールカー、そしてその中に逆さまに浮かぶ一人の人間を筆頭に広がるとてつもなく異様な部屋。

しかし、烈火はそんなことはどうでもよかった。彼の意識を集中させたのはたった二人。ビールカーの前に立つその二人は二度と会うことはないと思っていた男たち。紅麗と小金井薫だった。

其之参：召集と再会（後書き）

軽くネタバレになるんですが、次かその次ぐらいの話で火影に魔導具をゲットさせようかと思えます。しかし今カオリンに魔導具あげるかどうか迷っています。そこで皆さんよろしければあげるかあげないかご意見下さい。ただ1つ注意していただきたいのですが、あげなかった場合カオリンがひどく空気になってしまいかも知れませんが、その点を踏まえて皆さんのご意見をお聞かせ下さい。よろしくお願ひします。

其之肆：御坂美琴（前書き）

今回はとあるサイドのお話です。

其之肆：御坂美琴

第七学区のとあるファミレスで、レベル5第三位『超電磁砲』こと御坂美琴は考えていた。先日出会った“自称”レベル0のウニ頭のことを。

彼との出会いは一ヶ月ほど前、数人の不良に囲まれているところを助けられるという、それはそれはロマンチックなものだった。……助けられたのが美琴でなければ、だが。

彼女にとってこの手の輩に絡まれることは決して珍しくない。ある時はナンパ、ある時はカツアゲ、またある時は名を上げようとしてそんな奴らは腐るほどいる。

その度に彼女は己の能力“電撃”をもつてしてそんな連中を撃退してきた。もちろんかなり手加減して、だ。

その時も美琴は電撃で不良を攻撃した。ム力つく発言をしたウニ頭もろとも。

彼女の電気の最大電圧はおよそ10億。某電気ネズミの1万倍である。

流石にそんなものを人間に放つほど彼女は狂っていないが、それでも人間を失神させるには十分すぎる一撃“のハズ”だった。

しかし、美琴の目に映ったのは右手を突き出したポーズでピンピンしているウニ頭の姿だった。

オカシイ。無意識に手加減してた、ということはある得ない。その証拠に彼女の周りには黒焦げの不良たちが転がっていた。

つまりそのウニ頭は“何らかの力”で彼女の電撃を防いだのだ。

その日から美琴とウニ頭の少年との“追いかっこ”が始まった。美琴が少年に一泡吹かせるための。

だがその度に上手く煙に巻かれ相手の逃走を許している。今度こそは！ と美琴が意気込んでいると「……えさま？お姉さま！」

自分を呼ぶ声が聴こえた。慌てて視線を向かいの席に向けると、後

輩の白井黒子が訝しむようにこちらを見ている。

「全く……！今の話、聞いてらっしゃいましたか？」

「ゴ、ゴメン何だっけ？」

「……ハア、やっぱり聞いてなかったんですね……。」

呆れたようにため息をつく黒子。

「最近ボーツとしてることが多いですわよ？何かお悩み事でも？」

「別に悩んでほどのモンじゃないわよ。ただ……。」

そこで言葉を切る美琴。怪しい。黒子は思った。この態度、最近の何を話しても上の空な様子。これはもしか……！！

「お姉さまっ！！」

急にテーブルをダンツ！と叩き立ち上がった黒子に、美琴は驚いて思わず身を引いてしまう。

「な、何よ！？」

「もしや……もしか恋煩いのですッツ！？」

「ぶつつつ！？」

予想外の言葉に思わず飲んでいたアイスコーヒーを吹き出してしまった。

「な、何言ってるのよ！そんなわけ……。」

そこまで言って今までの自分を振り返る。

一人の異性のことを四六時中考え、他のことは上の空。これでは確かに……

考えると、急に恥ずかしくなってきた。顔が真っ赤に染まるのがわかる。

そしてそんな変化を黒子は見逃さない。

「その反応やっぱりそうですね！？キー……ッ！黒子のお姉さまをたぶらかしたのは一体どこの類人猿ですの！見つけたらコナゴナのグチャグチャのボコボコにして、その後　を×××してさらに

の　で　に「やめんか……！！」「ぎゃあ

ああああ……！！」

文章にすることも憚られるようなことを口走る黒子をなんとか止め

ようと美琴は電撃を放つ。『こうかはばつぐんだ!』と言った感じで黒子は悲鳴をあげながら地に伏した。

「ウへへ……お姉さま、もつとお……!」

……違う意味でも『こうかはばつぐんだ!』った。

「……で? 結局どんな話なの?」数分後、奇跡の復活を遂げた黒子に尋ねる美琴。

「ですから! 最近無能力者による能力者狩りが多発しておりますので注意していただきたいんですの!」

先ほどの様子が嘘のように、黒子はピシツと言いつた。

「はっ、なーんだそんなこと? 私がその辺の無能力者なんかに負けるわけないでしょ?」

そう、“アイツ”のような例外を除けば絶対に勝てる(もちろん“アイツ”にも勝つつもりだが)。それだけの自信がレベル5、御坂美琴にはあった。

「ですが油断は禁物ですよ? 何でも被害者の話では犯人は不思議な武器を使っていたらしいんですの」

「不思議な武器?」

「ええ。何でも自由自在に伸縮する刀とか被れば透明になる布とか「マユツバね」。そんなのホントにあんの?」

「わたくしも実際に見たわけではないのでなんとも言えませんが……。とにかく! くれぐれも油断なさらぬように!」

そんな黒子の注意を鼻で笑い飛ばす美琴。

「だーいじょーぶだって! 私を誰だと思ってるのよ? 『超電磁砲』の御坂美琴よ?」

「お姉さまは強気すぎますの……。でも……!」
黒子は美琴をじっと見つめる。怪しい笑みを浮かべながら。

「そんな強気なお姉さまも素敵ですのー!ー!ー!ー!ー!」
そしてターゲットを捕捉したミサイルのような正確さで飛びかかった。

「だからやめろっつーの!ー!」
「ぶごッッッ!」
「しかしその黒子

ミサイルは美琴の右ストレートという名の対空砲撃に撃ち落とされてしまった……。

「ほら！さっさと行くわよ！アンタの友達と会うんでしょ！」

「そうですね。そろそろ時間もいいですし、行きましょうか」

二人は席から立ち上がり、レジへと向かう。そして会計を済ませて店から出て行った。

二人の座っていたすぐ隣の席には一人の白衣を着た老人が座っている。

老人は一人ほくそ笑んだ。

（魔導具か……。面白い。実に興味深い。）

老人も会計を済ませて店を出た。そして向かうは学園都市の外れにある研究所。

（まずは取り入る。ことを起こすのはそれからでもいいからね）

老人は歩き出す。自らの野望、『絶対能力者』の完成を目指して…

…

其之伍：わだかまり

人間は本当に驚いたとき体が硬直してしまう。急すぎる出来事に、脳が正確な判断を下せなくなるのだ。

今この場にいる三人のうち二人もそんな状態だった。

二人の動きが凍ったのは一秒に届くか届かないかのごくごく僅か。しかし二人にとってその時間は何分間か、何時間か、あるいは何年間かと思えるほど永く永く感じられた。

「れ」

沈黙を破ったのは小金井の声だった。小金井は走り出した。二度と会えないと思っていたその少年目掛けて。

「烈火兄ちゃああああん！」

そのまま少年・花菱烈火に向けて繰り出されるロケットダイブ。烈火はそれをモロに鳩尾にくらってしまふ。「げぶえっっ!!」

その激痛は烈火の頭のスイッチをムリヤリONにする。

彼に抱き着いている少年。

14歳には見えないその背丈。どこか自分に似たものを感じる風貌。烈火の目の前にいるのは間違いない小金井薫であった。

「うおおおお！小金井イイイ!!」

烈火もまた、喜びの咆哮をあげながら自分に抱き着くチビツ子の頭をワシヤワシヤ撫で付ける。

烈火に遅れて他の面子もこの部屋に現れる。その顔は皆、驚きに染まっていた。

「薫くん！」

まずは柳が嬉しそうに声をあげる。その声を聴いた薫はパーッと顔を輝かせ、今度は柳に飛びついた。

「柳ちゃああああん！会いたかったよおお!!」「私もだよ薫くん!」

「よっしや！今だけは特別に柳に甘えてもよし！」

烈火もよほど機嫌が良いらしく、普段の彼にはあり得ない寛大な態度である。

「元氣そーぢやねえか!」「さっすがカオリン」「相変わらずチビだな」

我に返った他の三人も喜びを言葉にする。約一名毒を吐いた者がいたがテンションMAXの小金井の耳には届いていない。

ハシャギにハシャイでいる彼らに紅麗は全く何も思わなかった。

同じ世界からやって来た七人の中で、彼だけはこの再会を喜びも驚きすらもしていなかった。

彼が見ていたのはただ2点、烈火の右腕の手甲と両腕に刻まれた8つの漢字。

その2点は紅麗の推理をまた一步、確信へと近づける……。

じゃれあいの中、烈火はふと思いつく。小金井の隣にいた紅麗のことを。(……アイツにもアイサツぐれえしとかねえとな)

花菱烈火という人間は、よく言えば真つ直ぐ、悪く言えば単純な性格の持ち主である。

彼は過去を引き摺らない。つい数時間前に殺し合った人間と一緒にメシを食べるほどに人懐っこい。無頓着とも言えるその振る舞いが、彼が多くの人たちを惹き付けて来た理由なのかもしれない。

烈火は気にしていなかった。紅麗との間にあった因縁もわだかまりも何もかも。

だから彼は親しみを込めて紅麗に話しかけた。

「ウス!元氣!話し掛けるな。鬱陶しい」だが、紅麗は違う。紅麗は烈火ほど単純ではない。

確かに、裏武闘殺陣決勝戦で二人は互いを理解しあった。互いの志も、互いの覚悟も。

しかし、“それだけ”だ。

『自分と烈火は決して相容れない』

紅麗の心にあるその思いが揺らぐことはなかった。

もう一度言う。「紅麗は烈火ほど単純ではない」。

烈火は驚いていた。

以前と全く変わらない紅麗の態度に。

そして理解する。

『自分たちの関係』というものを。

「……よお。おつ死んでなかったみてえだな」そこにあるのはさつきとは正反対の感情。剥き出しにされた敵意のみ。

「……」

が、紅麗は応じない。その態度が、烈火の低い沸点を越えんとしている激情を後押しする。

「シカトしてんじゃねえぞ固羅！！」

その怒声に柳たちも何事かとこちらを見る。

「……話し掛けるな、と言ったのが聴こえなかったか？それともこんな言葉も理解できんほどに頭が腐ったか」

紅麗は口を開いた。安い挑発だが、それは烈火の怒りの起爆剤としては十分過ぎる代物だった。「んだと teme エ！ブツ殺すぞ！！」

「やってみる」

その一言で、烈火の感情は爆発した。

「上等だ固羅あ！！」

紅麗の顔面へ烈火の右拳が打ち出される。それはさながら感情の爆風のように。

しかし、爆風は紅麗に届かない。

「やめんかドアホツ！！」「ぶごっつ！！？」

風子が烈火を撃墜したために。

風子のエルボーを顔面にくらった烈火だが、すぐさま飛び起き、血の噴き出す鼻を押さえつつ彼女に食って掛かった。

「何しやがんだ teme エ！！」

「うっさい！頭冷やせバカ！！」

しかし風子は怯まない。

「今そんなことしてる場合じゃねーだろ！？アタシらが相手しなき

やいけないのは紅麗じゃないだろが!!」

そう。確かにそうだ。今はこんなことをしている時ではない。柳を守るためにも、冷静さを失ってはいけない。

烈火はすぐさま落ち着きを取り戻す。単純な性格が今は吉と出た。

「わりい……」

「わかりやいーんだよ!」

満足そうに微笑む風子。

「さて」

紅麗が切り出す。

「“客人”とやらはこれで全員だろう。そろそろ聞かせてもらおうかアレイスター? 私たちを招いたワケをな」

その時初めて、烈火は部屋の中央にあるピーカー、そしてその中に逆さまに浮かぶ“人間”を意識した。

それは“人間”に違いなかった。

だが、わかるのはそれだけ。

その“人間”は何にでも見えた。男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも凶人にも。

“人間”アレイスターは口を開く。「再会の余韻に浸る時間はもういいのか?」

茶化す。そう言えば和やかに感じるであろうこの言葉は、しかしながらとんでもない重圧を孕んでいる。だが……

「るせーよタコ!」

烈火はそれをはね除ける。

「んなこた誰も聞いちゃねーんだよ。さっさと質問に答えやがれ!」あくまでも強気。敵陣のど真ん中と言えるこの場所で、こんな態度をとる烈火はよほどのバカかそれとも勇者か。

彼をよく知る者に尋ねたらきつとこういうだろう。両方だ、と。

「それは済まないな。その前に君たちに渡すものがある。受けとれ」そう言うと、烈火たちの前に突如として巨大な箱が現れる。

「何だこりゃ? ま、ま、まさか爆弾とかじゃねーだろな!」

土門がビビりながら尋ねる。

「開けりゃわかんたる」

言うが早いか烈火と風子は二人で巨大な蓋をこじ開けようとする。

「おおおい！やめとけつてきつと爆弾だ！」

「そうだよ危ないよ？」

柳も説得を試みる。

「ダイジョブだよ！しかし重てーなコレ」

「ホントだね。土門！手伝え！」

そんな得体の知れないものに指一本触れたくないが愛しのマイハニ
ーの頼みとあつては断れない！

土門の愛が恐怖心を凌駕した瞬間であつた。

「ふごおおおお！！」

土門の助力で蓋はすんなり開いた。

箱のなかを覗き見る烈火たち。同時に、この日何度目かわからない
驚きの表情を見せた。

箱の中にあつたのは4つの魔導具・風神、土星の輪、閻水、鋼金暗
器。

新生火影忍軍の愛用していたその魔導具は、同時に紅麗の推理を確
信へと昇華させる。

“ 天堂地獄の復活 ” を……

其之伍：わだかまり（後書き）

紅麗の烈火への態度に疑問を抱いた方もいらっしゃるかと思います
が、烈火と仲良くする紅麗がどうしても想像出来ないのです、こんな
感じになりました。
ご理解いただけると嬉しいです。

其之陸・修羅再び（前書き）

遅くなつてすいません。これからも更新ちょい遅れると思います。

其之陸：修羅再び

『火影』 それは烈火たちの世界において、はるか昔、戦国時代に存在した忍の集団である。

一言で言うと、彼らは弱かった。

時を渡る秘術や自在に炎を操る者が存在したものの、走るのは人並み、剣術も誉められたものではなかった。

そんな火影を変えたのが、2人の天才、虚空と海魔だった。

彼らはその類い稀なる頭脳で幾つかの武器を創った。そう遠くない未来、時の武将・織田信長に火影が狙われる原因となった『魔導具』を。

烈火たちの目の前に、今“それ”はある。

「なんで……だよ？」

“なんで”と言ったが、烈火は薄々感付いていた。答えを知りたいのではない。自分の中に生まれた可能性を“否定”して欲しいのだ。

「天堂地獄じゃ」

しかし、返つて来たのは無情ともいえる“肯定”の言葉。

その声の主は……

「虚空!？」

そこにいたのはニット帽にアロハシャツというらしからぬ格好をした老人、天才の一人・虚空だった。

「テメーまた勝手に……ムグツ!？」

騒ぐ烈火の口を手で押さえ、虚空は続ける。

「天堂地獄が蘇ったんじゃよ」

「でも天堂地獄は……!」

“信じられない”という風に小金井が言う。

「根拠はある」

紅麗が口を開いた。

「貴様らの目の前にある魔導具。それに烈火。貴様も“力”を取り戻したハズだ」

“貴様も”という言葉で烈火も初めて紅麗の左腕の腕輪に気付く。

「まさかテメーも!？」

「これらの事実が示すのは……」

「コ・ノ・ヤ・ロ〜!」 「落ち着いて落ち着いて」

紅麗に無視されまともや怒り出す烈火を柳が諫める。

「天堂地獄の復活だ」

その一言は、99%を100%に、信じたくない“可能性”を信じざるを得ない“確信”へと変えた。

「だが何故だ!？」

水鏡が問う。彼の口調には普段の冷静さは感じられず、焦りしか見られない。

「天堂地獄は花菱がブツ壊したじゃねえか!！」

同じく焦った様子で土門も叫ぶ。

天堂地獄はHorrorで治癒の炎に力を奪われ、烈火の拳によって、その魂を委ねた森光蘭、もう一人の天才・海魔と共に砕かれた。それが何故復活したのか。

「ウム!その理由は……」

一瞬の沈黙。誰かが生唾を飲む音が静寂な空間に響く。そして虚空は告げた。

「わからん!ぶわっはっはっはっは!！」

(紅麗以外)全員がずっこけた。

「火葬しちやおっかなあ〜?」

鬼の形相で烈火が迫る。

「慌てるない!その辺もあっこにいる奴が話してくれるじゃろ!」
鼻をほじりながら虚空はアレイスターを指差した。

「今度こそ訊かせてもらおうか?」

紅麗が言う。そこには警戒心と敵意がひしひしと感じられる。
アレイスターは話し始める。

「では……まず君たちをこの世界に呼んだのは私だ。幻獣朗の手引きでな」

幻獣朗。その名を聞いた土門に戦慄が走る。

何故なら、

「アイツは死んだんじゃないのかよ!？」

そう、幻獣朗は“死んだハズ”だった。一度は別魅で難を逃れたが、二度目は音遠に小間切れにされて。

そして土門はそれを見ていた。だから信じられない。“アレ”は別魅などでは断じてない。本物の人間だった。

一人驚く土門をよそに、一同は冷静であった。

風子が土門に告げる。

「驚くことじゃないよ。八神も生き返ったんだ。天堂地獄があるなら幻獣朗がいたって不思議じゃない!」

以前、死んだハズの八神という人間が天堂地獄の細胞で蘇ったのを見ている彼らにとって、幻獣朗の存在は今さら驚くものではない。

それより気になるのが、

「手引き……とはなんだ？」

水鏡が尋ねる。

「ここに来る直前、大穴に飲まれたろう？アレを開けたのが幻獣朗だ」

「時空流離か」

紅麗の口から出たこの言葉に、烈火たちは納得すると同時に疑問を覚える。

何故幻獣朗が火影の秘術である時空流離を使えるのか。

そんな考えを見透かしたようにアレイスターは言った。

「私も詳しくは知らない。手段は幻獣朗に一任していた」

続けるぞ、と一言おいてアレイスターは再び話し始める。

「次に理由だが、これは単純だ。私は君たちの力が欲しい」

「どーゆーことだよ？」

「そのままだ。君たちの持つ“力”、そして魔導具の扱いに興味を

抱いた。だからこの街での安全を条件に幻獣朗に君たちを運ばせた」
烈火の問いに答えてアレキスターは紡ぐ。

「そしてその魔導具も交渉の材料だった。使い手がいても使う武器
がなければ意味がないからな。君たちの手甲と腕輪も彼が用意した
ものだ」

言われて烈火と紅麗は自分の腕に嵌められたものを見る。おそらく
これは幻獣朗かその仲間が作ったものだろう。

「わ、私たちは何をすればいいんですか？」
怯えながら柳が尋ねる。

力が欲しい、ということはすなわちその力を利用する、ということ
だ。

戦いの場に放り込まれるか、少なくとも身体を切り開かれるかもし
れない。

だからアレキスターの答えは予想外だった。

「何もしなくていい」「へっ？」
思わずすっとんきょうな声をあげた柳は、直後顔を真っ赤にして両
手を口に当てる。

「君たちは自由に過ごしていればいい。この街に必要なIDは用意
してある。学校には行ってもらうがどこに通ってもいい。この街に
さえいてくれればな」

“良すぎる”条件をアレキスターは提示した。

「信用できねーなあ」

烈火が言った。

「何故だ？君たちにとって破格の条件だと思うが」

「だからだよ」

烈火はアレキスターを睨み付けながら話す。

「んな怪しい誘いに『はいそーですか』って乗ると思ってるやがんの
か？」

「同感だ。一体何を企んでいる？」

烈火に続いて水鏡も警戒心を露にする。

「企みか……まあ、ないことはない。だが」
あまりに素直な返事に烈火たちは拍子抜けするがすぐに気を引き締め直させられる。

「それを知ってどうする？」アレイスターの威圧感によって。

「私の企みを知ったところで君たちは手を出すことができない。私の言う通りにするしかないんだ」

先に述べたように、ここは敵陣のど真ん中。つまりこれは“提案”でも“依頼”でもなく“命令”である。

「さて、話はここまでだ。天堂地獄とやらについては私も知らない。魔導具は持つて行け」

言われて、水鏡たち“異能”を持たざる四人はそれぞれの所持していた魔導具を再びその手にとる。「久々に着けたら変な感じすんなあ……」自前の鼻ピアスの代わりに土星の輪を鼻に通しながら土門が呟いた。

「しつかり慣れておけ。天堂地獄を相手するんだ」
水鏡が念を押す。

「さて、最後に何か言いたいことはあるか？」

アレイスターに言われると、烈火はビシッと中指を立て叫んだ。

「上等だ！いつかテメーもブツ飛ばしてやつから“頭”洗って待つてやがれ」

次の瞬間、烈火たちは消え、この空間にいるのは紅麗とアレイスターの二人となった。

「……相変わらず頭の悪い男だ。ところで何故私を残した？貴様に言うことなどないぞ」

「私にある。単刀直入に言おう。私の下で働いてもらう」

アレイスターは厳然と告げた。紅麗は薄ら笑いを漏らす。

「ククツ、私が自分の命惜しさに貴様に従うと思うか？」

「“他人の命”ならどうだ？」

紅麗の顔から笑いが消える。

「小金井薫……彼の命などこの街ではマッチの火より簡単に消える」

「一体何を望む？」

紅麗が聞き返す。彼から発せられているのは、もはや殺意などいう生温いものではない。しかしアレキスターは気圧されない。

「詳しくは追って使いを出す。とりあえずは教師にでもなるといい。君の頭脳なら容易いだろう」

「何を望む、と訊いた」

その眼光はそれだけで人を殺せそうなほどに鋭い。

「言っただろう？私の企みがなんであろうと、私の言う通りにするしかない、と」

それを聴いた紅麗は笑みを浮かべる。先ほどとは全く異質の、見たもの全てを凍てつかせるような狂気的笑みを。

「……いいだろう。“今は”貴様の掌の上で踊らされてやる。だがいつか必ず貴様を討ちに来る。それまでに“首”を洗って待っているんだな……！」

そして紅麗も消え、異様な空間は元の姿を取り戻す。大切なものを守るため、男は再び修羅と化した。そのことがこれからどんな結果をもたらすのか……それは誰にもわからない。

其之陸：修羅再び（後書き）

なかなか話が進まなくてすいません。
次話で烈火とあるのキャラが絡む予定です。

其之漆：自販機パニック（前書き）

魔導具渡すの忘れてたので前話修正しました。
よろしければ見てください。
ご迷惑おかけしました。

其之漆：自販機パニック

気づいた時には、烈火はすでに建物の外にいた。

“あそこ”にいたのは10分そこらのハズだが、外の空気が妙に懐かしい。

「ありゃ？土御門とかいうヤツどこ行つた？」

そこで初めて、外で待っていると思つていたあの金髪グラサンの男がいないことに気づく。

「先帰つたんじゃない？そーいや紅麗もないねえ」

「なんか話でもあんじゃねーか？」

『窓のないビル』を仰ぎながら烈火はふと思う。

(そーいや俺らどうやって入つたんだ？)

しかし、どうせ考えたつてわからない、と思考するのをやめた。

「しっかしカオリンがいるとは驚いたのお」

そう言つて土門は小金井の背中を軽く叩いた……つもりだったが、土星の輪で強化されたその一撃は、思いの外深刻なダメージを与えた。

「ゲホッ！？がふっ！……うえ……」

突然体を襲った強い衝撃に小金井は思わず咳き込む。

「大丈夫!？」

心配そうに背中を擦る柳。

「えほっ!……サンキュー柳ちゃん。もうダイジョブだよ」

「そう?よかったあ……。土門くん!気をつけなきゃダメだよ!」

「ゴメンナサイ……」

柳に叱られて、シュンとなる土門。

「相変わらず柳ちゃんはやさしいなあ。烈火兄ちゃんも少しは柳ちゃん見習えばいいのに」

「しばらくぞクソガキ!っつーかいつまで柳に引っ付いてやがんだ、さっさと離れろ!」

「あйтеツ!」

ゴチン、と烈火の拳骨が小金井の頭を襲う。

痛みに顔をしかめながら、小金井はさっきからの疑問を烈火にぶつけた。

「あれ?『姫』はやめたの?」

「おう!ついでに忍者も引退だ!……って思ったけどよ」

烈火の表情が真剣なものになる。

「なんでか知んねーが天堂地獄が蘇って火影の因縁やら火竜の呪いやらも戻ってきちゃった。だからよ」

言葉を区切って、皆の顔を見る。

そして烈火は高らかに宣言した。

「新生火影忍軍復活だ！そんで天堂地獄をぶっ壊す！元の世界にもなんとかして帰る！文句あるヤツはいつかあ！？」

その声は空へと消えていく。しかし、確かに皆の胸に刻み込まれ、一つの思いを生んだ。それは……

「やるっきゃないよね！」、風子。

「今度こそ復活しねえように俺様がぶっ潰してやんぜ」、土門。

「お前にはムリだ」、水鏡。

「私も皆の力になる！」、そして柳。

言葉は違う。態度も違う。それぞれの考え方も全く違う。

それでも皆の思いは一つ。『皆で天堂地獄を必ず倒し、元の世界へ帰る』

皆の胸に生まれた思い。それはすなわち、“希望”。だが、

「やろうぜ小金井！天堂地獄をぶっ壊すんだ！」

「ごめん……俺は皆とは行かない」

だが小金井は違った。

「なんでだよ!？」

外の世界へ舞い戻った紅麗が聴いたのは、烈火のそんな声。

「一緒に行こうぜ小金井!俺らは皆で進んで来たじゃねーか!」

「それでも、俺は行かない。ううん、行けない」

皆と一緒にまた過ごしたい。そんな思いを押し殺す。何故なら……

「俺は兄者と行く!」

何故なら、彼と紅麗は太くて固い、絶対に切れない“絆”で繋がっているから。

「兄者は……紅麗は、ひとりぼっちだった俺と兄弟になってくれた。俺を救ってくれた。その後色々あったけど……それでも俺は紅麗が大好きなんだ!」

SODOMで紅麗について行くとき、彼は誓った。いつまでも、どこまでも、辛くても、苦しくても、ずっと紅麗と一緒に歩んで行くことを。

そっか、と烈火は小さく呟く。

「でも忘れんなよ！？オマエはズーッと俺らの仲間だ！」
悲しむことはない。彼らもまた、小金井とは切っても切れない“腐れ縁”で繋がっているのだから。

「まあ同じ街に住むんだ。また会えんだろ！」

土門の言うとおり、これは今生の別れではない。結局は歩む道が違っても小金井と彼らの目指す先は同じだ。

「うん！それじゃ俺は兄者を待って「もういる」「うわぁっ！？」
つの間に！？」

急に背後から聴こえた声に小金井は思わず飛び上がる。

「さっさと行くぞ」

「行くってどこに？」

「役所だ。IDは用意してあるらしいから、色々手続きがいるだろう」

そう言って立ち去る紅麗。小金井も慌てて着いていく。

「バイビーみんなあ！またいつか会おうぜー！」

「おう！またな」「バイバイ薰くん！」

小金井と別れの挨拶をしたあと、烈火は大きく息を吸い込み、全力で叫んだ。

「紅麗イイー！！！」

名を呼ばれた紅麗は歩みを止めて、烈火の方に顔を向ける。

「なんだ？」

「俺はテメエが大つつつ嫌いだ！暗いし危ないし何考えてっかわかんねーし。ムカつくから今度ぶん殴ってやる！だからそれまで勝手に死ぬんじゃねーぞ！！」

紅麗はわずかに微笑み、小金井と共に再び歩き始めた。

「兄ちゃんも素直じゃないね。似た者兄弟だね」

「薰。お前は夕飯抜きだ」

「んなっ！？ゴメンナサイそれは許して！」

「ダメだ。私をあんな猿と同じ扱いにした罰だ」

「そんなああああ！！！」

叫びながら小金井は思った。

(やっぱり素直じゃない……)

「さて、それではこれからの指針をきめるぞ」

とある公園のベンチに座った状態で、水鏡は切り出した。

小金井たちと別れた後、とりあえず落ち着ける場所でこれからの行動について話し合うことに決まり、歩いている途中に見つけたこの公園に腰を下ろしている。

「ハイハイハイ！」

土門が元気良く手を挙げる。

「……言ってみる土門」

指名する水鏡。大して期待していない様子が伺える。

「腹減ったからゴハン！」「ふざけんな！」「死ね」

土門の意見は烈火と水鏡の二人に一瞬で切り捨てられた。

「ハイハイハイ！」

今度は柳が手を挙げる。

「言ってみてください柳さん」

指名する水鏡。土門の時とは全然態度が違う。

「ノドが渴いたからジュースを飲みましょう！」「ふざけんな！」

柳の意見を今度は土門が切り捨てる。が、

「びええええん！！」「ジュースでいいぢやねえか！」「死ぬ」

「ギャアアアス！」

柳の涙に逆上した烈火と水鏡にリンチされる羽目になってしまった。

(何かが間違っている……)

目の前で起こる理不尽な暴力へのそんなツツコミを、風子はそっと胸にしまった。

その後、厳正なじゃんけんの結果、ジュースは土門のオゴリに決定した。

「なんで俺が……」

不満をこぼしながらも、渋々自販機にコインを投入する。

何を買うか選ぼうとするが、メニューには“いちごおでん”やら“黒豆サイダー”やら珍妙なものはかり並んでいる。

しようがないのでとりあえず比較的マトモな“ヤシの実サイダー”のボタンを押した。しかし自販機は無反応。ボタンを連打してもウンともスンともいわない。返却レバーを動かしてみたが金すら返って来なかった。

「金返しやがれえー！！」

土門の渾身の蹴りが自販機に炸裂する。自販機は一瞬大きく傾き、その後ぐらぐらと小刻みに震えている。

突然の物音に、何事かと烈火たちも自販機の方を見る。

「はあ、何をやってるんだお前は……」

「だってよお、この自販機が俺の金盗りやがって……ってオオツ！
出てきた！」

溜め息をつく水鏡への弁解を中断し、自販機から吐き出される大量の缶を見て土門は喜びの声をあげた。

「スゲー！めちゃくちゃ出てきてる！」

その間にも自販機は大量の缶ジュースを産み出し続ける。……笑えなくなるぐらいに。

「これヤバいんじゃないの？」

不安げに風子が呟く。

「……自販機って一台いくらするよ？」

「知らん……」

「どした？せっかく出てきたんだからジャンジャン飲もーぜ」

顔をひきつらせる烈火たちを余所に、破壊した張本人はのんきに笑っている。

『……確認。器物破損ヲ確認。容疑者ヲ確保シマス』

ふいに、どこかから機械的な声がした。

見ると、50メートルほど先から、大量のドラム缶(?)がこちら

へ向かって来ている。

「なあ、アレなんだろ？」

土門は振り返り皆の意見を求める。しかしそこにいたハズの四人の姿はもうなかった。

「何やってんだあのバカはああー！」

「マジでバカだよアイツは！」

「死なないと治らんあのバカは」

「皆ヒドイ……」

バカバカと土門を罵りながら四人は走る。

鈍感な土門は気付かなかったようだ、あのドラム缶の群れが危険だということは本能で理解出来た。だから土門を見捨てて逃げた。

「待ってえー！」

振り返ると大量の缶ジュースを抱えた土門がこちらへ走って来ている。……ドラム缶たちを引き連れて。

「ギヤアア余計なモン連れて来んなあー！」

「やっぱアイツバカだあー！」

叫びながら逃げる。逃げる。逃げる。
道行く人々がギョツとした顔でこちらを見ているが気にしていら
ない。

とにかく死に物狂いで走る。
ふと後方を確認すると、

「メチャクチャ増えてるー!?!」

土門の後ろの軍勢は三倍ほどに膨れ上がっていた。

「烈火、風子」

走りながら水鏡が耳打ちする。

「「なんだよ!?!」」

「この先の別れ道が見えるか?あそこで別れてあとで落ち合つぞ。
烈火は柳さんを頼む」

言われて前に目をやる。そこには確かに路地裏へと続く何本かの道
があった。

「相手は機械だ。イレギュラーには弱い。僕たちがバラければ混乱
する。あのバカもそれはわかるだろう。きつと違う道を選ぶ。落ち
合つのはさっきの公園だ」

早口にそう言い残し、水鏡は左端の道に消える。

「それじゃまた後でっ!」

「柳！着いてこい！」

「待つてよ〜」

風子と烈火・柳もそれぞれ違う道に逃げ込む。

水鏡の作戦は“概ね”正しかった。

誤算は2つ。

1つ目。ドラム缶のような警備ロボが追っていたのは最初から土門1人であること。

2つ目、

「待つてえ風子おおお！」

「ぎゃあああこつちきたああ！」

こんな時に土門が選ぶのは、風子と同じ道以外にあり得ないことを。結果風子は、ジューズを抱えた土門という荷物と共に、警備ロボから逃げることとなってしまった。

風子の不幸を知らない烈火と柳は手を取り合って狭い路地裏を必死に走る。

ふと、何かが爆発したような音が聴こえた。場所はそう遠くないようだ。

「チッ！」

無理やりブレーキをかけてターンする烈火。

（幻獣朗が暴れてんのかもしんねえ！）

急な方向転換に、引っ張られていた柳はバランスを崩し転びそうに

なる。

「どこ行くの？」

「おっと、危ねーから柳は待ってる！」

そう言って手を離そうとするが、柳はそれを許さない。

「私も行く！」

「何言っただ！危ねえっつってんだろーが！」

烈火は足を止め、柳を怒鳴る。

「だからだよ！」

しかし、柳は譲らない。

「言ったでしょ？私はみんなの、烈火の力になりたいの！」

助けてもらっただけなのはもうイヤだ。自分のためにみんなが傷つくのも見たくない。だから自分も闘いたい。天堂地獄のときのように。烈火は少しの間動きを止め、

「……行くぞ柳！」

「うん！」

再び柳の手をとって走り出した。

広い道へ飛び出した烈火が見たのは、中学生ぐらいであろうツインテールの女の子に突進する巨漢の姿。

次の瞬間、烈火は柳の手を振りほどき駆け出していた。そして思い切り飛び上がり、

「女の子に手えだしてんじゃねーぞ固羅あ！」

叫びながら男の顔面に渾身の蹴りを叩き込んだ。

其之漆：自販機パニック（後書き）

サブタイトル考えんのが難しい！

今回なんかおかしなサブタイになっちゃいました。

これからも迷走を続けると思いますが、どうか見てやってください。
感想も頂けると嬉しいです！

それではまた次回！

其之捌：共闘、逃亡

「女の子に手え出してんじゃねーぞ固羅あ！」

そんな台詞と共に横合いから飛び出してきたウ二頭。そしてそのウ二頭の蹴りを見事にくらい吹き飛ばされる銀行強盗。それを見た黒子は呆然としていた。

「オイ、大丈夫か？」

黒子に心配げな声をかけるウ二頭、もとい花菱烈火。その言葉で黒子はハツと我に返り、

「助けていただきありがとうございます」

“一応”感謝を述べておく。

実際のところ、黒子はピンチでもなんでもなかった。

彼女は風紀委員としてこれまで様々な訓練を受けているし、それを実践して来た。相手が自分より一回り以上大きい場合の対処法も心得ている。

今度もいつも通り軽くのしてやるつもりだった。つまり烈火の助太刀など要らぬ世話で、むしろ（おそらく）一般人の烈火に首を突っ込まれたのが腹立たしい。

しかしまあ、善意から来るであろう行動に文句を言おうとも思わなかった。誇らしげに笑っているウ二頭から視線を外し、残りの強盗を捕まえようと振り返る。

「ぐっ……」

黒子に睨まれ、残り二人の強盗もたじろぐ。

「あなた方も年貢の納め時ですわよ？」

「うるせえ！」

身構える二人。

「おい」

ウニ頭が声を掛けてきた。

「あいつら強盗かなんかか？」

「それ以外にあんな覆面をしてバッグに札束を突っ込んで外に出る人がいたら見てみたいですね」

「チゲエねえ」

そう言つて烈火は黒子の前に入る。

「何のつもりですか？」

「わりいヤツならちいっと慣らし運転に付き合つて貰つんだよ」

「なっ!?! 一般人がこれ以上……ムグ」

「まあまあ、こーゆーことはお兄さんに任せなさい！」

黒子の口を手で塞ぎ、パキンポキンと首を鳴らしながら烈火は更に

前に出る。その顔には余裕が浮かんでいた。

「なめんじゃねえ!!」

強盗の一人が叫びながら手をかざす。ゴウっという音をたてて、その手は炎に包まれた。

「俺はLEVEL3だ!てめえなんかに負けやしねえ!」

「なっ……!？」

烈火は目を見開いた。

(どうなってやがんだ!?)

彼が驚くのは“LEVEL3”という数字に対してではない。そもそもこの世界に来たばかりの烈火はLEVELによる序列の概念など知らない。もっと単純で根本的なもの、“ただの人間が炎を出す”ことが信じられなかった。

「喰らいやがれえ!」

相手は考える時間を与えてはくれない。

炎は強盗の手から射出され、烈火を焼かんと迫り来る。

しかし烈火は動じない。ゆっくりと右手を構え、炎を受け止める。

「おらああ!」

そのまま思い切り炎を握り潰し、霧散させた。

「……………!?!」

絶句する強盗二人。

LEVEL3といえば、学園都市では比較的優秀な部類に入る。

もちろん、LEVEL4やLEVEL5、相性によつては同じLEVEL3にも劣る場合もある。しかし、それは決して生身の人間が受けきれるものではない。そう思っていた。

だが目の前の男はそれを右手1つでやってのけた。その事実には強盗二人は恐怖する。

「さーて、反撃開始ザマス！」

言つて烈火は空中に指で何かを描く。

「久々に頼むぜ！竜之炎壱式、崩！」

瞬間、烈火の掌から炎が生まれる。最初は無秩序に暴れていた炎は、徐々に一ヶ所に集まり、ソフトボールほどの1つの火球を形成する。

「久しぶりだから荒れてやがんな、崩！」

炎を生み出す懐かしい感覚。それを一瞬だけ楽しんだ後、

「せえー……………のおー!!」

掛け声と共に思い切り腕を振り抜き、火球を投擲した。

「うあああああ！」

強盗も反射的に炎で迎え撃つ。しかし高速で飛来する火球はその炎

を食い破り、強盗に炸裂した。

「ぐっ……あ……」

強烈な一撃を食らった強盗は戦闘不能となり、その場に崩れ落ちた。

「フム！絶好調ぢゃ！」

満足げに頷く烈火。

黒子は大きく溜め息をついた。

（全く。一般人の癖にでしゃばりすぎですの）

なんとなく少し遠くで見物している、先輩の御坂美琴に通ずるものを感じる。

（今日は大人しくしてませんが、お姉様も事件に首を突っ込むのはいい加減止めていただきたいですね。上から睨まれるのは現場責任者のわたくしなんですから。それにスカートの中に短パンを履くのはいい加減お止めになつてくれませんかしら！あとキャラモノの幼稚な下着をお召しになるのも頂けませんわ！常盤台のエースとしての自覚を……）

などと考えていると、

「離しやがれ！」

「嫌です！！！」

声が聴こえる。

見ると、いつの間にか離れていた最後の一人と先ほど出会った佐天

涙子が揉み合っていた。

佐天は小さな女の子を抱き締めていた。人質にされそうになっていた女の子を彼女が助けたのだろう。

「クソ!!」

強盗は佐天の顔を蹴り飛ばして振りほどき、側にあつた自動車に乗り込む。そしてそのまま発進させた。柳がすぐさま佐天に駆け寄る。

「あのヤロー!!」

「黒子お!!」

烈火が駆け出そうとした時、美琴の怒声が響いた。

「ここからは私の個人的なケンカだから……悪いけど手え出させてもらうわよ!!」

(結局こうなりますのね……)

黒子は再び溜め息をついた。

その間に車はターンし、アクセル全開でこちらに向かって来る。

「テメエらまとめて轢き殺してやる!!」

「危ねえ!!」

烈火は走り出した。が、黒子に手を掴まれる。

「何してんだ！早く助け」必要ありませんの」
黒子は烈火にキツパリと言い放った。

美琴は怒っていた。

佐天と出会ったのはついさっき。しかも彼女との間にあったつながりは、“友達の友達の友達”なんてとてつもなく細かいもの。

しかしそれでも、

（私の友達に手え出してんじゃないわよ！）

それでも彼女はもう美琴の友達だ。大切な友達を傷つけられて黙っていられるほど、彼女は薄情ではない。

美琴はポケットから一枚のコインを取り出した。

「ご存知ありませんの？」

そんな美琴を眺めながら黒子は烈火に尋ねる。

「何がだよ！？それよりアイツ危ねえんじゃないかよ！」

烈火は焦りながら聞き返す。それを無視して黒子は続けた。

「あの方こそが学園都市230万人の頂点」

美琴は親指でコインを弾く。宙を舞ったコインが二転三転し、再び親指に載ろうかというタイミングで美琴はもう一度それを弾く。

「七人のLEVEL5の第三位」

弾かれたコインは音速の三倍にまで加速して、強盗の乗った自動車を、まるで射的の景品のように軽々と吹き飛ばした。

「超電磁砲”の御坂美琴お姉様。常盤台が誇る最強無敵の電撃姫ですの」

嬉しそうに解説する黒子だが、彼女の声は鼻水を垂らし間抜けな顔をする烈火の耳には届いていなかった。

「ハイ！これで大丈夫だよ」

かざしていた手を下ろし、微笑みながら柳は佐天に言った。
佐天は左手で恐る恐る蹴られた左頬を触ってみる。痛みもないし、熱も持っていない。傷は完璧に治っていた。

「それじゃあまたね！」

柳は立ち上がり、

「さつきすつごくカッコよかったよ！」

そう言って烈火の方へ駆けて行った。

「カッコよかった、か」

そんな柳を見送りながら佐天はポツリと呟いた。

「ずらかるぞ」 駆け寄って来た柳に烈火はそう耳打ちした。

「ほえ？なんで？」

「事情聴取するから着いてこいって言うてやがる。めんどくせーし、みー坊たちと合流しなきゃなんねえからな。さっさと逃げんぞ」

そう言うて柳の手を握りその場を離れようとする烈火。しかし、

「どこへ行きますの？」

黒子に阻まれる。

「チツ！」

烈火は素早く懐に手を突っ込み、常備している煙幕玉を取り出して地面に叩きつけた。

「いよいよおー！」「きゃっ」

そして柳を方に担いで煙の中を駆け抜ける。

50メートルほど走ったところで後ろを確認するが、誰かが追ってくる様子はない。安心して前を向くと、

「おわぁおー！？」

「どこへ行きますの？と訊いておりますのに」「そこには振り切ったはずのツインテールの少女が立っていた。

「へっ？だつて今……え？」

混乱する烈火をよそに黒子は歩いて距離をつめる。そして烈火の目の前で立ち止まると、柳に手を触れた。と、次の瞬間

「へっ？」

柳の声と同時に烈火の肩から重さがなくなる。慌てて辺りを見回すと、10メートルほど後ろに柳が座っていた。彼女も何が起きたかわからない様子でキョトンとしている。

「あなたには少し眠ってもらいますわ」

今度は烈火に手を当て、黒子はそう言った。その瞬間、烈火の視界が逆転する。

「おぐ!？」

しかしその世界を目に焼き付ける暇もなく、烈火は頭に強い衝撃を受けて、夢の世界へと旅立った。

其之捌：共闘、逃亡（後書き）

やっと超電磁砲のストーリーに入れました。
進むの遅くてすいません。

其之玖：お説教と一人部屋（前書き）

更新遅くなって申し訳ないです！

其之玖：お説教と一人部屋

目覚めた烈火が最初に見たのは、僅からセンチにまで迫った土門の顔だった。

「ぎにゃあああああ！？」

「うっ！？」

反射的に思い切り殴る。土門は吹っ飛び、側にあつた本棚に頭から突っ込んだ。

が、即座に復活し、烈火と組み合う。

「いてーなコノヤロー！何しやがるバカウンチ！！」

「るっせーよ腐乱犬！心臓にワリイことしてんぢやねえ！」

「人が心配してやってんのになんじゃその態度は！」

「何が悲しくて起き抜けにテメーの顔おがまにやならんぢや！餓紗喰のがまだいいわ！」

「んなつ！言つたなテメー！今ここで決着つけてやる！！」

「上等だ固羅！表出るやあ！！！！」

「止めんかアホ共！！！！」

「ぶべらつ！！」

取っ組み合つていた2人は風子の鉄拳で同時に沈められた。

「ケンカしちやダメだよ！」

「少しはおとなしくできんのかオマエらは……」

「全くこれだから殿方は野蛮でイヤですよ」

柳に水鏡、烈火を気絶させたツインテールの少女もいる。どうやら烈火以外も全員捕まつたようだ。

そこで烈火は全てを思い出した。

「あつテメーさつきはムガガガ〜！」

「少し黙っている」

さつきは何しやがつた、と言おうとしたが水鏡に口を塞がれ耳打ちされる。

「?どうかしまして?」

「イヤ、問題はない。頭をぶつけて元々デキの悪い脳ミソが更に酷くなっただけだ」

「まあそうですね。なら問題ありませんわね」このやり取りのせいで烈火がまた暴れ出し、鎮めるのにかなり時間をとられたが割愛する。

「さて、それでは事情聴取を始めますの。あ、申し遅れました。わたくし白井黒子と申します」

そう言っただけで始まったのは事情聴取とは名ばかりのお説教。一般人が手を出すなだの、風紀委員の誇りだの、お姉様は美しいだの。

結局、烈火たちが風紀委員一七七支部と書かれた看板の横を通り過ぎたのは日がとっぷりと暮れてからだだった。

「で、さっきのはどーゆーことだよ?」
建物を出た直後に烈火が問う。

「ああ、にわかには信じがたいがな……」
そう前置きして水鏡は話し始めた。この街は『能力開発』を目的に造られたこと、白井や強盗たちはその結果生まれた『超能力者』だということ。

「ふーん」

烈火はあっさり受け入れた。

「驚かないの?」

「なーに言っただよ柳。俺もオマエも似たようなもんだべ。それに紅麗のクローンの……えと、レンゲだっけか?アイツもちげえだろ」

「ハッ!そっか!」

烈火の答えに納得する柳。この少女、基本的には優秀だがところどころ又けている。

そもそも烈火たちは魔導具なんて言う代物を目にして来た訳で、今さら驚いては身がもたない。

「って水鏡。まさか馬鹿正直に訊いたのか?」

自分たちの素性が知れるというのはそれだけリスクを上げる結果になる。幻獣朗の足取りを掴むまではそれはなんとしても避けなければならぬ。

が、烈火でも気づくようなことをもちろん水鏡が見逃すはずはなかった。

「バカ言え。置いてあった本を見たんだ」

そう言っただけで水鏡は『学園都市の全て』と書かれた小冊子を取り出す。

「ってナニがめてんだよ！」

「人聞きの悪いこと言うな。永久に借りるだけだ」

「どこのジャイアンだテメーは！」

シレッと答える水鏡にツッコむ烈火。

「みーちゃんも丸くなつたなあ」

「つつーか烈火の悪いところに似ちゃっただけだね」

土門と風子はしみじみ呟いた。

「ちよーのーりよくつつーことはアレはアレか。『レポート』ってヤツか」

白井黒子の能力を思い出す烈火。あの能力は昔映画で見たことがある。割とポピュラーな能力だ。

同時に一つの謎も解ける。

「ぢゃああのビル入ったんもそーゆーカラクリか」

『窓のないビル』を出てからずっと疑問に思っていたために、答えを得られたその顔はどこか清々しい。

「まっ、そゆことだね。それよりみーちゃん。これからのこと話すんでしょ？」

「ああ。烈火、とりあえずオマエが寝てる間に住むとこで学校は決めておいた」

風子に促され烈火に何枚かの書類を手渡す水鏡。

「そこに学校と寮の住所とかカードの番号とかが書いてある。オマエは柳さんと同じ学校だ」

「おうサンキュー！ってオマエらは別なのか？」

“オマエは”という言葉に反応する烈火。

「水鏡先輩がね？『てんどーじごく』の情報を集めるためになるべく別々でいようって言ったの」

水鏡に代わり柳が烈火に伝える。

「ふーん。ぢやオマエらもバラバラか？」

「そうだよチクショー！俺は風子様と一緒に良いって言ったのに……」

「ワガママぬかすな腐乱犬！」

泣き言を言う土門は風子に叱責された。

「ま、そういうことだ。それと烈火、コレも持っとけ」

水鏡が放った物体を烈火は右手でキャッチした。

「ケータイだ。僕らのものはここじゃ使えない」

「スツゲーこれマジでケータイかよ！？めちやくちや薄いじゃん！あぁっ！カメラだ！写真撮れんぞ！」

子供の様に烈火ははしゃいだ。無理もない。彼らのいた世界ではケータイはやっと学生に普及してきたぐらいのシロモノだ。カメラつきなどはるか先の話である。

「ガキかテメーは！」

「オマエもさつき似たよーなことしたろーが」

風子にビシッと指摘され頂垂れる土門。もはや今日何度目かわからない。

「じゃあな」

そう言つて手を上げて水鏡は立ち去る。次いで土門と風子もその場を去った。

「そんじゃ俺らも行くか！」

「うん！」

そうして烈火と柳も帰路についた。もちろん2人の住む部屋は別々であるが。

柳を部屋まで見送り、烈火も自分の寮の自分の部屋へと入った。灯りを点けるとそこに広がるのは紛れもない自分だけの部屋。

彼はまだ高校生だ。初めての一人暮らしで上がるテンションを抑え
きる術は持ち合わせていない。

「いやっほおー!!!」

ここには寝起きにフェニックス・スプラッシュを仕掛けてくる父も、
ご飯が片付かないとフライパンで叩き起こしに来る母もいない。

その結果、烈火はムダに夜更かしして次の日、

「遅刻だあああ!」

見事に寝坊するハメになった。

学校までの道を疾走しながら両親の偉大さを思い知る烈火であった
とさ。

其之拾：転校生（前書き）

やっと主人公の登場です。

其之拾：転校生

「不幸だ……」

生徒で賑わう爽やかな朝の教室の中、上条当麻は重々しく呟いた。彼の人生は、不幸の連続であった。

犬の尻尾を踏んづけて噛まれるというギャグ漫画チックなものから、サイフを落とすといった笑えないもの、挙げ句の果てには腹を刺されたことすらある。

その代わり、助けた人（主に女性）との間にフラグ（主に恋愛）が乱立するという、男としてとてつもなく羨ましい特性を持っていたりするのだが。

思えば、今朝の不幸は空室のハズの隣の部屋で騒いでいたあの男から始まったと言えよう。テレビで格闘技でも観ていたらしく、やたらとハイテンションで、時々上がる歓声は夜中の3時まで続き、結果、上条が起きたのは8時過ぎ。

朝食も口々に摂らず学校まで全力疾走するも、途中、サボリの不良の方々とぶつかり、逃走。なんとか振り切るも、今度は散歩中の獯猛なドーベルマンの尻尾を踏んづけ、逃走。それすら振り切った彼を待っていたのは最近やたらと突っ掛かって来るビリビリ中学生、逃走。

そんなこんなで大回りしてきたせいで、HR開始にあと10秒間に合わず、出席簿の彼の欄には遅刻と記入されてしまった。

「カ〜ミヤ〜ん」

そんな彼に青髪ピアスの大男が声をかける。

「カミヤん知つとる？今日なんと転校生が来るらしいで〜。しかも2人も！」

「この時期にかよ？おかしな話だな」

そう、今日は7月17日。夏休みまであと三日しかない。どうせなら二学期に来ればいいのに、と上条は思った。

「ん〜……まあ昨日は『システムスキャン身体検査』やったし、設備かたす前にその2人も測つとくんちゃう？」

「ちなみに！転校生2人の名前は花菱烈火に佐古下柳っていうらしいぜい」友人であり隣人の土御門元春も会話に加わる。

「なんで知ってるんだ？土御門」

「フッフ、土御門さんには秘密の情報源があるんぜよ。教えるワケにはいかないにやー」

「クウー！花菱烈火ちゃんに佐古下柳ちゃん！僕のレーダーがピンピン反応しとるでえ〜！！」

クネクネと気持ち悪い動きをしながら叫ぶ青髪ピアス。

「佐古下柳はともかく、花菱烈火って女なのかよ？」「わかってへんなあカミやんは！僕くらいになると名前聞いたらそれがどんな人かわかんねん！きつと佐古下ちゃんは清楚で可憐なお嬢様。花菱ちゃんは名前の通り烈火の如く激しい女の子とみとる！」

クネクネを激しくしながらキツパリ言い切る青髪ピアスに呆れた上条は、土御門に話を振る。

「そついや昨日俺の隣の部屋めちやくちやうるさくなかったか？お蔭で寝不足なんだが」

「ああ、ソイツが転校生ぜよ」

「なんやて！？」

上条よりも素早く土御門の言葉に反応する青髪ピアス。その目は血走っているように感じる。糸目なのでわからないが。

「カミやんとツツチーの部屋は男子寮！ということは転校生のうち一人は必然的に男になってしまっやん！そんな……そんなありえへん！」

「残念だったな青ピ。諦めろ」

「万年フラグ男は黙らっしやい！僕は今新たな可能性を見出だしたで！ズバリ！訳あって男装して男子寮に住むことになった俺系美少女なんや！」

「な訳ねーだろ！現実を見る！」

「てゆうかぶつちやけ男だにやー」「そんな！僕の夢はどうなんねん！？この行き場のない怒りをどこにぶつければ」「うるさいのよ貴様たち！」

いい加減本気でうるさくなつて来た青髪ピアス＋口論していた上条&土御門はクラスメート・吹寄制理の鉄拳で強制的に黙らされた。

「不幸だ……」

そう言い残し、上条は倒れた。

烈火、そして彼と同様に遅刻した柳は二人で共に校門をくぐった。

ちなみに柳は烈火のようにハメを外したのではなく、単純に昨日色々あつて疲れたせいで寝坊したのである。「ストップです！」

教室に向かう二人の前に、小学生くらいの女の子が立ち塞がる。

「初日から遅刻とは……。あなたたちが花菱ちゃんに佐古下ちゃんですか？」

「そうだけど、あなただあれ？」

ニツコリ笑いながら聞き返す子供好きの柳に、少女はこちらもこやかにこう答えた。

「私は今日から二人の“担任”になる月詠小萌です！よろしくですう」「ナニゆつてんだよガキンチョ！さっさと小学校に戻んな」

「あゝ！信じてないですね？ならこれを見やがれですう！」

烈火の発言に腹を立てた小萌はカバンからゴソゴソと何かを取り出した。見ると、それは免許証。そしてそこに記された生年月日を見た烈火と柳の表情が固まる。

「さあ、これでわかったです？全く、女性の年齢を間違うなんて失礼ですよ！」

そう言つて手招きする小萌。烈火は自分の世界にいる見た目20代、実年齢400オーバーの母親を思い出していた。小萌に連れられて烈火たちは教室にたどり着いた。が、少し待っているよう言われる。何でも、まずは先生が先に入って転校生のことを皆に伝えるのがお約束だそうだ。

「皆さんおはようですー！授業の前にビッグニュースですよー」
扉越しの小萌ボイスを聞きながら、烈火はぼんやり窓の外を眺める。
転校なんてすると思わなかったなあ、なんて考えていると、

「それでは二人共、どうぞー！」

小萌の合図が聴こえた。二人は扉を開けて教室に入った。「きゃー
！」

直後に響く黄色い歓声。女子のものかと思いきや、柳入場でテンションの上がった男共の声だったりする。

「二人共、自己紹介です」

言われて柳と烈火は黒板にそれぞれ自分の名前を書いて自己紹介を始めた。柳の自己紹介の途中に青髪ピアスの男が突撃して来るハプニングもあったが烈火が撃退したため、未遂に終わった。

そして自己紹介を終えた二人は空いてる後ろの席につこうとして、気づいた。

自分たちの案内人。不適に笑う土御門元春に。

直後、烈火は土御門の胸ぐらを掴んで持ち上げる。そして、女子の悲鳴を無視して彼を引っ張って屋上まで駆けていった。

取り残された柳たちはただ呆然とそれを見送った。

「何しに来やがった！」

屋上のフェンスに土御門を押さえつけ、烈火は敵意を露にする。

「何しにって、俺はずーっとココの生徒だぜい？これはプライベートル。 “お仕事” は関係ないにゃー」

「信じられつかボケ！」

「ホントだって。なんならクラスの奴らに訊いてみりゃいいぜよ。それに」

「がっ……」

言葉を切ると同時に、土御門の拳が烈火のみぞおちにめり込んだ。急な攻撃に対応しきれなかった烈火に激痛と吐き気が同時に襲い掛かった。堪えきれず、腹を押さえたまま膝をつく。

「俺って実はスパイなんだぜい？」

土御門はあっさりと言い放った。

「スパイ……だあ？」

「そ。イギリス清教の……っと。こっからは秘密ですたい」

そう言つて意地悪く笑う土御門は烈火にこう告げた。

「土御門さんは“嘘つき”だからにゃー。信用し過ぎちゃダメだぜい？」

と、その時

「花菱ちゃん！土御門ちゃん！」

「烈火！」

小萌と柳が屋上へやって来る。その後、烈火は昨日に続きお説教を二人分、柳と小萌から受けた。

「なあ、花菱……だっけ」

机に突つ伏したまま、プスプス頭から煙をあげる烈火に、上条は話しかけた。烈火は顔だけ上条の方に向ける。

「……なんぢや？」

「土御門と何があつたか知らないけどさ、あいつと仲良くしてやつて欲しいんだ」彼の口から飛び出したのはそんな言葉。上条は続ける。

「アイツはちよつと……いやかなり失礼だけど、ホントはいいヤツなんだ。だからさ、アイツと仲良くしてやつてくれないか？」

「プツ……ぶわっははははは！」

大爆笑を返した。

「なっ、どうして笑ってるんでせうか？上条さんなんかおかしなこと言いました？」

「ひゃひゃひゃ……はあ、だつておめえ真剣な顔でんなこと言うからよ」そして烈火は上体を起こして右手を差し出す。

「仲良くやるーぜ！名前教えてくれ」

「……ああ。俺は上条当麻。よろしくな花菱！」

上条は一瞬面食らった顔をしながらその手を握り返す。

今、二人のウニ頭の間で友情が芽生えた。「それでね、イソフラボンにはなんとバストアップの効果もあって……」

「フムフム！それでそれで!?」

隣でも吹寄と柳が仲良く健康食品のこと（今は胸に及ぼす効果）について話している。少し前まで吹寄の胸を敵視していた柳だが、それだけに彼女の発言には説得力があるらしく、熱心にメモを取っている。

そんなこんなで昼休みに入ると、小萌が声をかけて来た。

「花菱ちゃん、佐古下ちゃん。ちよつと来てください」

「何たる?」

「さあ?」烈火と柳がやって来たのを見て、小萌は告げた。

「今から二人は先生と一緒に『身体検査』に来てもらおうです!」と。

其之拾巻：身体検査（システムスキャン）

『システムスキャン
身体検査』。

それは、外界から隔離されたこの街、学園都市の大きな特異性の一つである。

これは、通常のテストとは異なり、学生たちの『能力値』を計測するために行われている。

学園都市では、“能力値の高さ 学生の優秀さ”なので、大体的場合で能力値、すなわちレベルの高いものほど、奨学金の額や授業免除など、色々と優遇される。

と、こんなことを、その高位能力者の集まりである名門・常盤台中学へ向かうバスの中で、小萌は烈火たちに話した。

「ちなみに先生は発火能力専攻なのですよ！おっ！花菱ちゃんもど
うやら発火能力者らしいですね！胸が踊るのです！」
バイロキネシスト

烈火たちの能力について書かれた、手元のファイルペラペラ捲りながら小萌は嬉しそうに声をあげた。

「パイオツロケット？なにそれ？」

「パ・イ・ロ・キ・ネ・シ・ス・ト！まあ簡単に言うと、ん〜人間ライターさんですね」

烈火は指を擦って火を出してみる。まあ確かにライター代わりに使ったりもしたが、あまりいい気はしない。

少々不機嫌に火を握り消す烈火に気づかないで小萌はファイルを捲り続ける。

「ん？んんん！？佐古下ちゃんの“治癒能力”^{ヒトリング}っていうのは先生知らないですねー」

「えつと、私他人の怪我とか病気を癒すことが出来るんです」

「ええつ！傷だけじゃなくて病気まで！？しかも他人の！？それつてスゴクレアですよー！！」

「そ、そうなんですか？私よくわからなくて」

興奮して迫ってくる小萌に少々たじろぎながら柳は答える。

「むー。それにしても二人は昨日、学園都市に来たんですよね？いつの間に能力開発を受けたんですか？」

「えっ？俺ら二人とも生まれつきだぜ？」

「ええええええ！？」

事も無げに言う烈火に、小萌はオーバーなぐらい驚いて、大声で叫んだ。そのせいでドライバーにお叱りを受けてしまった。

元々小さい体をさらに縮こまらせて、小萌は再び尋ねる。

「それホントですか？」

「うん。その能力ナントカってのは受けてない」

うーむ、と考える仕種を見せた後、小萌は呟いた。

「じゃあ“すけすけみるみる”とかは意味ないかもですね」

「ナヌ！？すけすけみるみる！？」

小萌の発した単語にいかかわしいものを想像する思春期真っ只中の花菱烈火。

「烈・火？」

そんな烈火に笑顔で迫る柳。口元はとてこやかだが目が笑っていない。ある意味、般若より恐ろしい表情の柳は烈火の足を思い切り踏み抜いた。

「ぼぎやあああああ！」

烈火の絶叫が車内に響く。結果、彼らはバスからつまみ出されてしまった。

一行は徒歩で学舎の園入り口まで行き、駅の自動改札のようなゲートを抜けて、ヨーロッパ風の町並みを歩いて、目的地である常盤台中学に到着した。

彼らがわざわざここまで来た理由は一つ。

彼らの“可能性の高さ”にある。

“能力値”の測定には様々な機材を必要とする。モノによっては比較的アナログな方法で計測出来るが、烈火と柳の能力はデリケートな“モノ”だ。その為、なるべく精密な機材で計測しなければならぬ。

常盤台のような名門と、烈火たちの高校では期待値が違う。従って、

名門校の設備ほど、より繊細に、より精密になっていく。

小萌は、そんな風に生徒たちの可能性を八ナから決めつけるようなマネは気に入らないが、そうなっているものは仕方ない。だからわざわざ、近場で一番の名門である常盤台にアポを取ってくれたのだ。

「烈火ー！柳ー！」

やたらと立派な校門をくぐった烈火と柳の耳に聞き慣れた声が届く。声の主は体操服姿の風子だった。

「風子ちゃん！」

「よう！おめえもシステムなんたらか？」

「そ。土門とみーちゃんも来てるよ」

「ふーん。で、レベルいくつだったよ？」

烈火が尋ねると風子は不敵に笑いながら懐から一枚の紙を取り出す。

「フッフッフツ！よくぞ聞いてくれました！これをみよー！」

無理矢理突っ込まれ、グシャグシャになったその紙には『霧沢風子
判定“LEVEL4”』と印刷されていた。

「わあ！風子ちゃんすごい！」

「へっへー！ちなみに土門たちも4だったよ」

(つーかテメーらどーやって測ったんだよ?)

誇らしげに胸を張る風子に烈火が小声で尋ねる。

(“これ”のことをお忘れかしらん?)

風子は指で風神をコンコンつつきながら言った。

ああ、と烈火は納得する。

そう言えばバスで小萌が言っていた。多少数値が下がるものの、能力の集中に必要ななら小道具の使用も認められる、と。

風神、閻水、土星の輪。なるほど、これらの導具はどれも少々ハデなアクセサリーと言えば誤魔化せる。魔導具を使えば風子たち“ただの人間”でも、高数値を叩き出せるというわけだ。

(レベルが高いほど色々なことあるらしいしね。それに)

風子はそこで一度言葉を切って辺りを見回すと、一段と声のトーンを落として囁いた。

(それに、幻獣朗のことだって何かわかるかもしれないしね)

(そっか……!)

その言葉で、俄然やる気が出てきた。

正直さつきまでレベルなんてどうでもよかったが、幻獣朗に関わってくるとなれば話は別だ。

(いっちょやったるか!)

と、烈火の闘志に火が点いたところで、

「花菱ちゃん」

小萌が声をかけてきた。

「そちらの女の子は知り合いですか？内緒話はよくないですよー」

「ん？ああ。こいつも俺の地元のツレだよ」

「そうですか。初めまして。花菱ちゃんの“担任”の月詠小萌です。よろしくですー！」

「えっ？あ、霧沢風子です？」

そう言っつて微笑む小萌に風子はよくわからないような顔で自分も名乗る。

「ふむふむ、霧沢ちゃんですかー。じゃあさっき言っつた『土門』に『みーちゃん』って言うのも？」

「おう！こいつとおんなじー！」

「花菱ちゃんと佐古下ちゃんは仲良しのお友達が多いようで先生とつても嬉しいのです！あっそろそろ時間ですね。それじゃ、花菱ちゃんに佐古下ちゃん。行くですよ？」

「ぢゃ、行くか！柳！」

「うん！じゃあまたね、風子ちゃん！」

「おう！頑張れよ！」

風子と別れた後、烈火と柳も別行動となり、烈火は小萌にプールまで連れてこられた。小萌曰く、発火能力は暴走すると危険なので、迅速に消火出来るように、水場で行うようになっていているらしい。

その小萌は着替えだとかで出ていったので、今は烈火一人である。渡された体操服に着替えた後、適当にそこら辺を眺めていると、陸上の計測器を巨大化したような機械が目に入る。何に使うのか疑問を持つが、まあなんかするんだろ、と無理矢理納得したところで、

「花菱ちゃん」

自分を呼ぶ声がある。見ると、オーダーメイドであろう小さなスーツに身を固めた小萌が立っていた。

「一応、ちゃんとした試験ですからねー。先生も堅苦しくしないとダメなんです」

言いながら、ポテポテ歩く小萌。本人はフォーマルなつもりらしいが、残念ながら、卒業式におめかししている小学生にしか見えない機械の前のパイプ椅子に座って小萌は告げる。

「それじゃ試験を始めるですよー。まずはコントロールを見せてもらおうですー！」

身体検査が始まった。

「なんと！炎が質量を持ってるですー！」「これは履気楼ですか？イヤ、炎が人の形に！？」「すごいですーバリアーですー！」

烈火が能力を披露するたび小萌は逐一喜びと驚きの交じった声をあげている。

そして十分ほど経過し、試験は最終段階に入った。

「それでは最後に花菱ちゃんの能力の最大値を調べさせてもらおうです。そのこのプールに思いつきり撃っちゃってください！」

手元の書類に色々書き込みながら、小萌は烈火に最後の指示を出す。それを聞いた烈火は目を輝かせた。

「マジでおもつきし撃ってもいいの？」

「どーぞどーぞ。むしろぶっ潰しやるです！」

「ヨッシャー！」

嬉しそうに腕をグルングルン回す烈火を見ながら小萌は考える。

(花菱ちゃんも概ね優秀ですけど、能力使う前に指をこちょこちょやるクセが気になります。コントロールも抜群ですし、あれがなかったら十分LEVEL5も狙えるんですけど……)

要は、“その程度のクセ”で覆されるぐらいの評価でしかない、ということだ。

しかし小萌は知らない。烈火の隠し持つ“切り札”を。

烈火は一度大きく深呼吸したあと、指を構えた。そして流れるような動きで字を描く。“切り札”の名を示す『虚』の一字を。

「出やがれ！竜之炎漆式！虚空！！」

烈火が叫んだその直後、

「ひええ！？」

烈火の背後に現れた“もの”を見た小萌は悲鳴をあげてパイプ椅子から転げ落ちる。無理もない。

そこにいたのは一つ目の竜。魔導具を生み出した“天才”の成れの果て、八竜の一匹・虚空である。

「加減はいらねえ。ぶっ放すぜジジイ！」

虚空が掴んでいた珠が、その大きな口まで浮かび上がる。そのまま虚空が力を溜めると共に、珠も大きく紅く煌めく。

「撃て！！」

瞬間、紅い光が閃いた。轟く爆音、跳ね上げられる水柱。

プールの水は半分以上が蒸発し、底はクレーターの如く陥没した。まるで爆撃を受けたかのように凄惨な光景が広がる。それを隠すかのごとく、濃霧と飛沫がプールを覆った。

「ふにやつ！？何！？」

退屈な授業に微睡んでいた美琴は凄まじい轟音に叩き起こされる。周りの生徒も一様に驚いて、音の発生源であるプールの方を見て騒いでいる。

壇上の教師も口をあんぐり開けていたが、直ぐ様落ち着きを取り戻し、ずり落ちたメガネを掛け直す。そしてバンバンと出席簿を叩いて浮き足立つ生徒たちを叱咤する。

「……ハイハイ！授業中ですよ！早く席に「トイレ行ってきます！」ちよっ、御坂さん！？」

言うが早いか美琴は教師を無視して教室を飛び出した。言うまでもなくトイレなどは建前で、真の目的はあの音の正体を確かめることである。

平気で『トイレに行く』、などと言う辺りが件のトゲトゲ高校生に『お嬢様らしくない』、言われる所以だということにも気づかないで、美琴は走る。

プールのすぐ側にある非常階段を四階までかけあがって、身を乗り出して プールを覗き込む。

そんな彼女が目にしたのは、クレーターののような形で広がりコナゴナに砕けたプールの床と、立ち込める濃霧の中に立つ男の姿（小萌は機械の陰に隠れているため見えていない）。

その男の特徴的な頭のシルエットには見覚えがあった。

（……なるほど。やっぱり只者じゃなかったってワケね）

自分でも気づかないうちに、美琴の顔には笑みが浮かんでいた。“好敵手” となり得る力を持った強者を見つけた喜びの笑みが。

其之拾巻：身体検査（システムスキャン）（後書き）

可能性で設備がよくなる云々はオリジナル設定です。ひょっとしたら原作とずれてるかもしれませんがご了承ください。

其之拾貳：挑戦

「おっ！帰って来たで〜」窓の外を覗きながら青髪ピアスが言った。他のクラスメートと一緒に上条も外を見ると、丁度、烈火と柳が校門をくぐるのが見えた。何故か小萌はいないが。

「ちなみにカミちゃんは花びー（烈火のアダ名）と佐古下ちゃんのレベルいくつぐらいやと思う？」

「ん〜、花菱はLEVEL0、佐古下は3つてどこじゃないか？」この予想は当てずっぽうではなく、わりと考えられたものだったりする。

柳は、AIM拡散力場がどうのと言った、所謂“学園都市向け”の授業には流石についていけないものの、その他の英語や数学といった授業ではその頭脳を如何なく発揮し、先生からお褒めの言葉を頂いていた。

対して烈火は、一限目の遅刻&喧嘩沙汰に加え、二限・ゴン狐を読んで号泣、三限・熟睡、四限・『俺は鳥になる』と言ってエスケープ、などとても優秀とは思えない。まあ似たような素行のLEVEL5を上条は知っているので断言はできないが、それでもあんなのは特殊なタイプだろう。おそらく烈火は見かけ通りだ、とそんなことを考えていると、ガラガラとドアを開いて烈火と柳が教室に入ってきた。同時にクラスが沈黙した。

原因は烈火にある。元々のヤンキーっぽい風貌や土御門との一件のせいで、烈火は上条、吹寄、青髪以外のクラスメートから敬遠されていた。

周りの反応など気にしていない様子で烈火は土御門に歩みよる。

「なっ！？オイ花菱！」

「ダメだよ」

上条は割って入ろうとするが柳に制される。

「お、おい！」

「いいから」

烈火は土御門の目の前で立ち止まると、右手を差し出した。

「ナニ、これ？」

「握手だよ。見りゃわかんだろ」

土御門の問いに答え、烈火は続ける。

「正直テメーのことはまだ信用できねー。けど上条がああ言うんだ。ただの悪モンぢゃねーべ？だから仲直りだ。悪かった」

烈火がペコリと頭を下げると土御門はニヤリと笑って、

「ああ、いいぜい。俺こそ殴って悪かったにやー」

烈火の右手を握った。

パチパチ、と誰かが拍手を始める。一人から二人、二人から四人、と拍手はどんどん増えていき、最後にはクラス全体での大きな拍手となった。

「上条くんのお蔭だよ。ありがとう」

しかし、柳がそう言った瞬間、拍手は止んだ。クラス中から殺気を孕んだ視線が上条に向けられる。

「な、なんで上条さんは睨まれているのでせうか？」

「カミヤん、またか。またなんか！」

「また貴様は純情な乙女を手込めにする気なのね……」

「お、おい青ピ。吹寄。一体何を、ってクラスの皆さんもナゼ青竜刀やマシンガンを構えてらっしやるのかこの憐れな上条当麻にお教え下さギヤアアアアアア！不幸だー！」

突如として始まった上条vsクラス全員の抗争といつかりんチに烈火と柳は口をポカンと開けている。土御門はニヤニヤしながら柳に耳打ちした。

「どうやらみんなは佐古下がカミヤんに惚れたと思ってるみたいぜよ」

「ええっ！？私別にそんなんじゃない……」

「わかってる。だからホントは誰が好きかハッキリ言えばいいんだにやー」

「でっでも、それは……」

「早くしないとカミヤんがやらねちまうぜい？ “恩人”のカミヤんが」

「ううっ……わかったよう」

“恩人”の部分を強調させる土御門に柳はしぶしぶ了解する。そして大声で叫んだ。

「みんなあ聞いてえー！」

攻撃の手がピタリと止まる。

「私、上条くんのは好きでも何でもないの！」

わかつてはいたが、ハッキリ言われ、ちよっとブルーになる上条。

「……やっぱり言わなきゃダメ？」

「ほらほら、早くしないとカミヤんが八千の巣ですよ？」

土御門に急かされ、柳は意を決した様に目を閉じると、顔を真っ赤にして叫んだ。

「私は、私は烈火が好きなんです！！」

「ぶっ！！」

思わず吹き出す烈火。彼女の気持ちはとうの昔に知っていたが、恥ずかしがりやの彼女がこんな公衆の面前で愛を叫ぶとは思っていなかった。

「おおお俺も好きだぞ柳」

しどろもどろになりながらこちらも愛を告白する烈火。

ゆでダコのように真っ赤になる二人は期待していた。さっきの仲直りと同じく、今回も祝福してもらえると。

だが、

「目標変更。バカップル（男）」

「ラジャー！」

青髪ピアスとクラスの男子の野太い声が、二人の甘い幻想をぶち殺した。

「ぎにゃああああ！」

クラスの男共が烈火に襲いかかる。「計算通り」その光景を見て土御門は一人ほくそ笑んでいた。

「で、レベルはいくつだったんだ？」

上条が烈火と柳に尋ねる。

あの後烈火は男子全員を返り討ちにしたものの、吹寄にボコボコにされてしまった。しかも、吹寄は二人の仲を応援していたのに、『こういう時は殺られるのがお約束』というワケのわからない理由で、「えと、私はLEVEL4でした……」小声で言う柳に続いてミイラ男と化した烈火も答える。

「俺はまだわかんねえ。機械がおかしくなっちゃったみたいだよ、先生が向こうでもっぺん計算し直してくれてる。……っと。ウワサをすればなんとやらだな」

バタバタを廊下を走る音が聞こえたかと思うと、乱暴に扉が開かれ、肩で息をしながら小萌が入ってきた。

「は……花菱ちゃ……れ、れべ……」「落ち着きーやセンセ。はいお水」

青髪ピアスが差し出した水を一気に飲み干すと、小萌は大声で告げた。

「花菱ちゃんはLEVEL5の第八位です!!」

一瞬の静寂のあと、

『ええええええええええええ!!?』

クラス全員の叫びが学校中に響いた。

新しいLEVEL5のニュースはすぐに

広まり、烈火は一躍、有名人となった。最も、広まったのは名前だけだが。

また、不良に絡まれていた女子生徒を助けたことで烈火の人気が上がった。

しかし同時に烈火のバカな行動も目立つようになり、三バカへの加入も決定（吹寄が決めた）。“デルタフォース”は“バカルテット”へと名を変えた。

そんなこんなで今日は夏休み初日。心踊る日……のハズだったが…

…。
「あぢい……」

昨夜突如訪れた停電のせいで、クーラーはおろか扇風機も作動せず、烈火の部屋はサウナのようになっていた。そのお蔭で烈火は寝不足、しかも今日は制服採寸（烈火と柳は名子霧高校の制服を着用していた）だとかで学校に呼ばれている。

そんなワケで今期二度目の夏休み初日の烈火は最低のテンションだった。

「ま、いーか。さつさと行ってさつさと帰んべ」

気持ち切り替えて柳との待ち合わせ場所へと向かおうと、ドアを開ける烈火。と、その時白い修道服の少女とぶつかった。

「っと、ワリイ」

「もう！気をつけて欲しいかも！」

その言葉に烈火はムツとする。

（人にぶつかつといてワビなしたあふてえガキだ）

説教してやろうかな、と思ったが少女は烈火が口を開く前に

「あ、そうか！あの電動使い魔！」

と去っていく。

諦めてふと後ろを見ると上条が立っていた。

「よっ！ナニしてんだ？」

「あ、ああ。何でもないよ。花菱、確か学校行くだよな？オレも補習入っちゃったから一緒に行こうぜ」

「ん？おう！」

お茶を濁された感じはするが深く追及せず二人で寮を出て、柳で合流して学校に到着した。

その後は上条と別れて柳と共に採寸してもらう。途中、ジャージ姿の爆乳女に見とれたせいで柳に殴られた。風子に似てきたな、と柳の悪い変化を嘆いてるうちに採寸は終了し、二人は晴れて自由の身に。だがすぐ帰らずに、補習の上条を待つことにした。

そして補習も終わりのいざ帰ろうか、という時に小萌が声をかけて来

た。

「花菱ちゃんに佐古下ちゃん！ついでに上条ちゃん」

「ついでかよ!？」

上条の訴えを無視して小萌は続ける。

「今日はせっかくの夏休み初日ですので先生の家で二人の歓迎焼き肉パーティーを開こうと思うのです。どうですか？あ、霧沢ちゃんとお友達二人も誘っていいですよー」

「おっ！マジで!？行こーぜ柳!」

「うん!」

「助かった！今朝は何も食べてなかったんですよ!」

「じゃあ決定ですね！あつ、ついでにお馬鹿二人のお勉強も見てあげるので二人共、宿題持つて来るですよ?」

最後の一言でテンションただ下がりになるバカコンビ。しかし、焼き肉パーティー参加のチケットを獲るためやむを得ず了承する。

二人は宿題を取りに行くため、小萌たちと別れ、夕日の眩しい街を自分たちの寮に向かって歩く。

「ちよつと待ったあ!」

そんな二人の前に立ちふさがる一人の少女。どこかで見たことがある気がするが思い出せない。烈火が頭を捻っていると、

「あー、またかビリビリ中学生」

「ビリビリゆーな！私には御坂美琴ってちゃんとした名前があんのよ！今日という今日こそって違う！用があんのはアンタじゃなくてソッチのアンタよ!」

そう言っつてビシツと指を差される。そこで烈火は思い出した。

「あつ！オマエあん時のビームっ娘か!？」

「……不本意だけどそれでいいわ。今日はアンタに言いたいことがあんの」

美琴は一度言葉を切ると、肺一杯に空気を吸い込んで、

「私と勝負しなさい!」

そう高らかに言い放った。

其之拾貳：挑戦（後書き）

そんなワケで多分読んでくださってる方全員の予想通りな展開になりました。

次話からバトル路線に突入する予定です。

其之拾参：本気の闘い

急な大声に辺りを歩く人の足がピタリと止まった。

皆こちらに注目しているが、美琴は構わずに続ける。

「アンタが新しいLEVEL5の花菱烈火でしょ？おっと、とぼけてもムダよ。調べはついてんの！」

「？ああ、俺が花菱烈火だ。でもなんでいきなり勝負？」

「決まってるじゃない。アンタが強そうだからよ！」

上条は慌てて話に割り込む。

「ちょ、ちよつと待てよビリビリ！オマエは少年マンガの主人公か！？そんな理由でケンカ吹っ掛けんよ！」

「アンタは黙ってなさい！で、どーすんの？受ける？受けない？」

「おい花菱！受けない方が「ヨシ！そのケンカ買った！」ちよつとおー！？」

上条の忠告虚しく烈火はあっさり承諾した。しかし上条は諦めずに、小声で烈火に説得を試みる。

（考え直せ花菱！あんなのでも一応女の子だぞ！？）

（大丈夫だって！手加減するよ。それにあーゆーのはちゃんと相手してやらねーといつまでも付きまたってくんぜ？）

（けどさ……）

「いーからいーから！！」

無理矢理押しきる烈火。彼も実は美琴の実力に多少の興味があった。もちろん本気でやるつもりは毛頭ないが、自動車を軽く吹っ飛ばす彼女の實力を間近で見て、手合わせしたいと思っていた。

彼もまた“少年マンガの主人公”な性格であったのだ。

「で、どこでやんだよ？まさかこんなところでおっ始めるつもりじゃねーだろ」

「当然よ。こーゆーのにおあつらえ向きの場所があんのよ。ついて来なさいー！」

「あつ待てよ！」

歩き出す二人を慌てて追いかける上条。

「何よアンタ。もしかしてホントは構って欲しいの？ツンデレ？」

「んなワケあるか！オマエら二人だけだと何しでかすかわかんないから心配なんだよ！」

「そんな心配する必要ねーって。ムチャはしねーよ！」

「転校初日にケンカ沙汰起こしたヤツの言うことが信用できるかあ！」

ギヤーギヤー喚く上条は結局ついて来ることになり、三人は河原に到着した。

「さ、着いたわよん」

「どーでもいいけどなんで河原？」

「っーかここ3日前に闘ったとこじゃねーか」

「何よ？文句あるの？決闘と言えば河原がお約束でしょ！」

なんでこの街のヤツらはこんなにお約束が好きなんだ？と烈火が考えているうちに美琴はストレッチを済ませて臨戦体勢に入る。「いつでもどーぞ！」

「そんじゃあ」

烈火も軽く屈伸して

「お言葉に甘えさせてもらっぜ！」

思い切り跳躍する。

普通の高校生の跳べる限界をはるかに越えた高さに到達した烈火は、ほぼ真下にいる美琴目掛けて特製の火薬玉を数発投げつける。

「甘いわよ！」しかし、美琴の放った電撃を喰らった火薬玉は、一つとして美琴に届かず、全て彼女の周りで爆発した。

「いっっ！？」

運動エネルギーを全て失った烈火の体は、今度は重力にしたがつて落下を開始する。

待ち構える美琴。得意の回し蹴りを放つ構えだ。その脚は下降する烈火にタイミングよく打ち込まれる。烈火はムリヤリ体を擦ること

で着地点をずらして蹴りを回避した。

美琴は烈火を追撃し、連続で拳を放つ。だが、その拳は一発も烈火には当たらない。

攻撃の手を休めることなく美琴は思う。

自分の直感は正しかった。やはりこの男は……強い！

身体能力の高さは、先日知り合った小金井という少年をも凌ぐほどだろう。

ただの一撃も喰らわせられないのがいい証拠だ。

しかも相手はまだまだ本気とは程遠い。

(こつちも本気で行くつきやないわね……！)

だがそれは美琴も同じだ。

「なんだ？」

烈火は美琴の髪がパチパチと帯電しているのに気づいた。

直後

「ぎっ……！」

烈火の体を雷撃の槍が貫いた。

体中を駆け巡る衝撃に思わず膝をついてしまう。

「どうかしらん？少しは本気でやる気になった？」

「ぐっ……まだまだあ！」

痺れる体を奮い立たせ、再び懐に仕込んだ玉を美琴に向けて投擲する。ただし今度は爆弾ではない。

「バカの一つ覚えね！！」

美琴は先ほどと同じように電撃で爆破する。瞬間、美琴の視界が白煙に包まれる。

(煙幕！？なるほど、煙に乗じてってことね。でも……)

美琴は背後に思い切り回し蹴りを打ち込む。

それは見事に烈火の腹を捉えた。

「んなっ……！？」

予想外の攻撃と毎日自販機を蹴って鍛えた脚力に烈火は思いもよらぬダメージを受ける。

美琴は続けて頭上に電撃を放った。黒焦げになった網の破片がパラパラ降ってくる。

「悪いけど、私って常に電波のリーダーはってんのよね。だからこんな風に死角を突こうとしても意味ないわよ？」

「小細工は通用しねえってことかよ……！」

烈火の顔には余裕のない笑みが浮かんでいる。

美琴は強い。自分の予想をはるかに越える強さだ。

動きに素人臭さはあるものの、その潜在能力は計り知れない。冷や汗を流す烈火にややイラついた口調で美琴は問い掛ける。

「なんで能力を使わないのよ？」

「女相手に本気出せつかよバカ！」

「何よ。アンタ、フェミニスト？」

「ちげーよ！俺は忍だ。女子供に手は出さねえ！」

烈火は、風子のような例外を除いて、女相手に本気を出すことを嫌う。

たとえそれが麗の兵隊であっても、だ。

美琴や瑪瑙のような普通の女の子など、もっての他だ。

そんな、紳士的とも言える烈火の態度は美琴を大いにムカつかせた。

「上等じゃない……！意地でも本気出させてやるわよ……！」

叫ぶと同時に美琴は走り出した。

勢いをそのままに烈火にパンチを繰り出す。が、やはり当たらない。烈火を追い込んで本気を出させようかと思っただが、肉弾戦では相手がかかるかに格上だ。これでは話にならない。

かといって、電撃を喰らわせ過ぎると、気絶してしまうかも知れない。それでは意味がないのだ。

と、思案する美琴は先ほどの烈火の言葉を思い出す。

『俺は忍だ』

推測するに、烈火は忍、すなわち忍者に憧れているらしい。ならば……！

「プツ！ククククク」

「な、なんぢや？」

急に笑い出した美琴に訝しげな視線を向ける烈火。

「だって、おかしいじゃない？」

「何がだよ？」

「ナニつてアンタ、忍者だなんて時代錯誤もいいところでしょ？」

美琴の口が発した一言に烈火の顔から樂しげな表情が消えた。

烈火は小さく、それでもハッキリと呟いた。

「禁句だ。取り消せ」

（かかった！）

美琴の策は単純明快。烈火の憧れの対象を馬鹿にする事で相手の怒りを誘うというものだ。そしてそれは予想以上の効果を見せた。責め所はあっていた。あとは畳み掛けるのみだ。

美琴は口撃を再開した。

「アメリカ人じゃあるまいし。忍者なんて馬鹿馬鹿しいわよ」

「もう一度言う。取り消せ」

烈火の声は先ほどよりも強い怒気を帯びていた。しかし美琴は怯まずに続ける。

「だいたい忍者って何よ？こそこそするだけのヒキョーモンじゃない」

「最後だ、次はねえぞ！取り消せ！！！」

もはや怒りを隠す気もない烈火の声。

それに気圧されそうになりながらも美琴は

「忍者なんてただのカスよ」

越えてはならない最後の一線に踏み込んだ。

メギイツ、と鈍い音をたてて烈火の右拳が高架を支える柱を殴る。

手をどけると、学園都市製の堅固な柱にヒビがはいっていた。

「上等だ……！望み通り本気でやってやるよクソガキ。後悔しろや

固羅！！！」

烈火が吼える。まるで獣のように獰猛に。

それを見て、今まで傍観に徹していた上条も慌てて止めに入る。

「おっおい！落ち着け花菱！」

こんなに怒っている烈火は初めて見た。

青髪ピアスが柳にちよっかいをかけているときとも、吹寄とケンカしているときとも違う。自分の信念を汚された男の本気の怒りだ。それだけに、これから起きるであろう惨劇は容易に想像がつく。

曲がりなりにも烈火と美琴はLEVEL5。

この二人が本気でぶつかれば、お互いにただでは済まない。それどころか、辺り一帯が吹き飛ぶような事態になりかねない。

「黙ってる。こいつは俺の問題だ」

しかし、烈火は上条の制止には応じない。

烈火は、風子のような例外を除いて、女相手に本気を出すことを嫌う。

たとえそれが麗の兵隊であっても、だ。

美琴や瑪瑙のような普通の女の子など、もつての他だ。

だが、そんな感情が塗りつぶされてしまうほどに、忍を、自分の両親が命を懸け、自分がずっと憧れてきた存在を侮辱されたことへの怒りは大きかった。

「弑式、碎羽」

烈火の右腕が炎に包まれたかと思うと、その炎は刃のような形に収束した。

「そうこなくっちゃ……！」

美琴も自らの能力で砂鉄を固めて剣を作り出す。

二人は同時に駆け出す。

御坂美琴と花菱烈火。LEVEL5“第三位”と“第八位”。

人外の能力を持つ二人の“本気の闘い”の火蓋が切って落とされた。

其之拾肆：決着（前書き）

前回何人かの方から、行間を開いた方がいいとご指摘を受けました。改善しようとして挑戦してみましたが、いまいち上手くいきませんでした。

申し訳ありません。見辛いかと思いますが、ご了承ください。

其之拾肆：決着

双方の刃が交わる。直後、美琴はその衝撃に数歩後ずさった。対する烈火は勢いをそのままに踏み込んで、連続で斬り込む。美琴はそれを受けるだけで手一杯となった。

(くっ！接近戦じゃ分が悪い！)

そう悟った美琴は距離を取るべく牽制の電撃を放つ。しかし、烈火はそれを読んで放たれる直前に体の軸をずらし、電撃を掻い潜り、再び懐に潜り込む。

(このままじゃ……！)

じり貧だ。

烈火の炎が持つアドバンテージが“威力”なら、美琴の電撃は“速度”だ。

自然の雷とは異なり光速を誇るそれに、速さで敵うものは存在しない。“マトモに距離を取れば”だが。

例えば、世界陸上のメダリストと只の小学生が、100メートルを競走したとする。それならば、10メートルや20メートルのハンデがあつたところで、小学生が勝てるハズはない。

しかしそれが、30メートルの勝負ならばどうだろうか。10メートルなら、1メートルなら？

十中八九がそれ以上の確率で小学生が勝つだろう。

距離が短ければ短いほど、『速さ』の持つ優位性は薄れる。重要なのはスタートの“位置”と“反応”だ。

烈火はそれを意識したワケではないが、数多の強敵を相手取って来た彼の体は、自然と相手を自分の土俵に引き摺り込むべく動いていた。

「……のお！」

美琴が、今度は全方位に電撃を放った。

「がっ……」

流石の烈火もこれは避けきれず、マトモに喰らってしまう。

しかし美琴は追撃せずに、冷静に距離を取った。

即座に復活した烈火は間合いを詰めようとするが、彼の体がそれを許さない。

“この距離”では、美琴の持つアドバンテージが存分に発揮される。下手に動けば、相手の攻撃をかわせなくなってしまう。

有利な状況に立ったにも関わらず、美琴は冷や汗を流す。

（アレを喰らって立つなんて……。なんてバケモンよ！）

先の一撃は、最大電圧には遥かに劣るが、それでも人を気絶させるには十分過ぎる威力だった。なのに烈火は立ち上がったどころか、それを苦にしている様子もない。

今思えば、最初の電撃もほとんどダメージにはなっていないようだ。

（けど、距離は取った！この距離ならどれだけスタートが早くても関係ない！）

今度は、烈火のタフさを見越して、“感電死”レベルの電撃を放つ。

当たれば如何に烈火と言えども気絶は免れない。だが、“当たらない”。

「どうした？当たんねーぜ？」

嘲るように言う烈火は、もう一度放たれた電撃も軽々かわした。

「すげえ……！」

二人の勝負を見届ける上条は感嘆を漏らした。

別に烈火は電撃よりも速く動いているワケではない。勘と経験で美琴の攻撃を予測して、撃たれる前に動いているだけだ。

それでも、“あの” LEVEL5第三位を手玉にとっているのだ。

美琴はもう一度思う。

この男は……強い！

だが負けられない。第三位のプライドに賭けて。

再び砂鉄の剣を作り出し、斬り込もうとする美琴。しかし烈火はそれを許さない。

「参式、焰群あ！」

烈火の右腕に炎の鞭が巻きつく。直後、それは鋭い動きで美琴に迫り、彼女の携える砂鉄の剣に巻きついた。

「力比べといくかあ？」

そう言つて烈火は思い切り腕を引く。
引き摺り込まれそうになりながらも美琴は、

「悪いけど、アンタの思い通りにさせないわよ！」

笑みを浮かべた。

瞬間、砂鉄の剣は寸断されたようにバラバラになる。そしてそのまま手裏剣のように烈火に飛来した。

「崩！！！」

烈火は焦らず、それら全てを撃ち落とす。

手裏剣はコナゴナに碎け散り、只の砂鉄に戻った。だが、

「甘いわよ！」

再び一本の刃となった砂鉄は、烈火の右足の肉を抉った。

「いつてえー！！！」

鮮血の噴き出す脚を押さえて倒れ込む烈火。

初めて大きなダメージを与えた美琴は余裕を取り戻し、烈火に問い掛ける。

「どう？そろそろギブアップしたら？」

「ヘッ！ナメんなバーカ。全然ヨユーぢゃ！」

立ち上がる烈火を、激痛が襲った。

「ぐっ！」

痛みに顔をしかめる烈火とは対照的に、涼しげな笑みを浮かべて、美琴は再び問い掛ける。

「無理しない方がいいんじゃない？」

確かに、かなり無理をしている。正直、痛みで立つことすら辛い。だが、

「るせーよペチャパイ。テメーの心配してやがれ！」

「ペ、ペチャ！？」

だが、負けられない。絶対に。

軽い気持ちで自分の、両親の、紅麗の、火竜たちの、多くの人の信念を踏みにじった目の前のクソガキにワビを入れさせるまで、絶対に、倒れない。倒れるワケにはいかないのだ。

引き裂かれたズボンで脚をキツく縛ると、烈火は虚空中で指を動かす。

「行くぜ、墨！」

烈火の体から炎が噴き出し、烈火が“もう一人”現れた。

「！？そんなこともできんの！？でも意味ないわよ。なんせ私はそれが“出来る”ところを見てる！どっちが本物が知ってるんだから！」

「わかってらあ！だから……こーすんだよ！」

崩の火球が飛来する。だが、それは美琴の周りの地面に炸裂し、粉塵を巻き上げた。

「また目隠し？芸がないわね！」

烈火の策は予測がつく。

美琴の視界を奪ったスキに分身を囿にし、攻め込んでくるつもりだろう。

レーダーの存在も忘れて。

砂煙を突っ切って烈火が現れた。美琴は慌てず電撃で迎え撃つ。

ダメージを与えられた“分身”は只の炎になり、霧散した。

(やっぱりね！そして……来た！)

美琴のレーダーが、獲物を捉えた。

美琴はそれを烈火だと確信し、撃ち落とした。

しかし、

「なあ！？学ラン！？」

美琴が迎撃したのは烈火ではなかった。なら本物はどこか。砂煙が晴れていく。

本物は、さっきと全く同じ位置に、一匹のバケモノを従えてたたずんでいた。

(くっ！忘れてたのは私の方だった！)

美琴は完璧に失念していた。自身が負わせた傷のことを。あれだけの傷を抱えてマトモに動けるハズがなかったのだ。一連の動きは、美琴の気を引くためのフェイク。そのスキに、『速さ』のアドバンテージを奪うべく、烈火は自身の持つ最大の一撃の準備を済ませていた。

（はめられた！）

烈火はゆっくり問い掛ける。先ほどの美琴と同じように。

「そろそろギブアップしたらどーだ？無理しない方がいいんでねーか？」

バケモノが凶暴に大口を開いて紅く煌めく珠を構えている。

美琴は強く答えた。先ほどの烈火と同じように。

「ヘッ！ナメンじゃないわよ、バーカ。全然ユウよ！」

嘘だ。

あのバケモノはおそらくプールを破壊した一撃の正体だろう。

怖い。死ぬほど怖い。

だが、

「私だって、私だって負けられないのよ！」

だが、負けられない。

最初は、星空を創ろう、だなんて馬鹿げた理由だった。それでも本気でそれを信じて、目の前のハードルを飛び越えてきた。

LEVEL 2、3、4と登り詰めていくうちに、周りの態度が徐々に変わった。

期待から羨望、羨望から尊敬、そして尊敬から敬遠へ。

ただ真つ直ぐに走って来た。たつたそれだけなのに、LEVEL 5になった自分の手元に残ったのは、能力だけだった。だから、負けられない。

「ぽつと出のアンタなんか……私の全てを奪われてたまるもんか……！」

ほとんど涙声で、叫んだ。

ポケットからコインを取り出し、バケモノに向けて構える。

レベルガン超電磁砲。美琴の代名詞でもある必殺技だ。

「退く気は……ねえんだな？」

「言ったでしょ？負けられないって」

美琴の言葉に烈火はニヤリと笑うと、

「キライじゃないぜ、そーゆーの……！」

互いに負けられない二人は、勝負を決める最後の一撃を同時に放つ。ぶつかり合う両者の攻撃。決着は一瞬だった。

超電磁砲を呑み込んだ虚空の炎は、美琴に迫る。美琴はゆっくりと目を閉じた。

(結局、私には何ものこらないのね……)

しかし、待てども衝撃は来ない。

美琴が恐る恐る目を開くと、一人の男が右手を突き出すポーズで自分に背を向けていた。

「何を……何をやってんだよ花菱!!」

怒れる上条当麻が。

其之拾伍：魔術との邂逅？魔術師

上条は、二人の闘いに手を出すつもりはなかった。

最初こそ止めようとしたが、これは二人の問題だ。自分が口を挟むべきではない。そう思って、ただ傍観に徹した。

だが、事態は変わった。

二人が構えたのは文字通り『必殺』の一撃。

敗れた方に待つのは死。

その瞬間、上条は走り出した。

互いの攻撃がぶつかり合い、烈火の炎が超電磁砲を打ち負かす。

上条は美琴の前に躍り出て右手を構えた。

炎は、上条の右手にふれたと同時に消滅した。

『幻想殺し（イマジンプレイカー）』

異能の力なら炎だろうが電撃だろうが打ち消してしまう、上条の持つ“異能”。

それは、烈火の八竜も例外ではなかった。

「何を……何をやってんだよ花菱！」

虚空の衝撃で立ち込める砂塵。その先に立つであろう烈火に向かって、上条は吼えた。

「なんで本気で殺し合ってたんだよ！確かに美琴はお前の憧れを汚した！それが笑って許されることじゃないことはわかる！だけど、だからってそれが女の子を傷つけていい理由になんのか！？命を奪いかねないような攻撃の免罪符になんのかよ！？」

上条にとって、烈火も美琴も、大切な大切な存在だ。いや、二人だけではない。

土御門も青髪も吹寄も小萌も、彼の周りにいる人間は全員彼にとってはかけがえのない存在だ。

だからこそ、大切な人間同士が傷つけ合うことが許せない。

叫び続ける。彼の思いの丈を、姿の見えない烈火に向かって。

「花菱！もしもお前が、自分の信念を守るためには人を傷つけることも厭わないと言うのなら、まずはその幻想をぶち殺……？」

“す”と最後の一文字は出てこない。

そんな上条の目に映るのは、地面に額を擦り付けている、つまりは土下座している烈火だった。

「スマーン！」

土下座したまま烈火が叫んだのは、謝罪の言葉だった。面喰らう上条。

それまで黙りこくっていた美琴が口を開いた。

「なんで？なんで謝るの？」

わからない。

勝負を申し込んだのも自分。挑発したのも自分。先に相手を傷つけたのも自分。なのに何故烈火が謝っているのか。

その問いに、烈火は申し訳なさそうに答えた。

「つい熱くなつて、女の子相手に虚空なんて使っちゃった……。俺は忍失格だあー！カクなる上は……」

カッターシャツを脱ぎ捨て半裸になると、どこからか小刀を取り出して自分の腹に向ける烈火。

「セツプクぢゃああ！」

「ま、待て花菱！落ち着け！」

「ええい止めるなカミヤン！俺は逝く！柳に俺の死に様を伝えてくれえー！」

「お、おい御坂！オマエも手伝え！」

「そ、そうよ考え直して！」

五分ほどかけて烈火を説得した二人は疲れて倒れ込んだ。烈火は未だに塞ぎ込んでいる。

美琴は立ち上がって烈火の下へと歩いて行く。そして烈火の前で立ち止まり、

「ごめんなさい」

ペコリと頭を下げた。

「私、本気出させるためにアンタの大切なものをバカにして。ホントにごめんなさい！」

烈火はゆっくりと立ち上がって、静かに問いかける。

「そいつは本心か？」

「信じてもらえないかもしれないけど……私は本気で申し訳ない思ってる。許してくれなくてもいい。それでも「なら許す！」……へっ？」

烈火はあっさりと言った。美琴は目をパチクリさせている。

「元々おめえにワビいれさすためにやってたんだ。謝るんならもう終わり！」

「で、でもケガさせちゃったのに……」

「気にすんな！男のケガはクンショーぢゃ！」

そう言って笑う烈火を見て、美琴は思った。

（敵わないな……）

よくよく考えてみれば、自分は相手から一発ももらっていない。意図してか、無意識にかは知らないが、最後の一撃以外はずっと手加減してくれていたのだろう。

似ている。望まない気遣いをしてくるあたり、自分の隣で満足げな顔をしているあのバカに。

ウニ頭つてのは皆こうなんだろうか？

考えていると、烈火が拳を突き出してきた。

「またやるーぜ！今度はハナから本気でな！」楽しそうに言う烈火。美琴は軽く微笑んで、烈火の拳に自分の拳をぶつける。

「望むところよ！今度こそ勝ってやるんだから！」

互いに笑顔で再戦を誓い合う二人。

『友情』とは少し違う、認め合った『好敵手』同士の心のつながり。それが二人にも生まれた。

上条も嬉しそうに頷く。

「イヤー、二人が仲直りしてくれて上条さんも嬉しいです！ん、待てよ？ってことは俺はこれからビリビリに追いかけて回されなくていい

いのでは!？」

上条は考えた。これで毎日の不幸が少しは減るかも知れない、と。しかしそんな期待は、

「んなワケないでしょ。アンタは別腹よ」

儂く打ち砕かれた。

「あ、せつかく体も暖まつてることだし、このままアンタとも一勝負いきましようか!」

「げっ墓穴!？おい花菱!オマエもなんか言つてやつてくれ!」

「いいじゃん。相手してやれよ」「薄情者!つて御坂サン?まだ心の準備ができてないんでビリビリはお止めになつて?」

「問答無用!」

「だあー!不幸だー!」

「こら逃げるなー!」

日の沈み始めた空に少年少女の叫び声が響いた。

その後、烈火の治療という名目で、上条は美琴の魔の手から逃れた。美琴は名残惜しそうにしていたが、やはり負い目があるらしく、彼女にしては珍しくあっさり見逃してくれた。そんなワケで、烈火は上条に肩を貸してもらつて寮への道を歩いている。

「イチチチ、にしてもどーやつて虚空消したんだ?んなこと紅麗もできねーぞ」

紅麗が誰だか知らない上条はやや首を傾げながらも答える。

「俺の右手つてさ、異能の力ならなんでも打ち消せるみたいなんだよ。多分神様の奇跡だつてな」

「ふーん。フシギだな」

異能の力と言われてもピンと来ないが、多分自分の炎や美琴の電撃なんかのことだろう。

そんな烈火に上条は言つ。

「俺に言わせりゃ花菱の方がフシギだよ。一体なんだつたんだ?あのデカイの」

先の闘いで、烈火が最後に繰り出した巨大なバケモノ。あんな能力は見たことも聞いたこともない。美琴もアレには驚いたようだった。

そつえば、と上条は今朝、謎のシスターに聞いた嘘臭い話を思い出す。

（魔術……か）

魔術が何か詳しくは知らないが、“未知の力”という点では烈火の能力も魔術も同じだ。

（ひよつとしたらコイツも何か知ってるのか？）

考えているうちに寮に着いた。

聞くところによると、今日この寮にいるのは自分と烈火と土御門だけらしい。

今日は夏休みの初日だ。みんな帰省やお泊まりにいつているのだろう。管理人もいないようだ。

二人の乗ったエレベーターがドアを開く。同時に、上条宅前の三台ほどの清掃ロボットが目に入る。

「うわ、もしかして土御門あたりがリバースしたか？不幸だ……」

「おりよ？誰か寝てんぞ」

烈火に言われて、清掃ロボの真ん中で寝ている謎のシスター・インデックスに気づく。

「なんて言うか……不幸だ」

「アイツ今朝のガキンチョぢゃねーか。知り合い？」

「ああ、今朝な。おい、こんな所で何やってんだ？」

そう言つて、覗きこんで、気づいた。

少女の背中に走る、一筋の赤いラインに。少女の沈む、深紅の血の池に。

「あ？え？ど、どーなつて……」

混乱する上条。ムリもない。

？つい数時間前まで元気だった？人間が、目の前で凄惨なキズを受け、瀕死の状態にあるのだ。

場馴れしている烈火ですら困惑を隠しきれない。

「オイオイ……なんだよこりゃあ？どーなつてやがんだ!？」

このシスターは今朝自分にぶつかつていった少女だ。少なくとも？その時？はこんな状態ではなかつた。

(それにこのキズアト……斬つたヤツはタダモンじゃねエぞ！)

おそらくは、水鏡並かそれ以上の実力を持つ剣士。そう思えるほどに、少女のキズは？綺麗？だつた。

その時。烈火は感じた。自分たちに向けられたナイフのように鋭い殺意を。久しく感じていなかった、殺戮者のオーラを。

「そこにいるヤツ。隠れてねーで出てきやがれ！」

「……別に隠れてたワケじゃないけどね」

烈火が叫ぶと、一人の男が物陰から姿を現した。

身長は2メートルを雄に越え、深紅の髪にくわえタバコ、ピアスに指輪とヴィジュアル系バンドのような装飾品を身につけているが、男の着る真っ黒い服は神父のそれだ。あまりにミスマッチな格好の男は告げた。

「初めまして。魔術師だ」

魔術師、という言葉にいち早く反応する上条。

「！もしかしてオマエがインデックスを追つてる……!?!？」

「そう。よく知ってるね」

男はバカにするようにパチパチと拍手する。

「魔術だかいんでつくすだか知らんが、このコやつたんはテメーか？」

怒りのこもつた声色で、烈火が尋ねる。

「ボクだつて今来たところさ。斬つたのは同僚の神裂つてヤツだ。まあヤツもわざとじゃないだろう。なんせ“それ”は『歩く教会』でガードされてたハズだからね」

それを聞いた上条が苦虫を噛み潰すような表情になつたが、烈火は気づかずに再び尋ねる。

「よーするにテメーはこのコ傷つけるつもりなのか？」

「必要があれば、そうするだろうね」

そうかよ、と烈火は吐き捨て、上条に言う。

「そのコ柳んトコ連れてってくれ。柳ならそんぐれえ治せる」

「オマエはどうするつもりだよ!？」

「俺は」

一度言葉を切って指を鳴らしながら、烈火は告げた。

「このバカぶちのめす!」

「何言ってるんだ!はやく……!?!」

烈火の腕を無理矢理引つ張って行こうとした上条は、烈火の目を見てその動きを止めた。

美琴の時の比ではない激しい怒りの炎を灯した目を見て。

上条の手を振りほどきながら烈火は言う。

「どのみちこのケガじゃ足手まといになっちまう。それに」

大男に向けて中指を立て、

「テメーをぶつ飛ばさねーと腹の虫治まんねーんだよ!!」

吼えるように言い放った。

一連の動きを黙って眺めていた男は不機嫌そうな声をあげる。

「やれやれ、折角待ってやったのに失礼な男だ。日本人はそのジエ

スチャーを軽々しく使い過ぎている……」

男の口から、ため息と共に白い煙が吐き出される。

「そーゆーワケだ。おめえはその娘を頼む!」

「……つでも!」

煮え切らない上条に向けて、今度は親指を立てて見せる烈火。

「任された!」

そう言っつて、不敵に笑う。

こうなつては意地でも譲らないだろう。一刻を争うこの状況で、迷つてはいられない。

「くそっ!後で必ず助けに来る!」

やむを得ず、上条はその場を去った。

シスターをおぶって階段を駆け降りる上条の姿を一瞬だけ見送って
烈火は口を開いた。

「わざわざ待つてくれるたあズイブン親切じゃん」

「なに、君を殺してから追いかけても十分お釣りが来るだろう。大
したことはないさ」

今の烈火は手負い。男の余裕は自信の表れだ。

「なめんじゃねーよ。泣かすぞ！」

「面白い。やってみろ」

一触即発の空気が漂う。

が、それを無視して思い出したように烈火は尋ねた。

「そーいや名前聞いてなかったな。なんつーんだ？」

若干拍子抜けた様子で男は答える。

「ステイル」マグヌスと名乗りたいところだけどここは『Fort
is931』と言っておこうかな」

タバコを口から離すステイル「マグヌス、もといFortis93
1。」

「これは魔法名といってね。謂わば」

ステイルは手に持つタバコを建物の外に放り投げる。

「“殺し名”さ」

瞬間、タバコの軌跡をなぞるように炎が走った。

その炎はまるで剣のようにしなやかに烈火に迫る。

「こ……んのお……！」

炎剣を、こちらも炎の刃・碎羽を繰り出して受け止める。

ステイルは興味深そうにそれを見る。

「おや？君も炎を使うのか。案外気が合うかも知れないね。もっと
も」

ステイルはパチン、と指を鳴らす。

同時に、炎剣が“爆ぜた”。

バックドラフトのように一瞬で膨張する炎。摂氏3000度を誇る
灼熱の波が、烈火を飲み込んだ。

「もう死んだけどね。無駄な努力をこ苦労様」
燃え盛る廊下を眺めて、ステイルは薄い笑いを浮かべた。

其之拾伍：魔術との邂逅？魔術師（後書き）

すみません！これからちょっと更新遅れるかもしれません。
新作ポケモン面白いし試験やら色々忙しい！

其之拾陸：魔術との邂逅？ 『ムカつく』（前書き）

若干ステイルがキャラ崩壊してるかも知れませんが、
キレた時の紅麗っぽく。

其之拾陸：魔術との邂逅？ 『ムカつく』

背後から響く轟音に、上条は立ち止まって振り返る。
自分のいた、烈火の今いる階を走る真っ赤な炎が目に入った。

「クソッ！」

烈火を援護するため引き返そうとして、思い直した。

『任された！』

烈火のセリフが、脳裏をよぎる。

そう、？任された？のだ。烈火は魔術師を、上条はこの少女・インデックスを。

ここでそれを放棄して助けに戻って、烈火は果たして喜ぶだろうか？
たった数日の付き合いの上条にもわかる。？そんなハズは絶対ない？と。

時は一刻を争う。上条はインデックスをもう一度背負い直して、柳の待つ小萌のアパートまで走り始めた。
自分たちを狙う凶悪な存在にも気づかず……

「やっ……」

ポケットから取り出した新しいタバコに火を点け、ステイルは思案する。

いくら差をつけられたとはいえ、相手は重傷の人間を背負って走っ

ている。

ニコチンと魔術に体力を奪われている自分でも十分追いつけるだろう。

タバコをくわえたステイルはエレベーターに向かってゆっくり歩き出す。

この時彼は確信していた。？あの男は死んだ？、と。摂氏3000度の地獄の業火に焼かれ、死なない者など存在しないと。

ゆえに、自分の耳を疑った。

「誰が死んだって？」

男の生存を証明する声を拾った、自分の耳を。

「なっ！？」

慌てて、振り返る。

ステイルの目に映ったのは、亀の甲羅のような形の半透明の膜と、その中に立つ無傷、正確にはステイルのつけた傷のない、烈火だった。

「結界……か？味なマネを」

「おろ？よくわかったな。竜之炎伍式、円！ちょっとやそつとぢや破れねーぜ！」

憎々しげに呟くステイルに、こちらは誇らしげにそう言って、指を動かす。そうして宙に描いたのは、『焰』の一字。

「焰群！」

炎の鞭が、螺旋を描きながら鋭い動きでステイルに迫る。その姿はまるで大蛇の如し。

「ちっ！」

ステイルは舌打ちして、バックステップでそれをかわす。目標を失った炎は床に深々と突き刺さった。

ステイルは素早く体勢を立て直し、タバコを吐き捨てて身構える。

(どうやらみくびっていたようだな……)

ステイルは烈火への評価を改めた。？他愛ないザコ？から？排除すべき敵？へと。

「炎よ」

ステイルは懐からルーンを取り出し、構える。

立ち塞がる者は何人たりとも焼き尽くす。？彼女？のために。

「壱式」

ステイルの動きを察知した烈火は、再び迎え撃つべく無数の火球を生み出す。

「巨人に苦痛の贈り物オツ！」

「崩っ！」

炎剣と火球がぶつかり、弾け合う。廊下という狭い空間に3000
クラスの熱気が充満した。

炎を操る者同士の、文字通り『熱戦』。

この状況で不利なのは烈火だった。この細長いリングでは、相手の
攻撃を掻い潜って懐に潜り込む、すなわち接近戦に持ち込むことは
難しい。

それだけでなく、先の決闘で脚に傷を負って、得意のフットワーク
が封じられている。加えて、相手の炎は紅麗にすら匹敵するほどの
ものだ。円で防ぐにも限界はあるだろう。

余裕そうに見えて、実際のところはかなり崖っぷちに追い込まれて
いた。

だが、烈火は笑う。

「面白れえ。やるじゃねえか！」

この程度の修羅場、烈火は幾度となく潜って来た。むしろ、この方
が燃える。

(……面倒だな)

凶暴な笑みを浮かべる烈火に抱いたステイルの感想はこうだった。

ああいった手合いはなかなか引き下がらない。降伏を促しても素直
に受け入れはしないだろう。
もつとも、

(殺せばすむ話、だけどね)

それは、？選択肢が一つ減った？だけのこと。
自分のやることは変わらない。どんな手を使っても敵を？退ける？
のみ。

「灰は灰に、塵は塵に」

今度は、ルーンを二枚構える。その二枚が自身の手中で燃え上がる
と同時、

「吸血殺しの紅十字！」

無慈悲の一撃を、放った。

十字架となった炎剣が、烈火を断罪するべく迫り来る。
が、烈火とてそう簡単にいかせるつもりはない。

「式竜！焰群！碎羽！！」

合成火竜。焰群と碎羽、鞭と刃が合わさって、？炎の鎖鎌？を生み
出す。

十字架は、？鎖？に巻きつかれ、？鎌？に斬り裂かれる。

鎖鎌は、十字架もろともステイルの左肩を焼き斬った。

「ぐっ！」

すんでのところでしゃがんだお陰で、ステイルの傷は浅い。だが、
相手は鎖鎌。攻撃は一度ではない。

大きく迂回した炎の刃がステイルの背後から迫る。しかし、ステイ
ルとて伊達にプロの魔術師を名乗ってはいない。

「ナメるなあ！！！」

防御も、回避もせずに炎剣を振るった。
直後に背中を襲う灼熱の激痛。だが、身に纏っている霊装に助けられて、致命傷は避けられた。

「だああ!？」

その上、烈火に一撃を与えることができた。
まさに肉を斬らせて骨を断つ、捨て身の戦法だ。

普段の烈火なら、あれしきの不意討ちは難なくかわしていただろう。
ステイルの度胸と美琴に負わされた傷が、重なった結果だった。如何に炎術士といえど、3000の炎を喰らってはタダですまない。
烈火のキズは決して小さくなかった。

「ハア、ハア、クソっ!」

息を荒げて吐き捨てる烈火。

ステイルは強い。おそらく十神衆レベルだ。

能力もさることながら、げに恐ろしきは背中を斬られながらも烈火に一撃を与えた、その執念。

まるであの螺旋閃のように何かを秘めた強さを感じる。

「おい、ステイルとか言ったな。………テメエはなんで戦ってる? 一体ナニがしてえんだ?」

だから、尋ねていた。男の真意が知りたくて。男が心中に秘めた、その想いを引き出したくて。

ステイルはほんの一瞬考える素振りを見せて、答えた。

「魔道書さ」

「……魔道書？」

「そう。？アレ？の中には10万3000冊の魔道書が眠っている」

「????？」

何を言っているのか、いまいち理解できない烈火。

ステイルは説明を続ける。もちろん親切心などではなく、失われた体力を少しでも取り戻すための時間稼ぎだが。

「『完全記憶能力』はご存知かな？……知らないだろうねその顔じゃ」

「うむ！」

何故か偉そうな烈火に呆れつつ、ステイルは話を続ける。

「その名の通り、なんでもかんでも覚えてしまう体質のことさ。それこそ、人混みでみた人の顔なんかも完璧にね」

「ほえ〜テストでベンリソーだな」

「平和そうな頭で羨ましいよ」

学生のささやかな感想をバツサリ切り捨てるステイル。

「魔道書ってのはかなり有害でね、目を通しただけで頭が毒に冒されてしまうんだ」

「オレも教科書読んだらそーなるぞ」

「だが、完全記憶能力者ならその毒にも耐えうるんだよ」

とうとう無視され烈火は若干いじけてしまう。

「そんなワケで、アレの頭には10万3000冊の魔道書が存在するのさ。僕たちはそれを狙ってやって来た悪い悪い魔法使いだ」

冷徹に、無機質に言っただけのけるステイル。彼の言っていることの半分も、烈火は理解できていない。

それでも、なんとなくわかることが一つだけある。

「……ホントにそーなのか？オレにや、そいつが teme の本音とは思えねえ」

ステイルの吐いたセリフが、彼の本心ではない、ということだ。

根拠などない。強いていうなら『勘』だ。

それでも、感じた。男の信念を。あのクソバカキザ仮面のようにな、禍々しい殺意の中に埋もれた男の？心？を。

だが

「ふん、馬鹿馬鹿しい」

男の返事は、？否定？。

ステイルはブツブツと何かを呟き始める。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり」

スキだらけ、だが烈火は攻めない。手の内が読めない、というのもあるが、それ以上に彼の中の？怖いもの見たさ？が働いていた。

ステイルは紡ぐ。自らの持つ最強のカードを切るために。

「それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。その名は炎、その役は剣。顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ！」

ステイルのボタンが弾けたかと思うと、彼の胸元から？何か？が現れた。それを見た烈火は、紅麗の炎、『紅』と『磁生』を思い出した。しかし、その何かは紅や磁生より巨大で、より人間離れして、より禍々しかった。

「行け！『魔女狩りの王』！」
イノケンティウス

ステイルの号令で、炎の巨人・イノケンティウスが動き出す。その手に持った巨大な十字架を振りかぶったまま、巨人は烈火に向けて猛進する。

「こんのっ、崩ッ！」

崩の炎がイノケンティウスに炸裂した。巨人に触れた瞬間、火球は弾け、その手足を喰いちぎっていく。

「わはは、どーじゃ！」

烈火は喜びの声を上げた。しかし、それも束の間

「んなあ!?!」

バラバラに引きちぎれた巨人の?肉片?は再び一つに集まって、イノケンティウスは復活した。

蘇った巨人は仕返しとばかりに十字架を振り下ろす。

「円!」

結界がイノケンティウスの攻撃を阻んだ。互いの力と熱が拮抗し、バチバチと火花が弾ける。が、そんな均衡はすぐに崩れた。

「甘い!」

スタイルが、巨人に炎剣を叩き込んだ。同時に起きる爆発。広範囲に拡散した爆風は、円の『面』をなす『点』を吹き飛ばした。

「いいっ!?!」

即座に復活したイノケンティウスの拳が、ガードがら空きになった烈火の腹を捉えた。

「ごっあっ……」

強大な一撃に、烈火は数メートル吹っ飛んで、背後の壁に叩きつけられた。

「ごっほっ、げっほっ……!!」

ムリヤリ圧迫された肺が不規則な運動を起こす。脚の痛みも相まって、意識が飛びそうになった。

「フム、やはりそうか。あの結界の弱点は頂点のようだね」

初撃を防がれた時から、ステイルは円の弱点を頭の片隅で探していた。結果、目をつけたのは面を為す火玉の頂点。そしてそれは正しかった。烈火と同じく炎を操る者としての経験が、彼に有利に働いた。

もはや烈火が勝つ手段はない、自分になぶり殺されるしかない。ステイルはそう確信していた。

それでも、

「ハア、ハア、ガハツ……ゲホツ」

それでも烈火は立ち上がる。

服は全身ボロボロ。右脚からはおびただしい量の血が流れ、腹は黒く焼け爛れている。まさに満身創痍の状態だ。

なのに、立ち上がる。両脚でしっかりと地面を踏みしめ、己の意志と連動するように、真っ直ぐとステイルの前に立ち塞がった。

「ハツ、ハツ、お……いテメエ。ウソ、ついてんじゃねえぞ固羅」

息も絶え絶えに、ハタから見れば世迷い言でしかないセリフを吐く烈火。

ステイルは眉を潜めたが、すぐにポーカーフェイスに戻って問いかける。

「ウソ？何がだい？」

「何もかもだよ！」

傷だらけの体を奮い立たせ、烈火は叫ぶ。

「あの娘襲った理由も、テメエの気持ちだって全部ウソっぱちだろーが！誤魔化せると思ってたんじゃないぞ！」

「なっ!？」

動揺を隠しきれない。

烈火は、適当なことを喋っているワケではない。？確信？を持って？核心？をついてきた。だからこそ、揺らいだ。

「何を……言ってる？ボクはウソなんて「じゃあよ」

スタイルの言葉を遮って、烈火は問う。

「なんでテメエは苦しんでんだ??タダのモノ?傷つけんのになんでそんなに辛そうなんだよ!」

スタイルは、自分の心を?仮面?で隠して来た。決してバレることはないように、精巧な?仮面?で。

だが、烈火は見逃さなかった。紅麗と同じ、心を偽る冷たい?仮面?を。

そして?仮面?を叩き砕いた。

スタイルは思った。

もうこの男にウソは通用しない、と。

そう感じたから、

「……ためだ」

「あ？」

「あの子を守るためだ」

自分の？素顔？を烈火にさらけ出した。

「僕たちが、僕たちが守らないとあの子は死ぬんだ！そんなことは絶対にさせない。あの子を守るため、あの子を救うためなら悪魔にだってなつてやる！傷ついても、傷つけてでもあの子を守って見せる！これが僕の覚悟だ！！」

男の？素顔？は、自分の子を守る獣のように、獰猛でそれでいて優しいものだった。

そんなステイルを見て烈火は言った。

「なんだそりゃ。そんなことかよ……！！」

と。確かな怒りと共に、吐き出した。

「訊いといてわりいケド、アホくせえな。テメエはそんなしよーもない理由で大切な人キズつけたのか」

「なんだと……？」

ステイルの顔が怒りで歪む。醜く、恐ろしく。

「貴様に何がわかる！！僕の、神裂の、僕たちの覚悟の何がわかるんだ！！！！」

あらんかぎりの殺気と共に放たれる怒号。それに臆することなく、烈火は静かに答えた。

「わかんねえよ。わかりたくもねえ」

烈火は何も知らない。そもそも、何故インデックスの命が危ないかなんてことも知らない。

「別にオレはヒーローじゃねえ。テメエのやっтерることが正しいのかもわかんねえ。でもよ、コイツだけはわかんた」

言葉を切つて、ステイルを睨み付ける。ステイルも烈火を睨み付ける。両者の視線が交錯したところで、烈火は言った。

「テメエがムカつくつてことはよ」

そう、ムカつく。かつての葵や紅麗のように。

「結局テメエは諦めちまつただけだろ？歩くのが辛えからって楽な道選んだだけだろーが」

己の運命を呪つて、道を踏み外したあの時の二人のように。

「カクゴとか言つてカツコつけてんじゃねえよ……！ホントにあの娘が大切ならみつともなく足掻いてみやがれ馬鹿野郎！もっぺん言うぞ。『テメエはムカつくんだよ』！」

ムカつく。壁を越えるのを諦めた弱虫が。カツコつけるのをやめないキザヤローが。

烈火の言葉は、ステイルを揺さぶつた。ステイルの心に湧き上がる

やいかねーんだ」
だから、と一拍おいて烈火は告げる。

「?取って置き?使わしてもらっぜ!」

烈火の指が、空気を引き裂く。

「竜之炎肆式」

烈火が描くは、『刹』の一字。呼び出すは、危険過ぎるがゆえに使うのを躊躇っていた『邪悪竜』。
その名は

「刹那!」

烈火の体から火柱が立ち上る。

火柱は、所狭しと暴れまわって壁を、天井を突き破った。瓦礫の雨が降り注ぎ、10メートル下に駐輪している自転車たちが押し潰された。

スタイルは、気づいた。それがただの火柱ではないことに。

「な……んだ?それ?は?」

それは、一匹の竜。のっぺらぼうのそのバケモノは、大口を開いてスタイルを威嚇していた。獰猛そうな牙や舌がスタイルを威圧する。

イノケンティウスとは違う。東洋の竜の姿をしたその炎は、まるで本当に生きているかのようだ。

い。死んでないにせよ、結構なダメージを与えてしまったハズだ。烈火が片足飛びでステイルに近づこうとしたその瞬間、

『ゴアアアアアアア！！』

咆哮、そしてガラスを叩き割るような音と同時に、？鳥籠？から炎の巨人が解き放たれた。

「んなっ！？」

自由を取り戻した炎の巨人の豪腕にまたもや吹っ飛ばされる烈火。

「ぐっ……チキショーどーなっでんだ！？」

「イノケンティウスは……滅びない」

地に伏していたステイルが、狂ったように笑いながらこちらを向いていた。

「僕を……倒して油断したか？む……ただ。このマンションに貼った何千何万のルーンを剥がさない限り……イノケンティウスは滅びない」

烈火を、自分の覚悟を汚した世間知らずを、より苦しめて、より絶望に近づけて、殺す。必死にもかく滑稽な姿を嘲る。ステイルが能力を打ち破る方法を教えたのは、そんな理由からだっただけ。しかし

「簡単じゃん」

烈火は希望を見出だした。

「何を……バカな。その脚では……イノケンティウスからは逃れられない……！共に地獄……へ落ちろ」

「ヤだね」

キツパリと、烈火は言い切る。そこには死への恐れなど微塵もない。

「オレは死なねー！シテムエも死なせねえ！ルーンかなんか知らんが」

こんなところで死ぬ気も、ステイルを死なせる気もさらさらない。ゆえに、烈火は指を動かす。

「建物ごとブツ潰す！」

さっきとは別の二匹の竜と、その能力である無数の火玉が烈火の背後に現れる。

「な……に、を？」

烈火の答えを聞くより先に、ステイルの視界は眩い閃光に支配された。

其之拾陸：魔術との邂逅？『ム力つく』（後書き）

質問なんですが「魔女狩りの王」みたいな書き方と「イノケンテイ
ウス」みたいなのとどちらが読みやすいですか？

これから先も一方通行とか冥土返しとか出す予定なんで出来たらこ
意見下さい。

其之拾漆：魔術との邂逅？襲撃者達（前書き）

更新かなり遅れました！すいません！

其之拾漆：魔術との邂逅？襲撃者達

「ありがとうございますー」

店員の声に後押しされながら、柳はスーパーの自動ドアをくぐった。太陽は既に落ち、街灯が道を照らしている。

彼女の両手には、たくさんのタマネギやジャガイモが入ったビニール袋が携えられている。

「風子ちゃんたちも呼んだし、烈火と上条くんも早く来ないかな」

「

今、彼女は小萌に頼まれて、うっかり買い忘れた野菜を買いに来たところだ。

ルンルン気分でスキップしながら、柳は小萌の家を再び目指す。スーパーまでの簡単な地図は小萌に渡されていた。あとはこれを見ながらさつきとは逆に道を辿っていくだけだ。

そう、辿っていく“だけ”。それだけなのに……

「ふええええん！こことこー！？」

数分後、もの見事に迷子になっている柳の姿があった。

目の前にそびえ立つのは自分たちが最初に飛ばされた廃ビルのアパートとは逆方向だ。

「ぐすん。早く帰りたい……」

とぼとぼと、とりあえず来た道を逆走する柳。怖がりの彼女としては、こんな人気のない、いかにも“出そう”な場所はとっとと離れ

たい。

と、その時、柳の耳に遠くからの轟音が届いた。見ると、自分や烈火の寮がある方から、数本の光の筋が目映る。その光には、見覚えがあった。

「アレってこくーさんの……？」

烈火の炎の中でも最強の威力を誇る虚空。その破壊力は絶大で、東京ドームクラスの建物を全壊させるほどだ。

そんなものが、“つかわれている”。

ただならぬものを感じた柳は、光の見えた方向へ駆け出そうとした。その瞬間、

「見つけた」

女性の声と同時に、廃ビルの壁が崩れて、中から巨大な人影が現れる。

街灯に照らされたその巨体は、人間ではなかった。

まるで粘土を固めて作ったような、不細工な土の人形。その上に、金髪色黒、ゴシッククロリータの服を着た女性が座っている。

女性はニツコリ笑って口を開いた。

「こんばんは。『必要悪の教会』ネセサリウスのシェリー・クロムウエルです。私と一緒に来てもらえないかしら？」

柳は、今まで烈火たちの側で、『狂人』と言うべき人間を何人も見てきた。それこそ、笑顔で人を殺せるような人間を。そんな彼女の経験は告げる。

『この笑顔は偽物だ』

直後、柳は廃ビルの中に駆け込んだ。

“狙われなれている”がゆえに、シエリーを人のいる場所に連れていくのは危険だと判断した。そのため柳は、恐怖を押し殺して自分一人でシエリーを相手取ると決めたのだった。

シエリーは忌々しげに舌打ちする。

「チツ、穩便に済ませようと思ったのに。やっぱりエリスに乗ってたのが不味かったかしら？……ったく、手間かけさせやがって。エリス！」

シエリーが呼び掛けると、ゴーレム・エリスは先ほど開けた穴をくぐって再び廃ビルへと潜り込んだ。

かくして、廃ビル内の鬼ごっこが始まったのだった。

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ」

走る、走る、走る。全速力で走る。

おぶっているインデックスを落としまわらないように気遣いながらも、数十秒前に再び聞こえた轟音と背後からの閃光を気にしながらも、上条は全力疾走を続ける。

もう立ち止まることはしないと決めた。インデックスを救うためにも。

そんな彼の前に、長髪で顔の半分が隠れた男が現れた。上条は無視

して横を駆け抜けようとした、が

「シカトすんなよ」

「かはっ……………」

上条の脇腹に、男の脚がめり込んだ。

吹き飛ばされる上条とインデックスは、地面にしたたかに叩きつけられた。

「くっ……………何だてめえは！あの魔術師の仲間か！？」

「魔術師？なんだそりゃ。オレは幻獣朗のジジイに言われて、そこ
のガキさらいに来ただけだ」

インデックスを指差して、男は言う。その凶悪な顔は、醜い笑顔で
歪んでいる。

「しっかしツマラン役だぜ。せつかくすぐそこに火影のヤツらがい
るつてのに、誘拐たあよ。せめてその幼女殺していいっつーなら少
しは“殺る気”出たんだがなあ。そういやオレ、こっち来てから一
人も殺してねーなあ。あの木山とかいう女、どんな声で啼くか聴い
てみたかったなあ。ああいうタイプはワリといい声で啼くのもつ
たいねえ。キヒヒヒヒヒ……………」

ブツブツと独り言を呟きながら恍惚とした表情を浮かべる男。

上条は戦慄した。

（なんだコイツは！？あの魔術師の比じゃない！ヤバい！ヤバすぎ
る！！！！）

逃げるしかない。幸いと言つべきか、男の口ぶりから察するに、インデックスを殺すつもりはないらしい。
なら、今のうちに自分は逃げて、シヤツジメント風紀委員なり警備員なりに連絡すれば、安全にことを済ませられる。“自分だけ”安全に。

(……それで、いいのか?)

自問する。

今、烈火は戦っている。傷ついた体で、命を懸けて戦っている。そんな時に自分が選ぶのが、そんな情けない答えでいいのか、“逃げる”ことが本当に正しいのか?

「なワケ、ねえよなあ……!」

『地獄の底まで、一緒について来てくれる?』

少女の言葉が胸を刺す。ハッキリ言って、そんなことは絶対に御免だ。出会って三十分にも満たない相手と共に、地獄なんて落ちたくない。

「ちくしょう、そうだよ……。地獄の底までついて行きたくなけりゃあ」

笑って、眼前の男を見据える。

「……地獄の底から、引きずり上げてやるしか……ねーよなあ!」

自答した。そして、己の決意を乗せたその右手で、男に殴りかかっ

た。

数分前まで存在したとある高校の学生寮は、今はまるで発破解体でもされたかのようにガレキの山へと成り果てていた。

ガレキの一角がガタガタと動く。やがて大きな破片の隙間から、一人の男が姿を現した。

男の名は、ステイル・マグヌス。この学生寮が健在だったころ、花菱烈火と死力を尽くして戦っていた人間だ。

ステイルは、まだ生きていた。

「……アイツは、アイツはどこだ？」

キョロキョロと辺りを見回す。

彼が探すのは、生け好かないクソヤロー。あのまま放っておけば、炎に撃たれるかガレキに押し潰されるかして死んだ自分を、わざわざ結界で護ってくれたウニ頭だ。

ガタツ、という音を、ステイルは聴き逃さなかった。自分の目の前のガレキがぐらぐら不安定に揺れたかと思うと、特徴的なウニ頭が顔を出した。

「うげえ、ペッペッ！やり過ぎちまったか？」

口の中の石ころを吐き出しながら起き上がろうとする烈火。

「あははははは」

だが、烈火の意思に反して、彼の体は仰向けに倒れ込んだ。
脇腹の辺りがズキズキと痛む。どうやらアバラが何本か折れているらしい。

「イテテテ……折れてんなチクショー」

「……………何故だ？」

脇腹をさすりながら顔をしかめる烈火に、ステイルは尋ねていた。

「ナニがだよ？」

「何故助けたんだ!!」

ステイルは叫んだ。腹の底から、思い切り叫んだ。

「やはり貴様は……貴様は僕の覚悟を踏みにじるのか!？」

烈火は答えない。手近にあった鉄パイプを杖代わりにゆっくり立ち上がると、覚束ない足取りでステイルに歩み寄る。

「聴いているのか!それとも貴様は人を殺す度胸もない臆病者か!?
?答える!!」

ステイルの目の前に辿り着いた烈火は、そこで足を止めた。
そして右拳を握りしめ、ステイルの頬を、打った。
全体重を乗せて、力の限りに。

「がつ……………」

ステイルは数メートル吹っ飛ばされた。

烈火はその場にどっかかり腰を下ろす。

「今のはさっき殴るつつた分。……んで、質問の答えだけだよ、簡単だ。殺したくねーから。そんだけ」

「くっ……、殺したくないだと？ふざけるな！」

上体だけ起こして、ステイルは烈火に怒りをぶつける。彼の口からは血が流れ落ちていく。

「それが臆病だと言っただけ！奪う覚悟もなく大切なものを守れると思っっているのか!？」

やはり、許せない。こんなふざけた男に負けた自分に腹が立つ。

烈火は答えた。

「知るかよ。そんなこと」

「このっ！」

ステイルは再びルーンを構えようとするが、烈火は石を投げてそれを弾き飛ばす。

「黙って聞いてろ」

そして、続ける。

「オレは別に正義感とかで動いてるわけじゃねえ。テメーがやりてえことやってるだけだ。さっきも言ったべ？人を殺す覚悟つてのは逃げ道だつてよ」

裏武闘殺陣で、空海に問われた。

『大切なものを守るために人をも殺す覚悟はあるのか？』

丁度、今と同じように。

今もあの時も一緒だ。烈火の答えは変わらない。

「オレはオレの道を行く！邪魔するヤツはブツ飛ばす、壁があるならブツ壊す！」

あくまでも、自分の志を貫く。それが烈火の選んだ道だ。

力強く宣言して、朗らかに、笑う。全てを包み込むかのように、優しく、暖かく。

「オメエもそうすりゃいいーちゃん。やりたくねーことやってるよかよっぽど楽しいぞー！」

「黙れ！そんなものはワガママだ！平和しか知らないヤツの詭弁だ！――！」

噛みつくように、スタイルは叫ぶ。

「かもな」

烈火の返事は、意外にも“肯定”だった。

“裏側”を知っているがゆえの肯定。

「クソガキの戯れ言にしかオメエにや聞こえねーかもしんねえけどさ、やっぱオレはオメエを殺したくない」

烈火は理解している。自分の吐いたセリフは、砂糖菓子より甘っこ
よろいことを。

「だからそれが甘いと言っんだ！」

「だってよお」

ステイルの言葉は聞き流す。『甘い』なんて、耳にタコが出来るほ
ど聞いてきた。

聞く価値のないそんな言葉よりも、今は自分の素直な気持ちを話し
たかった。だからこそ、

「オマエが死んだら、きつとあの娘が悲しんじまうと思ってよ」

包み隠さず、本音を話した。

「ま、なんつーか。『女の涙ほど苦手なモンはない』って感じか？
ワハハハハハハハハ！」

そして、豪快に笑う。辛いことなんて吹き飛ばせ、と言うように。

烈火の言葉を聴いて、ステイルは思った。

（あり得ない）

彼女の中にあつた自分たちとの楽しい思い出なんて、とっくの昔に
消し去った。今の彼女にとって、自分たちは憎むべき敵でしかない。
わかっている。わかっている、ハズなのに……

「あ、う、うああああああ」

ステイルの心の氷は、解かされた。
焼き殺すだけの自分の炎とは違う、まるで太陽のように優しく心を暖める、烈火の炎によって。

解けた氷は涙となって頬を伝う。声に出して、ステイルは泣いた。
弱冠14歳の少年らしく、心から、泣いた。

烈火は優しく笑って立ち上がり、ステイルに手を差し伸べた。

「そーいやオレの名前、まだ言ってなかったな。花菱烈火だ！一緒に頑張つてあの娘助けよーぜ！」

烈火はもう一度立ち上がって、ステイルに手を差し伸べた。皆の希望を掴みとって来た、その右手を。

「あ、ああ、ああ……！」

ポロポロで、だけど力強くて暖かい烈火の右手に掴まると、ステイルが手を伸ばしたその時、

「んがつ！？」

烈火の体は横に勢いよく弾き飛ばされた。

「あなたらしくありませんね。ステイル」

ステイルの同僚、聖人・神裂火織によって。

其之拾漆：魔術との邂逅？襲撃者達（後書き）

柳が半端な萌キャラみたいにしかならないんですが、違和感ありませんかね？

其之拾捌：魔術との邂逅？三者三様

(チクシヨウ……！)

烈火はムリヤリにでも立ち上がろうと、腕に、脚に、全身に力を込める。しかし、立てない。

美琴にステイルとの連戦と、短時間での火竜の乱発のせいで、烈火の体はとつくの昔に限界を迎えていた。それでも気力を振り絞って踏ん張っていたが、それすらも今喰らった女のものとは思えない鋭い蹴りで、全て吹き飛ばされてしまった。烈火はもはや立つこともままならない。

女は烈火には目もくれず、地に伏したステイルに話しかけている。

「あなたらしくありませんね。ステイル」

「神……裂。な……にが？」

(……神裂？)

その名を聞いた烈火は、先のステイルとの会話を思い出す。

『斬ったのは同僚の神裂ってヤツだ』

(アイツが……！)

「敵に感化されることが、です。忘れましたか？私たちの「オイ固羅クソババア！」

烈火の怒声が神裂の言葉を掻き消す。神裂は烈火の方へ顔を向けると鬱陶しそうに口を開いた。

「……人の話に割り込んでくるのは感心できませんね。それに私はまだ18歳です」

「うるせえ！」

烈火は吼える。

「あの娘斬ったんテメエだな！？女だからって容赦しねえぞ固羅！」

獣のような烈火の叫びにも神裂は臆することはない。

「イキがるのは結構ですが、まずはご自分の姿を確認してはいかがですか？」

神裂は烈火にゆっくり近づくと、思いきり脇腹を蹴飛ばした。

「かつ……!!」

気を失いそうになる激痛と同時に、数十キロある体が一瞬宙に浮く。うつ伏せの体勢は空中で反転して、烈火は背中から地面に叩きつけられた。

「が……あ、……このやる……！」

喋ろうとするがマトモに言葉が出てこない。肺を少し動かしただけで死ぬほど辛い。全身にイヤな汗が浮かんでくる。

神裂は涼しげな顔でそれを眺めて問い掛ける。

「わかりましたか？それが私たちの苦しみなんです。先ほどのステイルとの会話は聞かせてもらいました。アナタなんかに」

鳩尾を力の限りに踏みつける。

「うがつ……がはっ……」

「口を挟んで欲しくはありませんね」

苦しむ烈火。腹への痛みだけではない。呼吸が乱れると全身の循環も乱れ、それが激痛に繋がる。

「い……てえ」

「痛いでしょう？苦しいでしょう？」

神裂は烈火のボロボロの服の胸ぐらを掴んで、あるうことかそのまま片手で持ち上げた。

「アナタは『自分の道に行く』と言いましたね。ステイルも言っていました。そんなのは詭弁です。失う苦しみを知らない人間のね」

「待て……神裂」

「黙っていて下さい、ステイル。話はまだ終わってません」

ステイルの制止にも、神裂は耳を貸そうとはしない。鋭い目で烈火

を睨んで、命じる。

「謝りなさい。彼と私に。『何も知らない癖に偉そうな口を聞いて申し訳ありません』、とね」

怒っていた。丁寧な口調の裏で、ステイルと同じように、否、ステイル以上の激しい怒りに、神裂は身を委ねていた。怒りの矛先は自分たちの覚悟を“逃げ道”呼ばわりした烈火に向けられる。

「さあ、早く謝りなさい」

「……………」

烈火が小さな声で何かを呟いた。神裂は眉を潜めて聞き返す。

「聞こえませんかよ？大きな声で言いなさい」

「黙れよ臆病モン」

そう言つて、烈火は中指を立てる。

直後、彼の腹に神裂の拳がめり込んだ。

「うはっ……………」

尋常じゃない一撃が、内臓に深刻なダメージを与える。口からは吐瀉物のようにビチャビチャと血液が流れ出た。

「どつちやら口で言ってもわからないようですね」

神裂は烈火を放り投げる。烈火は再び地面に叩きつけられた。

「もう少し痛い目を見てもらいましょう。安心してください。殺しはしませんよ」

神裂は腰にさしていた2メートルはあろうつ刀を鞘ごと引き抜き、振りかぶり、

「かなり苦しいでしょうがね」

烈火めがけて力の限りに降り下ろした。

「うおおおおおお！」

上条の決意を乗せた拳が男を襲う。が、

「おっと」

男は容易くそれを見切り、上条の腹に右のカウンターを叩き込んだ。

「かはっ……」

上条の呼吸が止まる。男は左手で上条の首に手刀を入れる。上条は頭から地面へと倒れ込んだ。

「なんでえ、手応えなさすぎるぜ。まあいいか、任務完了……っとなんだ？」

上条は、踏ん張っていた。必死に意識を保って、インデックスに歩

み寄ろうとする男の脚にしがみついた。

「待てよ、オレはまだやられちゃいねえぞ……!!」

「イヒ……!! いいねえ!!」

男は上条の頭を踏みつける。上条は再び頬からアスファルトにこすりつけられた。腹に男の脚からの衝撃が襲ってくる。

「いいねえ、もつと来いよ! チミみたいなイモムシくんが頑張ってるのは大好きなんだよ。頑張ってるのに惨めに踏み潰されんのがなあ!!」

下品な笑いをあげながら、男は上条の腹を蹴り続ける。あえて力を抜いて、いたぶるように。

「ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ! おらどうした? もう終いか? もっと頑張らねえとあのガキブツ殺しちまうぜえ?」

男は嬉々として、なおも蹴り続ける。度を越えたサディズムを露にしながら、上条をなぶり続ける。

痛みを堪えながら、上条は待っていた。男が完全にスキを見せるその時を。

「おらよお!!」

チャンスは、来た。

男が脚の引き幅を大きくし、より強い蹴りを見舞ってくる。上条は

男とは逆方向に転がりながら、その脚を絡めとった。

「うおっ!?!」

上条の体というストッパーをなくし、むしろ引つ張られて勢いをました自分の脚にバランスを崩され、男は背中からアスファルトに叩きつけられた。

(よっしや!成功!)

上条は即座に馬乗りになって、両膝で男の両腕を押さえつける。そしてそのまま男に向かって右腕を振るった。

上条の渾身の右が、男の顔面に突き刺さる……ハズだった。

「なっ!?!」

拳は、届かない。男の体を突き破って出てきた細長いものが、上条の右腕に巻きつき、それ以上の進行を許さない。

(これは……なんだ!?)

慌てて腕を引き抜こうとするが、恐ろしいほどにキツく巻きついていて、ビクともしない。

上条の体がゆっくり宙に持ち上げられると、男も立ち上がる。

「残念だったなあ。オレの腕は二本だけじゃあねえんだ」

男の腕から、服を破って再び細長い何かが見れる。ウゾウゾと触手のように蠢くそれは、“木”だった。

「魔導具『木霊』。こいつとも長い付き合いになるぜ。いや、「コレ」は“前の”とは別モンか？」

男の口から発せられた聞き覚えのない単語が上条の耳に引っ掛かる。

「……魔導具？何言ってるんだよ」

「テメエに教えてやる義理はねえよ。もっとも、んなもんハナツから持ち合わしちやいなーがな」

つまらなそうに言う男の腕に木が巻きつき、槍のように鋭く尖る。

「それじゃあアバヨ。オレ様に土つけるヤツなんざ久しぶりだったぜ」

木の槍が、上条の体を貫かんと撃ち込まれた。

(怖いよ……烈火)

窓からの月明かりに照らされた廃ビルの片隅で、柳は怯えていた。階下からは自分を探すゴーレムがその巨体を引き摺る音が聞こえる。柳の頬を涙が伝う。恐怖からではない。己の無力が悔しくて、いつまでも守られるだけの自分が悔しくて、泣いた。いつも自分を守ってくれる、大切な人の名前を呼びながら。

「ううっ……烈火、烈火あ」

「あらあら、泣いちゃダメよ」

反射的に、飛び退いた。

目の前に立つのはシエリー。自分を狙う謎の女だ。

「なんで……？だつて下に……」

階下からは、いまだゴーレムの存在を証明する音が聞こえる。だが、シエリーは嘲るように言った。

「わざわざあんなに目立つエリスと一緒に行動すると思ったの？んなワケねえだろバーカ。少しは頭を使うべきね」

カツン、カツン、と建物中に足音を響かせて、“鬼”は柳に魔の手を伸ばす。

「つーかまえ……たっ!？」

捕まる直前、柳は野菜入りのビニール袋を投げつけた。散乱したジヤガイモ、タマネギ、トウモロコシがシエリーを襲う。

「ぐっ……このー!」

シエリーが怯んだスキに、柳はもう一つの袋を抱えて離脱した。

シエリーは遠ざかる背中をただ呆然と見送った。

「フフツ。そうでなくては面白くないわ。今のうちに必死こいて逃げやがれ」

懐から白いチョークのようなオイルパステルを取り出すと、壁に何

かを書きなぐる。すると、壁面からポコポコと無数の目玉が生まれた。

「行け」

シエリーの号令で、目玉たちは散り散りになる。

これで包囲網は完成した。あとはキツネ狩りのように追い詰めるのみ。

シエリーは焦らず歩き出す。

逃げる、逃げる、柳は逃げる。運動を得意としない彼女の体は既にほとんどの力を使い果たしている。しかし、それでも逃げる。戦えない自分ができるのは、コレだけだ。絶対に捕まらない。自分を、自分の持つ力を渡さない。そのために、逃げる。

そんな、決死の逃走劇は、

「おいで、エリス」

背後からの声と、床を突き破って現れた怪物によって、終止符を打たれた。

冷たい声で、シエリーは告げた。

「これ以上逃げられても面倒だし、脚、潰しちゃいましょうか。エリス」

エリスが腕を振り上げる。標的は、柳。

「イ……ヤ……烈火っ……！」

巨人の豪腕が、か弱い少女に降り下ろされた。

三者三様に、ピンチの場面。そこに、三人の“助っ人”が現れた。

「つらら舞い」

烈火は、地面を砕いて現れた、無数のつららに、

「鎌鼬！」

上条は、凶悪な木の槍を切り裂いた風の刃に、

「ふんがあー！ー！」

柳は、巨人の豪腕を受け止めた大男の怪力に、救われた。

邪魔をされた三人は三者三様に問う。

「……何者ですか？」 「誰だあ邪魔しやがんのは？」 「……誰かしら？」

救った三人は、偶然にも、イヤ、“必然にも”三者一様の言葉を口にする。

「火影だ！」

と、水鏡、風子、土門は言い放った。

其之拾捌：魔術との邂逅？三者三様（後書き）

みーちゃんのおらら舞いのおららって漢字がケータイでは出てこなくてもどかしいです。平仮名で問題ありませんか？

其之拾玖：魔術との邂逅？脅威（前書き）

なんかパワーバランスがおかしくなつて来てる気が……

其之拾玖：魔術との邂逅？脅威

男は、永井木蓮は狂喜した。

「ヒヒ、ヒヤハハハハハハハハ！会いたかった、会いたかったぜえ！」

視線の先には、殺したくて殺したくて仕方ない、火影のメンバー、霧沢風子が立っている。

そんな木蓮に、風子は嫌悪感を露にする。

「うげえ……アタシは会いたくなかった」

「キヒヒ……ツレねえこと言うなよ。死んじまった命だって、ずっとメエら火影に会いたがってたんだぜ？」

風子に向けて、木蓮は手をかざす。

「ブツ殺すためになあ……！！」

鬼のような叫びと共に、複数の木が木蓮の体を突き破って風子に迫る。が、

「ナメんなつての！」

風子が腕を振るうと同時につむじ風が起きる。小型の竜巻と言ってもおかしくない風の壁が木を全て引きちぎった。木片がパラパラと舞い散る。

「相つ変わらずヘッドが出る性格してんなあ……！ちょっとそのイ
ガグリ！」

「い、いが！？」

呼び掛けと共にやって来た蔑称に心決られる上条。風子は焦ったよ
うに叫んだ。

「ボサツとしてねえでその子病院連れてけ！手遅れになっちまうよ
！？」

ハツとする。そうだ、急がねばインデックスの命が……！
インデックスを背負い直して上条は走る。だが……

「行かせねえよ」

メキメキと、アスファルトを砕いて地中から現れた無数の木が、上
条の行く手を阻んだ。

バットほどの太さのある木の軍勢は、鞭のようになつて、上条を
叩き潰さんと、自身を振り下ろす。

「うおっ！？」

威力は絶大だ。上条がなんとか一撃をかわすと、一秒前まで彼の立
っていた地面が粉々に砕かれた。

「くっ……！！」

上条は歯噛みする。非常に厄介だ。

上条の右手に宿る能力、『幻想殺し』はそれが異能の力ならば、電撃だろうが炎だろうが、それこそ虚空の一撃だって消し去ってしまう。異能の力“のみ”ならば。

例えば、彼は美琴の電撃を打ち消しても超電磁砲、すなわち音速の三倍で射出されたコインは打ち消せない。

“威力”ではない、“相性”の問題だ。

あの木は操られているだけ、能力で生み出されたものではない。

(……待てよ?)

と、回避行動をとりながら彼は気づいた。

(さつきから見てんのは同じ木ばかりだ……)

植物に興味がこれっぽっちもない上条にもそのくらいのこととはわかる。ならばあの男の操っているのは一つの植物が枝分かれしたものである可能性が高い。

だとすれば……

上条はインデックスを背負ったまま木々の織り成す壁に突撃する。

木の一本が再び叩きつけられる。上条はタイミングよくそれをかわすと、地面にめり込んで勢いが完全に死んだその木に右手でタッチした。

「なっ、クソがあ！何しやがった!？」

瞬間、木蓮の体から生えていた木も、上条に襲い掛かってきた木も完全に停止した。

上条の読みは当たった。要は、直列電流と同じ。

ボロボロの烈火の口から出たのは、そんな悪態。

「遅刻ばかりのサルがほざくな」

水鏡もまた、悪態をついた。

二人の表情から伺えるのは、認めあった戦友同士の“信頼”だ。

「さて、そろそろ消えてもらおうか？目障りだ」

「そうはいきません。彼にはまだ話があります」

攻撃的な水鏡の言葉にも、神裂は耳を貸さない。そこに存在するのは確固たる信念と、それを汚した烈火への怒り。

「ハア、そうか。なら」

水鏡はため息をつくど、

「力づくだ……！」

闇水で斬り込んだ。神裂も、自身の所持する2メートルの太刀、『七天七刀』を抜刀する。

そこから始まる、達人同士の斬り合い。超高速の太刀筋は、手練れのステイルにも見えない。烈火ですら目で追うのがやっとだ。

『氷紋剣』最後の使い手・水鏡凍季也、ロンドンでも十指に入る魔術師・神裂火織。二人の剣士の一騎討ちは僅か五秒で終焉を迎える。

「はあっ！」

「くっ……」

水鏡の敗北という形で。

閻水は水鏡の手から弾かれる。明後日の方向に飛ばされて、地面に深々と突き刺さった。

（水鏡が押されてる！？あのキャタピライーンとんだクセモンだぞー！！）

一度は自分を完膚なきまでに叩き潰した男が、“剣技”という己の土俵の上で相手に引けをとっている。その事実には烈火は驚愕した。

丸腰の水鏡に刀を向けて、神裂は静かに問う。

「実力の差がわかりましたか？退くのはあなたのほうです」

だが、水鏡は応じない。

「イヤだね」

あのバカが、あれだけポロポロになるまで踏ん張った。自分が退くわけにはいかない。

根底にあるのは、そんな負けず嫌いな性格、そしてプライド。

神裂はわずかに歯を噛みしめ、

「そうですか。なら、眠っていなさい！」

刀を振り上げた。

「水鏡いーーーー！！！！」

体に走る痛みも無視した烈火の叫びが辺り一帯に轟く。神裂は高く構えたその刀を振り下ろす……せなかつた。何故なら、

「なっ!?!」

「おひよひよー！風子ちゃんよりデカイわい！」

突如として現れた謎の老人に、自分でも気づかないうちに、背後から胸を揉みしだかれていたために。振り払おうと刀を振るう。老人・虚空はそれを軽くかわして、烈火の側に着地した。

「な、何ですかあなたは!?!一体どこから!?!」

怒りと羞恥で顔を真っ赤に染め上げながら叫ぶ。虚空は締まりのない顔でいやらしく笑った。

「ヒョッヒョッヒョッ。若いムスメはええのう！」

「固羅ジジイ」

「ぴよっ!?!」

烈火が鉄パイプで虚空の頭をどついた。虚空はマヌケな悲鳴をあげて悶絶する。

「勝手に出てきてんぢゃねえよスケベジジイ！」

「助けてやったのにカタイことゆるーない！」

「嘘こけ！テメエがおっぱい触りたかったただけだろーが！ごふ！？」

虚空の拳が烈火の脳天に炸裂する。烈火はそのまま気絶した。

「コイツがおると話が進まんワイ。さてと、ねーちゃん」

「何ですか？」

尋ねられて、神裂も落ち着きを取り戻した。

刀に手をかけて応答する。警戒は緩められない。ふざけたことを言っ
てはいるが、あの身のこなし、そして威圧感。ただ者ではない。
下手をすれば、ステイルを破ったあの少年より……強い！

そんな神裂の心情を知ってか知らずか、虚空は飄々とした雰囲気
を取り払って、厳然と尋ねた。

「十万三冊の魔道書。それがインデックスとやらを苦しめる
原因ではないのか？」

「!？」

核心に迫る一言に、神裂はたじろぐ。しかし、悟られてはいけない。
自分たちの問題に、首を突っ込まれるワケにはいかないのだ。

「あなたには関係ありませんよ、御老！」

言って、斬りかかる。
が、

「僕が相手だ」

話の間に閻水を回収した水鏡がそれを阻む。

「くっ……!!」

分が悪い。手練れが二名。闘えばただでは済むまい。
そもそもステイルを助けるのが当初の目的だったはずだ。怒りに流された結果、こんな状況を作り出してしまった。
己の短絡的な行動を悔いながら、神裂は

「勝負は預けます!」

ステイルを担いで逃走した。

「……さて」

去り行く神裂を見送りながら、水鏡は切り出した。

「どういふことが、聞かせてもらおうか?」

風子と木蓮、一進一退の攻防は続いた。互いにまだ無傷、そして“奥の手”を残している。これまでの戦闘は様子見でしかない。

ここで、風子が痺れを切らした。生来我慢強い性格ではない彼女は、

自身の“切り札”で一氣にカタをつけようと動いた。

「おいで！風神ちゃん！！」

呼び出すは、風神の本体である小さな獣。次元を破ることすら可能な規格外の最終兵器だ。召喚すれば一瞬で勝負を決めることができるだろう。

しかし、“召喚できない”。

「ウソツ！？」

混乱によって生じる一瞬のスキ。それを見逃す木蓮ではない。

「ヒヤハッ！」

木の槍が、風子の脇腹を抉る。

「ぐっ……」

持ち前の反射神経で致命傷は避けたものの、傷は決して浅くない。

「まずは……一匹目え！」

木蓮の一撃が迫る。凶刃が、風子の体を貫かんとした刹那、

『ピリリリピリリリ』

閑静な住宅地に、電子音が鳴り響いた。風子の鼻先二センチのこ

二つの“脅威”は決着を待たずして去った。
残るカードはあと一組、石島土門とシェリー・クロムウエルの闘いのみ。

其之拾玖：魔術との邂逅？脅威（後書き）

軽く織り混ぜてみたロケットプリンセスネタがわかる方はいらっ
しゃったのでしょうか？

其之貳拾：魔術との邂逅？土門の意地（前書き）

シエリーがめっちゃ悪者になってます。

ねーちゃんといひ、望まぬキャラ崩壊……（・・・）

其之貳拾：魔術との邂逅？土門の意地

「うおおおおおー!!」

大地が砕けんかのごとき咆哮をあげて、土門は巨人の腕を押し込む。とてつもない負荷がかかった巨人の腕は勢いよく跳ね上げられて、エリスはその無防備な腹をさらけ出した。

迷わず踏み込む土門の横から、もう一对の腕が迫り来る。それでも土門は止まらない。加速を利用して、あるうことか片腕でそれを弾き飛ばすと、そのままエリスのボディに怒濤の連打を浴びせた。

「オラオラオラオラあー!!」

『殺人ラツシユ』

地元ではそんな物騒な名で恐れられているこの攻撃は、言うてしまえばただ殴りまくっているだけ。

しかし、裏を返せば、“ただ殴りまくる”だけで技に昇華されるほど、土門のパワーが凄まじいということだ。

しかも、その自慢のパワーは今、『土星の輪』で極限まで強化されている。いかに頑強な身体を誇るゴーレムとさえど、マトモに喰らえば一溜まりもない。現に、エリスの胴体はものの二十秒足らずで叩き折られた。

崩れ落ちた巨人の上半身が砂ぼこりを巻き上げる。土門はペツ、と唾を吐き捨てた。

「ヘッ、大したことねーな！準備運動にもなりやしねえー!!」

「キヤー！土門くんカツコイー！」

「応援センキューベイバー！！！」

勝利を確信してハシャぐ土門と柳。しかし、シェリーは未だに薄い笑いを浮かべている。

「調子ノツてんじゃねーよ糞餓鬼が」

シェリーは懐からチヨークのようなオイルパステルを取り出す。それを見た土門がたじろいだ。

「又ウツ！チヨーク！？なるほど、力ぢやオレ様に勝ち目がねーからオレの苦手な勉強に関係あるモンで怯ませる作戦だな！？しかし！いつまでも自分の弱点を放っておくオレ様ぢゃねーぜ！厳しい特訓の成果で教科書を一度に三ページまで読んでもへーきになったのだ！どーだ、参ったか！！！」

一人で喚いている土門を無視してシェリーは壁にチヨークを走らせる。

「捻り潰せ」

ベギン！と土門の足元の地面が砕ける。そこから現れた巨大な腕が土門をガツチリと掴んだ。全身を押し潰しそうな圧力が土門を襲う。

「ナメんなあ！」

全身の骨をコナゴナに砕いてしまいそうなパワーにも、土門は負け

ない。ギシギシと巨人の握り拳がムリヤリほどかれる。

「うがああああ！」

最後の一押し。巨大な掌は弾けるように開かれた。土門の体が一瞬空中で静止する。

これこそがシエリーの狙いだっただ。

ボゴン！地面が盛り上がり、そこからもう一对の腕と共に巨人が生まれる。豪腕が真下から土門を突き上げる。上方へと加速した土門の体を、先ほど土門がはね除けた掌が八工叩きのように叩き落とした。

「土門くん！」

柳が叫んだ。

重力とスピードを味方にした土門は、めり込みそうな勢いで地面に落ちた。

「うぶっ……！」

突き上げられ、叩き落とされ、地面に叩きつけられた、三つの衝撃が連なって、容赦なく土門を襲った。

（クソッ！牙王クラスのパワーじゃねえか！）

それでも持ち前のタフさで立ち上がる。シエリーは感嘆を漏らした。

「スゴいわね。あれで立ち上がれるたあな」

「たりめーよ。オレを誰だと思つてやがる？鬼の石島土門様じゃ！」

再び、突進。単調な攻撃の裏には、遠距離から攻める手段がないことと、それ以上に百戦錬磨の自信が存在する。

だが、自信だけで乗り切れるほど、シェリーの壁は低くない。

振るわれた豪腕が、掬い上げるように土門の巨体を吹き飛ばす。

「うおお!？」

いかに規格外のパワーを持てども、土門の体重はせいぜい80キロそこそこ。下方から攻撃されては手の打ちようがない。

土門はそのまま柱に叩きつけられ、ズルズルと地面に崩れ落ちた。

「土門くん!大丈夫!？」

柳が駆け寄る。

「ああ。しかしヤロウ、とんでもなく強えぜ！」

仮にも土門は裏武闘やSODOMで数多の強敵を相手取り、打ち破ってきた。自信は十二分、しかし、それを容易く叩き潰すほどに、シェリーは手強い……!

と、その時ガサリと土門の指が何かに触れた。それは、柳が提げていたスーパールのビニール袋。そしてその中身は……

「いいモンあんじゃねーか！」

土門はニヤリと笑うと、袋の中身を取り出して三度突進する。

「何度やっても同じよ。学習しやがれ！」

シエリーが叫びながらチョークを振るうと、それに連動してエリスもそれに連動して左の拳を撃ち出す。掬い上げるようなその一撃を、土門は跳躍してかわした。

土星の輪の効果は下半身にも及んでいる。

「おりゃああああ！」

エリスの頭を越えるほどの高さまで飛び上がる。幸いにもこのフロアは吹き抜けになっており、天井に激突する心配はない。

土門はハンドボールのように手に持つ“物体”を投擲した。その正体は……カボチャ。本来なら四分割されているハズだが、今日は特売日。丸ごと一個を柳は購入していた。

たかが野菜、と侮ってはいけない。たつぷり詰まった身を固い皮でコーティングされているそれが、時速100キロにも届くスピードで投げ込まれる。それはまさしく“砲弾”。

砲弾は進路を阻むエリスの掌を貫いて、シエリーの胸に直撃した。

「じつ！？か……はっ……！」

勢いよく吹き飛ばされるシエリー。気道が圧迫されて呼吸が止まったらしく、盛大に咳き込んだ。

「ゴホッ、ガハッ！カハ、コヒュー、コヒュー……クソッ！」

ふらつく頭を押さえて、立ち直ったシェリーは忌々しげにカボチャを尖った瓦礫に叩きつけた。
強い衝撃で脆くなり、オマケに風穴まで開けられたカボチャは、直後シェリーの蹴りで簡単に砕け散った。

「……ナメたマネしやがって、覚悟はできてるんでしょっかね？ 叩き潰されちまいなあ！！」

エリスが両手で柱を砕く。砕けたコンクリート片はガチガチと、巨人の両手に集まる。やがて巨人の腕は先端だけが異様に膨らんだ、まるでハンマーのような形に変貌した。

エリスが右腕を、土門に向けて降り下ろした。土門はどっしり腰を落としてそれを待ち受ける。

「力比べで負けっかよ！！」

こちらの体重が関係なくなる上方からの攻撃。これなら全身の力を使えば受け止められる……ハズだった。

「いっはあ！？」

しかし、結果的に土門は叩き潰された。

魔術的効果など一切ない。ただ単に、物理法則の生み出した破壊力。単純な重量増加のみでなく、形状変化による遠心力の増加。これにより一撃の重みは、先ほどの数倍かそれ以上にはね上がる。

エリスは続けて左腕も叩きつける。

ゴドン！ 轟音と共に、コンクリートの床も限界を迎える。三人と一体は崩壊に巻き込まれて、瓦礫と仲良く落下した。

「きゃあああああ！」

頭から落下したハズの柳は、しかし誰かに受け止められた。

「大丈夫か……？」

「土門くん……？」

受け止めたのは、土門。代わりに、上手く着地できずに落下の衝撃をモロに喰らっていた。

「何で私を……！」

「オマエになんかあったら花菱にブツ殺されちまわあ」

力なく笑って土門はゆっくり立ち上がる。

「待ってて！今すぐ皆を……あつ」

柳が取り出したケータイもヒョイっと取り上げた。

「コイツはオレの喧嘩だ。手出しはすんじゃねえ。おっと、ケガも治さなくていいぜ」

言われて、かざしていた手を下ろす柳。その目からは涙が溢れていた。

「なんでそんなに頑張るの？叩かれたら痛いよ？死んじゃうかもしれないんだよ？」

「柳」

土門は柳の前に掌を突き出して黙らせる。そして優しく語りだした。

「オマエはずーっと花菱と一緒にだったからわかんたろ？アイツだつてずーっと倒れなかった。ずーっと突つ走つて来たんだ。オレがこんなところで立ち止まるわけにはいかねーんだよ！」

立ち上がる理由。それは、意地。自分がずっと目標としてきた、生涯のライバルと張り合つたための、ただの意地。

「オレは火影の石島土門様じゃ！テメーみてえなじゃじゃ丸にまけられっかよー！」

負けない。負けられない。こんな所で立ち止まっていたでは一生かけても烈火には追いつけない。だから進む。“男の意地”を貫くために。

「あつそう」

ゴドン！と、そんな意地は、シエリーの冷たい声と共に降り下ろされた豪腕に、土門もろとも押し潰された。

「土門……くん？」

先生！ベタ塗り終わりましたあ！

死んだ。

風子さまあああああ！

死んだ。

弱い部分補いあって何が悪い！それが仲間ってモンだ！！

土門が、死んだ。

夢を与える作家先生になりてえんだろ？起きろ！

大切な仲間が、死んだ。

「ウソ……？いや、いやああああ！！！」

悲しみの絶叫が響いた。

シェリーは墓標のようにそびえ立つ巨人の腕に歩み寄って、嘲る。

「クク、アハハハハハハ！残念だったなあ、死んじまったなあ！」

狂ったように笑うシェリーは、次は放心状態の柳に歩み寄る。

「さて、今度こそ一緒に来てもらおうかしら？」

シェリーの魔の手が、柳に伸びようとしたその瞬間、

「死んじやいねーぞ！」

聞こえるハズのない声が聞こえた。シェリーの表情が凍りつく。ピシッ、とエリスの腕に亀裂が入った。そこから眩い光が漏れる。亀裂は徐々に広がり、強力な発光と共に、エリスの腕が砕け散る。

光が止んだその場所には、

「鬼の土門！復活！！」

肌は浅黒く、額に『鉄』の文字が浮かび上がった石島土門が立っていた。

其之貳拾巻・魔術との邂逅？LUCKY PUNCH(前書き)

すみません！遅くなりました！

其之貳拾巻：魔術との邂逅？LUCKY PUNCH

鉄丸 体内に投与することで、術者に文字通り『鉄の体』を与える身体強化魔導具。

それは、天堂地獄や他の魔導具と共に、滅びた？ハズ？だった。しかし、理由はわからないが、土門の血肉となったその魔導具は息を吹き返して、再び土門の力となった。

「エリス！」

困惑を浮かべてシエリーが叫ぶと、巨人が左腕を振り下ろす。

「ウオオオオオッ！！」

土門の鉄拳が迎え撃つ。

ぶつかり合う両者の拳。軍配は、

「いよっしやあー！」

「なあっ！？エリス！」

土門に上がった。

粉々に砕け散るコンクリートの腕。今やエリスはダルマも同然となった。

「オオオオオオオッ！！」

果敢に攻める土門。一切の妥協なく、ただひたすらに暴れるその姿はまさに？鬼？。殺人ラッシュが再び巨人を打ち崩す。相手の戦意を奪うには十分過ぎる光景だった。

ところが、シエリーの表情には再び余裕が戻っていた。

たしかに、先の一撃で仕留められなかったのも、土門の持つ異常な破壊力も計算外だ。

しかし、？それだけ？。

シエリーが壁にチョークを走らせると、

「なんぢやあ！？コンクリがくつついてやがる！」

周囲の瓦礫が集まり、巨人の体を組み上げた。

もとより、ゴーレムの強みは頑強さに非ず。真に恐ろしきはその再

生力。

ちぎれた粘土をくつつけるように、巨人は五体満足を取り戻す。

（そついやコイツさつきからなんべんブツ壊しても再生してやがる！底無しか！？）

闘っているのが水鏡なら、あるいは気づいたかもしれない。

エリスは決して不死ではない。その肉体には『シエム』と呼ばれるセーフティ安全装置が隠れており、それに軽く触れるだけで機能停止するということに。

が、あいにく土門には水鏡ほどの頭脳はない。

『攻めて攻めて攻めまくる！』

猪突猛進のインファイト。これが土門の戦闘スタイル。

とどのつまり、エリスとの相性は最悪だ。

不運は重なる。

「うげっ！鉄丸が！？」

「土門くんの色が戻ってる！？」

鉄丸が、その力を失い始めた。

元来、鉄丸は手慣れた術者でなければ長時間の発動はかなわない。

長い間戦列を離れていたブランク。蓄積されたダメージ。この二つが鉄丸の発動時間を極端に短くしていた。

額の文字も薄れ、土門の体は？生身の人間？に戻りつつあった。

さっきのように何かを投げる作戦をとろうにも、めぼしいものは全てエリスに吸収されている。結果エリスは今、コンクリートの鎧に身を固めている。ハンパな攻撃ではビクともしないだろう。

絶体絶命の大ピンチ。その中で、土門はある行動に移った。それは、
「うがあああああああ！」

突進。ヤケクソのように見えるが、それは今の土門に出来る最良の選択だった。

（考えたって、どうせオレにゃあナンも思いつかねえ！だったら！）
「殺られる前に殺ってやらあー！！！」

時間がないなら攻めればいい。弾丸がないなら自身を弾丸にすれば

いい。

生兵法はケガの素。付け焼き刃では効果はない。ならば、攻撃あるのみ！これ以上ないほどに単純明快だ。

狙いは巨人の背後に立つ術者・シエリー「クロムウエル」。

土星の輪と鉄丸の相乗効果で猛スピードを発揮する土門の体は、まさしく？砲弾？と化していた。

十数メートルの助走ののち、ロケットパンチの格好で飛び上がる。

砲弾は、巨人の鎧を容易く砕き、その胴体に風穴を開けた。

「う、ああああ！？」

回避行動をとろうとするシエリーだが、時すでに遅し。土門の頭突きが腹に突き刺さった。

「ごぼっ……！！」

口から血ヘッドを吐き出しながら、シエリーの体は5メートル後ろの柱に叩きつけられる。

大ダメージ。それこそ立つことも出来ないほどの。

だが、

「ク、ククククク……！！」

女の口から漏れるのは呻きではなく笑いだった。

「な、なんぢや？何がオカシイんだよ？」

急に笑い出したシエリーに若干ビビりながら尋ねる土門。

シエリーが笑うのは、まだ？手？があるからだった。

たとえば、シエリーが倒れたとしても、エリスは倒れない。？手動？マニュアル

が？自動？オートマに替わるだけ。二秒後には、エリスの掌が、既に鉄丸の効力もきれ、油断しきっている土門を叩き潰している。その、？ハズ？だった。

しかし、薄れゆく意識の中でシエリーが見たのは、崩れゆく巨人の姿。

（なっ！？エリスが、エリスが崩れる！？まさか！！）

その？まさか？だ。タネを明かせば簡単なこと。土門の体がエリスの胴体もろとも？核？を破壊したというだけ。しかし、いくら触れ

やすい箇所にあつたとはいえ、核はそうそう簡単に触れられる大きさではなかった。だからこそ、シェリーもその復活を確信していたのだ。

運が良かった。

言つてしまえばそれだけのこともかもしれない。

もしも鉄丸の発動があと少し遅れていたら？

もしもたまたま核に触れることが出来なかったら？

勝敗は確実に逆転し、今地に伏しているのは土門の方だっただろう。あくまでも、？運が良かった？。

しかし、四死天の蛭湖は土門の強運をこう評価した。

『運をも味方につける天賦の才』だと。

新生火影忍軍・石島土門

その力は、計り知れない！

「クソツ！」

上条は思わず目の前のドアを殴っていた。

ジンジン痛む拳とドアの間には、小萌の残した貼り紙がある。内容は、『買い物に行ったきり帰って来ない柳を探しに行く』というもの。

不幸、としか言いようがない。

烈火に、名も知らぬ女子高生。二人のお膳立てが一瞬で水泡に帰した。

（チクシヨウ！タイミング悪すぎんだろ！）

再びドアを拳で叩く。金属製のドアはビクともせず、逆に上条の拳が傷つくが、気にせず、むしろ味わうように殴り続ける。

（……結局、何もかも、オレのせいだ。オレが不幸に巻き込まれたんだ！）

わかっている。今すべきはこんなことではないと。それでも、八つ当たりせずにはいられなかった。

ガン、ガン、と鈍い音をたてながら、何度も何度もドアを殴った。

「クソツクソツクソツ……なんでだよ？」

上条当麻は不幸な人間だ。

例えば、犬に噛まれたり。

例えば、サイフを落としたり。

それどころか、幼い頃に借金を抱えた男に刺され、そのあまりの不幸ゆえにバケモノ扱いされすらした。

それでも、彼はそれで良かった。

自分がどれだけ不幸であっても、周りの人間が幸せならそれでいい。博愛だとか、自己犠牲だとか、そんな大層ご立派なものではない。

迷子が母親と再会したのを『良かったなあ』と思うぐらい簡単に、人の幸せを喜び、それを自分の幸せと呼べる人間だった。

しかし、？不幸？は彼にそれすら許さなかった。

上条は殴るのを止めて自分の右手を見る。

インデックスは言っていた。異能の力を何でも打ち消すこの右手が、彼を不幸にしているのではないかと。

「これが、この右手さえなければ……！」

ケンカで勝てなくても、女の子にモテなくても、テストで満点とれなくてもいい。

だが、周りを不幸にすることだけは、自分の不幸に巻き込んでしまうことだけは許せなかった。

ガーン！と一際大きな音が響く。

「チク……シヨウ」

鈍い痛みを発する右手を固く握りしめ、上条は力なく地面にヒザをついた。その間にもインデックスは辛そうに息を荒げている。

上条は、立ち上がれなかった。立ち上がる？運命？に抗うことは出来なかった。

「何やってんだ！」

不意に、怒鳴り声が聞こえた。見ると、制服の脇腹辺りを真っ赤に染め、息を切らした少女が立っていた。

その少女は霧沢風子。さっき上条を逃がして、戦闘を行って来た風子に追いつかれたということは、それだけの時間が経過した、とい

うことだ。

風子はズカズカと上条に近づくと、トゲトゲの髪の毛をむんずと掴んで、怒鳴り付けた。

「さっさと病院つれてけっつってんだろーが！血の跡追ってきたらコレか！？助ける気あんのか！？」

「？あつた？よ」

静かに、答えた。

「病院は使えない。コイツはこの街の人間じゃないんだ。下手な所に連れて行けない」

「だったら……！」

「だから、佐古下に治してもらうつもりだった。なのに、コレだ」貼り紙を指差す。風子はそれで全てを察した。

上条は続ける。

「タイミング悪いよな。もしインデックスを見つけたんのがもう少し早けりゃあ、もしあの男が襲ってこなけりゃあ、もし」

歯を噛み締めて

「オレが不幸じゃなけりゃあ……！」

悔しさ。上条から伝わってくるのはそんな感情だった。

自分のせいで、他人を不幸にしまった。そんな、憐憫を誘うような感情。

それを見て風子が覚えたのは、苛立ち。

スピーカー！と小気味良い音が響く。風子の平手が上条の頬を張った音だ。グイツと胸ぐらを掴んで上条を睨み付ける。

「ヤル気ねえんなら、帰りな」

ただただ、厳しい言葉。

「アタシはよお、その子助けてえからアンタ逃がしたの。拗ねてるだけのヘタレに用はねーんだ」

怒りの形相で叫んだ。

「たられば話するヒマあんなら足動かせ。今しなきゃいけねえのはそういうことだろうが！」

たとえ0・1%でも可能性が残っているなら、否、？可能性が残っていないかも？ムリヤリ希望を掴みとって見せる。

緋水のときのような思いは、したくなかった。だから、絶対に諦めない。

そんな風子に伝えるように、

「このままでは禁書目録の生命維持は困難と判断。ヨハネのペン自動書記で目覚

めます」

インデックスが無機質な声でそう言った。

其之貳拾貳：魔術との邂逅？終日

少女は、目覚めた。ただし、開かれた眼から生氣は感じられない。それを見て風子が思い出したのは、いつかの柳の姿。神慮思考で精神を削られ、天堂地獄の？生け贄エサ？にされかけた柳と、ウニ頭の少年に背負われた少女はそっくりだった。紡がれる言葉も、まるで機械のように感情がない。インデックスは続ける。

「生命維持のための魔術を行使します。これから私の指示にしたがつて、適切な処置を施していただければ幸いです」

「えっ、ナニナニどゆこと？」

話についてこれてない風子を無視して、上条が名乗りをあげた。

「だったらオレが……!!」

「不可能です」

しかし、即座に切り捨てられる。

「もう一度言いますが、行使するのは？魔術？です。その？右手？がある限り、貴方には魔術は使えません」

大前提。そんなことすら忘れるほどに、今の上条は焦燥していた。

「だったら他の誰かは!？」

「可能ですが、推奨はしません。？貴殿方？は、脳を？開発？しているハズです。？才能ある？能力者が、？才能なき？魔術師の力を行使すれば体に身体に多大な負荷がかかり、場合によっては命を落とすこともあります」

無機質に紡がれる一言一言が、確実に希望を絶望へと塗り替えていく。この街の人間は、大半が脳ミソを弄くられた、謂わば『改造人間』だ。

ふと頭に浮かんだ案、『だったら？開発？を受けていない？大人？なら？』

だが、これも口に出すまでもなく却下となる。

乱暴に言っつてしまえば、この街の大人は皆、『学園都市の犬』だ。

もちろん、本当にそんな危険な人間は一握りで、ほとんどの大人は、ただ純粹に子供たちのことを思いやれる善人だろう。

ただ、上条に？それ？を見抜く力はない。万が一、心無き人間の手にインデックスが、魔術という未知の力を秘めた『武器の設計図』が渡ったとき、彼女がどんな扱いを受けるかは、想像に難くない。

唯一、確かに信用出来る大人である小萌も、どこにいるか、いつ帰って来るか見当もつかない。

？手詰まり？

そんな言葉が頭をよぎった瞬間、

「ハイハイハイ！アタシがやる！」

風子が手を挙げ自己の存在を主張しながら、そう言った。

「なんかよくわかんないけど、とにかく普通の人なら大丈夫なんだ

る？だったらアタシがやる！アタシは脳ミソ弄くられたりしてないからダイジョービ！」

「ハア！？」

風子の言葉を、上条は理解出来ない。

このバンドナ少女は確かにさっき、あの狂った男に向かって能力を使っていた。だったら能力者に違いないのではないか？

と、そこで上条は思い出した。数刻前に烈火が召喚した、『炎のバケモノ』を。

？アレ？は、少なくとも上条の知るところではない。

もしもアレが超能力ではなく、もしも少女の？チカラ？がそれと同じなら、あるいは……！

「お前、名前は？」

「霧沢風子ちゃん！火影の紅一点です！」

「霧沢……頼んで、いいんだな？」

「まっかせなさい！」

藁にもすぎるような上条の望みは、風子に託された。これでもはや、

(オレに出来ることはなくなっちゃった、ってワケか……)

喜ぶべき場面、なのだろう。不連続きの中に、幸運が転がり込んできた。インデックスの命は繋がったのだ。

それなのに、上条が感じているのは言い様もない、？悔しさ？だっ

た。

「……あとは、任せた」

背中のインデックスを地面に座らせると、それだけ言い残して上条は階段を駆け降りた。自分を呼び止める声が聞こえたが、それも無視して走り去る。

ここにいて自分が出れることは、何一つない。イタズラに術式を破壊するのが関の山だろう。

今、彼がしなければならぬのは、一秒でも早く、一メートルでも遠く、インデックスから離れることだけだ。

百メートルほど走ったところで、上条は徐々にスピードを落として、足を止める。

そして、

「チクシヨオオオオ!!!」

咆哮しながら、再び街灯に右拳を叩きつけた。

「あっオイ!」

去り行く上条を呼び止めようとするが、彼はそのまま階段を駆け降りて行った。

追い掛けているヒマはない。やむを得ず、風子はブツブツ何か呟いているインデックスに尋ねた。

「で、どーすりゃいいの？」

「術式を展開するのであれば、なるべく閉鎖された空間に移動していただければ幸いです」

「？閉鎖された空間？つつわれても……」

「この建物の中の部屋で構いません」

その言葉に反応して、風子は家主不在の小萌宅に目をやった。

一応カギはかかっているものの、アパートと同じくかなりの年齢らしい。時折吹く風で金属製のドアがギシギシと軋んでいる。

風子は少し距離を取ると、

「風子ちゃんターツクル！！」

全体重を乗せた体当たりを、ドアに叩き込んだ。

強烈な一撃に、ドアより先にそれを支える金具が限界を迎える。全てのネジが弾け飛び、風子はドアごと室内に倒れ込んだ。

「痛ッ！イチチチ……」

木蓮に挟られた脇腹に激痛が走った。再びじわりと血が滲む。痛みに顔をしかめながらも、風子はしっかりとインデックスを抱え、部屋に連れ込む。

明かりを点けると、目の前には空き缶の海が広がった。

「うわっ、キタナー！……烈火よりひどいよ」

ブツクサ言いながら、散乱した空き缶を蹴り飛ばしてスペースを作り、そこにインデックスを寝かせる。
インデックスが口を開き、尋ねる。

「現時刻は、日本標準時間で何時何分ですか？それと、日付もお願いします」

風子はポケットからケータイを取り出すと、それをパカッと開く。

「えーと……7月20日の午後八時半だね。んなこと聞いてどーすんだよ？」

「天狼方向に誤差0.038で一致しました。確認します。現時刻は日本標準時間で7月20日、午後八時三十分でよろしいですね？」

「よろしいです！だから何でそんなこと「巨蟹宮の終わり、八時から十二時の方向……」聞けやー！」

キシヤーツ、と叫ぶ風子だが、インデックスは全くの無反応。ブツブツと呟きながら、ちゃぶ台に血で何かを描いている。その姿は、とてつもなく不気味だった。

明らかな致命傷を負って、口からダラダラと血を流しながらも、顔色ひとつ変わらない。人間として大切な何かが欠落したその姿は、まるで人の形をしたロボットのようだ。

次にインデックスは、風子に指示してちゃぶ台の上にメモリーカードに文庫本、フィギュアetc……部屋中の小物を並べさせる。そうして部屋のミニチュアが出来上がった。

「……つて、お人形遊びしとるバヤイか！？さっさとしねーと！！」
「問題ありません。それよりこちらの指示を正確にこなしていただかなければ、貴女の肉体は破壊ミンチにされます」

「んにゃっ!?!」

妙な奇声をあげる風子を気にせず、インデックスは続ける。

「天使を降臨させます。私のあとに続き、唱えてください」

インデックスが呟いたのは、？声？というよりむしろ？音？だった。音楽の成績が1の風子は、形だけ真似してみる。
と、ちゃぶ台の上のフィギュアが同じように？歌った？。

「思い浮かべなさい（イメージ）！」

突如、インデックスが叫んだ。

「金色の天使、体格は子供、二枚の羽を持つ美しい天使の姿！」

「て、天使!?!」

何がなんだかわからないが、とにかく自分のオッサン臭い脳ミソで、必死に天使をイメージする。

（天使！天使！！天使！！！！）

心の中で叫び続けた甲斐あってか、イメージ出来た。

全裸にワツカと翼を携えた、土門の天使が出来上がった。

「イメージ出来るかあああ！」

脳内で土門天使をフルボッコにしながら怒る風子。

途端、空間がグニヤリと歪む。

「とにかく思い浮かべなさい！これは術者の貴女の意味に従って力
タチを取り込んでいくのです！」

つららのように鋭く冷たいインデックスの声は、風子に取り乱すこ
とすら許さない。

（だーっ！もういい！土門でいい！失敗したら土門ボコボコにする
から許してね！！）

さりげなく土門に責任を押し付けながら、風子は再びイメージする。
頭の中で、下手すればトラウマになるような天使像が完成する。

瞬間、インデックスのフィギュアの背中、風子のフィギュアの脇腹
がドロリと溶けた。

かと思うと、それは再び元のカタチに固まった。

ふと、違和感を覚えた。痛みがない。脇腹を見ると、結構な深さで
抉られたキズがきれいさっぱりなくなっていた。

「生命の危機の回避を確認。自動書記を休眠します」

パチン、とスイッチをいれたように、インデックスの瞳に柔らかい

光が戻った。異常なほどの汗を流しながら、？人形？から？人間？へと戻った少女は言う。

「大丈夫。キズそのものは塞がってるんだよ。治すには自分の体力がいるだけ」

グラリと後ろに倒れかけた少女を風子は咄嗟に支える。

「ここで私が死んだら、やっぱあの人に背負わせちゃうかもしれないからね」

そう言って、そっと目を閉じて、インデックスは眠りについた。ほっと一息ついた風子の耳が、いくつかの話し声を捉える。

「いや、みーちゃんにも見せてやりたかったぜ。オレ様の大活躍！」

「調子に乗るなゴリラ。みすみす敵を逃がしておいて、何が大活躍だ」

「だって、急に暴れだすんだもん……」

「ど、土門くんはカツコ良かったよ！」

「甘やかしてはいけません、柳さん。躰にはアメー割とムチ九割です」

「何がシツケぢゃコノヤロー！」

騒がしいその声は、よく聞き慣れた仲間たちのものだった。風子は

腰を上げて、出迎えに行く。

こうして、長かった一日が終わりを告げて、戦士たちは束の間の休息を手にした。

しかし、彼らはまだ知らない。これは、これから始まる長い長い戦いの、ほんのプロローグでしかないことを……

其之貳拾貳・魔術との邂逅？終日（後書き）

土門天使は、烈火の炎22巻裏表紙が元ネタです。
あれをイメージしていただけるといいかと思えます。

其之貳拾参・休戦（前書き）

カミヤんがへタレになっていく…

其之貳拾参：休戦

布団の中で安らかに眠る烈火の目覚めは、強烈な一撃と共に訪れた。

「フェニックススプラッシュ！」

「ぼぎゃああああ!？」

風子の特技が、昨日のベ三人の強敵と闘った烈火に炸裂した。悶絶する烈火をさほど気にせず、風子はハリセンでペシペシウ二頭を叩く。

「ホレ、いつまで寝てんだ遅刻大魔王。ちやつちやと起きろ！」

「もっとデリケートな起こし方出来んのかワレは!？昨日どんだけ踏ん張ったと思っとんぢや!……ってアララ？」

ウガーツ、と怒鳴る烈火だが、体に力が入らない。また布団へと倒れ込んだ。

「全く！ムチャし過ぎ！ケガは柳が治してくれたけど、体力が戻ってねーんだよ。火竜もかなり使ったんだろ？」

「そーしなきゃ勝てねえ相手だったんだよ。ステイルつつつたな。十神衆並みだったぜ……」

最も、その前に美琴と闘ったダメージもあったのだが。それでもステイルの強さ、そして執念は恐ろしかった。

「それでも寮潰すのはやり過ぎだったの！」

「だって……アレしか方法なかったモン」

言い返せず、唇を尖らせてブー垂れる烈火。

まあでも、と前置きして風子は続ける。

「アレがなきゃ、戦闘にも気づけなかったし、柳とインデックスって子も助けらんなかったよ」

焼き肉パーティーにお呼ばれして、小萌宅に向かっていた風子たちは、？アレ？によって戦闘をいち早く察知。おかげで被害はほぼゼロに押さえられた。

「そっか、あの子助かったんか！良かった良かった！」

インデックスの無事を聞いてウンウンと頷く烈火だが、ふと神妙な面持ちで尋ねる。

「オイ、柳も襲われたってことか？もしかして幻獣朗の仲間か！？」

「それはわかんない。『ねせさりうす』のシエリーだか灰原だかってヤツらしい。土門が倒したけど逃げられたって」

「ねせさりうす？幻獣朗とは関係ねーのか？」

「さあ？でも、確実に繋がってるヤツとも会ったよ。……木蓮だ」

「木蓮だと！？」

その名を聞いた烈火の目付きが変わる。

木蓮はSODOMで自分との『最後の殺し合い』に敗れ、命と共に散った。そう思っていた。しかし、木蓮は再び火影の前に、再び敵として立ちはだかった。

驚愕する烈火だが、不敵に笑ってみせる。

「ヘッ！上々等！何度でもブツ潰してやらあ！」

「アンタの方の詳しい事情も虚空から聞いたよ。まーためんどくさい問題引っ張って来てくれたみたいだなオイ」

烈火の頭を再びハリセンで叩く風子。それを振り払いながら烈火は言う。

「しゃーねーべ。乗り掛かった船だ！オレは最後まで付き合っぜ！」

力強く宣言する烈火に、風子は軽く肩をすくめてみせる。

「まっ、アンタのワガママは今に始まったことじゃないしね。アタシも付き合っぜ、大将！」

それは、強い信頼。烈火のことを心から信頼しているからこそその言葉だった。土門に水鏡も同じだ。きつと、悪態をつきながら共に闘ってくれるだろう。それこそが、火影の持つ？絆？だった。そんな風子に、烈火は親指をビシッと立てて見せる。

「サンキュー！頼りにしてんぜ、北風小僧！」

と、そこで烈火は思い出したように尋ねた。

「そーいやココどこ？柳に土門にみー坊は？」

「ココはみーちゃんちだよ。みんなでお泊まりしてんの。アイツらは今ちよーっと手が離せないからおとなしく待ってな」

何故かニヤニヤしている風子。

それを訝しく思いながら、烈火は自分の部屋を見回してみる。ホコリの一つも存在しないその部屋は、本人の性格を表していた。

「しっかし広い部屋だなあ。12畳ぐらいあんじゃねーのか？」

「まだ他にも部屋あるよ。みーちゃんのガツコ長点ナンタラっつー名門なんだってよ」

「ほえ〜」

感嘆を漏らす烈火。一応自分はレベル5なのにこの差は一体……と
釈然としないものを感じていると、

「風子ちゃん！オツケーだよ〜」

扉の向こうから柳の声が聞こえた。

「こつちも準備完了〜！入っていいよ！」

ニヤニヤ笑う風子の合図でドアが開かれ、柳が入って来る。

「オハヨー烈火。じゃじゃーん！みー子ちゃんの入場でーす！」

パパーン、と風子と柳が同時にクラッカーを鳴らす。水鏡が俯いて

「クソッ、離せ土門！」

「おーじょーぎわ悪いよみーちゃん。そんなんじゃオヨメに行けないゾー！」

「誰が行くか！というか風子、お前が言うな。オイ烈火、何してる。やめるケータイを構えるな！」

「どうせだし記念に一枚撮っとこーぜ！」

「キサマあとでタダじゃ済まさないぞ！」

凄む水鏡だが、着ているモノがモノなので全く怖くない。というかむしろ面白い。写真だけでは飽き足らずムービーも20本ほど撮影する烈火であった。

その後は、拗ねた水鏡を連れてみんなで遊びに出掛けた。久方ぶりの殺し合いを忘れるかのような平和な時間は、瞬く間に過ぎて行った。

（オレは、何も出来なかった……）

安らかに眠るインデックスの隣で、小萌の用意した朝食にも手をつけずに、上条は思い悩んでいた。

ここは、小萌のアパートだ。

風子が壊したドアは玄関の外に立て掛けられており、代わりに今は

暖簾が部屋と外部を仕切っている。時折吹く風が心地よい。しかし、それでも上条の心のモヤは晴れない。

（オレは、何も出来なかった……）

魔術師が現れた時も、謎の男が襲ってきた時も、インデックスが苦しんでいた時だって、自分は何も出来なかった。

烈火に、風子に、全てを任せきってただそれを傍観しているだけだった。

全ての異能を打ち消す右手。それをロクに振るうことも出来ずに。

「グッ……!!」

思いきり歯を噛み締める上条。そんな彼の背を、小さな手が叩いた。

「どうしたんですか、上条ちゃん？」

手の主は、小萌。何も言わずに自分とインデックスを泊めてくれた、善良な教師だ。

いつそ、彼女に全て話してしまえばどれだけ楽だろう。しかし、それは出来ない。

？役立たず？の自分が、これ以上他人を巻き込むようなことをしてはいけない。

そんな上条を見て、小萌は言った。

「『みんなが頑張ってたつてのに、オレ一人何も出来なかった』、なんて考えてるんです？」

「んなっ!？」

「驚くことじゃないですよ。私が何年先生やってると思ってるです?上条ちゃんの考えてることなんて丸わかりなのです!」

普段なら、驚きもしただろう。尊敬もしただろう。

が、小萌の誇らしげな声に上条が感じたのは、煩わしさだけだった。

「……だったら」

「へ?」

「だったら、放つといってくれよ!」

口をついたのは、そんな言葉だった。

「それがわかんなら、今の気持ちだってわかんたる!?オレが今、
どんだけ辛い!か!どんだけ苦しい!か!アンタならわかんたる!」

違う。言いたいことも、言わなければならぬことも、こんなことではない。

『ありがとうございます』

そう言って、一生分の感謝をしたかった。

それでも、口が思うように動かない。

「オレだって、わかってんだよ!腐ってる場合じゃないって!でも、
でも……しょうがねえんだ」

ガツクリとヒザをつく。嘆くのは、己の無力さ。そして、立ち上がれない弱さ。

「上条ちゃん」

小萌が優しく呼び掛けた。

「確かに、上条ちゃんは役立たずだったのかもしれませんが。でもそれは、？昨日？の話です」

よくわからない顔をする上条に、小萌は続ける。

「野球だってそうでしょう？一番が塁に出て、二番がそれをバントで送って。人にはそれぞれ『役割』があるんですよ。上条ちゃんの出番は？まだ？ないだけなんですよ」

迷っている生徒に道を示す。

そんな教師の？役割？を、今、小萌は果たしている。

「上条ちゃんは、代打の切り札！九回裏ツーアウト満塁一点ビハインド、そんな場面が用意されてるんです。だったらそこまで必死に頑張ればいいんです。？役割？がないんならそれでもいいじゃないですか。上条ちゃんの出番がないってことは、みんながピンチにならないってことなんですから！」

そう言って微笑む小萌に、上条は思わず泣きついていた。小学生のような恩師の胸が、今はとても広く感じられた。

少年は、石造りのただっ広い聖堂に佇んでいた。時代錯誤を感じさせる燭台や足下の六芒星、それに漆黒のローブを纏った男たちは、どれもこれから行う魔術儀式には欠かせない重要な？パーツ？だ。

それらの品々に囲まれるようにして、固い石のベッドの上で、銀髪の少女が苦しそくに息を荒げて眠っている。

「限界です」

少年の隣で、黒髪の少女がそう言った。

少女の名は、神裂火織。世界に二十人といない聖人であり、少年の同僚であり、銀髪の少女・インデックスの親友であった。

神裂は、心底つらそうな表情で続けた。

「早く処置を　！彼女の苦痛を取り除いてやってください」

その言葉に反応したのか、インデックスは覚醒し、重たい瞼を弱々しく持ち上げる。

「な……に……？」

「大丈夫、少しの間眠っていればすぐに良くなりますよ」

掠れた声で不安げに訪ねるインデックスを、神裂が彼女の頬を撫でながら優しく諭した。気丈に振る舞っているものの、しかしその手

は微かに震えていた。
核兵器並みに危険とされる聖人といっても、神裂は十代半ばの女の子。？別れ？が、恐ろしいのだ。

「い……や……だよ」

そしてそれは、インデックスも同じだった。
少女の碧眼から、ボロボロと大粒の涙が零れ落ちる。身体的苦痛に因るものだけではない。

インデックスは、？怖い？のだ。
仲間たちとの、これまでの自分との決別。

即ち　　？死？が。

それは、心も体も幼い少女に背負わせるべき運命ではない。

それでも、天は、彼らの信ずる『神』は、キリストが背負った十字架の如く、少女に過酷すぎる試練を　　否、？厳罰？を課した。

「私………忘れないよ」

滝のように涙を流しながら、インデックスは消え入りそうな声で呟く。

「二人とも………！ぜったい忘れないから………っ！！」

喉の奥から、心の底から絞り出したインデックスの言葉に、少年は胸を締め付けられるような感覚を覚えた。

僕は、どれだけ無力なんだ。

少年は、インデックスを守るために何でもやって来た。
10万3000冊の魔道書を狙う魔術師を焼き殺したし、既存のものでは足りないと思って新しいルーンを開発したりもした。
彼女を、自分が愛したインデックスを絶対に傷つけさせないために。

だというのに。

苦しむ彼女を前にして、ただ突っ立っているだけじゃないか……！

炎剣も、魔女狩りの王も、血の滲むような努力と苦勞の末に得た己の？力？は、全く役に立たない。
焼き尽くすことしか知らない己では、インデックスを苦しめている元凶を討つことはできない。

悲しい、悔しい、ムカつく……！！

今すぐにも自分を焼き殺してやりたいくらいだ。
だが、それは？できない？。

「インデックス、これを持っていてください」

神裂がインデックスに一枚の写真を握らせ、その手を優しく胸の上においてあげた。

「お守りです。私たちが、これからも良き仲間ともでいられるように……！！」

写真に映るのは、仏頂面の少年と、ぎこちない笑顔の少女たち。
数日前に神裂が『三人で記念写真を』と提案したものだ。

最後にもう一度インデックスの頬を慈しむように撫でて、神裂は少年を促した。少年は短く返事して、一步前に踏み出した。

インデックスの顔は、まるで聖母のように優しかった。

その笑顔が、その優しさが、少年を何度も勇気づけ、少年を何度も暖めてくれた。

……もう二度と、あの笑顔が少年に向けられることはないだろう。

だとしても、少年の？覚悟？は揺るがない。

インデックスのためならなんだって壊す。誰だって殺す。

少年は胸元の十字架を、インデックスを？救う？ためのキーアイテムを固く握り締める。

そして、誓った。

　　喻え君が全てを忘れてしまったとしても、僕は君のために生きて死ぬ。だから……

「安心して……眠るといい」

それが、インデックスの『仲間』として、少年が彼女にかけた最後の言葉だった。

少年の心は、凍りついた。

ふっと、ステイル＝マグヌスは目を覚ました。

どうやらここはどこかのビルの屋上らしく、目の前には澄んだ青空

が広がっている。

「イ、ツツ……」

体を起こすと、背中に激痛が走る。昨日の闘いで花菱烈火に負わされたキズだ。

全身のヤケドは自分で治せたが、残念ながら背中のキズは専門外だ。一応、神裂が応急処置として包帯を巻いてはいるが、あまり意味は為していない。

とりあえず寝起きの一服をしようとタバコに火をつけながら、ステイルは心中で舌打ちした。

（今さらあんな夢を見るとはね……）

イライラする。去年はこんなことはなかった。どうして、今思い出したのか。

『ホントにあの娘が大切なら、みっともなく足掻いてみやがれ！』

『オマエが死んだら、あの娘が悲しんじまうと思ってよ！』

烈火の言葉が脳裏をよぎった。が、すぐにそれを払い除ける。

「違う！あんなヤツに惑わされるものか！！」

虚空に向かって叫んだ。

「僕は誓ったんだ！絶対に、絶対に認めない！認めてたまるか！！」

まるで自分に言い聞かせるように叫ぶスタイル。その度に、インデ

ツクスと烈火、両者の言葉が蘇り、頭の中で何度も繰り返される。

『私…忘れないよ』『テメエはムカつく』『ぜったい』『カクゴとか言うて』『忘れないから……っ！』

「アアアアああアアアアアアアアアア！」

全てを掻き消すように、一際大きく吼えた。

「ハア、ハア、ハア……僕は、僕は……！」

苛立ち紛れに、地面を殴る。

だが、そんなことをして気が晴れるはずもなく、ただ拳を痛めるだけだった。

その時、建物の内部へつながるドアが開き、神裂火織が姿を現した。

「今の大声、どうかしましたか？ステイル」

「なんでもない。気にしないでくれ」

平静を装うステイルだが、神裂は怪訝な顔でこちらを見ている。が、聞くだけムダだと判断し、切り出した。

「二つ、話があります」

「話？なんだい？」

「まず一つ目。昨日、シェリーがこの街の人間と交戦しました」

「何……？」

ステイルは眉をひそめた。シェリー＝クロムウェルとは『必要悪の教会』の同僚だ。

ステイルの反応をわずかに伺って、神裂は続ける。

「結局は、その人間に倒されて捕まりかけたところをなんとか逃げおおせたようですがね。たった今、使者と共にこの街を去ったところですよ」

「何故ヤツがここにいた？それ以前に何が目的だ？」

「さあ、詳しいことはこれから本人に吐かせるそうです」

ステイルは、ほんの少し考えるような仕草を見せて、口を開いた。

「……聞いたことがある」

「何をですか？」

「過去に色々あったらしくてね、どうもシェリーは科学と魔術が交わることを極端に嫌っていたらしい。僕も人伝に聞いたただだがね」

「それは初耳ですが、今回のことと何か関係が？」

「考えても見ろ」

古いタバコを地面で揉み消し、新しい一本に火を点けて、ステイルは再び話始める。

「魔術も科学も互いに深く干渉しすぎるのは良しとしていない。そんな時にこちらの人間があちらで人死にでも起こしてみる。少な

らず軋轢は生まれるだろうさ。死んだのが重要人物ならなおさら、ね」

「身内？がやられて黙っている者はない。しっぺ返しは必ず来る。つまりはそういうことだ。」

「ですが」

釈然としない様子で神裂が尋ねる。

「？侵入者？とされたのは我々三人のみでしょう？シェリーはどうやってこの街に潜り込んだのですか？彼女が隠密行動に長けているとは思えませんが……」

「三人？とはステイル、神裂、そしてインデックスのことだ。そこにシェリーの名は存在しない。」

「それは？こちら？からの話だ。もし？あちら？にシェリーの協力者がいれば？侵入は容易いだろうさ」

完璧と言えるステイルの推理だが、神裂の疑問はまだ残っている。

「ならば、その協力者は、何故シェリーを利用出来たのですか？何故私でも知らない情報を操ることが出来たのですか？」

確かに『必要悪の教会』において、馴れ合いは存在しない。

あくまでも皆、上からの命令をもとに個人プレーを行っている。しかし、それでも外部の人間よりは強い繋がりを持っている。

何故？外部犯？が？身内？も知らないシェリーの暗い過去を知ることが出来たのか。

ステイルは事も無げに答えた。

「簡単なことさ。『獅子身中に虫』ってヤツだ」

「内通者がいる、と？」

「断言は出来ないがね」

そうすると、また新たに疑問が生まれる。それが誰なのか、何を目的としているのか。

しかし、考えたところで答えが見つかるハズもない。

神裂は強引に話を打ち切った。

「なら、もう一つの話をしませう」

鞘に納まった七天七刀をステイルに向け、静かに問うた。

「あなたには、まだあの子の記憶を奪い続ける？覚悟？はありますか？」

其之貳拾参・休戦（後書き）

シリアスとギャグが混じって変な感じになりました。最初はギャグオンリーなつもりだったんですが……いや〜ギャグ考えんのがって難しい！

其之貳拾肆：再開戦

魔術師たちとの死闘から、四日が経った。

時刻は8時過ぎ。今、烈火たち五人は小萌の家に向かっている。理由は、四日前に行われる予定だったが、様々なことが重なって中止となった魅惑の会合、『焼き肉パーティー』に参加するため。

「肉ぢゃあ〜！」

「食うぞー！！！」

獣のように目をギラつかせる烈火と土門。わざわざ昼飯を抜いてまで決戦に備えているあたりが貧乏人の悲しい性といったところか。ちなみに、二人とも恐ろしいほどの回復力で既に四日前に負ったダメージは全快していた。裏武闘での連戦を勝ち抜いて来たのは伊達ではなかったようだ。

先に行くバカコンビを柳は嬉しそうに眺める。

「二人とも楽しそうだね〜」

「ったく、あんまハジがかせんよ！」

「へっへー、もうかきまくってるから今更隠すことはないのだ！」

「えばれることがアホ！」

誇らしげに胸を張る烈火に風子の鋭いツッコミが飛んだ。

四人から少し離れたところを歩きながら、水鏡は思案していた。目

下の懸念事項である二人の魔術師について。

(何故動きを見せない？諦めた……ワケではないだろうな)

この四日間、水鏡たちは交代で日に二回小萌宅を訪ね、いざというときは連絡を入れるよう上条たちに伝えてあった。

が、結局魔術師による襲撃は一度としてなかった。かといって、彼らがあれだけ執着していたインデックスをそう簡単に諦めるはずはない。

とすると、？コレ？は単なる準備期間と考えるのが妥当か。聞けば、烈火はステイルという魔術師に『刹那』を使ったらしい。あの竜の炎を喰らったなら、その治療に多少の時間を割いてもおかしくはない。

四日間の空白の謎をそう結論づけ、水鏡は残る？三つ？の謎へ意識をシフトさせる。

(柳さんを襲ったシエリー、インデックスを襲った木蓮、そして何故か起きない？騒ぎ？、か……)

柳によると、シエリーは『必要悪の教会』なる組織に属しているらしい。

その組織に居るのか、はたまたただ手を組んでいるだけかはわからないが、少なからず幻獣朗の息がかかっているだろう。幻獣朗が何故柳を狙ったかは深く考えない。

『他の誰かに命じられて』『永遠の命を欲して』『火影へ復讐するため』e t c……。

ほんの一瞬でこれだけ思いついた。組織が思ったより大規模であることを鑑みると私怨の線は薄そうだが、それでも絞り切れはしない。

木蓮がインデックスを狙ったことについても同じだ。言ってしまう
ば彼女は『武器の設計図』。利用手段など、それこそ掃いて捨てる
ほど存在する。

そもそも、相手の目的なんて些事、大した問題ではない。

『全力で柳を守る』

ただそれだけ。今は脇道に逸れているものの、その？目的？は忘れ
はしない。もちろん、烈火たちも同じだ。

最後に、あれだけ目立つこと、具体的には『学生寮を能力で破壊す
る』なんて事件を起こして、何故か大規模な騒ぎが起きないこと。

せいぜい新聞の片隅に、『学生寮全壊。原因はガス爆発か』と小さ
く載っていたぐらいだ。

あからさまにおかしい。

そもそもあの日、例の？閃光？を目撃した人間はたくさんいるハズ
だ。

それをムリヤリ塗り潰した。あまりに不恰好で、逆に不自然さを際
立たせている。

この件に関しては、予測がついていた。

(大方、？魔術？の存在を認めなくなかったんだろう)

二日前に小萌宅を訪ねたとき、上条に聞いた。

この街では、魔術は？まだ？認知されていないらしい。

超能力がありで魔術がなし、というのもおかしい話だが、とにかく
魔術は存在しない？ことになっている？。

もし烈火が犯人だと糾弾したとする。そうすれば、？何故能力を使

ったのか？という疑問が生まれる。

LEVEL5。学園都市の最高戦力がその能力を全開するなど、ただ事ではない（少し前に？ただ事？で同じLEVEL5と闘っているのだが）。

そこに帰ってくる答えが、『魔術師と闘っていた』。

確かに、信じる者は少ないだろう。だが、逆に言えば？少しはいる？。

ダムが決壊と同じこと。少しの？傷？は、やがて大きな？穴？となり、そこから大量の？水？が流れ出す。

科学などと謳ってはいるが、度を過ぎた？信用？は、？信仰？と変わらない。？信者？の離反を恐れた上層部が事件を揉み消した。そう考えれば合点が行く。

（何にせよ、警戒は緩められないな。タダでさえ幻獣朗に魔術師にやることはいくらかもあるんだ）

心の中でそう呟き、気を引き締め直して、やっと気づいた。自分の少し前を歩いていた四人の姿が忽然と消えていることに。

（いや、違うな……！僕が？移動させられた？んだ）

辺りを見回しても、目に映るのは全く知らない風景ばかり。街灯がポツポツ点在するだけの、殺風景な大通りだ。自分でも来たことがないような場所に誘導されていた。

不意に、殺気を感じる。洗練された戦士のソレは、姿を隠した己の存在をこごぞとばかりに主張していた。

水鏡は、殺気の主へと冷たく告げる。

「姿を現せ。いるのはわかっている」

「……気取られましたか。やはり、タダの学生ではないようですね」
そう言つて、物陰からユラリと姿を現したのは、2メートル近い刀を携えた長い黒髪の女性。魔術師・神裂火織だ。

「あの程度、土門でも気づく。で？なんの用だ？キミたちの狙いはあのインデックスとかいう少女だったはずだろう」

「白々しいことを言うのですね。どうせ、あなた方も我々の邪魔をするつもりでしょう？」

言いながら、神裂は自身が持つ超長身の刀、七天七刀に手をかける。

「ならば、あなた方を先に潰す。それだけのこと」

水鏡は、後ろへ跳ねた。理由などない。ただ本能の告げるままに。直後、七つの斬撃が水鏡の立っていた場所を切り砕いた。砕け散ったアスファルトの破片が宙を舞う。

「……残念です。今の『七閃』に気づいていなければ、楽に意識を失えたでしょうに」

心底？残念そうに？、神裂は呟いた。そこから感じ取れるのは、自信。

水鏡など相手にもならない、という圧倒的な。それが、水鏡のプライドにキズをつけた。

「……ふっ」

ポケットに手を突っ込んだ水鏡の口元が、僅かに歪む。それを見て、神裂は怪訝な顔で問う。

「何がおかしいのですか？」

「いや、なんてことはないさ」

酷薄に、不遜に、嘲るように笑う水鏡。

「ただ滑稽なだけさ。あんな子供騙しで得意になっているキミがね」
ピクン、と神裂の眉が上がる。女は、上面だけ冷静に返した。

「無様に逃げたあなたがそんなことを言っても、負け犬の遠吠えにしか聞こえませんか？」

「だったら試してみるといい。もう一度、さっきの？宴会芸？をな」
我慢ならなかった。自分の実力を過小評価する輩が。

故に、挑発する。舌戦は得意とするところだ。烈火のような直情型なら尚更扱いやすい。

直情型の神裂は、今度こそ肩を震わせ、撒かれたエサに見事に食いついた。

「後悔しなさい」

ふっ、と神裂の手がブレると同時、水鏡に七つの斬撃が迫る。
が、水鏡は動かない。その場に突っ立ったままポケットから手を引き抜き、その手に持つ何かを振るった。

それだけ、たったそれだけで、七つの斬撃は、その全てが消滅した。

「!?!」

絶句する神裂。ムリもない。

七閃、とは魔術ではない。あくまで、魔術に見せかけワイヤーで相手を切り裂くものだ。

それでも、鋼鉄のワイヤーを斬ることなど、一朝一夕で習得出来ることでも、かといって鍛練を積みれば誰でも出来ることでもない。

才能と努力。その両方が備わって初めて可能な芸当だ。

水鏡は冷ややかな視線と共に、魔剣『閻水』を冷や汗を流す神裂に向け、口を開く。

「やはり、子供騙しだったな」

同刻、小萌宅へと続く道中、忽然と姿を消した水鏡を探す烈火たちの姿があった。

「チクシヨー！いつの間に消えたんだ!?!」

苛立ちと焦りを声に出す烈火。心中には後悔が渦巻いていた。

(クソッ！油断した!)

今思えば、四日間も何もして来なかったのは、自分たちにスキを作

るためだったのかも知れない。
だが、今さら気づいても遅かった。既に水鏡とは分断させられている。

「落ち着け烈火！」

風子が今にも一人で突っ走りそうな烈火の手を掴む。

「みーちゃん信じな！アイツならそうそうピンチになりゃしないよ
！」

「それはどうかな？」

風子も、土門も、柳も知らない声がした。烈火ただ一人は知っている。その声が誰のものなのか。

「テメエか、ステイル……！」

「久しぶりだね、花菱烈火」

夜の闇から浮かび上がったのは、四日前に烈火と死闘を演じたステイル。マグヌス。街灯に照らされたその顔には、挑発的な笑みが浮かんでいる。

「その水鏡とやらは、今神裂が相手をしている。ヤツと闘えば、タダでは済まないだろうね」

口から白煙を吐き出しながら言うステイル。言葉とは裏腹に、先に進ませてくれる様子は毛頭ないようだ。

「もう一度闘え、花菱烈火。僕とキミの決着だ」

殺意と、それ以上に強い？何か？を烈火へぶつけるステイル。烈火は、僅かに笑った。

「上等だ。今度こそケリつけよーや」

「オイ花菱！」

完全にヤル気満々の烈火を止めようとする土門だが、烈火は逆に手で制す。

「邪魔すんな腐乱犬。オマエらはみー坊探して来い！」

「……ラジャー！負けたらオシリペンペンだぞ！」

「行くよ土門！」

今来た道を引き返す土門と風子。柳は一人残っていた。

「オイ柳！オマエも行くの！」

烈火が怒鳴るが柳も譲らない。

「ヤだよ！烈火だってワガママ言ってるもん。私のワガママも聞いてくれなきゃ不公平！」

烈火は苦笑すると、

「わーったよ。ワガママ姫様！」

二人のやり取りを見ていたステイルが呆れ顔で声をかける。

「そろそろ始めないか？」

「おっワリーワリー！ワハハハ」

向き合う両者。完全な臨戦体制となっている。

二人は、同時に叫んだ。

「我が手には炎、その形は剣、その役は断罪ッ！」

「竜之炎弑弑ッ碎羽！！」

両者が生み出したのは、共に炎の刃。一瞬の間を置いて、互いの攻撃が交錯する。

衝撃が熱風となって、辺りを包み込んだ。

開戦の狼煙は再び上がった。

より深く、より複雑に絡み合ったそれぞれの？想い？を乗せて

其之貳拾伍：戒めの剣（前書き）

二期のねーちゃんメツサ可愛い！

こっちのねーちゃんは全く可愛くありません……

其之貳拾伍：戒めの剣

神裂火織は、刀を抜いた。

（私もまだまだ修行不足、ということですか）

見誤っていた。自分と相對している剣士の実力を。だからこそ、もう加減はしない。全力でもって、相手を叩き潰す。非礼を詫びるため。何よりインデックスを救うため。

水鏡も、神裂の纏う空気の変化に気づいた。もはや彼女に驕りはない。獲物を狩る獅子のように、全力を尽くして自分を仕留めに来るだろう。

懐から水の入ったペットボトルを取り出して、その中身を盥水の刃に垂らす。刃を伝って地面に滴り落ちるハズの水は、しかしそうはならず、その刃を、より強固なものへと作り替える。

風が一陣駆け抜けた。ステイルの刻んだ人払いのルーンの効果で、日が落ちてから大して時間が経ってないというのに、辺りに人影は全くない。

だからこそ、互いに遠慮せず全力で闘える。

ペットボトルが空になると、水鏡はキャップと共にそれを放り投げる。

カラン、と間拔けな音が響くと、それが戦闘開始の合図となった。

同時に駆け出す両名。20mほどあった距離は一瞬でゼロになり、壮絶な斬り結びが始まる。それはまるで、四日前の光景を再現する

かのように。

だが、四日前とは違い、水鏡が押し負けることはない。理由は単純、水鏡は？そもそも押してはいない？から。超高速の斬撃を、彼は一つ残らず受け流していた。

言葉にすれば簡単そうに聞こえるが、それは決して容易ではない。

タイミング、力加減、太刀筋。

これらが一つでも、少しでもズレれば、途端、水鏡は七天七刀の錆となるだろう。

以前の五秒に満たない打ち合いでその三つを把握しきった頭脳。

針の穴を通すような正確さでそれを実行してみせる剣技。

一つ間違えれば命さえも落としかねない状況で顔色一つ変えない度胸。

それら全てが神裂を驚かせる。

だが、驚いているのは水鏡も同じだった。

(この女、スキがない……！)

多大なリスクを背負ってまで水鏡が接近戦を選んだのは、神裂のスキを縫ってカウンターを喰らわせるためだ。成功すれば、肉体・精神共に大きなダメージを与えられるだろうが、その？スキ？がない。かなりの重量を誇るであろう七天七刀を、自分とさして変わらぬスピードで打ち込んで来る。これでは反撃しようがない。

烈火はステイルを十神衆並みだと評していたが、神裂はそれすら数段上回るだろう。

これ以上続けても体力を浪費するだけ。互いにそう判断し、再び距離を取る。

もう一度スキを探ろうと、じつと神裂を見据える水鏡は、ふと右手の甲に痛みを感じた。見ると、閻水を持つその手に、小さな切り傷が出来ていた。

(チツ、やはり防ぎきるのはムリがあるか……)

ここまで凌ぎきれただけで上出来と言っていていいだろう。

赤く滲んだ血を舐めとつてもう一度、神裂の動きを注視する。

女は、攻めて来ない。その代わりに、口を開いた。

「名を、名乗ってください。一応調べてはありますが、あなたの口から聞いておきたい」

それはつまり水鏡の実力を認めたということ、彼に断る理由はなかった。

「……水鏡凍季也だ」

「私は、神裂火織です。……面白いものですね」

場の雰囲気こそぐわない神裂の言葉に、水鏡は僅かに眉を潜める。

「どづいつことだ……?」

神裂は続ける。その端正な顔に、少しばかりのどこか自嘲げな笑みを浮かべて。

「私たちは正反対の名前をしています。正反対の立場にあります。なのに、同じように剣を振るって、同じように闘っています。問いますよ、水鏡凍季也。あなたは何のために力を得たのですか?」

刀を振りかぶり、神裂は突進する。それを待ち構える水鏡。両者の剣が、再び交わった。

「仲間を守るためですか？仲間を作るためですか？一体何を得たかだったのでですか？」

(くっ、やはり……速い！)

それでも怒涛の連撃を必死で受け流す水鏡だが、次第にガタが生じてくる。ゴールのわからないマラソンレースのように、一向に終わる気配のない斬撃の嵐が水鏡の心身を蝕む。

ガクン、と水鏡は大きくバランスを崩した。彼の足と地面の間には、さつき神裂が砕いたアスファルト片が挟まっていた。

(しまっ……！)

そんな好機を見逃す神裂ではない。

七天七刀の一閃が、水鏡の胸を斬り裂いた。

「ぐあっ……」

呻きと共に、鮮血が舞い散って、水鏡のシャツを紅く染める。

即座に体勢を立て直すが、斬られたダメージで体が上手く動かない。続く一撃をなんとか閻水で受けたが、踏ん張りきれずに閻水ごと後ろへ大きく弾き飛ばされた。追撃はない。神裂はゆっくりと水鏡に歩み寄りながら、語り続ける。

「私は、『救い』です」

すぐ側の街灯が、血塗られた七天七刀を、そして、悲しげな神裂の顔を闇夜に照らし出す。

「救うために強くなつて、救うために剣を振るいました。だからこそ、あの子を、大切な？親友？を救いたいのです！それが喻え間違つた道でも！？臆病者？だと罵られても！」

声を荒げて、女は叫んだ。

胸の焼けるような痛みと闘いながら神裂きの言葉に耳を傾けていた水鏡は、感じた。

(……こいつは、似ている。あの？バカ共？に)

大切な友のことを想い、そのために闘うこの女は？似ている？。烈火に、土門に、風子に、小金井に、そして自分にも。

それでも、？似ている？だけだ。自分たちと神裂には大きな違いがある。とても大きく、とても重要な？違い？が。

水鏡も、言葉を発した。

「……『何を得るため強くなった』。キミは、そう訊いたな。得るものなどない。復讐だ」

水鏡の口からでたそのワードに、神裂は意外そうな顔を見せる。それを僅かに伺って、水鏡は言葉を紡ぐ。

「七年前、僕は姉を殺された。今でも覚えているよ。姉さんの苦しそうな顔、男たちの楽しそうな顔……！」

両親を失い、金も身寄りもなかった。それでも二人は幸せだった。陳腐なセリフを吐くならば、『愛があったから』。だが、二人の幸せは突如として砕かれた。二人の愚かな男の手によって。

「それからは、復讐だけを理由に強くなった。姉さんの仇を取るために！」

痛みを堪えて立ち上がる。そして神裂に鋭い視線をぶつけた。とても強い、憤りを込めて。

「『あの子を救う』、そう言ったな？だが、キミも変わらないよ。姉を殺めた二人と何一つ」

神裂の目付きが鋭くなった。心外だ、とでも言うような怒りを灯して。

「……聞き捨てなりませんね」

射殺するような視線に動じることなく、水鏡は忌々しげに吐き出した。

「一緒さ。闘う力のない弱者に刃を向ける、愚か者以下のクズだ」

その言葉が、軽蔑の眼差しが、水鏡の発する全てが、神裂の怒りの琴線を刺激する。

「もう一度、いや、何度でも言っただけ。貴様に弱者を？救う？資格などない。貴様は、クズだ」

許せなかった。どんな事情があるかは知らない。それでも、許せなかった。

姉の命を奪い、祖父を苦しめ続けたあの男たちが、同じようにインデックスに刃を向けた神裂火織が。だからこそ、侮蔑の言葉を投げつけた。

沸々と、神裂の中で込み上がって来た感情が、爆ぜた。

「うるっせえんだよド素人が!!」

裏拳が水鏡の頬を捉え、弾き飛ばす。閻水を放すことはなかったが、水鏡はもう一度アスファルトへと背中を強かに叩きつけた。

「あなたに何がわかるんですか!? 私の何が! 葛藤が! 苦痛が! 悲しみが!」

ぐちゃぐちゃになった感情を、鞘で全て水鏡に吐き出す神裂。顔を、腕を、脚を、腹を。何度でも、何度でも、殴り続けた。尋常じゃなく重い一発一発が、水鏡の意識と、勝利への希望を刈り取っていく。(完全に、手詰まりだ)

もはや痛みすら感じないなか、水鏡は感じていた。自分はもう勝てない。ここで終わるのだ、と。すでに立ち上がることも難しい。仮に立って闘っても、絶対に勝てはしない。

(呆気ない結末だったな……)

諦めかけた、その時

諦めちまうのか？

声が、聞こえた。二度と聞くハズのない、男の声。

こんなところで諦めちまうのか？私はずっと倒したかったオマエが。巡狂座の一番弟子が。

一度は耳を疑った。二度目は確かに耳に届いた。声は、なおも水鏡を叱咤する。

立つんだ、水鏡。復讐を棄てたオマエの、私が命を賭して闘った水鏡凍季也の強さを見せろ！

幻聴、なのだろう。死人の声が聞こえる。そんなことはあり得ない。だが、幻聴だろうがなんだろうが、その声は、水鏡に力を与えた。

？絶対に負けない？

そう思う、気力を。

（キミには、借りを作りっぱなしだな。だから、今ここで全てを返すよ）

水鏡は、立ち上がる。傷ついた体で、痛みを堪えて。

（あの女を倒して、水鏡凍季也の強さを証明することだ！）

？勝つ？ために。

満身創痍。それでも立ち上がる水鏡の姿に、神裂は重ねていた。ど

れだけ痛めつけても、絶対に自分を曲げなかったあの少年を。

「何故ですか！？何故そこまでボロボロの体で立ち上がるのですか！？？」

心底疑問だった。

タダの学生が、どうしてここまで頑張れる？どうして強くある？とし続けられる？

わからない。全くわからない。

「意地だ」

水鏡は答えた。

「やりたいことは意地でもやる。やりたくないことは意地でもやらない。火影はそんなバカの集まりなんだ。そして……」

ズン！と地面に閻水を突き立てた。

「どうやらボクにもバカが伝染^{うつ}ったらしい！」

地面を砕いて、無数のつららが神裂を串刺しにせんと迫る。つららの一本を刀で受け止めながら後方へ跳躍してそれを掻い潜る神裂。水鏡は追撃をかける。

「氷雨ツー！！」

氷塊が無数の礫となって、まるで雨のように降り注ぐ。が、神裂はそれすらもほとんど刀で防ぎ、大したダメージを受けなかった。

「四方より交われ……」

水鏡は攻撃の手を休めない。閻水の切っ先を囲むように四つの水の珠が現れる。

「水成る蛇！」

珠は一点で交わり、巨大な水の蛇を生み出した。うねりながら突き進む水の大蛇。それすらも、

「ハアツ!!!」

神裂は、一刀のもとに叩き斬った。

そのまま、水鏡へと猛進する！

「終わりです！水鏡凍季也!!!」

七天七刀。2mある刀による高速の突きが、水鏡の体を貫いた。だが、

「これはっ!?!」

?それ?は、水鏡ではなかった。形を崩したその物体は、水で出来たタダの人形。氷紋剣『水傀儡』。

バシヤン、と地面を叩く水を見て、神裂は驚愕する。

(蛇を斬った時のほんの一瞬ですり変わった!?本体は……これは、血!?)

水鏡の居場所は、上から落ちて来る彼の血が教えてくれた。

見上げると、傷だらけのハズの水鏡が上空で閻水と共に両腕を振り上げている。極限の闘いの中、運命は聖人である神裂に微笑んだ。

「その体でよくそこまで闘いました！今度こそ、終わりです！」

横薙ぎに振るわれる七天七刀。鍛え上げられた神裂の豪腕が繰り出す斬撃が空中の水鏡を引き裂き、

水鏡の体が、またしても形を失った。

神裂の体に雨の様に降り注ぐその液体は、水ではない。神裂の視界が深紅に染め上げられる。

閻水は、液体を刃に換える魔導具だ。油でも、ガソリンでも、？液体？でさえあれば、刃を成す。それが喩え、己の血液でも。

二段構えの目潰し。流した血の量を考えれば、？ワリに合わない？どころではない。

それでも、水鏡は命を賭した。

己の意地を、誇りを、そして強さを証明するために。

「僕の勝ちだ、神裂火織」

背後の声が、神裂の耳に届いた。彼女に振り返るほどの猶予はない。

神裂の首の高さで、文字通り、持ち主の命を宿した深紅の刃が振り抜かれる！

神裂の美しい黒髪が、舞い散った。

其之貳拾陸：誰がために

「吸血殺しの紅十字！」

炎剣を碎羽で受け止めた烈火に、二撃目を放つステイル。二つの炎剣は、交錯すると同時に爆ぜ、烈火の体はドームのような爆炎に呑み込まれた。

「烈火あー！！」

柳が叫ぶ。が、

「効かねえーッ！」

炎のドームを突っ切つて現れた烈火は全くの無傷。

「くっ……バケモノかアイツは！？」

猛進する烈火に身の危険を感じ取ったステイルは、顔の前で腕を交差させ、重心を低く構えることで防御体勢をとった。

しかし、烈火はステイルの前で勢いを殺さないように一回転すると、

「オラアっ！」

ローリングソバットでステイルの体を、その拙いガードごと吹き飛ばした。大男は地面で二回ほどバウンドして勢いを失った。

鋭い痛みと共に流れる鼻血を指で拭い取って素早く立ち上がると、ステイルはもう一度炎剣を放った。

自身を焼かんと迫る灼熱の剣を、烈火は碎羽で受け止める。そして、
「フンガッ！」

その腕を、横に思い切り振るって、炎剣を弾き飛ばした。炎の塊は軌道上にあつた街路樹に激突し、さながら巨大な松明に火を点けたかのように、辺りは眩い光と激しい熱に包まれた。

ステイルは歯噛みする。

(くっ……この前闘った時とはまるで違う！ケガーつの差がコレほどとは……！)

対する烈火は、僅かな違和感を覚えていた。

(……なんだ？いくらなんでも？弱すぎる？)

確かに、四日前と今とでは状況が全く違う。例えば、烈火の脚にキズがなく、彼がそのスピードを如何なく発揮出来ること。例えば、ステイルには？仕込み？が出来ておらず、彼は全力を出しきれていないこと。それでも、喻えそれら全てを差し引いたとしても、今のステイルの動きは明らかにオカシイ。

己の心の？ブレ？によつて生じた綻びを、その絶大な実力でもつてムリヤリ取り繕っている。そんな印象だ。

しかも、本人がその事に気づいている様子も一切ない。

烈火の中のそんな考えに気づかないステイルは、ルーンのカードをばら蒔きながら叫んだ。

「顕現せよ、『魔女狩りの王』イノケンティウスッ！」

出し惜しんでいる場合ではない、そう判断したのだろう。しかし、そうして生み出された巨人に、以前はあれほど烈火を苦しめたステイルの切り札に、前の禍々しさはカケラも感じられず、今にも消えてしまいそうなほど脆弱に見えた。まるでステイルの心を写し出すかのように。

「円」

静かに呟くと、炎の結界が巨人を捕縛する。

「崩」

二言目。直後、結界の中で無数の火玉が飛び交って、弾け合って、魔女狩りの王を叩き潰した。案の定と言うべきか、本来なら復活するハズの巨人は、粉々に砕かれたあと霧散した。

その事実が一番驚いているのは、他でもない。術者のステイル「ماغヌス張本人だ。

「そ……んな！魔女狩りの王！」

事態を呑み込めていないステイルの、困惑した顔に目をやって、烈火はハツキリ呟いた。

「つまんねえ」

ステイルの顔がギョツとして固まった。ある種の？恐怖？を浮かべて。

「つまんねえよ」

「やめろ、言うな！」

命令、というより懇願するステイルを無視して、烈火の口は決定的な一言を吐き出した。

「テメエ、ナニ迷ってやがんだ？」

「あなたには、まだあの子の記憶を奪い続ける？覚悟？はありますか？」

鞘に納められた刀を自分へ向ける神裂のそんな質問にステイルが抱いたのは、憤りではなく、心からの疑問だった。

「意味が……わからないな」

「シラを切るつもり、ではなさそうですね。本当に気づいていないなら伝えましょう」

神裂は、ステイルに向けていた七天七刀をゆっくり下ろすと、

「今のあなたからは、？迷い？が感じられます」

「……ハ？」

やはり、意味がわからない。

神裂は、そんなスタイルをやや呆れた目で見る。

「あれだけ大声で叫んでおいて……あなたはもう少し自分に目を向ける必要がありますよ」

「……聞こえていたのか」

「聞こえないワケがないでしょう」

続けます、と一言おいて神裂は告げた。今、スタイルが一番聞きたくない名を。

「花菱烈火……彼にほだされたようですね。あなたらしくもない」

「なっ！？何をバカな！」

「今それだけ取り乱しているのが十分すぎる証拠ですよ」

言い返せなくなるスタイル。彼には、何故言葉が出て来ないのかすらわからなかった。

「今、あなたは迷っています。」

信者に教えを説くように、神裂はスタイルに語りかける。

「確かに、我々の選んだ道が正しかったのか、それとも間違っていたのかはわかりません。ですが、それでも私たちは迷っていません。あの子を？救う？ためにも」

神裂は、再び刀をスタイルに向ける。己の覚悟を示すかのように、

刃をさらけ出して。

「迷うのであれば、あなたは邪魔なだけです。今すぐ帰るか、それとも残って闘うか。選んでください」

刃のように鋭く自分を睨む神裂を一瞥したあと、ステイルは刀に触れてそれを下ろさせると、

「愚問だね」

そう返した。？迷い？など、最初からなかったと言うように。

「僕は誓ったんだ。あの子に全てを捧げる、と。こんなところでおめおめと帰れるものかよ。それと、一つだけ訂正がある」

口にくわえていたタバコを空中に投げ捨てる。強風に煽られたタバコは、彼方へと消えて行った。

それを眺めながら、ステイルは言う。

「僕たちの選んだ道は？絶対に正しい？。？絶対に？、だ」

感情の一切を捨て去った、冷たい表情で。

（そうだ、正しいんだ！僕は迷ってなどいない！）

再度生み出される魔女狩りの王。突撃する巨人だが、攻撃対象であ

る烈火は全く動じない。

烈火が指で宙に何かを描くと、腕に炎の帯が巻き付く。そしてその右手で巨人が振り下ろした炎の十字架を殴り、巨人の腕を消し飛ばす。それに連動して、巨人の体は全て消滅する。

ステイルに人差し指を向けて、烈火は言った。

「やっぱ、テメエは迷ってる」

「黙れ！魔女狩りの王を潰して勝ったつもりか！？生憎だが何度だって」

ステイルが言い切る前に、無数の火玉がステイルの周りの地面に炸裂した。火玉はアスファルトを粉々に砕きながら、散らばっていたルーンを焼き尽くした。

「自分の能力の弱点も忘れちまうくらいな」

その弱点は、ステイル自身が烈火に告げたものだ。ステイルは、そんな事すら失念していた。それでも、認めたくなかった。

「迷ってなどいない！」

あくまでも頑ななその態度に、烈火は僅かにため息をついて、

「じゃあよ、なんでこないだテメエは泣いたんだ？」

ステイルは答えられない。否、？答えたくない？と言った方が正しいだろう。

答えてしまえば、？芯？が折れてしまうような、そんな気がして。それを見て、烈火は続ける。

「言いたくねえならオレが言っただけでやる。テメエはな、後悔したんだ。ずっとあの子を傷つけてきたことを。だから迷ってる」

その言葉が、ステイルの胸に深く突き刺さる。

男は、一度拳を固く握り絞めると、すぐにそれをほどいて、

「ああ、そうだよ」

吹っ切れたように言った。

「ああ、そうだよ。迷っているのかもな！だが、？それがどうした？！」

男の叫びは悲痛なもので、それが烈火と柳の心に響く。

「関係ないんだ！迷っていいようがいまいが！僕に出来ることは、嘘え傷つけてでもあの子を守る、それだけなんだ！」

「ダメだよ！」

柳の声が、響いた。

烈火に、火影に、？守られてきた？少女はもう一度言った。

「ダメだよ、そんなの」

そこでステイルは初めて気づいた。柳の、とても悲しそうな表情に。

「あなたは、インデックスちゃんを大切に想ってるんだよね？だったら、インデックスちゃんもあなたのことを大切に想ってるの。大切な人と敵同士になっちゃうのって、すごく、すごく悲しいんだよ」

……？」

そう言う柳はボロボロ泣いていた。思い合う二人が離ればなれになることが、辛くて。

柳は、一度死んだ。天堂地獄の生け贄となつて。

怖かった。死ぬことが、ではなく、大切な人と離ればなれになってあまつさえ敵として、その人たちを傷つけてしまうことが。

だからこそ、烈火は選んだ。柳をバケモノに変えてしまうのが怖くても、それが、ずっと一緒にいることが彼女の幸せだと想つて。柳と、永遠を歩む道を。

結果的に柳は蘇った。それでも、二人にはわかる。大切な人と引き裂かれることが、どれだけ苦しいことなのか。

「傷つけるなんて言わないでよ。ずっとそばにいてあげて。インデックスちゃんも、きつとそうして欲しいと思うよ……？」

顔をクシャクシャにする少女を見たステイルの心に、あの時の、インデックスの言葉が蘇る。

『私……忘れないよ。かおりも……ステイル！ぜったい忘れないから……っ！』

そして、その時の泣き顔も。

ザグン、と心がざわめく。だが、

「違う！僕の選んだ道は正しいんだ！！」

そんなものを掻き消すように叫んで、炎剣を繰り出す。

思い出を消される苦しみを何度も味わわずくらいなら、命と記憶を天秤にかけるくらいなら、敵として彼女の命を守り続ける！

ステイルの想いを込めた炎剣が、柳に振り下ろされる。だが、そんな一撃は、柳の前に躍り出た烈火が、右手一つで受け止めた。

「……正しいかどうかなんて、誰も聞いちゃいねんだよ」

烈火は見据える。その目で、ステイルの？心？を。

「大事なのは、テメエとあの子の気持ちだろーが。目エ背けてんじやねえぞ！あの子を本気で守りてえんなら」

炎剣を握り潰し、その拳を振りかぶり、

「まずはテメエと向き合いやがれ！！」

己の？覚悟？を秘めた渾身の一撃を、ステイルに放つ。
数多の強敵を打ち倒し、変えて来た烈火の拳が、ステイルの顔面に突き刺さった。

薄れゆく意識の中で、ステイルは思っていた。

（自分の気持ち、か。確かに向き合うことはなかったな）

自分の体が宙を舞っているのがわかる。おそらく、あと二秒もしないうちに地面に叩きつけられ、意識は闇の底だろう。

（怖かったんだな。向き合うことで、？覚悟？を失ってしまうのが。だけど、もう逃げはしない。真っ直ぐに自分と向き合おう）

そして、最後に誓った。

（インデックス、たとえ君が全てを忘れてしまおうとしても、僕は君のために生きる。そして、ずっと君の側で守り続けて見せる。いつまでも、いつまでも……）

それから0・1秒後、ステイルは地面に叩きつけられて意識を失った。

静かに眠る少年の顔には、どこか晴れやかな笑みが浮かんでいたという。

其之貳拾陸・誰がために（後書き）

早いところ紅麗たちの話に移りたいのになかなかこっちが終わらない
……

其之貳拾漆：仲間

「おおーい！迷子のジョンヤーい！」

知らない人が聞けば犬でも探しているのか、と勘違いしそうなことを言いながら、風子と別れた土門は市街地から外れた方向へと向かっていた。

彼の手には、ヘンなラクガキの施された紙が何枚かクシャクシャになって収まっている。コレらは道すがら、そこら中に貼られていたもので、花屋の息子として環境問題的に見過ごせなかったために剥がして来た。実はステイルの刻んだ人払いのルーンだとも知らずに

ともあれ、正しい方向に進んでいた彼は、目的の人物である水鏡凍季也と、やたらエロいカツコのねーちゃん・神裂火織を発見した。

閻水の一閃で、神裂の美しい黒髪が舞い散った。美しい黒髪？だけが。それ以外、彼女は首をはねられるどころか、キズ一つついていない。

「……何故、斬らないのですか」

固く拳を握り締め、尋ねる神裂。水鏡は素っ気なく答えた。

「『髪は女の命』らしいからな。それで勘弁しといてやろう」

「ッ……フザけるなッ!!」

女は、咆哮した。敗北の悔しさに、情けをかけられた屈辱を上乗せして。

「あなたはこの私を愚弄してるんですか!?それとも情けをかけて恩を売ってるつもりですか!?!」

自分は命を賭して闘った。そんな覚悟が、下らないフェミニズムで台無しにされた。腹立たしくてたまらない。もう一度、怒りを吐き出そうとしたとき、

「だったらキミはどうなんだ?」

水鏡がそれを遮った。

「何が……ですか?」

「とてもじゃないが、僕にはキミが本気で闘っているようには見えなかった。その気になれば、僕を殺すくらいワケはなかったはずだ。結局、キミは人を殺せる人間ではなかったんだ」

そう言っつて水鏡は柔和に微笑む。

見透かされていた。己の信念を。?救い?を信条とする自分に、人を殺すことは出来ないということを。

「……問います」

神裂は、小さく呟いた。

「ならば、何故あなたは私を殺さなかったのですか？復讐こそがあなたの目的なのでしょう」

何故、何故なのか。何故、復讐などという負の感情に突き動かされて来た人間が、どうしてもそこまで優しい顔ができる？

それが、神裂の疑問だった。

水鏡は、手に持つ盥水に、？姉の形見？に目を落とすと、

「……確かに、最初は復讐だけだった。姉さんの仇を討つことさえ出来れば、死んでもいい。そう思っていた。だが、変わったんだ」

漆黒に塗り潰された夜空を、そこにいる誰かを水鏡は見上げる。

「？友？が教えてくれた。復讐は何も生まない。待つのは自身の破滅だけだ、と。そして」

命を捨てる覚悟はあった。それなのにその言葉がたまらなく恐ろしかった。その理由も、？彼？は教えてくれた。

「僕には？仲間？がいることを」

本当に、バカな奴らだ。その考えは、今も以前も変わらない。それでも、そんなバカ共に、いつしか自分も溶け込んでいた。？仲間？と呼び合う関係になっていた。

水鏡の暖かい顔を見て、神裂は思う。

(……やはり、私たちは正反対です)

片や、表面上は凍っているように冷たい人間を装いながら、その実、仲間を想っていた水鏡。

片や、表面上は火のように暖かな人間を装いながら、その実、仲間を見捨てて来た己。

まるで、自分は道化だと嘲られている。そんな感じがした。

「……私だって、気づいてるんですよ。私たちがあの子に行ってきた仕打ちは、私たちが選んだ道は、？救い？などではないことに。それでも、そうするしかなかった……！」

唇をキツく噛み締める。鋭い犬歯が厚い肉に突き刺さり、口の端から血液が流れた。

「私が間違っていると云うのなら、いつそのまま殺せばよかった！無様に生き恥を晒すくらいなら、死んだ方がよっぽど「知ったことか」

神裂の泣き言は、冷たい声に掻き消された。

「懺悔したいなら教会にでも行くんだな。僕にキミを裁く権利はないし、そんなつもりもない」

それに、と水鏡は言葉を紡ぐ。

「あの少女を傷つけたことを悔いるなら、キミがしなければならぬことをよく考える。少なくとも、今ここで犬死にする事では絶対ない」

あの忍者バカなら、あの男女なら、あのモヒカンゴリラなら、あの

チビっこなら、立ち止まりはしない。辛い気持ちも後悔も、全てを背負って前に進むだろう。そして、自分も。それこそが、火影と神裂火織の決定的な違いだ。

「あとはキミ次第だ」

身を翻して、水鏡はその場を立ち去る。

（全く、本当に甘くなったな。少し前なら、躊躇わずに斬ってただろうに。……？バカが伝染った？か）

我ながら言い得て妙だな、と笑いながら、水鏡は？友？の言葉を思い起こす。

『オマエには仲間がいる。死を恐れる！死に急ぐ必要などないのだ』

（僕が今ここにいるのも、あの女に勝てたのも、キミのお陰だ。キミと出会えたからこそ、僕は変わった。礼を言うよ。ありがとう（戒）

心の中で？友？に感謝を述べたあと、水鏡は崩れ落ち、意識を失った。胸には刀傷、全身の打撲に加え、あれだけ血を流した。最後の怒涛の連撃で、彼は力を使い果たしていた。

その姿を見て、神裂はポツリと呟く。

「……バカですよ、あなたは」

「ウムウム全くそのとおり！」

振り向くと、背後にモヒカン頭の大男が立っていた。確か、水鏡の仲間の石島土門と言っただろうか。

神裂が、目を通した資料について思い出していると、土門は水鏡の元まで歩いて行って、彼を抱え上げながら続ける。

「アンタ、すつげえ貴重だぞ。みーちゃんがこんなにスナオになることは滅多にねーからな」

神裂に顔を向け、不敵に笑う。

「心の底ではアンタのこと認めてんだよ。きっと変われるってな！ま、どーするかはアンタの自由だ。自分の好きな道を選ぶこつたな」

閻水を拾い上げ、クルリと背を向けると、今来た道を歩き出す土門。神裂は、

「待ってください！」

思わず、呼び止めていた。驚くほど自然に。

「私に運ばせてください。それと、話します。あの子を襲った理由も、何もかも」

何故そんなことを言ったのか、神裂自身にもわからない。？そうしたかった？。強いて言うならそれだけだ。

土門は立ち止まって神裂をじっと見つめると、

「ホイッ」

ぼーん、と片手で水鏡を放り投げた。

「なになっ!?!」

慌ててキャッチする神裂。土門はビシッと親指を立てると、

「任せませ!」

そう言つて、先に帰っていった。神裂は、小さくなっていく土門の背を眺めながら、

(本当にバカですよ。敵に仲間を預けて行くとは……)

あるいは、信じているのかも知れない。敵である、自分を。クスツ、と笑いが込み上げてくる。

(ステイルがあの子を気に掛けるワケがわかった気がします。迷っていたのは、私も同じだったようですね)

水鏡を肩に担ぎ直して、神裂は土門の跡を追う。

(……聖人を打ち破ったあなたの強さ、見極めてみたくなりました。水鏡凍季也)

そうして、女は歩み始めた。自分が真に進むべき道を。

「ナニ？みーちゃん見つかった？……わかったわかった。後でナデナデしたげるから……わかったつつつてんだろがフランスモアイ！切るぞ！！」

電話の向こうで手柄をやたらと誇示してくる土門に苛立ちながら、風子は乱暴にボタンを押して通話を打ち切った。

ここは狭い路地裏。

風子の通ってきた道には、『ヘンゼルとグレーテル』よろしく、ガラの悪い男たちが道しるべのように転がっていた。風子をナンパした不良少年の哀れな末路だ。

ムーンと唸って、風子は不良たちの転がっているのは逆方向に進んだ。

軽く三十人ほどぶちのめして来たので、自分の通ってきた道には足の踏み場がほとんどない。別に不良たちを踏んづけて帰ってもよかったが、この暗さではバランス的に少々危険だ。別に彼らがかわいそうだから、とかでは断じてなかった。

と、そこで風子はカツ！と目を見開くと、プルプルと震えだした。

「……焼き肉、忘れてた」

慌てて時間を確認。約束の時刻を三十分ほどオーバーしている。

「ヤバい！早く行かないと全部喰われちゃう！」

焼き肉パーティー参加者は、火影以外には貧乏人の上条当麻とブラックホール・インデックス。彼らが自分たちの分まで肉を残してくれるとは思えない。最悪、野菜だけのしょっぱい会合になってしまう。それだけはなんとしても避けねばならない。

もう烈火たちはどうでも良いから自分だけでも参加してやる！と決意を新たに走り出した風子は、直後ポリバケツの陰から飛び出していた何かに躓いて、盛大にコケた。

「誰だテメ固羅！××××ちゃん切つたるか！」

食べ物への恨みは恐ろしい。スタートダッシュをジャマされて、とても華の女子高生とは思えない口汚いセリフを叫びながら、自分が躓いた原因に目をやる。

「つて、ありゃ？鋼金暗器？」

それは、魔導具・鋼金暗器。その先に、ポリバケツに隠れるように座るその持ち主を見つけた風子は、絶句した。

アザだらけで頭から鼻から血を流し、着ている学生服は暗がりでもわかるほどボロボロで一部は血で真っ赤に汚れている。

風子が見たのは、そんな仲間の姿。

死んだように眠る、小金井薫だった。

其之貳拾漆：仲間（後書き）

今回の話は超電サイドと若干繋がっています。

それと、今さらなんですけど、烈火に『超電磁砲』みたいな能力名つけた方がいいでしょうか？すっかり忘れてました（´・`・´）

其之貳拾捌・制限時間（リミット）（前書き）

アニメとは凄いもので……原作では一切興味なかったあわきんも、アニメ見たら好きになりました。

てゆうか一方さんヒデエ

其之貳拾捌：制限時間（リミット）

結局、水鏡と小金井は入院することとなった。柳の力で治療してもよかつたが、魔術師による襲撃の心配がなくなつたため、ゆつくり体を休めるべきだという、烈火の彼らしからぬ判断だ。

二人は未だ目を覚まさないものの、キズ自体はほぼ完治していた。二人を診たカエル顔の医者曰く、水鏡は体力が回復しきつておらず、小金井は何か大きな精神的ショックを受けたのではないか、とのことだ。

（精神的ショック……ねえ）

医者の言葉を、烈火は反芻する。

ここは病院の屋上。ギラギラ輝く真夏の太陽に照らされ、コンクリートの地面が熱せられたフライパンのように靴の裏側を焼いている。落下防止のフェンスにもたれ掛かる烈火の手には、ついさつきカエル医者が奢ってくれた『ガラナ青汁』が握られている。

（あのガキンチョがなんもん受けんのか？）

小金井薫は、天真爛漫を絵に描いたような少年だ。つまるところ、精神的ショックなど受けるとは思えない。

ただ、考えられるのが……

（……紅麗となんかあつたのかねえ）

紅麗の率いた暗殺集団『麗』を裏切つて火影に与した際も、彼には少なからず心のキズがあつた。それは、紅麗に？裏切られた？ことによるものだ。

そもそも、小金井ほどの実力者があれだけやられたというのが信じられない。

「ウム、わからん」

こういう考え事はクーラーで冷却された空間でしたいものだが、生憎病棟内ではケータイは使えない。？連絡待ち？の烈火としては、それでは困る。

ともかく、沸騰してしまいそうな血液を常温に戻すべく、ガラナ青汁を飲む決意を固める。

プルタブを起こすと、プシュツ、という炭酸飲料独特の音と共に、炭酸パワーで刺激を増した青汁臭がお出迎え。それだけで烈火は戦意喪失しかける。

断言できる。？コレ？は人の飲むものではない。

しかし、いや待てよ？と烈火は思い直す。

自分は喰ったことも嗅いだこともないが、ドリアンなる果物が存在する。

それはとてつもなく臭い、がとてつもなく美味しい……らしい。

もちろん人から聞いた話なので真偽はさだかでないが、試す価値はある。

何事もチャレンジだ。あの紅麗に勝利した己が、たかだか缶ジュースに負けるワケがない！

意を決して、グイツと一口流し込んだ。

直後、口に広がる甘味、苦味、酸味。オールスターゲームのように節操なく放り込まれたその液体は、一言で表すなら？不味い？。二言で表すなら？とても不味い？。とにかく？クソ不味い？。

「ブオホツ！！！」

反射的に緑の液体を全て吹き出す烈火。その拍子に缶も滑り落としてしまう。烈火の口と缶からこぼれ落ちたガラナ青汁は、熱せられたコンクリートに触れると同時に、一瞬で蒸発した。

「飲めるかチクシヨオオオ！」

暑さのせいでいつもの数倍沸点が低くなっている烈火は怒り狂いながら叫ぶ。と、そこへ待ち望んでいた連絡を知らせるケータイの着信音が響いた。

烈火と柳、そして途中で合流した上条は、彼らがよく利用するファミレスへとやって来た。

彼らを呼び出したのは、魔術師・ステイル「マグヌスと神裂火織だ。

自動ドアをくぐってウェイターの女の子に待ち合わせである旨を伝えると、少女は顔面蒼白でステイルたちの席まで連れて行ってくれた。どうやらタトウー、ピアス、赤髪、それと長身というパンクな格好のステイルが恐ろしいらしい。

烈火は、柳と上条と一緒にステイルたちの向かいに腰を下ろして、適当にオーダーすると切り出した。

「よオ。話す気になったみてえぢやねえか。」

長かった神裂の後ろ髪がやたらと短くなっているのが気になったが、言及はしない。

ステイルは、烈火たちが来る前に注文したらしいコーヒを一口飲んで、言葉を返す。

「ああ、始めるとしよう。まず、僕たちの所属する組織は『必要悪の教会』ネセサリウスと言う」

その言葉を聞いた烈火、柳、上条がそれぞれ驚きを示した。

「それって確かインデックスの……！」

最初に上条が口を開くと、

「オイ柳！オマエ拐おうとしたシェリーとかゆうヤツも……！」

『ねせさりうす』って言ってた！」

シェリーの名を耳にして、今度は神裂が驚いた。

「シェリーを知ってるんですか！？それに、拐おうとしたとは……」

？」

「オメーらと最初闘った日に、コイツも襲われたんだよ。なっ、柳」

「うん。『一緒に来てください』って言って、逃げたら襲って来て

……そしたら土門くんが助けてくれたんです」

土門、というと昨日会った大男のことだ。

思いもよらぬ情報だが、信憑性は高いだろう。そもそも、シェリーほどの魔術師が、たかだか学生に倒されるのかと言うのが甚だ疑問だった。が、あの烈火や水鏡の仲間なら然程不思議ではない。彼らもまた、自分やステイルに勝ったのだから。

そんなことより気になるのが、？何故柳を狙ったのか？だ。

「あなたの能力はなんですか？」
ステイルの推理では、シェリーをけしかけたのは外部の人間とのことだ。

それは、学園都市の関係者のみとは限らない。敵対する科学組織が、学園都市の機密情報を得ようと、学生を拐おうとした可能性だってある。能力のレアリティによっては、狙われ得るだろう。「えっと、治療能力ヒーリングって言って、他の人のケガとか病気を治せるんです」
神裂は俯いて考え込む。

(……確かに便利な能力ではありますが、？それだけ？のためにシェリーを敵地に潜入させて、自分の足がつくりスクを背負うとは思えません)

学園都市あつちの事情に詳しくはないが、その程度の能力ならごまんとするハズだ。それに、柳の口振りから察するに、誰でもよかったワケではないだろう。

？柳でなければならなかった？理由が必ずある。
と、神裂が思索していると、

「あの、そろそろインデックスのこと話しませんか？」

「全くだ。キミたちは何しに来たと思ってる？」

上条が恐る恐る言って、ステイルが若干イラつきながら同意する。

「あつ、すつスミマセン。つい……」

神裂は気まずげにコホン、と咳払いして、

「それで、その『必要悪の教会』ですが、その少年も察しているように、インデックスの所属する組織でもあります」

「ナニ……？」

烈火が眉を潜める。

「ワケわからん。テメーら同士が仲良くて、そんで入ってる組織も一緒に、なんであの子追っかけ回してたんだ？」

例えば、『ロミオとジュリエット』のように、想い合う両者は最初から敵同士だった、というなら理解できる。だが、互いに想い合い、なおかつ所属する組織も同じという状況で、何故ステイルたちは敵

を名乗っていたのか。

ステイルはポケットからタバコの箱を取り出そうとするが、禁煙席であることを思い出してポケットにしまい直すと、

「記憶喪失……なんだ」

ポツリと呟いた。

曰く、インデックスの記憶している10万3000冊は脳の85%を占めており、曰く、そのせいでインデックスは一年ごとに記憶を消さねばならず、曰く、そうしなければ容量をオーバーした脳味噌がパンクし死に至る。

「辛かったんだ、あの子と何度も別れるのが……。苦しかったんだ、あの子の笑顔を見続けるのが……！」

ステイルはそう告げた。

「何だよ……何だよそれはッ！」

両手をテーブルに叩きつけながら立ち上がる上条。客や店員が何事か、とコチラを見ているが、彼は構わず叫び続ける。

「テメエら何勝手にインデックスを見限ってんだよ！インデックスがそんなこと「わかってる！」」

上条にも劣らない大声を張り上げて、ステイルも立ち上がった。

「わかってる！もうあの子をキズつけはしない！……だが、それとこれとは話が別だ」

大男は、力なく腰を下ろした。

「記憶と命では天秤にかけるまでもない。僕たちは、これからはあの子と苦しみを共有し続けると決めた。あの子だけにリスクを背負わせるワケにはいかない」

ステイルは冷めてきたコーヒーを口に含む。

それを見て、なかなかタイミングが掴めずに商品を届けられないでいたウェイターの少女が、『今が好機！』とばかりにオムライス他飲み物数種を迅速かつ丁寧なテーブルに置くと、『ごゆっくりどうぞ』と引き吊った笑みを残して足早に去って行った。厨房からは、彼女を讃える声が聞こえる。

「ほんべ(そんで)?」

オムライスで口をハムスターのようにした烈火が尋ねる。

「へへーばは、ほーふふんば(テメーらは、どーするんだ)?」

「食べながら喋らない!」

柳に叱られて、烈火は一口で飲み込むと、

「諦めちまうのか?あ、お冷やおかわりー」

「粘ってはみませう。私たちだって、あの子の記憶は消したくありません。しかし……」

答えて、一度言葉を切る神裂。ステイルがそれを引き継いだ。

「三日だ。今日も含めてリミットは三日。それまでに手段が見つからなければその時は……!」

その先は言わない。?言えない?と言うべきか。それでも、全員が理解した。

「……話はここまでだ。今日の分は僕のおゴリだ」

ステイルが伝票を持って席を立つ。神裂もそれに続くと、烈火に向き直っておずおずと口を開いた。

「あの……本当に申し訳ないことをあなたにも、水鏡凍季也にもしてしまつて……その……スイマセ「ストップ!」……へ?」

完全な謝罪態勢で深々と頭を下げようとした神裂を、烈火は手で制止した。彼は、呆気にとられた表情の神裂に言う。

「謝るのはあの子を助けた後……だろ?」

神裂はわずかに微笑むと、

「……ええ!」

力強い肯定の返事を残して、会計を済ませたステイルの後を追った。入れ替わるようにして例のウェイターがお冷やを運んでくる。恐怖の対象であった赤髪ロン毛が消えたため、どこか不敵に『注文でもなんでもバツチコイヤー!』な顔をしている彼女は、直後、席に忘れたケータイを取りに戻った恐怖の赤ロン毛に水をぶっかけてしまい、泣き崩れた。

大声で泣き出したウェイターを、自分が原因だと気づかず必死に英国紳士な対応で慰めるびしょ濡れステイルを取り残して、烈火たちは店を出た。インデックスのお土産に、お持ち帰り用のケーキも買ってある（ステイルに勝手にツケてきた）。

再び真夏の日光に身を焦がされながら、柳が呟いた。

「三日……か」

ジージーうるさいセミの鳴き声も、すぐ隣のグラウンドで練習している野球少年たちの掛け声も、その一言で音楽プレイヤーの電源を切ったかのように、聞こえなくなった気がした。（三日……）

短すぎる？制限時間リミット？が三人に重くのし掛かる。たったそれだけの時間で、インデックスの記憶を消さずに済む方法を考えなくてはならない。

上条と別れた後も、烈火は考えていた。

（水鏡もダウンしてるし、土門と風子じゃアテになんねえ。母ちゃんがいりやあな……）

烈火の母、陽炎は？不老不死？だった。

その話は、まず烈火が、？ここに来る前にいた世界の人間ですらない？ことから始まる。否、正確にはその世界から400年以上前の時代の人間だった。

彼は、火影忍軍の七代目頭首として生まれ、戦火から逃れるために、時を渡った。

その時、彼を逃がすべく陽炎が使ったのが、『時空流離』。烈火たちをこの世界に導いたのと同じ、火影の秘術だ。

時空流離には、代償があった。それは、術者を不老不死に換える、

『呪い』。陽炎もまた、例外ではなかった。

そうして、彼女は烈火と巡り合うまでの400年を一人で生き続けた。

今はすでに呪いは解けているのだが、それは次の機会に話そう。

ともあれ、陽炎は400もの歳を重ね、それに違わぬ知識を誇る。

単純な知識量なら水鏡をも凌ぐだろう。

その彼女がいれば、今だつて的確なアドバイスを得られたのだろうが……。

「だーっ、もーっ!」

急に頭を抱えて叫び出す烈火。ビツクリした柳が尋ねる。

「どしたの?」

「いんや、無い物ねだりしたつてしゃーねえと思つてよ!あと三日もあんだ。オレたちだけでもなんとかかなんたる!」

この時、烈火はわずかな引っ掛かりを感じていた。それこそが、インデックスを救うための?カギ?だと言ふことに、彼はまだ気づいていない……。

其之貳拾玖：禁書目録？得られし解答（前書き）

テストが（二重の意味で）超終わりました！超久々の更新です！と
ぎんぎらぎんは某空素装甲風に皆様に最新話をお届けします。

……疲れてんのかな？

其之貳拾玖：禁書目録？得られし解答

結局、インデックスを救う方法は何一つ見つからないまま、時は流れた。風子と土門からも案の定何のアイデアも出ず、水鏡も意識を失ったままだ。

七月二十七日午後七時過ぎ、小金井薫の病室を訪れる二人の少女の姿があった。

御坂美琴と佐天涙子。彼女らは、小金井がこの世界で作った友人であつた。

未だに目を覚まさない小金井を、壁に寄りかかつて沈痛な面持ちで見つめる美琴と、丸椅子に座つたまま拳を握つて今にも泣き出しそうな佐天。

烈火は傍らでそんな少女たちと小金井を見守つていた。ついさつきまで柳もいたが、彼女は花瓶の水を替えるため今は退室している。スツ、と美琴が無言で親指を廊下に向ける。烈火はその意味を読み取つて、二人で病室を離れて屋上へと出た。

夏だけあつてこの時間でもまだ日が落ちきつておらず、空は鮮やかなオレンジ色に燃えている。

「あつちいな。オイ、なんか飲むか？」

出入口付近の自販機にコインを投入し、先日敗北を喫したガラナ青汁に再挑戦する烈火。

美琴は僅かに首を振って、

「私ね……」

消え入りそうな声で、ポツリと呟いた。

「最近、借り作ってばっかなのよね。アンタにも、アイツにも、もう一人の？アイツ？にだって……」

代名詞ばかりのその言葉が誰を指すのか、なんとなくわかる。美琴は拳を固く握った。己の弱さを握り潰してしまうかのように。

「……何があった？」

ガラナ青汁を一口飲んで、烈火が尋ねる。事情は知らないが、タダ事でないのはわかる。

「私のせいなのよ。私のチンケな意地のせいで、アイツは、小金井はキズついて、失った……！」

要領を得ない説明。感じ取れるのは、美琴の悔しさ、そして憤り。感情が昂って能力の制御が効かないらしく、前髪からはパチパチと青白い光が瞬いている。

「……ゴメンね。その質問にはこれ以上答えられない。アイツが自分で話してくれるまでは……」

フツ、と光は消滅し、美琴の表情が穏やかになった。どこか虚しく、そして憐く。

「それじゃ、部屋に戻ろっか」

建物の中へ繋がるドアに手をかけ、ドアノブを回そうとすると、

「抱え込むこたねーぞ」

烈火が、そう言った。彼はガラナ青汁を一気に飲み干して、空き缶をゴミ箱に放ると、

「詳しいことは知らねーケド、独りぼっちで考えなくても良いと思うぞ。そーゆー時は誰かに頼る！オレでもカミヤんでも良いからよ。ネガティブになっても何もいいこたねえからな！」

ポジティブの象徴のように、笑って見せる。

美琴もつられて僅かに微笑んだ。

「そうそう！女の子には笑顔が一番ね！」

「ふふっ、アンタ見てたら悩むのがアホらしくなっちゃったわ」

と、そこで美琴は顔を真っ赤に染め上げる。

「って！何で今アイツの名前が出んのよ！？別にアイツはそんなんじゃない……」

ゴニョゴニョ言い訳している美琴を見て、烈火は頭上に疑問符を浮かべた。

「？ イヤ、アイツなら親身になって聞いてくれると思ったんだけど……そんなんって何だよ？」

純粹に疑問をぶつけてくる烈火。自分が墓穴を掘ってしまったことに気づいた美琴は顔をゆでダコのようにして、ケムリを上げた。

「ととと、とにかく！もう抱え込んだりしないから大丈夫よ！」

ブンブン両手を振って強引に誤魔化す。上条ほどではないが鈍感気味な烈火は、急に赤くなってオロオロする美琴にちよっとビビったが、彼女の言葉を聞いて満足気に笑った。

「おう！あんまし頭使つと脳ミソいっぱいになってパンクしちまうぞ」

何気ない一言だった。タダの軽口のもりだったし、美琴もそう受け取った。だからこそ、彼女も軽い気持ちで烈火に言った。

「大丈夫よ。人間の脳ミソって百年以上もメモリー容量あんのよ？」

それが、烈火の脳を揺さぶった。

（百年、以上……？）

腕を組み、頭を回転させる。思い出したのは、二日前に感じた違和感だ。

（あん時も、似たような感じだった。母ちゃんのこと思い出した時、変な感じがした）

神妙な顔で黙りこくった烈火に向けて怪訝な視線を投げ掛ける美琴。

「ちよろつとー？何急に静かになってんのよ？」

（何だ？何が引つ掛かった？）

ともすれば、勘違いともとれるほど些細なものだが、烈火は確かに違和感を覚えていた。母親に関係する言葉を頭に思い浮かべる。

(影法師)

違う。

「ねえ聞いてんの?」

(黒い服)

違う。

「い・つ・ま・で、シカトしてくれちゃうのかな?」

(怒ると怖い、いいトシしてコスプレ好き)

これも違う。

「いい加減にしないと美琴ちゃん怒っちゃうゾ」

(実は四百歳以上)

頭の中に、電流が走った。と、その瞬間

「無視すんなやゴラァァ!」

「ぎゃあああああ!」

バリバリバリバリイ!と烈火の体にまで電流が走った。元凶が誰かなど言うまでもない。

「殺す気かああオノレは!？」

怒号号号号号号!と火山を噴火させるような勢いで怒り狂う黒コゲ烈火。美琴はつーんと口を尖らせて素っ気なく答える。

「無視するアンタが悪いんでしょ？」

「く〜そ〜が〜き〜が〜！」

「いひゃいひゃい(痛い痛い)!ホツペ引つ張んなあ!てゆーか思春期に過剰なボディタッチすんじゃない！」

ジタバタ暴れて魔のホツペ固めから脱出した中二の美琴は、ジンジンする両頬を手で押さえながら尋ねる。

「ムツカシイ顔して何考え込んでたのよ？」

「ツと。そーだった。ワリイけど、オレのツレに伝えといてくれや。『答えが出た』ってな」

そう言つて、落下防止のフェンスに手をかけ、よじ登る。

「別にいいけど……って何してんの?ココ八七階建デスヨ?」

この大学病院はそれなりに大規模で、それなりに階数があつて、それなりに高さがある。……少なくとも、『人が飛び降りたらそれは自殺と言いますセンサー』なぐらいには。

「何ってそりやおめー」

フェンスの頂上に達した烈火は一度美琴を見て、

「ショートカット」

「ストオオオップ!!!」

美琴の静止虚しくピョーンと飛び降りた。

この時、烈火の着弾点には夏休みの自由研究と称してナースの一日を観察しに来ていた青髪ピアスの大男が立っていた。彼が『やつぱりナースはエエなあ。小萌センサーがいつかナースのカッコしてくれたらなあ……。ハッ！自分で言っといてなんやけどコレって無敵の組み合わせちゃうん！？ロリ＋ナースとか土御門クンもきつと大絶賛……。いや、あのシスコン軍曹はメイドにしか興味ないんやつた』とか思いながら何気なく空を見上げると、見知ったウニ頭が降ってきた。

「ぎゃあああああああああ!?!」

落下型ヒロインがストライクゾーンに入る彼でも、流石に落下型ウニ頭はウエストボール同然らしい。

「親方、空からウニ男ごぶふああ!?!」

なにやらステキな遺言を残して、烈火のクッション代わりとなった青髪ピアスは儚く散った。

「おっ、スマン」

ボロ雑巾と化した友人に軽く一言だけ詫びて、烈火は駆け出す。

目指すは、上条とインデックスがいる、そして記憶抹消の儀式場となる予定の小萌宅。

『百年分以上もメモリー容量あんのよ？』

きっかけとなったのは、この一言だった。実際のところ、百年以上も生きられる人間など、ほんの一握りだ。だが、烈火はその希少な例を知っている。

陽炎

不老不死の呪いを受けた、烈火の母親。

？四百年？の時を、彼女は確かに？生きてきた？。

確かに、彼女は完全記憶能力など持っていないから、不要な記憶は忘却できる。

確かに、彼女は少し前まで首を斬っても死なないような体だった。

それでも、その僅かな矛盾点は、烈火を走らせるには十二分の理由だ。

（待ってる上条、インデックス！）

完全に日が落ちて、月がダークブルーに照らす夜の闇を烈火は駆ける。

……彼を待つのは、一つの別れだった。

凍季也、凍季也。

どこからか、呼び声が聞こえる。

凍季也。

懐かしい声。されど、決して忘れることのない声。

水鏡が立っている場所は一面の花畑。少し離れた場所に、純白のワンピースに身を包んだ一人の女性が佇んでいる。

(姉……さん?)

女性は水鏡に背を向けており、彼に気づく様子は全くない。彼は、おぼつかない足取りで歩み始めた。

(姉さん……!)

昔日の思い出が胸に蘇る。これは果たして夢幻なのだろうか。彼はただ、手を伸ばした。触れれば消えてしまう、まるで雪の結晶のようなその思い出に。

女性の肩に、水鏡の手が乗った。女性はゆっくり振り返って、水鏡に顔を見せる。

『ごおんにいちわあ凍〜季〜也〜』

どこのモヒカンゴリラと全く同じその顔を。

とてつもない衝撃が水鏡を覚醒させる。同時に眼前に広がるのは、
つい今しがた夢の中で水鏡にトラウマを植え付けたゴリラ顔。

水鏡の悲鳴と土門の断末魔が病院を揺るがした。

「ととと飛び降りた！アイツがピョーンってコツチにも死体！？」

烈火のヒモなしバンジーを目撃した美琴がそのことを報告に来たのはそれから五分後のことだった。

魔術師は、たくさん情報を提示してくれた。

その情報の一つ一つは、それ単体なら大した意味は持たない。しかし、それら全てが重なったとき、そこには綻びが生じた。

科学の街にすむからこそ、成績が優良とはお世辞にも言えない彼にも気づけたのかもしれない。あるいは、あの狂人がインデックスを狙った理由を推測すればより単純か。

『インデックスの脳が思い出に押し潰されるなんて真つ赤な嘘。彼女を真に苦しめているのは、彼女を手放したくない教会が嵌めた？
首輪にある？』

これが、上条当麻の導き出した解答だった。もちろん、彼一人の力ではない。ついさつき、銭湯へ出掛けようとした小萌に、？人の脳？の仕組みを聞いたからこそ得られた真実だ。

これを？成長？と呼ばずしてなんと呼ぶ。全てを一人で抱え込もう

としていた少年が見せたのは、明確な進歩。

それでも、運命は彼を逃そうとはしない。

上条当麻は？不幸？だ。大小さまざまな災厄を招き続けた彼は、今宵？最悪？の不幸に見舞われる。その事に、彼も気づいていた。

確信ではないが、十五の齡を不幸と共に重ねてきたからこそその悪寒。

少年は、それでも立ち止まりはしない。全てを擲ってでも、この少女を？救う？と決めたから。

『幻想殺し』

全ての異能を打ち消す？異能？が、少女を苦しめ続けた魔の刻印に触れた。

其之参拾：禁書目録？右手が掴む希望（前書き）

活動報告にも書きましたが、諸事情で【其之弍拾伍：戒めの剣】と【其之弍拾漆：仲間】を修正させていただきました。どうか、ご了承ください。

其之参拾：禁書目録？右手が掴む希望

学園都市第七学区にあるとあるビルの屋上で、二人の魔術師は強大な魔力を感じ取った。

「ッ！??コレ?は一体何なんだ!??」

ステイルが叫ぶ。その表情を形作るのは?困惑?と?焦燥?。隣に立つ神裂も同じだ。

「わかりません。が、ただならぬ事態が起きているのは確かです……!」

8・0の視力を誇るその双眼が見据えるのは数キロ先に在るボロアパート。より正確には、そこから発せられている不吉な気配と言っべきか。

「とにかく、一刻も早く向かしましょう。?何か?あったのは明白です。……アレは!」

聖人が、彼方を走るウニ頭の姿を捉えた。

「どうした?」

「……協力者が見つかりました。行きますよ、ステイル!しっかり掴まってください!」

「……待て、何をする気だ?」

顔を引き吊らせてステイルが尋ねる。恐ろしくイヤな予感がしていた彼の心情を知ってか知らずか、神裂は事も無げに答えた。

「飛ぶんですよ」

言うが早いか、神裂はステイルの首根っこを掴んで、百メートル近い高さのビルから？飛び降りる？。

「ぬおわあああああああ！？」

インテリ系不良神父のマヌケな絶叫が、日が落ちたばかりの夏の夜空を震わした。

一瞬の間をおいて、上条はようやく自分がインデックスに弾き飛ばされたことに気づいた。

右手に激痛が走る。見ると、小指が変な方向に折れ曲がっていた。

「くっ……インデックス！」

少女に向かって叫ぶ。今の今まで死んだように眠っていた少女の眼は見開かれ、血のように紅く妖しく煌めいている。

その色は、インデックスの瞳に浮かぶ魔法陣が放つ輝きだ。

直後、インデックスを中心に爆風のような衝撃の波が生まれる。タンスが、テレビが、ちゃぶ台が、それを喰らって叩き壊される。上条の体はもう一度宙を舞い、頭から床に叩きつけられた。

「ぐっ……！」

ふらつく頭を左手で押さえて、上条はインデックスを見据える。

「…… 『首輪』の自己再生は不可能、現状、10万3000冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

なにやら不穏な言葉を紡ぎながらインデックス、否、彼女の体に憑いた？何か？は立ち上がる。袋の中にゼリーでも詰まっているかの如く、不気味な動きでゆっくりと。

インデックスと上条の視線が交差する。彼は、まるで感情が感じられない、人形のようなその目に見覚えがあった。

数日前、瀕死に陥った彼女自身を回復させるべく起動した装置^{システム}。その名は、

「『ヨハネのペン 自動書記』、起動します。」

これこそ、？能力者ではないただの人間？たる彼女が魔力を持たざる理由。つまりは、侵入者を迎撃、抹殺するため、この装置を組み上げることに全ての魔力を注いだ結果だ。

「……………」

インデックスの口が小さく動いて何かを呟く。上条が聞き取れたのはほんの僅か、『聖ジョージの聖域』の部分だけだ。

ピシッ、とガラスを割ったような音をたてて、空間に亀裂が走る。上条は背筋が凍るような感覚に襲われた。

(何か……来る！)

ピシピシと空間は少しずつ、確実に裂けていく。隙間から見え隠れする白光は、明確な死の気配を孕んでいる。

瞬間、？死？が爆ぜた。

太陽を溶かしたような純白の光が、強引に空間を粉碎して上条を消滅させんと迫る。時と場合が違えば美しいとすら感じそうなその光の奔流は、しかし今は上条を？死？へと誘う死神でしかない。異能を打ち消す右手で受け止めようとしますが、

(しまっ……！)

先に負った小指の骨折がそれを阻んだ。

それは、コンマ一秒にも満たない僅かすぎる、されど、？生？の希望を？死？の絶望にすり替えるには十二分のタイムラグ。

死神の鎌が上条の首を刈り取らんとした刹那

「虚空……！」

背後の壁を突き破って飛来する紅蓮の閃光。二つの光は正面から衝突し、互いに相手を食い潰さんと攻めぎあう。行き場を失った破壊の余波が、上条を再び吹き飛ばすべく迫り来るが、彼は今度こそ右手を突きだしそれを消し去った。

「この能力は……！」

「待たせたなあ、カミヤン！」

背後から聞こえる男の声。力強いその声は、この一週間ほどの間に幾度も聞いてきた。その主は、

「花菱烈火……只今推参！」

烈火が、右手をかざして一步前に進んだ。

「ぐぎぎぎぎぎぎ……！」

歯を食い縛って全身に力を込める。腕が、額が、腹が裂け、血液が噴き出した。火竜に過剰な力を注ぎ込んだせいで、それを処理しきれずダメージが体にフィードバックしているのだ。

(なんつー威力だ……！？虚空並かそれ以上だ！)

「オイ固羅神裂イ！なんなんだよこりゃ一体！？」

烈火の言葉に呼応するように、二人の魔術師がアパートの屋根を破壊して、？戦場？へと降り立った。両者とも、その目に驚愕を宿している。

「そ……んな、何故あの子が魔術を！？」

『理解できない』

言外に彼女のそういった心情が伝わってくる。ステイルが叫んだ。

「『ドラゴンブレス竜王の息吹』だ！そいつに人の身で取り合おうなどと考えるな

！」

「『聖ジョージの聖域』は侵入者に対して有効と判断。『首輪』保

護のため侵入者の破壊を継続します」

忠告虚しく、インデックスの冷淡な声と共に、抹殺の光が勢いを増す。

一際大きく血を噴出し、烈火の腕から力が抜ける。

？生者の光？たる紅い炎を蹴散らして、『竜王の息吹』が烈火に迫った。

「　　そういうワケで、記憶のし過ぎで脳がパンクすることなんてあり得ないんだ。わかったかアホ×2」

三日経ってようやく目覚めた水鏡は、脳の仕組みをやっと風子と土門に理解させることができた。所用時間は一時間ほどか。これだけ時間がかかったのも、ことあるごとにアホ二名が『先生、わかりません！』を連発したためだ。

「わかったけどナニもあんな殴らなくてもいいーじゃん！」

「そーだそーだ！風子様のゆう通りだあー！」

頭に巨大なタンコブをこさえた二人が、涙目になりながら抗議してくるが、水鏡はそれを一睨みで黙らせる。そんないつも通りのやり取りを見て、柳もいつも通り苦笑している。土門が水鏡に尋ねる。

「にしてもよオ、みーちゃん。花菱の助太刀しに行かねーでいいんかよ？アイツ今ヤベエかもしんねーんだべ？」

「問題ない……とは言えない」

「ぢゃあさつさと行かねえとイカンだろ！」

「お待ち土門！」

慌てて病室を駆け出そうとした土門を、風子が手で制す。

「アタシらの方にだってヨユウがあるワケぢゃないんだ。だろ、みーちゃん？」

「ああ。情けない話だが、僕もまだマトモに動けないし、小金井だつて眠つたままだ」

敵の力が未知数で、襲撃の心配がある以上は、戦闘要員をこれ以上減らすワケにはいかない。水鏡はそう告げた。

「そんな悠長なこと言ってるバアイかよ！」

「大丈夫だよ、土門くん」

柳が言った。その眼差しに信頼を込めて。

「烈火は強いモン。私信じてるの。烈火は必ず帰って来てくれるつて」

信頼ゆえに、彼女は烈火を心配しない。彼はいつかこう言ってくれたから。

『オレは姫を守る!!』

(柳、やっぱりアンタは強いよ。アタシたちよりよっぽどね。なんせ、アイツが主君に選んだくらいだもんな)

強く微笑む柳を見て、風子はこう思った。彼女はベッドに腰かけて、窓から小萌のアパートの方を眺めた。

(なんも起きなきゃいいケド……)

直後、アパートの辺りから天に向かって射出される白い光を彼女は目撃する。

上条の右手が、『竜王の息吹』を受け止めた。

「おおアアアあああ!」

雄叫びのような声を上げ、彼は右手に力を込める。しかし、光が消滅することはない。

(そうかつ……光の?質?が一粒一粒全部バラバラなんだ!)

インデックスは、10万3000冊の魔道書を使って、10万3000通りの魔術を全て同時に発動している。

つまり、この光は維管束のようなもの。幾千幾万の細かな粒が集ま

つて一本の巨大な束を成しているに過ぎない。一つを消しても新しい一つがそれを補う。その作業が、延々と繰り返されているのだ。

「どういうことなんだ！？何故あの子が魔術を使える！？」

「騙されてたんだよ！」

困惑するステイルに向かって上条は叫んだ。

「考えてみりゃ簡単だったんだ！禁書目録なんて残酷なシステム作りやがった連中が、テメエら下っ端に心優しく真実全部話してくれるワケがなかったんだよ！」

魔術師たちは呆然と、亀裂の先にいるインデックスを見た。

『信じた者に裏切られた』

そのショックで足を止めてしまった二人に、上条はもう一度叫んだ。

「立ち止まってんじゃねえぞ！」

魔術師が、こちらを向いた。

「テメエらはインデックスを救いたいんだろ！？だったら立ち止まってんじゃねえ！一歩でも前に進んで、少しでもインデックスのために働きやがれ！」

それは、自分への戒めでもあった。インデックスが苦しんでいるとき、何一つしてやれなかった自分への。

だが、そんな彼はもういない。仲間が、恩師が、何よりインデック

スを救うと誓った自分自身が、彼を強く育て上げた。
彼はもう一度、もう一度だけ叫んだ。

「手を伸ばせば届くんだ。いい加減に始めようぜ、魔術師！」

小指に再度激痛が走り、彼の右手はとうとう弾き飛ばされる。美しい殺人光線が上条を貫こうとした、その時

「魔女狩りの王！」
イノケンティウス

叫びと共に、ステイルの手元から無数のルーンがまるで吹雪のように飛び交って、壁を天井を埋め尽くす。上条の前に、まるで彼を守るかのように、炎の巨人が生み出された。

「Salvare000！」

今度は女の叫びが聞こえた。神裂が刀を抜くと、そこから七本のワイヤーが地を走り、インデックスの足元の畳を斬り裂いた。突如足場を失った彼女は、そのまま後ろへ倒れ込む。光の柱は巨大な剣のように、下から上へ、進路にあった全てを欠片も残さず引き裂いた。閃光ははるか上空にまで飛んでいく。彼らは知る由もないが、人工衛星を破壊して、宇宙の果てまで。

破壊された残骸が、眩い光の羽と化して雪のように降ってくる。一枚一枚に必殺の威力を込めて。

「行け、上条！！」

烈火が叫ぶより早く、上条の足は動き出していた。全ての異能を打ち消す右手を突き出して。

この右手があつたつて、良いことなんて何一つなかった。

彼は走る。少女の下へ。

ケンカに勝てるワケではない。女の子にモテるワケではない。テストで満点とれるワケではない。だけど、右手は便利だ。

大切な彼女を救うため。

目の前で困ってるヤツに、差し伸べてやれるんだから。

「この世界が、神様アンタの作った奇跡システムの通りに動いてるってんなら

？不幸？な少年は右手を伸ばす。そこにある、？希望？を掴み取るために！

「まずは、その幻想をぶち殺す！！」

少年は、右手を振り下ろす。何か割れるような音と共に、空間に走っていた亀裂が消滅する。

彼はなおも右手を？差し伸べる？。苦しむ彼女に、インデックスに向かつて。

「あああああああ！」

右手が、インデックスの頭に触れた。同時に、光の柱も、魔法陣も、全てが消えた。彼は、インデックスを救ったのだ。

其之参拾：禁書目録？右手が掴む希望（後書き）

次話でやっと禁書編終わりです。……長かった。

其之参拾巻・禁書目録？小さな奇跡（前書き）

インデックスさんに初めてマトモな描写が入ります

其之参拾巻：禁書目録？小さな奇跡

「ふにゃ……ふわーあぁ……」

時刻は午前八時過ぎ、学園都市第七学区のとある大病院で、一人の少女が目を覚ました。別に患者でも病院関係者でもない彼女、御坂美琴にベッドなんてものは用意されておらず、眠っていたのは口ビーにある固いソファの上。

彼女がこんなところで夜を明かした理由は他でもない。今から十時間ちよつと前に担ぎ込まれた、例の？アイツ？が気になったから。その少し前から、花菱烈火の友人数名が騒いでいるとき、ちよくちよく？アイツ？の名前が耳に入った。何事かと思つて、佐天を寮に送つたあとに再び引き返してみると、丁度誰だか知らない女性に担がれて行く？アイツ？と、後を追う花菱烈火にチャライノツポが見えた。

それが気になつて帰るに帰れず、ルームメートの白井黒子に頼んで（『お姉さまが外泊！？ダメですのお姉さま！リアル14歳の母なんて黒子は認めませんのーッ！』とか言つてゴネていたのをムリヤリ説得して）寮監を誤魔化してもらい、人生初の病院お泊まりを敢行したワケだ。

寝起き特有の口内の渴きを感じた美琴は、とりあえずノドを潤すために自販機に向かい、その前で長考。普段はコレを思い切り蹴飛ばして、ランダムに出てくるものを飲んでいるため、選ぶことには慣れていない。

（流石に病院のもの壊すのはアレだしねー……）
とんでもなく素行の悪い彼女にも、スズメの涙くらいの良識はあるらしく、キワモノだらけの品揃えの中、比較的マトモそうな『ヤシの実サイダー』のボタンを押す。が、

「なんじゃこりゃー!？」

太陽に吠える美琴の手には熱々の『いちごおでん』。どうやら回路

がイカれて配列がめちゃくちゃになっているらしい。

クーラーが効いているとはいえ、ノドが渴いている時にこんなモノ飲む気になれず、しょうがないからコレを見舞いの品にすることに
して、美琴は？アイツ？の病室に足を運んだ。

「えーつと確かこちら辺……んっ？」

彼女の目に入ったのは、一足先に目的地に入室する、真っ白い修道服を着た小さなシスターの姿だった。

「とつま」

インデックスは名を呼んだ。視線の先のベッドに座っている少年、全ての異能を打ち消す右手で、インデックスに降りかかった災厄を、神様の奇跡という幻想をぶち殺してくれた、上条当麻の名前を。

上条は、小さく首を傾げて困り顔で言った。

「あなた、病室間違えてませんか？」

「ッ……！」

まるで、赤の他人に電話をかけるような、丁寧で、不審そうで、他人行儀なその声が、インデックスの心を抉る。

つい十分前にカエル顔の名医に聞いた言葉を思い出す。

『あれは記憶喪失というより、記憶破壊だね？思い出を忘れているのではなく物理的に能細胞ごと？破壊？されてるね？あれじゃ思い出すことはまずないと思うよ？』

一字一句違わず、レントゲンの詳細やデスク上のカルテの内容、それにナースの写真集といったオマケまでついて鮮明に。

自分の持つ完全記憶能力をここまで恨めしいと思ったことはなかった。『聞き違いだった』なんて希望的な観測は持てない。目の前に広がるのはどす黒い絶望のみだ。

自分の？せいで？、少年は失った。思い出を、『上条当麻』という人間が今まで生きてきた、その？証？を。

辛すぎる現実が、少女の小さな肩に重く押し掛かる。悲しみの衝動が涙となって零れ落ちそうなのを必死で堪えていると、

「なんつってな、引ーっ掛かったあ！あっはっはーのはーっ！」
少年は、超邪悪な顔で大爆笑していた。

目の前の信じられない光景に、少女は思わずごしごし目をこする。

「あれ？え？とうま？あれ？脳細胞が吹っ飛んで全部忘れたって…

…」

「プププププ… オマエってホント鈍チンなのな！」

挑発的な言動で、インデックスの表情が困惑から怒りへと変化する。少々ムツとするインデックスに、上条は続けて説明する。

「考えてもみるよ。オレの脳ミソのダメージってのも？魔術的な力？なんだろ？だったら簡単だよ。ダメージが届く前に、ためえに向かって幻想殺しをぶち当てちまえばノープロブレムじゃねーか」
インデックスは啞然とした。

ムチャクチャだ。ムチャクチャだが、嬉しかった。少年が無事で、本当に。

しかし、それは同時に、少女の悲痛な決意を彼に告げねばならないということでもある。

今すぐにでも、逃げ出してしまいたい。だが、

（逃げちゃダメ。とうまだって逃げなかったんだもん。私が逃げちゃ、絶対にダメ……！）

全ての気持ちを噛み殺して、飲み込む。少女は出来る限り快活に、明朗に、悲しみなんて微塵もないように、こう告げた。

「本当に、申し訳ありませんでしたッ！」

腹の底から叫びながらリリウムの床に額を擦り付ける武人・神裂火織。あまりの男らしさに、謝罪対象の水鏡始め火影の面々はたじろいでいる。

「お……おいおい。何もそこまでしねーでも」

「いえっ！私の気がすみません！！」土門が宥めようとするが、神裂は頑なにそれを拒否する。

椅子に座ってふんぞり返っているスタイルがタバコを吹かしながら

つまらなそうに言った。

「こんなヤツらにそこまでする必要はないさ、神裂」

「テメーはもうちよい申し訳なさそうにしるやあ!!」

「落ち着け風子オオオ!!」

あまりに傍若無人な態度にキレた風子が赤ロン毛に襲いかかること
するのを、烈火が必死でホールドして食い止める。

柳が苦笑しながら言った。

「神裂さんもステイルくんも、そんなに気にしないでいいですよ？」

「少なくともそっちの赤いのは全く気にしてねーけどな。ってか柳
が年上にくん付けて珍しーな」

烈火がステイルを睨みながらそう言った。

それなりに付き合いの長い水鏡ですら呼称は『水鏡先輩』だ。水鏡
がステイルをちよっぴり羨ましそうに見ていると、柳は首を傾げて
当たり前のように言っただけのける。

「ほえ？だつてステイルくんって年下でしょ？」

「……ハ？」「……」

四人分の、『何言ってるの？』的な声が重なる。

「おや、よくわかったね」

まさかのまさか、ステイルからの肯定の返事に、四人はさらにギョ
ツとする。

「異議あり!!」

「ハイ、ハナビチくん!!」

ズビシイ！と烈火が右手を勢いよく挙げ、土門が指名する。

「オレより年下のヤツが土門よりデカイわけねえ！テメーはいくつ
だ!？」

「14歳だが？」

「信じられつかあ!!」

「グハア!？」

素直に答えたステイルは、烈火と土門の理不尽なWパンチで吹っ飛
んだ。

「ぢやあナニか!? テメーはカオリンと同年だつてののか!？」

「あうあうあうあう」

ノックアウトされたステイルの胸ぐらを掴んで頭をグワングワン揺さぶる烈火。

「あーっ、ダメだよ年下イヂメちゃ!」

「くっ、そうだもつと言つてやれ! バーカバーカ!」

見兼ねた柳が助け船を出すと、ステイルはその陰に隠れて後ろから烈火たちを罵倒する。その姿は強気な女の子にガキ大将から守ってもらうイジメられっ子そのもの。

この場に立ち会つた知り合いが神裂でなければ、失笑を買っていただろう。

もちろん烈火たちが黙っているワケもなく、ステイルは柳の後ろからムリヤリ引つ張り出されて三人から総攻撃を受けた。

「ハア……」

よく見慣れた光景に、水鏡は軽く頭痛を覚える。日常茶飯事とは言え、鬱陶しいことに変わりはない。いつそ凍らせてやろうか、と閻水を構えると

「フフ……」

神裂が笑いを漏らした。

「どうした?」

「いえ、あなた方は本当に不思議だと思ひましてね。ステイルがそんなに楽しそうにしているのは久しぶりに見ましたよ」

件の赤ロン毛に目をやると、風子のキヤメルクラッチを受けている真っ最中だった。

「……君はMか?」

「なっ!? 違いますよ! そういうことじゃありません!」

神裂は顔を真っ赤にしながら両手を振つて否定する。からかい甲斐がありそうだとドSな水鏡が思っていると、神裂は落ち着きを取り戻して言った。

「アレは、ずっとあの子のために奔走していました。自分を殺して、

他人を殺して。ステイルがあの子の前以外であれだけ自分をさらけ出すのを見たことがあります。あなたたちが、ステイルも、そして私も変えたんですよ。？信頼？という絆で」

「恥ずかしげもなく放たれたセリフを、水鏡は軽く鼻で笑って否定する。

「そんなにいいものじゃないさ。言っただろう？火影はみんなバカなんだ。バカだから、他人を疑えるほどの頭がない。それだけのことだよ」

言いながらも、水鏡の顔は優しくかった。神裂との決着がついた時と同じ表情だ。

神裂の脳裏に、幾人かの顔が浮かんで来る。それらは皆、過去に彼女が見捨てた？仲間？のものだ。

（私はもう二度と、彼らと共に歩むことは出来ない……。この聖人の力がある限りは……）

「オイ、神裂。なんだ？」

急に押し黙った神裂の顔を、水鏡が覗き込む。「な、なんでもありません！」

彼女は慌てて目を反らす。と、壁に掛けられたアナログ時計が目に入る。時刻は既に八時半を回っていた。未だサンドバッグ状態のステイルを呼ぶ。

「ステイル、そろそろ時間では？」

「そうか……わかった」

「ん？どっか行くのか？」

急にシリアスな調子になったステイルを見て、烈火たちも攻撃の手を止める。大男は服についたホコリを払いながら立ち上がると、

「あの子をイギリスに連れていく」

鬨りのある面持ちでそう言った。

「私、イギリスに帰るからね」

明るく笑って、なるべく軽い感じを装って、少女は別れの宣告をし

た。

「へっ？」

意外すぎる告白に、上条は目を丸くしている。二の句を継ごうとするが、口がパクパク動くだけで、声が出ない。

インデックスは腰に手を当てて、人差し指を立てながら、悲しみを表に出さないようにして

「とうまは弱っちいんだもん。とうまなんかじゃ魔道書図書館たる私を守るには役者不足かも！だから私はイギリスでもっと強い人に守ってもらうんだよ！」

そう、上条は弱いのだ。せいぜいが、不良の一人二人を相手にするのがやつとの力。

ガラス細工のようなものだ。どこまでも美しいその心も、叩けば粉々に砕けてしまう脆い体でできたもの。

自分のような存在が側にいれば、彼はいつか破滅する。だから、彼女は別れを選んだ。

「だから、とうまは心配しなくていいんだよ？おバカなんだから勉強でもして、夏休みなんだから友達と遊んで、それで、それで……私のことなんて忘れちゃえばいいんだよ……！」

インデックスの声は、震えていた。自分で言ったことなのに、堪らなく恐ろしい。彼が、今年の記憶しかない自分を初めて受け入れてくれた存在が、自分のことを忘れてしまうのが。

少女の目から一筋の涙が零れそうになった時、

「インデックス」

少年が、優しく彼女の？名を呼んだ？。

「ナニ感極まってるんだよ？イギリスなんて、飛行機で十時間も飛ばば着く距離じゃねーか！会いたくなったらまたいつでも会えるんだ。だから、行ってこい！……オレ、絶対に？忘れない？から」

少女は俯いてプルプルと震えると、何も言わずに背を向けて、乱暴にドアを開いて病室を飛び出した。

「によわっ！？危ないじゃない！！」

右に曲がると、ドアの横に立っていた短髪の少女とぶつかりそうになったが、インデックスは気づかずには駆ける。

彼女は何度も呟いた。

「とうまのバカ、とうまのバカ、とうまのバカバカバカ！」

どこまでも鈍感な少年への文句、そして、

「……大好きだよ、とうま」

本当の気持ちを。

「何よ。ハツパかけてやるーかと思ったのに。こんな空気じゃ入るに入れないじゃない……」

短髪の少女は、ポツリとぼやいた。

「？忘れない？、か……」

今さっき少女に告げた言葉を、もう一度繰り返す。反吐が出そうだが自分の言ったことは全て真つ赤な嘘。幻想殺しで記憶が蘇るワケもなく、彼は少女の顔さえも覚えていなかった。

今の自分の行いは、冷酷で、非情で、もし嘘がバレた時、少女を余計に傷つけるものでしかない。

思い出を司るエピソード記憶とは違い、傷一つない、知識を司る意味記憶が思い出させたのは、『お年寄りに親切に振る舞って、後からお金を騙し盗る』、そんな類いの詐欺のこと。

最低だ。心からそう思う。だが、自分の嘘も程度は同じだ。

それでも、彼は嘘を貫くことを決めた。彼女の笑顔を守るためなら、自分は？偽善使い？で構わない。それが、記憶を失う前の『上条当麻』の願いだ。なぜだか、確信できた。

「あれ？」

そう言えば、と少年は先ほど己が放った不可思議な一言を思い出す。少女は一度も名乗っていない。それなのに、自分は確かにこう言った。

『インデックス』

意識は全くしていない。まるで呼吸をするように自然な感覚で、彼は彼女の名を呼んでいた。

それは、どこまでも不幸で、どこまでも真つ直ぐな少年に神様が与えた、ほんの小さな奇跡だったのかもしれない。

其之参拾巻：禁書目録？小さな奇跡（後書き）

原作ないしアニメ見てない人には優しくない話ですね。ごめんなさい m (((m

一応これで禁書編はいったん終わりです。烈火と上条さんのやり取りとか書こうかと思ったんですが、しばらく持ち越しとなりました。

紅麗&小金井ファンの皆様お待たせシマウマ！次からやつと紅麗様が出ます！と言いたいところですが、今回は悪役サイドの話を書こうと思います！今までほとんど出てませんからね。

其之参拾貳・裏側（前書き）

メリークリスマス！……だというのに、今回はグロイです。文章力がないので大丈夫かもしれないませんが一応ご注意を。

其之参拾貳：裏側

時は二週間ほど遡り、七月十六日午後九時過ぎ。

学園都市の外れにあるとある研究所。その中に、苛立った様子の一人の老人が立っていた。

彼の周りにはいくつもの巨大なビーカーがそびえており、それら全ては、一つの巨大な装置と大量のケーブルによって繋がれていた。まるで、心臓から伸びた血管が身体中の臓腑と繋がっているように。

「くっ！何故じゃ！何故上手くいかん！」

老人は怒りのままに、目の前にあったビーカーの一つに拳を叩きつける。欲にまみれたその眼が映すのは、ビーカーに漂う異形の生物……いや、『生物』ではない。それは、老人の身体から一部を抽出した、『天堂地獄』の細胞が成長したものだ。

老人の名は幻獣朗。烈火たち七人をこの世界に誘った張本人だ。

彼は前の世界で、麗十神衆の一人である音遠に殺された。音遠も、コマ切れにされた彼自身もそう？思っていた？。

だが、彼は蘇った。そうさせたのは、彼が裏武闘殺陣で烈火に斬られた左腕の代わりに埋め込まれた、天堂地獄の細胞だ。

それこそが、破壊された天堂地獄の本体に宿る二つの魂、森光蘭そして海魔の掛けた？保険？であった。

ヘル・オア・ヘレン
H o r hでの火影との最終決戦の際、火影の猛攻を受けて多大なダメージを受けた天堂地獄はこう言った。

『ここに存在する数多の分身体は戦力とは考えていない！全て本体復原の為の予備電源にすぎぬのだ！』

それは何も、その場にいた分身体のみを指した言葉ではない。天堂地獄の細胞を持つ幻獣朗、そしてSODOMの各所に散らばっていたゾンビたちをも含めていた。

それはつまり、万が一本体が破壊された時の？保険？。

そして、天堂地獄の思惑通り、幻獣朗は蘇った。その狙いは一つ。

『強大な力を以て、世界を手中に入れること』

絵に描いたような悪人の望み。しかし、これは絶大な力を持った者が辿り着く、必然の願いとも言える。

もちろん、今のままでその悲願を達成することはできない。全てのゾンビを結集したとて、その力は本体の1%にも満たない。だから、彼は仲間を集め、火影という目の上のタンコブがない世界に逃れ、そこにある一つの？力？を欲した。

だが、全てが思い通りには行かなかった。

彼が時空流離で現れたのは、学園都市の中だった。

その街は絶えず衛星で監視されており、侵入者を逃すことはない。ご多分に漏れず、幻獣朗もすぐに捕捉され、兵隊が送り込まれる。

垣根帝督と名乗るその男は、強かった。

天堂地獄にすら匹敵しそうなほどの力は、当時の幻獣朗では手も足も出ないモノだ。聞けば、学園都市で第二位の強さだと言う。さらなる強さを持つ『第一位』に戦きながら、幻獣朗は素直に投降し、『窓のないビル』へと連れて行かれた。

そこにいたのは、大人にも子供にも、男にも女にも、聖人にも囚人にも見える？人間？アレイスター「クローリー」。

ちようど、今幻獣朗の目の前にあるようなビーカーに逆さに浮かんだ？人間？は、幻獣朗に幾つか問うた。その全てに、幻獣朗は正直に答えた。否、答えざるを得なかった。アレイスターの放つ威圧感のせいだ。

上っ面では対等を装ったが、結局彼は明らかな不平等条約を結ばされる羽目になった。

今思い出してもハラワタが煮え繰り返る。だが、これから先に行動する為の先行投資と取れなくもない。

現に、学園都市にいる間の身の安全も約束されたし、なかなか大規模な研究施設も提供された。

火影に魔導具を渡すリスクを負ったが、リターンもそれなりに大きい。

そしてその研究所で、彼は今、？力？を手に入れるための計画の一つを進行している……のだが、目下その計画は停滞中。幻獣朗は苛立ちを募らせるばかりだ。この街で雇った研究員たちも、飛び火を恐れて距離をとっている。

と、そんな彼に声をかける者があった。

「落ち着きたまえよ幻獣朗」

「……幻生か。何をしておる？貴様には別の仕事を与えておったはずじゃ」

「何、少々手が空いたから助言を授けに来ただけだよ」

幻生と呼ばれた老人は、ビーカーの一つを眺めながら答える。

「助言じゃと？ふん、見くびるなよ。儂は長きに渡って魔導具を研究し続けた。今さら貴様に訊くようなことなぞ残っておらんわ！」

僅かばかり張り上がった声に研究員たちは畏縮するが、幻生は顔色一つ変えないで言った。

「ああ、いけない、いけない。過去の歴史を紐解いてみると、科学の進歩に素人の何気ない一言はかなり重要なスパイスを与えて来たものだ。君も科学に携わる者ならそんな経験はないかね、幻獣朗？」

「……」

なるほど、一理ある。それにこの男はこの街でも十指に入る優秀な科学者だ。現在は一線から退いたようだが、良いきっかけにはなるかも知れない。

「わかった、話してみる」

その一言に幻生は怪しく口を歪めると、

「AIM拡散力場、というものを知っているかね？」

「確か能力者が発しておる磁場のようなものじゃったな？それがどうした」

「今はまだなんとも言えないがね。君の仲間、永井君だったかな？彼に頼んで、私の知る優秀な科学者と接触してもらった。その科学者が結果をもたらしてくれるハズだよ」

「腑に落ちんな」

疑惑を浮かべて、幻獣朗は幻生を睨み付ける。

「何故貴様が直接会わんのじゃ？」

答えは、馬鹿らしいと言わんばかりの含み笑いだ。

「『知り合いだから仲が良い』。そんなに単純なものじゃないのはわかるだろう？心配はいらぬよ。彼女は実直な人間だ。大切な生徒のためなら周りが全く見えなくなるくらいね」

幻生が言わんとしていることは理解した。非常に悪どい、しかしかなり効率的な方法だ。

幻獣朗は己の口角が思わずつり上がるのを感じた。

「ククク……まあ良い。手段は主に任せよう」

「ご期待に添えるように善処させていただきます。……フム、ところで」

幻生は顎に手をあて、思い付いたように尋ねる。

「？例の場所？の方は大丈夫なのかい？統括理事会が『ハウンドドッグ 獵犬部隊』を差し向けたそうだが？」

「問題はない。？ヤツ？は他の四人と比べてかなり扱い易い。ちょうどいい？エサ獲物？じゃよ」

今思えば、本来学園都市内の？掃除？を行う自分たちが外部の仕事
を任せられたのがおかしかった。
その時は、上層部の命令だったということもあり、『いつもより多
めのギヤラがもらえる』ぐらいの軽い気持ちで依頼を受けた。それ
が全ての歯車を狂わせた。

言われた通りにこの場所までやって来た彼女たちを待ち受けていた
のは、3m弱もの図体の？ケモノ？だった。髪は逆立ち、ラグビー
ボールのような形の仮面をつけ、手にはバットの芯ほどの太さの槍
を持ったその？ケモノ？は、手始めに、先を行っていた同僚を一人
血祭りにあげた。

その時に実力差に気づいてさえいれば、彼らもここまでの害を被る
ことはなかったかもしれない。

目の前で仲間（と言っても事務的なもの）を殺された猟犬部隊は、
その巨大な？ケモノ？を敵と見なし、一斉射撃を行った。

これで終わる。誰もがそう思った。

だが、？ケモノ？は地面を蹴って、凄まじい速度でナンシーのすぐ
隣にいた男の腹を押し潰した。

ブピュツ、という、腹を下した時の排便のような音がした。それが、
腹にとてつもない力を受けた男が、口と肛門から内臓を吐き散らし
た音だと言うことに部隊の面々が気づくには、二、三秒の時間を
要した。

誰かの悲鳴と共に発砲音が響くと、それが大虐殺の引き金となった。
ある者は、その巨大な掌で頭をトマトのように握り潰され、またあ
る者は、顎関節ごと下顎をひっぺがされた。共通点は一つ。皆、？
殺された？。

？ケモノ？は現在、逃げ仰せた同僚たちを追っており、腰を抜かして逃げることに出来なかったナンシーは、這いずって木やブッシュで覆われた場所まで移動した。

脳裏をよぎるのは、視神経ごと抉り出された目玉や、飛び散った鮮やかなピンク色の脳漿。

身の毛がよだつような感覚がナンシーを襲う。猛烈な吐き気が込み上げてきた。彼方から聴こえる耳をつんざく叫び声は、？ケモノ？に捕獲された哀れな同僚の断末魔だろうか。

彼女はこれでも、こんなことには慣れていた。学園都市の機密を洩らそうとした輩を拷問にかけた時など、今より遥かに凄惨だったし、吐き気など少しもなかった。

狩るものと狩られるもの。立場が変わるだけで、物の見方は全く違うものへと変貌を遂げる。

イジメツ子とイジメられっ子では、行動の重みが全く違うのに似ているのかもしれない。

ゲームの画面に映っているゾンビだって、明日は我が身と考えれば目も合わせたくない。今の彼女はそんな心境だった。

彼女に出来るのはたった一つ。ロクに信じてもない神に、ただひたすら祈り続けるだけ。

ガサツ、と草根を踏み分ける音と、何か重いものを引き摺る音が耳に入る。心臓の鼓動が激しくなると共に、歯がガチガチと震え出す。音をたてまいと歯と歯の間に指を三本突っ込んで、ナンシーは全身全霊を？ケモノ？の一挙手一投足の注意に向けた。

？ケモノ？はスンスンと鼻を鳴らし、当たりの匂いを嗅ぎ回っている。しかし、いくら鼻がよくても死臭だらけのこの場所で人の匂いを嗅ぎ分けるのは困難を極める。

其之参拾貳・裏側（後書き）

次回は平和です。

其之参拾参・日常は非日常（前書き）

ほのぼの書こうと思ってたのに……またしても後半がダーティな感じに。紅麗をほんわかさせられない！

其之参拾参：日常は非日常

学園都市　その名の通り学生の街であるこの都市においても、学校の優劣は存在する。

『名門』と呼ばれる学校にもいくつか種類があり、例えば長点上機学園は一芸に秀でてさえいけば高位能力者でなくとも十分やっていけるし、例えば霧ヶ丘女学院はイレギュラー的な能力者開発のエキスパートである。そして、LEVEL5の御坂美琴や風紀委員の白井黒子が在籍する常盤台中学は、その二校と肩を並べるほど優秀な、世界有数のお嬢様学校として知られている。

『義務教育終了までに世界に通じる人材を育成する』が基本方針で、さらには全校生徒の能力レベルを総合すると生身でホワイトハウスを攻略出来るとまで噂される、まさに文武両道のトンデモエリート学校だ。

生徒がそれだけ優秀となれば、教師にも相応の能力が求められるワケで、？地元ではそこそこ有名な国立大出身？は愚か、下手をすれば日本国内の大学では経歴として認められないと言われるほどだ。と、そんな内部事情を知っているために、本日七月十七日、僅か二十歳の若さで常盤台の特別講師となった小金井紅麗なる男を、美琴はイマイチ信用出来なかった。

「だいたい、仮にも教師みたいなモンだっつーんならグラサンなんてしてんじゃねーっつーの！ぬわにが『見られたくないものがあるのでご容赦願いたい』よ！キザったらしいたらありゃしない！」

クーラーガンガンのファミレスで、今日の一限で早速あつた紅麗の担当である日本史の授業を思い出しながら後輩の白井黒子に愚痴をこぼす。その時グラスを乱暴にテーブルに置いた仕草が、たくさん

ある彼女のお嬢様らしくない部分の一つだろう。黒子は黒子で悦に入りながら、

「ああ、黒子はバカでした。お姉さまがエロスなオトナのオトコの魅力にやられてしまわないかと疑っていましたの。お姉さま！この不忠な黒子をどうかお殴りくださいませ！」

「なにセリヌンティウスみたいなこと言ってるのよアンタは。っーかその恍惚の表情からは反省が一切うかがえないんだけど」

「ああ、放置プレイ！放置プレイですよのね！？憎すぎますわお姉さま！黒子のことをここまで理解してくださいななんて！やっぱりお姉さまには黒子しかいなかったんですのねええっ！！！」

「あーもー、わかったわかった。暑苦しいからベタベタ引っ付くなくてゆーか私、ああゆうスカしたヤツ苦手なのよね」

相も変わらぬ黒子の予想通り過ぎる反応に、ツツこむことも億劫になった美琴は、彼女を引き剥がしながら答える。すると、黒子は真面目な顔で少々以上のため息をついた。

「はあ、だからといって、最近よくお話しになる殿方のような男性もどうかと思いますわよ？大体お姉さまは常盤台のエースとしての自覚を「あーあー！わかったわかった！ったく、二言目にはエースの品格がどーのこーのって。アンタは私のママか！！！」

またしてもテンプレ通りな返答に辟易した美琴は強引に話を中断させてコメカミに手を当てると、ふと思い出したように尋ねた。

「あ、そうそうー！今日プールからスッゴい音がしたの聞こえた！？」

「ええ。聞こえてましたけど。クラスメートの湾内さんや泡浮さんが『プールが壊れてしばらく練習が出来ない』と言って残念がってましたわ。てっきり昨日の測定にミスでもあって、お姉さまが測り直してるのかと思っただんですけど……」

そんな答えにチツチツ、と人差し指を振って見せると、美琴は怪しく笑ってこう言った。

「それが違うのよねえ〜！なんと！プールを壊したヤツの正体は昨日のウニ頭発火能力者だったのよ！」

ウニ頭、発火能力者。黒子の脳内で二つの検索ワードから一人の少年が導き出される。

『女の子に手エ出してんじゃねーぞ固羅！！』

(……あの殿方ですね)

昨日、銀行強盗退治の助っ人となってくれ、その後自分の事情聴取を受けた高校生くらいの男。名は確か、

「花菱烈火……でしたかしら？」

LEVEL3で自分と同じ発火能力者を正面から打ち破り、なおかつプールを大破させた美琴以上の一撃。

単純に考えてもLEVEL3かLEVEL4。あるいは

「アイツ、『LEVEL5』になるかも知れないわよ？」

LEVEL 5。

生身で軍隊と渡り合える証明であるその称号を口にした美琴の顔は、どこか嬉しそうだった。

体を内側から振動させるようなチャイムの大音響を背に受けて、小金井薫は本日付で新たな母校となった柵川中学の校舎を後にした。
？着られている？感が拭えない制服姿の少年は、まるでお気に入りのおモチヤをくわえた猫のように、飛び上がりそうな勢いで機嫌良く歩いている。

（やっぱり学校は楽しいーなー）

昨今の学生としてはかなり特異な感想を彼が心で述べたのも無理はない。なんせ、彼が少し前まで住んでいたのは天正十年、俗に言う戦国時代。学校など存在するはずもない。平成で暮らしていた時だって、花菱家に居候していたほんの僅かな間しか通っていない。
彼にとつて、同年代の人間と喋ったり遊んだりすることは、同い年の他人と比べて極めて珍しい体験であった。

（そう言えば、ヒロヤたち元気かなあ……）

老け顔のヤンキー中学生や、そんな彼を一途に想う小金井親衛隊長の顔が浮かんでくる。小金井に学校の楽しさを教えてくれたのは彼らだった。

もう二度と会えない友人たちに思いを馳せる小金井が、少しだけし

んみりしたまま正門の外へ踏み出そうとしたその時

「カオルせ・ん・ぱーい！」

魅惑的な呼び声と共に小金井の背中を結構な衝撃が襲い、体重の軽い彼は軽々吹っ飛ばされて額を電柱に思いつきりぶつけた。

「ありや……やり過ぎちった。テヘツ」

「テヘツ じゃありませんよ佐天さん！先輩、大丈夫ですか！？」

「ヒドイよ……涙子ちゃんと飾利ちゃん……」

涙目の小金井が巨大なタンコブを両手で押さえながら振り向くと、片目を閉じて可愛らしく舌を出した黒いロングヘアの少女と、隣でオロオロしている頭に花瓶のような飾りをつけた少女が立っていた。

「わ、私は止めましたよ！？佐天さんが勝手に……」

「オヤオヤ？初春だって面白そうだーって言ってたじゃん」

「言ってますせん！一秒たりとも思ってますらいません！」

黒髪ロングの佐天と花瓶少女・初春が口論を始めると、小金井は口を尖らせて抗議する。

「オレのことオモチャにしないでよーっ！！」

両手を振り上げて怒る姿は小動物のような可愛らしさがあり、ちっとも怖くない。実際、過去にはモヒカンのサイボーグオカマにスト

ーキングされたというトラウマ級の経験もある。

プンスカと擬音が聞こえて来そうな小金井の頭に手をのせて、佐天はエヘヘと笑うと、今度は心をエグる一言を放った。

「まあまあ！細かいコト気にしてたら背が伸びませんよー？」

「ぬぐッ!？」

コンプレックスを刺激されたチビっ子はショック顔で硬直する。

「だ、大丈夫ですよ！薫先輩はちっさいままでもカワイイですよ？もう！佐天さんもキチンと謝らないとダメじゃないですか！」

初春が佐天を叱責しつつ、小金井をフォローする。が、それはフォローとして機能せず、小金井のキズをより大きくした。とうとう小金井は体育座りでイジけだす。

「どうせオレはチビだもん……」

「あーあスネた。初春のせいでー」

佐天が意地悪く言うと、初春はアタフタしながら必死で弁明を試みる。

「え、えーと、ほら！バスとか電車にも子供料金で乗れちゃうじゃないですか！ウワアウラヤマシィー」

氣イ使ってるのが全面に押し出されたフォローは、仲間たちから小学生呼ばわりされ続けた14歳の少年にトドメを与えた。

土御門元春は、第七学区のとある大型倉庫に足を運んだ。ドラマなんかで怪しげな薬の取り引きにでも使われそうなその倉庫は、『スキルアウト』と呼ばれるゴロツキの無能力者集団の溜まり場となっており、つい一時間前に？新人？の研修先として選ばれた場所だった。

「さて、期待の新人のお手並み拝見といこうか」

まるで、ドラフト一位の高卒ルーキーの球でも拝みに行く野球ファンのように軽い口調で独白する。これから向かうのが血生臭い『殺し』の舞台だというのに、だ。途中の自販機で購入した『スープカレー』を飲み干した頃に、彼は目的地に到着した。

巨大な引き戸は開きつぱなしで、中からは光、熱気、そして生臭いような焦げ臭いような何とも言い難い悪臭が漏れている。だが、土御門は若干顔をしかめただけで、鼻を摘まむこともしない。彼もこの匂いは嗅ぎ慣れていた。

無遠慮に倉庫の中に踏み込んで見たものは、凄惨な光景だった。赤黒い染みがあちこちに飛び散っており、そこら辺に積んであるドラム缶や木箱には破壊の爪痕が生々しく残っていた。極めつけは、薄暗い倉庫を照らしている明かりの火種となったモノ。かつては人間だった肉の塊が、松明のように轟轟と燃え盛っている。

しかし、それら全てを引つくるめても比べ物にならないような？存在感？が倉庫の中央に佇んでいた。

漆黒の衣を身に纏い、邪悪な仮面を装着した長髪の男、暗殺集団麗

の元首領・紅麗だ。殺気、怒気、覇気、もろもろのオーラとも怨念ともつかぬモノを体から漂わせながら、男は土御門に背を向けたまま声を発する。

「……土御門か。遅かったな」

首一つ動かさずに自分の名を呼んでみせた紅麗に少々ばかりの畏怖を抱きながら、しかしそんなことはおくびにも出さずに土御門はポーカーフェイスで言った。

「流石にアレイスターが目をつけただけはあるな。仕事が早いとは聞いていたが、まさかコレほどまでとはな」

心底感服した様子で土御門は両手を挙げる。紅麗はつまらなそうに返した。

「フン、わざわざ私を呼び出してまでやらせた仕事が小バエの退治か。随分と安く見られたものだな？」

土御門はたくさんある木箱のうち一つを漁りながら苦笑する。

「そう言うな。これは次に頼む大仕事のためのウォームアップだと思ってくれればいい。それに、コイツらだってなかなかの人間落伍者だぞ？強盗強姦は日常茶飯事、クスリの横流しもしてるし、小学生を殺したヤツだっている。クズの相手はクズがすべきだとは思わないか？」

オレも人のことは言えないがね、と付け加えて金髪の男は箱から何かを取り出した。それはソフトボールほどの大きさの珠で、『紙』と大きく書かれている。

「おっ、魔導具ゲットだぜ！そうそう、コイツらだけじゃないが、

何でもスキルアウト共に魔導具がいくらか出回っているらしい。心当たりは？」

答えるまでもないその質問に、紅麗は律儀に返答した。

「十中八九、幻獣朗だ。狙いはおそらく、学園都市の混乱といったところか？」

パチパチと、土御門は白々しい拍手をしてから、

「確かに、普通ならそい考えるだろうな。だが、いくら何でも普通過ぎやしないか？」

「……何が言いたい？」

「例えばの話だが、こんなのはどうだ？魔導具の流出はタダのフェイント。本命はさらに大きな計画にある」

例えと言う割りには、土御門の顔は確信に満ちている。というより、それ以外は考えられない？、と言った感じだ。土御門は尋ねた。

「レベルアップ幻想御手って知ってるか？」

其之参拾参・日常は非日常（後書き）

とりあえず年内更新はこれがラストです。

年末で皆さん忙しいのか、単純に話がつまらないのか、PV少ないわポイントがやたら減るわで大ショックです。

それでは皆さん良いお年を〜！

其之参拾肆・葛藤（前書き）

すいません、時間かかったわりに短いです……

其之參拾肆：葛藤

「それでねそれでね！迷子になってたオレを涙子ちゃんと飾利ちゃん
んが学校に案内してくれて」

「そうか。良かったな」

午後九時過ぎ、第八学区のとある教員寮の一室で座卓を囲みながら、
紅麗と薫兄弟は遅めの夕食を摂っていた。

ちなみにメニューは全て時間を持て余した小金井が作ったもので、
お世辞にも美味しいとは言えない。だがそこまで不味いワケでもな
いので、会話の肴としてチビチビと口に運んでいる次第だ。

「あとねあとね！風がびゅーん！で炎がバーン！で」

「そうか。良かったな」会話と言うのは名ばかりで、実質的に喋っ
ているのは八割方小金井のみ。紅麗は時折適当な相槌を打つことに
止まっている。

もともと、この壮年夫婦を思わせるやり取りが、彼らのいつも通り
の姿だったりする。基本的に寡黙な紅麗と生まれつきお喋りな小金
井の会話では、どちらが主導権を握るかなど、一桁の足し算より簡
単に解ること。初めて会った時から、二人の会話はずっと？こう？
だった。

「あつ、そうそう！それと今日はシステムスキャン身体検査っていうのがあって

「ああ、そう言えば」

身体検査という単語に、紅麗は今までと違う反応を見せる。珍しく
義兄が話し始めたので、小金井もマシニングトークを中断して話に
食いつく。

「今日うちの学校に火影の連中が来ていた」

「ええっ！？なんでなんで！？」

思わぬ一言に、紅麗が予想していた以上に驚く小金井。

紅麗は食事を終えて皿を重ねながら答えた。

「高位能力者である可能性が高いから設備のよい常盤台に測定に来たんだそうだ。烈火の担任だという教師が教えてくれた」
小学生にしか見えない超ロリっ子教師を思い浮かべながら語る。本当にアレはなんだったのか……。

彼がこの街の都市伝説の一角である謎の不老女について頭を悩ませていると、小金井が口を尖らせながら、彼にしてはやや沈んだ声で言った。

「みんなLEVEL4とかになるのか……。いいなあ……」

他の五人は自分の能力や魔導具で、この街の『超能力』を模倣しているが、生憎と？パズルタイプのタダの武器？でしかない鋼金暗器でそんなマネが出来るはずもない。結果、彼の診断は『LEVEL0』。能力開発をしていないので当たり前ではあるのだが。

ただ、あの柳や土門ですら高位能力者である可能性が高いのに、自分一人だけ無能力者というのは非常に寂しい。

「我々はいつかアレイスターに下剋上を起こそうという身だ。LEVELの高さなど、大した問題でもないだろう。もともと、お前がずっとこの街で暮らすと言うなら話は別だがな」

笑いながらからかうように言ったが、紅麗の中でその言葉は半ば以上の本気だった。

小金井はその事に気づいた様子もなく、

「ぶー、意地悪……」

「意地悪で結構だ。さっさと食え」

頬を膨らませながら机に突っ伏す小金井をバツサリ切り捨てて、紅麗は座卓の側に落ちていたテレビのリモコンに手を伸ばし、赤い電源ボタンに指をかける。上手い具合に希望のチャンネルに合わされていたテレビの中では、スーツを来た男が巨大なモニターの前に座って機械的な口調で書類を読み上げる。

「それでは、次のニュースです。本日、学園都市に新たなLEVEL5が誕生しました」

画面の下端に質素な白いテロップで「新しい超能力者は発火能力者

「!?」とデカデカ書かれている。「ねえ、これってもしかしくなくても……?」

「あのバカだろうな」

口と目を大きく開く小金井とは正反対に、紅麗は仏頂面でつまらなそうに呟いた。

ニユースはまだ続いており、キャスターはさらに四人のLEVEL 4が生まれたことも告げ、学園都市への侵入者の話題に移った。

「あんなに目立って大丈夫なのかなあ?」

小金井が不安げな声を漏らした。

彼が懸念しているのは、『あまり飛んだり跳ねたりすると、幻獣朗に狙われやすくなるのではないか』ということだ。

「心配はないだろう。我々の素性さえ周りにバレなければ、幻獣朗もこちらに手出しは出来ない。ここは敵地のご真ん中だから……迂闊なことをすれば、危ないのはあちらだ」

一応、安保条約のようなものはあるらしいが、それもあつてないようなものだ。アレイスターがその気になれば、幻獣朗はたちまちこの街に住む230万人を敵に回すハメになる。

(まあそれも 真に自分が危なくなつた時だろうがな……)

つくづく面倒な相手だ。だが、自分たちもいずればその?面倒な相手?と闘わねばならない。

(……関係ない、か)

そうだ。相手が誰であろうと、どれだけ強かろうと、己の炎で焼き殺すのみ。結局、やるべきことに変化はない。

思わず凶悪な笑みを浮かべそうになった紅麗を、テレビから流れて来る声が押し止めた。

『次のニユースです。最近、LEVEL0と2の学生たちの能力が急上昇する事例が頻発しております。同時に、現在ネット上では使用者の能力値を上げると言われる幻想御手レベルアップと呼ばれるものが噂になっており、警備員および風紀委員はこれら二つの案件の関連性を調査していく予定です』

小金井がテレビを見ながら表情を明るくする。

「ねえねえ！幻想御手だつて！ソレがあつたらオレもハンドパワーみたいな使えるかな!?」

「止めておけ。意識不明の重体、なんてことにはなりたくないだろっ?」

その言葉を紅麗からの直接的な鉄拳制裁の脅しととつた小金井は顔を引き吊らせて押し黙り、食器を流しに持って行く。実際、紅麗なら素手で人を引き裂くことも出来るのでシャレにならない。

当の紅麗はと言うと、そんな気は更々なく、純粋な忠告のつもりだつた。

(幻想御手……)

形状、システム、媒介etc……。何一つ情報がないそのドラッグは、既に釧路帷子、丘原燎多など、使用者数名をその毒牙にかけている。

彼らは突如として昏倒し、今なお意識が戻っていない。共通点は一つ。？急激な能力値の上昇?だ。

土御門が紅麗に渡した情報はたったそれだけ。『あとは自分で何とかしろ』ということだろう。

(……まあいい。この事件の首謀者が幻獣朗と繋がっていることは間違いない)

ゆっくり捕えてじっくりいたぶり幻獣朗の居場所を聞き出す。たったそれだけのことだ。

「それにしても帰つて来るの遅かつたねえ。どしたの?」

「取るに足らない?残業?だ……」

紅麗が見つめる小金井の顔は本当に輝いている。

紅麗の中に、一つの葛藤が芽生えた。

自分は薫を守るために再び闇に堕ちた。だが、そんな己が彼と共にいるのが本当に正しいのか?

薫と共に歩みたい。だが、それが果たして彼のためになるのか?このジレンマは、やがて幾人かの心に大きなキズを刻むこととなる。

その事実にも、もしも今紅麗が気づいていれば、未来は変化を見せて
いただろう。

其之参拾肆・葛藤（後書き）

紅麗がずっとシリアスモードで難しい……

活動報告の方でアンケート採ってるんで、よろしければご協力ください！明日いっぱい締め切りです！

其之参拾伍：難航（前書き）

今回ほどサブタイトルと話の内容が噛み合わない話はないと思います。主役はまさかのあの人です。

其之参拾伍：難航

目下、紅麗を悩ませるものが二つ存在する。

一つは、言わずと知れた魔法のアイテム『幻想御手』レベルアップ。形状から何から、全く手掛かりのないそれを紅麗一人で探しだし、制作者及び横流ししているバイヤーを肅正しろとは土御門からのお達しだ。そしてもう一つ。それは、

「あ、あの！小金井先生、コレ受け取ってもらってよろしいでしょうか？」

自分の前で顔を真っ赤に染め上げている少女と、彼女が差し出しているハートのシールで封をされたピンク色の便箋。

ちなみに、『小金井先生』というのは紅麗のことだ。前の世界でも姓を持たない（戸籍上は森姓だが、死んでも名乗りたくない）彼は、義弟の姓である『小金井』を拝借している。

（……………何回目だ？この時代にえらくレトロなことだな）

サングラスで隠れた視線を職員室の天井に向けながら、紅麗は今日一日を思い起こしてみる。

まず登校途中に三人から愛の告白を受け、学校に着いて下駄箱を開けて見れば今度は手作りクッキーが二つ、チョコが三つ。そして昼休みである今この時までには四人がわざわざラブレターを持参してくれた。紅麗はやたらモテていた。

白井黒子の言葉を借りるなら原因は、『エロスなオトナのオトコ』の魅力というヤツだろうか。小金井の失笑を買った真っ黒のスーツ

にネクタイ、サングラスと頬にはガーゼというヤクザの若衆みtainなファッションも、世間知らずのお嬢様たちのフィルターがかかった目で見れば妖艶さを引き立てる代物なのだろう。

紅麗は口を開き、今日何度復唱したかわからないセリフをモジモジしている目の前の女学生に返した。

「すまないな。私はこれでも教師だ。お前が望むような関係にはなれない」

少女の顔が一気に落胆を表す。

「わかって……くれるな？」

優しく諭すようなその口調に、少女は微かに震えて目を真っ赤にする、涙声で

「わ……がり……まじ、た」

少女はそのまま振り返ってパタパタと走り去って行った。取り残された紅麗には、教師たちの労いと気遣いの声がかけられる。

紅麗は小さくため息をついた。

(全く……。昨晚から気苦労が絶えないな)

昨夜は昨夜で色々大変だった。勘が鋭く鼻の利く小金井に血の匂いがバレないようにするのは中々に困難だ。おそらく火影の誰よりも人が死ぬのをたくさん見てきた小金井は、用心しなければならぬ。

もしもバレれば彼の事だ。『自分も闘う』などと言い出しかねない。それだけはなんとしてでも避けねばならない。全ては彼の命を

守る為に。

だから今の仕事もなるべく早く終わらせるべきなのだが……。

(……手掛かりは極僅かだな)

職員デスクに備え付けられたパソコンで幻想御手の情報収集を試みたが、大した情報は得られなかった。アンチスキル警備員本部のコンピュータに侵入しようとしたものの、学園都市の超高性能ファイアウォールがそれを阻んだ。

(やむを得ん。とりあえず、掲示板で実名を晒していた阿呆のところに乗り込むか)

と、紅麗が今後の行動について考えていると、

「特別講師の小金井というのはあなたですわね？この婚后光子の許嫁にしてあげてもよろしくてよ？」

また一人、悲しい運命を辿ることとなる哀れな乙女がやって来た。

つい今しがた紅麗にフラれた少女・湾内絹保は失意のあまり、学校はおろか学舎の園まで飛び出してしまっていた。

「うぐつ、ふえええん！」

お嬢様らしくないみつともない泣き声は、それだけ彼女の悲しみが

深いことを表している。今の行動に関しても同じだ。見た目に反して体育会系の水泳部である彼女は、走ることで無意識のうちに悲しみを吹き飛ばそうとしているのだ。

「うわああああああん！」

走る、走る、走る。

初恋と失恋をほぼ同時に味わった少女は、失意のままにどこまでも走った。

そうして、彼女が辿り着いたのは、

「エグツ、ここは……？」

薄暗い路地裏だった。

泣き止んで落ち着きを取り戻した湾内の頭に、常盤台に入学して間もない頃、不良に絡まれた記憶が蘇る。

「い、いけない！早くここを……」

離れなければならない。そう思い、引き返そうとするが

「お嬢ちゃん。ちょっとお小遣いくんねえか？」

時既に遅し。彼女の前に、茶髪に鼻ピアスの不良が立ちはだかる。慌てて振り返るが、そちらにももう一人、バンダナを頭に巻いた不良が立っていた。

「おいおい、ホントに大丈夫なのかよ浜面。駒場のリーダーにバレたら大目玉喰らうぞ？」

「問題ねえって。半蔵だって金に困ってんだろ？大体、ATM襲う

のがアリならいたいけな少女からカツアゲすんのだって全然アリだろ」

不良たちの会話も湾内の頭には入って来ない。

狼に喰われるのを待つ兎のように、ただ怯えることしか彼女には出来なかった。

「ま、とにかくサツサと金出しゃひでえこたしねーからよ。財布渡してくれ」

茶髪の不良がズイッと右手を突き出す。何が何だかわからないで湾内が震えていると、声を荒げて、

「早くしろツつってんだろ！素っ裸にされてえか！？」

恫喝にますます怯えて縮こまりそうになるが、このままでは何をされるかわからない。震える手で懐の財布を取り出す。

「よし、それでいい。ほら、さっさと寄越せ」

言われるがままに、不良の大きな掌に財布を乗せようとしたその瞬間、

「渡す必要はないよ」

背後から、女の声が聞こえる。直後、細く鋭い何か飛来し、茶髪の不良の右腕に突き刺さった。それは、木材に穴を開ける時などに使う錐だ。

「あつ、がああああ！？」

「浜面アアア！オイてめえ何しやがる！？」

狭い路地裏に浜面の絶叫と、彼を心配し、その元凶に吠える半蔵の
声が響く。

湾内が振り向くと、ショートカットで額にバンダナを巻いた少女が、
不良たちに怒りの形相を向けていた。

「せーっかく授業が午前中だけで気分良かったのに、ムカつくモン
見せやがって。テメーらそれでもキンタマついてんのか？」

ドスの利いた低い声が空気を震わせる。

半蔵は怯まずにバンダナ少女に襲いかかった。

「テメエエ！よくも浜面をござつ！？」

しかし、少女の鉄拳が彼の顔面に突き刺さり、半蔵を吹っ飛ばす。

少女はゆっくりと、血が噴き出す右腕を押さえる浜面に歩み寄る。

浜面は地面に尻をつけたまま、無様に後ずさった。

「ヒイツ、くくく来るなあッ！」

「オイ」

バンダナ少女が浜面の髪を掴んでグイッと引き寄せる。そしてその
ままこう言った。

「女ナメてんじゃねーぞ固羅！！」

少女の渾身の右ストレートが浜面の顔面にめり込む。浜面はカエル
が潰れたような声をあげて二転三転しながら、突き当たりの壁に勢

いよくぶつかり意識を失った。

「あ……あ……」

腰を抜かしてへたりこんだ湾内の口から、言葉にならない声が漏れる。それは驚嘆であり安堵であり、そして感謝でもあった。湾内の胸が僅かに動悸する。

少女は湾内の顔を見つめると、優しく微笑み手を差し伸べた。

「立てる？」

「あ、ハ、ハイ！」

少女の手を掴むと、途端に動悸が激しくなってくる。百メートルを泳いだ後より、さらに強く。

「ん〜、ケガは無さそうだね。不用意にこんなトコ来ちゃダメだよ？アンタただでさえ大人しそなんだから」

「ごめんなさい……」

戒めの言葉に、湾内は頭を垂れてスカートの端を掴み、プルプル震える。バンダナ少女は必要以上に落ち込んでしまった彼女を慌ててフォローする。

「ま、まあでも！ブジで何より！ぢゃあ私は帰るから、アンタも気をつけて帰りなちゃい。そんじゃ「待つてください！せめてお名前を……！」

場を離れようとした少女の手を引っ張りながら尋ねる。わからない。

何故だかわからないが、彼女との繋がりを失ってはいけない気がした。

バンダナ少女は照れ臭そうにポリポリ頭を掻くと、

「霧沢風子。アンタは？」

「あつ、わ、わたくし湾内絹保と申します！本当に、ありがとうございます！」「

湾内がペコリと頭を下げると、風子は彼女の頭を軽く撫でて、

「いーってことよ！んぢゃ、またね！」

明るく笑うと、手を挙げて去っていった。

力強い少女の背中を眺めながら、湾内はポツリと呟く。

「霧沢……風子様」

男勝りな少女に投げ掛けられた、お嬢様の熱い視線は、感謝か、憧憬か、はたまた別の何かに因るものか。

わかるのは、湾内絹保ただ一人。

同刻

とあるコンビニで爆発事件が発生。風紀委員が一名負傷。犯人は未だ不明。

警備員及び風紀委員は、これを最近立て続けに起きている連続爆破

事件『虚空爆破事件』と同じものと判断。
調査にあたった。

其之参拾伍：難航（後書き）

湾内さんはかわいいと思います。超電磁砲のキャラの中で一番かわいいと思います。

関係ないけど、たまーにチラツと他の方の禁書二次創作を拝見させていただいているんですが、オリキャラが美琴とくつつく率がやたら高いです。やっぱ人気なんですかねえ？

其之参拾陸：虚無の暴発？目的（前書き）

時間かかったわりに短いです……前も書いたなこんなこと

其之參拾陸：虚無の暴発？目的

「今日はセブンスミストに行きましょー！」

ばんぱかぱーん！と元氣いっぱいな効果音と共に、柵川中学前で佐天は宣言する。正午を過ぎたばかりで夏の日がさんとさんと降り注いでいるのだが、頭を付け替えた直後のあんパン男級のテンションを常に意地し続ける彼女には、焼け石に水といった感じた。

「いえーっ！」

勧誘の対象である小金井もノリ良く叫ぶ。この二人、並んで歩くとセミ以上に騒がしいため、周囲の学生たちからは冷ややかな視線が向けられている。

少し離れて、現在の気温相応に気だるげな脳天花畑・初春がケータイ越しに誰かと会話していた。

「ええ、はい。……うえっ！？今日は非番……わっわかりましたよー！行けばいいんでしょー？」

通話を終了した初春は頭の花が枯れてしまいそうな勢いで、ドバァーッと大きなため息をつく、気まずそうな感じで前を行く二人を呼び止める。

「あのー、お二人とも？」

「おっ、終わつたか初春！白井さんなんだって？」

何がそんなに楽しいのか、クルクルとバレーナーのように回転しながら佐天が尋ねる。初春は可愛らしくペロツと舌を出して告げた。

「お仕事入っちゃいました。テヘッ」

「「ええー！？」」

瞬間、小金井と佐天の口から不満が飛び出す。

「サボっちゃえばいいーじゃん！」

「私と仕事、どっちが大事なの！？」

「二人は白井さんの恐ろしさを知らないからそんなことが言えるんですよー！白井さんも御坂さんとの約束が反故になっちゃってスッ

「ゴク不機嫌なんですから!!」

初春の脳内で、トレードマークのツインテールを鬼の角のように逆立てた黒子が襲いかかって来た。

『ヒイツ!この子たちはお許しを〜!』

とか言いながらガクガクぶるぶる頭の花をガードする初春を見て、さしものドSも気の毒になつたらしく、ひよいひよいと手を振つて、「わかつたわかつた。ほら、さつさとしてきな。女を捨てた初春の代わりに、私が大人の階段登つて来るからさ」

ガバツと小金井を引き寄せる。身長差のせいでちょうど胸の辺りに頭が来るのだが、思春期に程遠いシヨタつ子は走り去る初春へと無邪気に手を振り続けている。

「バイビー飾利ちゃん!また明日ー!」

「……センパイ。からかい甲斐がないですね」

「え?ナニが?」

「いえナニも……」

女のプライドに大きめのキズをつけられた佐天が視線をガツクシ地面に落とすと、そこに緑色の布のような物が落ちていた。

緑地には四本の白いラインが入っており、真ん中の二本を遮るように盾を象つた紋章が描かれている。拾い上げてよく見ると、それはジャケット風紀委員の腕章だった。持ち主はおそらくとかほぼ確実に初春だろう。

「あいつ、昨日もファミレスに忘れて御坂さんに拾ってもらつたつて言つてたのに……」

額に手を当て、級友のドジっぷりを嘆く。小金井が横からヒョッコツと顔を出して提案した。

「コレって飾利ちゃんのもでしょ?届けてあげた方がいーんじゃない?」

「あー、大丈夫ですよ。こんな失敗いつものことですから。あ、そーだ!」

初春が聞けば憤慨必至な発言をした佐天はニヤツと笑つて、小金井

の右腕に腕章を通し、安全ピンで袖に留める。

「オー！似合う似合う！それじゃ行きましょー！」

「おーっ……！」

かくして、天真爛漫コンビはセブンスミストへと向かった。

「ふああ……ねっむー」

ふにゃあー、と昼寝中のネコのようにぐだりながら、美琴は教室で大きくあくびした。それを見て帰り支度中のクラスメートが感涙に咽んでいるのが視界に入ったが、気にしない。

（あー、疲れた……昨日いろいろあつたからなあ……）

？いろいろ？とは、具体的にいうと、黒子を見返すために風紀委員の仕事をしたり、その帰りに出くわした例のバカと決闘したり、己のワガママに忠実に動いたことだ。一晩中追っかけっこをしたせいで、とんでもなく眠い。

そんな寝不足状態で四時間もの苦行に耐えきった彼女がフラフラと教室を出ると、

「待て、御坂」

自分の名を呼ぶ声が聞こえた。あまり聞き慣れない、されど確かに聞き覚えのある声の方へ、敵意を剥き出しにして向き直り、

「……何のようですか、小金井先生？」

皮肉の混じった声で返した。

昨日黒子に話した通り、美琴は紅麗が気に入らない。

特に理由があるワケではない。ただなんとなく、？ムカつく？だけだ。それも、いつも目の敵にするウニ頭とは正反対のベクトルに、だ。

「？何の用？とは御挨拶だな。昨日あれだけのことを仕出かしておいて」

人を化かしたような物言いが、ますますハナにつく。

「だから！私がいっただい何を「能力の無断使用。それも、かなり私的な理由で」

ピタツ、と紅麗に掴みかかろうとした美琴の動きが石像のように停止する。その後逆再生みたいに元の体勢に戻ると、

「ごきげんよう、先生」

「待て」

身を翻し脱兎の如く逃走しようとした美琴の首根っこを紅麗がガシツと掴まえた。

「仮にも貴様は常盤台のエースだ。罰則というものは上に立つ人間が示してこそだ」

紅麗はブキミに笑って、宣告した。

「どうもここ最近のお前の行動は目に余るそうだ。というワケで、今日一日は私がお目付け役となった。わかったな？」

「んなつ！そんなオーボーな」わかつたな？」「……ハイ」
有無を言わさぬその一言に美琴はただただ泣き寝入りするのみだった。

(……泣いていいかな?)

自業自得。

中二の少女は心底それを体感した。

「白井さん、初春さんどうだった？」

「すぐに来るそうですわ」

風紀委員一七七支部。雑居ビルの一室を陣取って存在するその空間で、パソコンに向かいながら会話する少女が二名。

固法美偉に白井黒子。同支部が誇る能力者たちだ。

「最近は本当に物騒ね。一昨日白井さんが連続発火強盗を捕まえたつていうのに、今度は虚空爆破事件……息つくヒマもないわね」

『ムサシノ牛乳』と書かれた牛乳パックの中身をストローで吸いながら、先輩系巨乳女子高生・固法はばやいた。足元のクズカゴに山のように積まれた牛乳パックを見るに、タバコ感覚で牛乳を飲んでいるらしい。

変態系貧乳淑女・黒子も固法同様、疲労と不満と苛立ちとその他諸

々を吐き出すように叫んだ。

「まっつったくですの！お姉様とのデートがなくなるわ、同属誕生の気配がするわで、わたくし気が気じゃありませんのッ！！お姉様の貞操の危機があアア！」

「……むしろ御坂さんにとって一番の危機はあなたでしょうね。ほら、ちよつと落ち着きなさい」

冷徹にツツコんで、手近にあった『ムサシノ牛乳』を黒子に手渡すと、固法は再びパソコンに向き直る。ディスプレイに表示されているのはこの街の学生たちの顔写真と能力についての簡単なプロフィールのようなものだ。

「それで、犯人の目星はつきましたの？」

「ぜんぜん。『書庫』^{バンク}からデータ引つ張り出してもカスリもしないし、読心能力者^{サイコメトラ}に遺留品を調べてもらっただけ、手がかりゼロよ。せめて犯人の動機だけでも掴めればねえ……」

「動機……ですか」

小さく息を吐いて、パックにストローを突き刺すと、黒子はそれを一口含む。ほんのりした甘さが口に広がったところで、思い出したように言った。

「そう言えば、一つ気になることがありますの」

「気になること？」

「ええ。同僚がこの事件で何人も負傷しているのは固法先輩もご存知でしょうけど、その数が異様に多いんですの」

黒子は固法の下まで移動すると、デスクの上のキーボードをカタカタと操作する。ディスプレイに映し出されたのは、一連の事件の報告書だ。

「全八件のうち、風紀委員の負傷者が……九名！？それも全ての事件で負傷してる……！白井さん、コレって！！」

固法が青ざめた顔を向けると、黒子は悔しそうに歯を喰い縛った。

「ええ……！わたくしもたった今気づきましたの。これは無差別爆破などではない……犯人の真の狙いは、観測地点周辺にいる風紀委

「...の...！」

其之参拾漆・虚無の暴発？蠢く陰謀（前書き）

キツイです

上手く纏めきれない…

其之參拾漆：虚無の暴発？ 盡く陰謀

「でねっ！そのバカったらね！」

「……」

何だコイツは。紅麗の純粹な感想だった。

事の発端は十分前。紅麗の質問にあった。

彼女は学園都市に七人しかいない（昨日八人に増えた）LEVEL 5の一人だ。その戦闘能力は一個軍隊にも匹敵するほどらしい。内に秘めたポテンシャルでいえば、自分や烈火をも上回る可能性だつてある。

だからこそ、そんな彼女に本気を出させるほどのチカラを持つ？アイツ？に対して興味が湧いた。

美琴がコレほど執着する男は、一体どれほど強いのか。それで、ついあんなことを口走ってしまった。

『オマエが本気で闘うほどの相手はどんな男なのだ？』と。

そこから始まったのは、グチというか、ノロケというか、聞くに耐えない言葉の嵐。

急に地団駄踏んで怒鳴り出したかと思えば、次の瞬間には乙女ちっくに顔を赤くしてモジモジし出す。

最初の方は見ていて面白かったのだが、流石に十分間休みなく聞かされていれば、鬱陶しくならない方がムリというものだ。

「だから私は言ってやったのよ！『私を無視すんな！』って。そし

たらアイツ……」

さっきまでの敵意は何処へやら。

彼女の目はこれでもかというくらい輝いていた。例えるなら、クリスマスイブにベッドで赤福白髭の義賊を待つ小学生とあったところか。しかし残念ながら、そんなハッピー美琴ちゃんの話をいつまでも笑って聞いてくれるほど、紅麗の心は広くない。

いい加減、実力を行使してでも黙らせてやろうかななどと紅麗が物騒なことを考えていると、

「あとねー、もう一人面白そうなヤツがいんのよ。花菱烈火って言うんだけどー」

美琴の口からよく知る名が飛び出した。

仏頂面をキメ込んでいた紅麗の顔が少し引き吊ると、LEVEL5の観察眼で目敏くそれを発見する美琴。

「オヤオヤ。その反応、もしかして知り合い？」

「……まあな」

嘘についてもよかったが、特に理由もないのであっさり肯定する紅麗。と、美琴はより一層目をキラキラ（というかキラキラ）させながら、紅麗の腕に無邪気に絡み付く。

「やっぱり!? ねーねー、アイツどこの学校わかる? あ、どーせなら直接本人に会わせてよ!!! LEVEL5になったらしいけど、この街に来たばっかみたいで『書庫^{バンク}』にもデータないのよね〜。てゆーかアイツどんな性格してんの? 教えて教えてー!!!」

(言わなければよかった……)

幼い子供がダダをこねるように、美琴は紅麗をガクンガクン揺さぶる。

珍しく振り回される紅麗は、己の軽率な行動を悔やみながら、僅かに微笑んだ。

憎まれ口を叩いてはいるが、きっとこの少女は嬉しいんだろう。

この二日、紅麗は教師から要注意人物と言われた美琴をしつかりと捕捉していた。そして、わかったことがある。御坂美琴の人間関係だ。

一見すると皆の憧れの的になっているように見えるそれは、火影のように気兼ねしない信頼でもなければ、自分を慕う雷覇や音遠のような心からの忠義とも違う。

『LEVEL5の超電磁砲』というフィルター越しに彼女を見た、羨望であり、尊敬であり、敬遠でもある。

彼女は輪の中心に立つことができても、その輪に加わることはできないのだ。

もし彼女がLEVEL5でなければ、きっとこうはならなかった。

持ち前の明るさや面倒見の良さで、たくさんの友人関係を築いていただろう。あの底抜けに馬鹿な愚弟と同じように。

美琴の今の感情が、紅麗にも僅かばかり理解出来た。

程度の差こそあれど、？力？のせいで仲間が、友人がいらないという点では、自分も美琴も変わらない。

そして、自分にとっての紅や月乃のように、美琴にとって？あのバカ？が心の支えになっているという点でもだ。

『LEVEL5の超電磁砲』ではなく『ワガママな御坂美琴』として自分を見てくれる数少ない存在が、彼女は本当に嬉しいのだろう。驚くほど自然に、紅麗は思っていた。

この少女には、自分と同じようにはなって欲しくない。

それは、同類への憐れみなのかもしれない。純粹に美琴を思いやっただけかもしれない。

いずれにしても、過去の紅麗ではあり得ない考えだった。ただひたすらに破壊と殺戮を繰り返し、光の下に生きる者を、自分と同じ闇の世界へ引きずり込もうとしていたあの時の紅麗では。

(……変わったな)

変えたのは、愚弟。真っ直ぐに、純粹に、己の志を貫き続けた一人の忍だ。

「アイツは……」

紅麗は僅かに足を止め、目を輝かせている美琴に呟いた。

「面白い男だよ」

(やっぱり、私の期待通りのヤツだったみたいね……！)

紅麗の言葉を聞いた美琴は、確信の笑みを浮かべた。

彼女の名誉のために述べておくが、美琴は決して戦闘狂というワケではない。好戦的な面はあるものの、見ず知らずの人間にケンカを吹っ掛けるようなマネは、？例外？を除いて絶対にしない。なら？例外？が？例外？たる所以はどこにあるかということ、結局は、彼の人間性に行きつくだろう。

無能力者（LEVEL0）のクセに、身の程も弁えずに自分へ助け船を出そうとしたこと。身の程も弁えずに自分を子供扱いしたこと。身の程も弁えずに本当の自分を見つめてくれたこと。

？アイツ？の持つチカラなど、建前でしかない。

美琴が？アイツ？を目の敵にするのは、嬉しかったからだ。『超能力者（LEVEL5）』という飾りではなく、その中にいる『御坂美琴』と真っ直ぐに向き合ってくれることが。

もつとも、美琴はまだ子供。しかも素直になれない性格のせいで、そんなことに彼女自身は気づいていない。己をここまで駆り立てるのは、？アイツ？の持つ不思議なチカラがあると、出会った時からずーっと思いついてる。

だから今、ウニ頭二号に興味を持っているのも同じ理由だと考えていた。

（LEVEL5の発火能力者……きっと、破壊力なら私をも上回る。花菱烈火……！絶対に勝つ……！）

結局のところ、烈火と闘いたがっている理由だって変わらない。『？アイツ？に似た二オイを嗅ぎとった』。それだけの話だ。

ただ、その事に自分で気づくほど、彼女は大人じゃないし素直じゃなかった。

美琴が胸中で勝利への闘志をメラメラと燃えたぎらせていると、

「待てーっ!!」

前方50メートルの曲がり角から、猛スピードで小柄な少年と見知った野良犬が走ってきた。

「薫か……?」

少年のものと思われる名を紅麗が口にしたのが聞こえた。美琴は少年と犬に目を向けたまま尋ねる。

「知り合い?」

「ああ、弟だ」

少年に追い掛けられている野良犬は、昨日、落とし物のカバンをくわえて逃げ回り、自分に余計な徒労をかけさせたアホ犬だ。よく見ると口には花の形をしたヘアピンか何かをくわえている。それと、少年の腕には風紀委員の腕章が。美琴はある程度の推測がついた。

（まーた落とし物パクったな……あの犬）

助太刀してやるか、と犬の前に立ち塞がり、進路を断つ。ちょっとばかり前髪をパチパチやってみると、犬は急ブレーキをかけて反対方向へ逃げ出そうとする。

が、もちろんそちらには今の今まで犬を追い掛けていた少年……と一昨日できた友達の佐天涙子が。

「佐天さん！？ナニやってんの！？」

「あつ、御坂さん！その犬が私のヘアピンくわえて行っちゃったんですよ！」

「……薫。オマエも何をしている？何だ、その腕章は？」

「あつ！ヤッホー兄者！そっちこそナニしてんの？……あつ！さてはデート！？ダメだよ、中学生に手エだしちゃ」

「そ、そんなオトナのオトコとデートだなんて流石御坂さん！！」

「違っつてば佐天さん！だからそんな憧憬の眼差しを向けないでえ！！」

偶然にも邂逅した知り合い同士の雑談会が始まる。意識が完全に自分から離れていることを感じた野良犬は勝負をかけた！

猛然と美琴と紅麗の方に駆け出す野獣。その小さな体躯はトップスピードに乗るまでの時間を極端に縮め、二人を掻い潜ることを可能とする。

が、LEVEL5は甘くない。美琴は常に張っているリーダーによって犬の動きを察知、牽制の電撃を放つ。

そもそも雷の類いを苦手とする犬にとって、それは予想以上に効果があった。野良犬は慌てて車道に飛び出した。

高速で走る乗用車の真ん前に。

(しまっ……！)

美琴にとって、この事態は完全な計算外。それが、彼女の動きを遅らせる。

足が地面から浮いた時には、既に犬と車の間には10メートルの間もなく、これからは起こるであろう悲劇に、目を閉じそうになったその瞬間、

小金井薫が、飛び出した。

一瞬の出来事だった。

小金井は犬を抱え上げると、そのままの位置で跳び上がる。そして、時速40キロで迫り来る巨大な鉄の塊を踏み台にもう一度高く跳ねる。まるで紙飛行機のように軽やかな動作で空中を渡ると、スタツ、と重さを全く感じさせない音と共に、犬を抱えた小金井は歩道へと着地した。

一瞬の静寂。それを破ったのは、

「すすす、スツゴーーーーーい!!!」

佐天の歓声だった。

「何ですか今の!? シャツ、シャツ、ピョーンって! シャツ、シャツ、ピョーンってえ!!!」

興奮して意味のわからないことを口走りながら小金井の頭をワシヤワシヤ撫で付ける。

小金井は犬を小脇に抱えて誇らしげに胸を張った。

「えっへん! スゴいだろ!」

「『スゴいだろ』じゃないっつーの！」

スパカーン！と美琴の拳骨が小金井にクリーンヒットした。その拍子に野良犬の拘束が解かれ、野良犬はヘアピンを置いて逃げて行った。

「イッテーなあ……ナニすんだよう」

「コッチのセリフよ！心臓止まるかと思っただわよ！！」

「ま、まあまあ御坂さん。ブジだったんだしいじゃないですか」

小金井の胸ぐらを掴んで怒りのシャウトを決める美琴を佐天が宥める。煮え切らないような顔をしながらも、美琴はしぶしぶ手を離し、顔を赤くしながら、

「ま、まあ感謝はしてるわ。アンタが助けてくれなかったら、私があの犬殺したようなモンだし……ありがとう」

ボソツ、と頑張らなければ聞き取れないような声で囁いた。

小金井と佐天は同時に思う。

（素直じゃないなあ……）

紅麗は紅麗で少し離れたところから、

（ああいうところも私と同じ……かもしれない）

とか考えていた。

其之参拾漆：虚無の暴発？ 蠢く陰謀（後書き）

烈火の炎の巻末にあったインタビューを後書きにオマケとして載せてみよっかなーと思ってます。

ご希望のキャラがいれば（烈火、禁書どちらでもOKです。出来れば登場済みのキャラで）お寄せください。

一回限りではないので、これから先いつでもどうぞ！

其之参拾捌：虚無の暴発？COUNT DOWN（前書き）

時間かかったあー！

ストーリーは頭ん中にできてるんですが、文章に起こすことがなかなか出来ませんでした……

後書きにオマケのインタビューを載せておりやす！

其之参拾捌：虚無の暴発？COUNT DOWN

一口に『殺気』と言っても、様々な種類がある。
衝動的なもの、計画的なもの。

怨恨によるもの、利益を得るためのもの。

純度の高いもの、低いもの。

そして、大きいもの、小さいもの。

大小問わなければ、それは誰でも持っているものだ。

例えば、『この先公マジム力つく』なんて些細なものでも、突き詰めれば心の奥には立派な殺気が存在する。

それは、『震度』に似ているかもしれない。

『震度0』が決して地震の発生していない状態ではないように、『殺意0』は殺気のない状態ではない。

詰まるどころ、『生命』が存在すれば、『殺気』は何処にでも現れるのだ。それこそ、そこに居るのが聖人君子でもない限り。

学園都市という巨大な街にも、いや、巨大な街だからこそ『殺気』はまるで坩堝の中身にあるかのように混在している。

その中で、自分に向けられた一つの『殺気』を紅麗は鋭敏に感じ取った。

(……ここまで強い殺気は久しく感じていなかったな)
胸中で呟いて、じつくりとそれを吟味する。

種類は計画。動機は怨恨。純度は最低。大きさは……とてつもなく大きい。

(挑発しているつもりか……？身の程知らずの虫けらが)

紅麗がそう判断するのも無理はなかった。彼が感じ取った殺気には、隠そうとする気配はまるでなく、むしろ己を誇示するような感情すら練り込まれていたのだから。

紅麗は横目で同じ道を歩く三人を見る。

「えーっ！アンタ私と同じ年なの！？てっきり小学生かと思ってた

「!!」

「やっぱりそう思いますよね!? 私も初めて会った時は小学生が大
人びたカツコしたくて制服着てるんだと思いました!」

「ヒドツ!二人ともヒド過ぎる!見てるよ、今に180センチオー
バーして二人を上から見下ろしてやるんだあ!」

「いやムリムリ」

「先輩、『人』の『夢』と書いて『儚い』って読むんですよ?」

「うわああん!二人共、水鏡並に性格悪いよオ!」

三人共、殺気に気づく様子は全くない。

素人の美琴や佐天はもちろん、紅麗が口を酸っぱくして注意を促し
続けた小金井も。

(とりあえず、このバカは後でオシオキするとして……自分の力を
弁えぬ愚か者にも、じっくりと制裁をくわえるか)

紅麗は、笑っていた。表情に出してはいないが、確かに笑っていた。
男が感じた久方ぶりの『殺意』を内包した『殺気』は、アレイスタ
ーの謀略によつて目覚めかけていた男のある感情を、完全に覚醒さ
せ、増幅させた。

それは 狂気。

「何をやっておりますのつつつ!!!」

ジャッジメント
風紀委員一七七支部に、白井黒子の怒声が響いた。

「ふえ〜!ごめんなさい!」

正座しながらベソを掻くのは、緊急の呼び出しを喰らってついさつ
き支部に到着した初春だ。

「二日連続で腕章をなくすなんて、風紀委員にあるまじき失態です
のよ!?!タダでさえやることが多いと言うのに、これ以上仕事を増
やさないでくださいまし!ガミガミガミガミ……!!」

黒子の説教は延々と続いた。

十分くらい経つたところで、いい加減初春をかわいそうに思った固
法が助け船を出す。

「まあまあ、白井さん。初春さんも反省してるみたいだし、そのくらいにしといてあげたら？」

研修生の時からお世話になっており、さらにはとある事件で大きな借りを作っている固法に言われては、さしもの黒子も勘弁してやるより他はない。

「……固法先輩がそこまで言うなら仕方ありませんの。ただし初春！次に同じようなミスをしたら、どうなるかわかってますよねえ？」

「うーん、パフェでも奢ってくれますか」

「あ、そんなに残業がしたいんですのね。じゃあ初春は夏休みに毎日出勤してもらいましょう」

「そんなああ！軽い冗談ですよー！固法センパイ！」

「自業自得ね。やつちやいなさい白井さん」

「イヤアアア！カラオケが、ゲーセンが、ショッピングがああああ！」

泣き叫ぶ初春を華麗にスルーして、黒子は『夏休みの出勤予定表』を初春の名前で埋め尽くした。

『ムサシノ牛乳』を1パック飲み干して、固法は気持ちを切り替えるように自分の頬を叩く。

「とりあえず、腕章をどこに落としたかは早めに把握しないとマズイわね。犯人の狙いは風紀委員、腕章を拾った一般人が被害にあう可能性だつてあるのよ……！」

普段から真面目な彼女の口調が、いつにも増して緊迫している。経験豊富な固法のその様子に、黒子も初春も、事件の大きさと危険度を再度痛感した。

「とにかく早く腕章を見つけませんと……！落とした場所に心当たりはありませんの！？初春！」

焦燥がハッキリと現れた黒子の言葉に、初春もテンパった様子で返答する。

「だから今必死に思い出してるんですよー！！えーと、確かずつと

カバンに入れてて、校門の辺りで白井さんから電話がかかって来て…… そうだ！多分あの時カバンからケータイを出したから、そこで腕章が落ちたんですよ！！」

「その時近くにあなたの知り合いが誰かいませんでしたの！？もしいたなら、その人が腕章を拾って持つてる可能性が高いですよ！」

「知り合いなら佐天さんと薫先輩がいました。多分二人のどつちかが拾ってくれてると思います！」

「だったら早く連絡とりなさい！警ら中の風紀委員には腕章を外すよう指示したけど、風紀委員でもない人たちに伝わってるはずがない。もしフザけて腕章を嵌めたりしてたら、その人たちが標的になつちやうのよ！？」

固法の切羽詰まった声に、初春の顔がサーツと青ざめる。初春は慌ててケータイを取り出すと、リダイヤル機能で素早く佐天のケータイへ電波を飛ばした。

電話はすぐに繋がった。

佐天らはすでにセブンスミストにいるらしく、電話越しに雑音のよくな周囲の喧騒が伝わってくる。

「ヤッホー初春！どーしたの？あつ、もしかしてお仕事終わった？だったら今から「佐天さん！？もしかして私の腕章、拾ってませんか！？」

佐天の言葉をムリヤリ遮り、初春は半ば叫ぶように問いただす。佐天は少々ムツとした様子で答えた。

「人が話してる時に怒鳴らないでよ。腕章なら拾ったよ」

初春は黒子と固法に頷いて見せると、続けて尋ねた。

「それで、今も佐天さんが持つてるんですか！？」 「何なのよ全く。今は私じゃなくて薫先輩が持つてるよ。というかつけてる。初春よ。り様になつてるよ？」

初春の顔が苦虫を噛み潰したような表情になる。ともあれ、今の事態を説明し、一刻も早く二人を危険から遠ざけるべく口を開くと、

『きやつ……』

佐天の短い悲鳴と同時に、ブツツと音をたて、通話が中断された。

「……ッ！佐天さん、佐天さん！？」

名を読んでみても、耳を打つのは『ツー、ツー』という虚しい電子音のみ。ただならぬものを感じた黒子が血相を変えて問うてきた。

「どうしましたの！？」

「通話が途中で切れちゃったんです！腕章は薫先輩がつけてるみたいで……」

「ならその薫とやらに早く連絡するんですの！」

「ムリですよ！先輩、この街に来たばかりでまだケータイ持ってないんです！」

「その人たちは今どこにいるの！？どこかのお店にいるなら、そこに連絡すればいいわ！」

固法の指示に、初春はハツとすると、

「セブンスミストです！二人共セブンスミストで買い物してるハズです！」

「わかったわ！私がセブンスミストに連絡入れとくから、初春さんは腕章を外してその二人に」

その瞬間、数台あるパソコンの一つがけたたましいアラーム音をあげる。三人は一瞬互いの顔を見合わせて、そのパソコンへと殺到した。

「重力子の爆発的加速を確認。場所は……セブンス、ミスト……」
初春は、画面上のデータを力なく読み上げた。

『seventh mist』という名の衣類量販店は、たくさんの学生たちでごった返していた。当然といえば当然なのだろう。そもそも嗜好品の類いは『外部』よりも値が張る学園都市において、全国展開するこのチェーン店の物品は比較的優しい値段となっている。

オマケにかなり品揃えが良く、学校指定の制服から、最近流行りのブランド品まで、服と名がつく様々な品が置いてある。

そんな中、御坂美琴は食い入るように展示された服の一つを見つめていた。

「はわあ〜」

彼女の目を奪うのは、？ふあんしい？な寝間着。

柄はフラワー、袖や裾にはフリルがあしらえられており、パステルピンクが可愛らしさを引き立てている。

（こっ、こんな掘り出し物があるなんてっ……！！）

何という幸運。新しいパジャマを求めて来た先で、こんなに素晴らしい一品を見つけることが出来るとは。まさに、運命の出会いと言すべきか。

美琴はまるで宝石のように目を輝かせながら、小躍りしたい気持ち在必死で抑える。

「御坂さん、パジャマ見つかりました〜？」

「こっちは買い物終わったよー、美琴ちゃん！」

買い物袋を引つ提げた佐天と小金井が自分を呼びながら歩いてくる。彼らの目的は小金井の服を買うことだったらしい。

「ねーねー兄者知らない？急にどっかいつちった」

「うっん、知らないわ……！ね、ね、それより……！」

紅麗の居場所など知らないし、どうでもいい。今は、二人にこの素晴らしいパジャマを見せてやりたかった。こんなに可愛い寝間着を見て喜んで貰いたかった。

そうして、興奮冷めやらぬまま口を開くと、

「このパジャマ、うっわあ〜！見てくださいよ先輩、このパジャマ。小学生が来そうな柄じゃないですか？」

佐天の言葉が矢印となって、美琴のハートに鋭く突き刺さった。

「うーん、どうだろう。たしかに子供っぽいかなあ」

さらには小金井にまで苦言を呈され、美琴の心はポッキーの如くベキベキにへし折れた。

何も知らない佐天が無邪気に尋ねる。

「で、このパジャマが何ですか？御坂さん」

「……ないわよねえー！うんうん、中学生にもなつてコレはない。うん！アハハ、ナイナイ……」

気丈に笑いながら、美琴は必死で虚勢を張った。素直になれない性はこんなところでも彼女の足を引つ張っていた。

いち早く美琴の心情を察知した小金井がフォロローに走る。

「で、でもありじゃないかな！オレの知り合いにも高校生でこーゆーの好きな子いるし！」

実際、コレを見た瞬間、とあるバカップルの

『見て見てー！新しいパジャマー！カワイイでしょー？』

『うわーホントだ！カワイイねえー』

みたいなやり取りが鮮明に脳内再生された。というか生で見たことがある。

が、そんな小金井の実体験に基づくフォロローも今の美琴には効果なしといった感じで、

「エッ、ソナ高校生ガイルンダ。私二八関係ナイケドネ。アハハハハハ」

クルミ割り人形のようにカクカクしながら泣き笑いしていた。

(ドンマイ、美琴ちゃん……)

「もう夏休みも近いし、水着見に行きませんかー？」

小金井が戦場に散ったツンデレ戦士に哀悼を捧げていると、佐天が明るい声で提案した。しかし、美琴は力なく首を横に振る。

「私はもう少しパジャマ見てるから、先に二人で行つといて……」

「そ、そーだね！よし！行こう涙子ちゃん！」

「わわっ、引つ張らないでくださいよ！じゃ、お先に〜」

水着コーナーへ足を運んだ二人を見送り、美琴は涙目で再びふあんなしいパジャマに向き直る。

(……グスン。いいもん。人に見せるワケじゃないもん)

誰に言うでもなく、心の中で言い訳する。

美琴はもう一度チラリと水着コーナーの方に目をやった。佐天も小金井も水着を物色しており、まだしばらくはこちらに戻っては来な

いだろう。

(ほんの一瞬、合わせるだけだから！)

忍者のようにしなやかな動きで、丁寧に積み上げられたふあらしいパジャマの一つを手にとり、姿見まで素早く移動。そのまま自分の前でパジャマを広げ、その姿を確認した。

『運命の出会い』とは、必ずしも幸運にのみ適用されるワケではない。出会いたくなかった時、思わずして出会ってしまう？不運？もまた、『運命』なのだ。

そう、美琴は今この時出会ってしまった。

普段は自ら突っ掛かって行くが、こういう場面はある意味黒子以上に見られたくない相手に。

姿見越しに見えるその目にはやる気がなく、相手も美琴には会いたくなかった様子がうかがえた。

「何やってんだ、ビリビリ？」

辟易した口調で、？あのバカ？こと上条当麻は美琴にそう尋ねた。

其之参拾捌：虚無の暴発？COUNT DOWN（後書き）

？「本日は禁書キャラ随一の苦勞人、ステイルさんにインタビューをしたいと思います！こんにちは！」

ステイル「どうも」

？「原作での不遇な扱いについてはどう思いますか？」

ステイル「僕は別に不遇とは思わないがね。魔術サイドでは一番出番が多いくらいだし。……かませ犬の役割が多いのは不服だが」

？「とても14歳には見えないんですが、年齢は偽ってませんよね？」

ステイル「当たり前だろ。だいたい、僕以上に見た目と実年齢の釣り合わないキャラなどいくらでもある。神裂とか麦野とか」

？「勇氣ある発言大変結構です。夜道には気をつけてください。では質問です。そのバーコードは本当にカッコいいと思ってるんですか？」

ステイル「なっ何を……！？」

？「ケータイのストラップもドクロだし、中二病でも患ってるんですか？」

ステイル「……」

？「あと、ロリコンだというウワサは本当ですか？インデックスとか小萌先生とか……」

ステイル「イノケンティウス魔女狩りの王！！」

ステイル、暴れだす。インタビュー続行不能。

其之参拾玖：虚無の暴発？BURST UP（前書き）

日曜までに投稿したいと言いながら、遅れてしまってすみません！
かっこ良さげとかいう理由で、サブタイに意味も知らない横文字入
れてすいません！

紅麗編は纏めるつもりだったのに、だらだら長くてすいません！

其之参拾玖：虚無の暴発？BURST UP

（今度こそ、今度こそ殺してやる……！）

少年を取り巻くのは殺意という負の感情。

（今度の爆弾ならず殺せる……！）

少年の行動を後押しするのは殺意という大きな絶望。

非常用通路にひっそりと身を潜めながら、少年は手に持ったカエルのぬいぐるみを強く握り締める。中身は綿を詰め込んだだけのその緑の塊は、まるでピカソの絵みたいにシユールにひしゃげた。

……少年の心と同じように、歪でアンバランスに。

「ところでさっきの電話なんだっただの？飾利ちゃんだよな」

美琴に他人の目を気にせず思う存分ふあんしいパジャマを堪能してもらおうと、佐天の手を引いて水着コーナーに連れて来てから、小金井は尋ねる。先ほどは店内で走り回っていた子供たちが通話中の佐天にぶつかってしまい、その拍子にケータイの電池パックが吹っ飛んでしまった。電話先の初春は何やら憔悴していたようだが、ケータイが復活を遂げてからもなんの音沙汰もない。

が、そんな状況にも関わらず、引っ張られてきた佐天は可愛らしく首を傾げて見せた。

「さあ？なんか腕章がどうか言ってみましたケド」

「……やっぱり届けてあげた方が良かったんじゃない？」

小金井の懸念の声を、佐天は明るく笑い飛ばす。

「アハハハ、だいじょーぶですよ！普段からミスばっかなんだから、たまにはお灸すえてやらないと」

（やっぱり涙子ちゃんドSだ！水鏡並みにドSだ！）

小悪魔スマイルに旋律を覚える小金井。そんなことは露知らず、佐天は目の前の水着を手にとって無邪気(?)に、

「初春の泣き顔ってスツゴク可愛いんですよー？」

なんて言い放っていた。

と、その時佐天のケータイから、今全国で大人気のアイドル歌手、ひつじほのひつじほのの歌声が流れ始める。ケータイを確認する佐天。ディスプレイには初春飾利の名が表示されている。

佐天が通話ボタンを押すと同時、

「大丈夫ですか佐天さああああああああああああん！？」

初春の涙混じりの叫び声が鼓膜を突き破っておもいつきり脳を揺さぶった。その声はすぐ側にいた小金井はおるか、近くを歩いていたお客を振り返らせるほどのものだ。佐天へのダメージも尋常ではない。佐天は顔をしかめて涙目で、

「…………ツ、急に大声出さないですよ」

『ああっ、ごめんなさい！ケガはないですか？アブナイ目に合いませんでしたか！？』

「だいじょーぶだよ。だから落ち着きなさいって」

佐天の無事を確認できたことで初春の興奮も幾分治まったらしい。初春はさっきの半分くらいのトーンで話し始める。

『落ち着いて聞いてくださいね？……その店で重力子の爆発的な加速が確認されました』

前置きまでして佐天が冷静さを保てるように配慮した初春だが、そんな単語を並べられても佐天はいまいちピンと来ない。

「ごめん、全然意味わかんない」

『平たく言うと爆弾が仕掛けられてるんです！白井さんがそっちに向かっています！』

「ばっ爆弾！？」

佐天がすつとんきょうな声をあげるのとほぼ時を同じくして、館内に女性の声でアナウンスが流れた。

『本日はご来店まことにありがとうございます。ただいま、当館の電気系統の不備を発見いたしました。大変申し訳ございませんが、お客様方にはご退出いただきますよう、よろしくお願い申し上げます』

機械的に努めようとはしているものの、よく聞けばその声は明らかに震えている。もっとも、事情を知らない者には気づかれぬ程度に、だが。

佐天は今一度電話に向かって言った。

「初春！私センパイや御坂さんと一緒に避難誘導手伝ってくる！何もしないよりマシだね！」

『えっ？御坂さんもいるんですか！？……じゃなくて！佐天さん、薫センパイに今すぐ腕章を外すように言ってください！佐天さん？聞いてますか！？』

言うが早いか佐天はケータイを 통화状態でポケットにねじ込み、小金井の腕をひつ掴む。初春の声は既に届いていなかった。

「センパイ！行きますよ！」

「えっ？ナニナニ爆弾ってなんのこと？ねえってばああああ！」

何が何だかわからないまま、小金井も避難誘導に駆り出されて行った。

「ちょっとアンタ、さっさと避難しなさいってば！」

佐天に事情を聞いて避難誘導に協力する美琴は、未だ店内をうろちよろしている上条を怒鳴り付けた。が、彼は焦りを顔に浮かべて叫

ぶ。

「オレと一緒に来てた女の子がいないんだ！知らないか、御坂！？」

「えっ？女の子ってあのちっさい子よね！？何で目エ離すのよ！」

「面目ない！説教ならあとで聞くから今は探すのを手伝ってくれ！」

一刻を争うこの状況で口論している場合ではない。美琴の方もそれを理解し、駆け出そうとした時、

「お姉ちゃん」

自分と呼ぶ可愛らしい声が美琴の耳に届いた。

振り返ると、先ほど上条と一緒にいた探し人の少女が不細工なカエルのぬいぐるみ（決してゲコ太にあらず）を抱えて走って来た。

「どこ行ってたんだ！心配したんだぞ！」

（あつ、さっきのゲコ太モドキ。見れば見るほど似てないなあ）

「おトイレ行ってたの。お姉ちゃん、風紀委員のお兄ちゃん知らない？」

上条が説教をかましている横で、ぬいぐるみを見た美琴が下らないことを考えていると、少女がそう尋ねて来た。

「風紀委員って……小金井のこと？アイツなら向こうにいるわよ」

「ありがとう」

少女はペコリと頭を下げて、ポテポテ駆け出そうとする。その手を上条がソフトに掴まえる。

「まてまて、落とし物でも届けに行くのか？ だったら避難してからにしないさい。危ないだろ？」

「ハイ」

少女は若干つまらなそうに返事した。が、聞き分けよくすんなり諦め、代わりにゲコ太モドキを美琴に渡して、スイツとその小さな両手を二人の前に差し出して来た。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん。手、つなごう」

本来、一瞬の遅れが死に直結する状況で、イタズラに機動力を殺ぎかねないような状況に身を委ねるのは愚策以外のナニモノでもない。だが、超電磁砲を上回る破壊力をもつ純真無垢なその願いを無下に切り捨てられるほど、美琴と上条の心の防壁は強固ではなかった。

二人は言われるがままに少女の手を取り歩き始めた。ふと、美琴はあることに気づく。

(…………あれ？あれあれ？この構図って…………)

美琴の脳内にとある情景が広がった。

『ねーねーパパ、ママ、お手をつなごー』

『まったく、麻琴（仮名）は甘えん坊だなあ。一体誰に似たんだか』

『なによーその目は。あなただっつていい歳して甘えて来るじゃない』
アハハハーウフフフー、と幸せいっばいに笑う脳内家族。配役は言うまでもない。

(イヤイヤイヤ！ないから！それは絶対ないからっ！)

頭をぶるんぶるんシェイクして妄想を完全抹消しようとする。

美琴の突然の奇行に、上条は目を丸くして

「何やってんの、お前？」

「はうあっ！にゃんでもないからほっつとしてよー！」

「めちやくちやベタな動揺だなオイ。頼むから今はビリビリすんなよ、ちっさい子と一緒になんだぞ」

「わかってるっつーのー！」

そう言いながらも美琴の前髪からはバチバチと電流が迸っている。上条はポフンと右手を美琴の頭に置いた。

「秘技、ビリビリ封じ！今日の上条さんは一味違いますよー？」

「なっ……？ちよっ……！ばっ……！！」

美琴は文句の雨を浴びせてやろうと口を開くが、不意の一撃はそれすら許さず、金魚のように口をパクパクさせながら赤面するのが関の山だった。

と、そんな美琴のリアクションの意味がまったく理解出来ない上条は、ふと視界の端に二人の中学生を捉える。うち一人の腕に巻

かれた風紀委員の腕章も一緒に。

(お探しの風紀委員ですよーっと)

上条は中学生たちの方を指差し、ツンツンと肩をつついて少女にそれを伝える。

「ほら、風紀委員のお兄ちゃんがいたぞ」

「あつホントだ！いつてきます！」

言うが早いのか、少女は石像のように硬直した美琴からゲコ太モドキを引いたくって駆けていった。

「あつ、待てって！」

上条はもう一度少女の手を掴もうとするが、意外に素早い少女を捕らえることは叶わず、上条の手は虚しく空を切るばかり。

「あー、行っちゃまった。……オイ、いつまでフリーズしてんだよ御坂。オレらもさっさと行くぞ」

上条もまた、美琴の手を引き走り出した。

「ふう！粗方避難はすんだみたいだね」

小金井は軽く息を吐いた。

佐天に事情を聞かされ、避難誘導を始めたのが十分前。美琴に協力を仰いだとはいえ、この人数でこのスピードなら上々だろう。店員を含め、もうこの店には自分たち三人しかいないはずだ。

「ですね。私たちもさっさとこの店離れないと。避難誘導してた人間が避難しきれずにドカンじゃ笑えませんからね」

さらっとシャレに言っただけの佐天の顔にはうつすら汗が滲んでいた。クーラーがガンガン効いている店内の気温を考えると、暑さに因るものでないことは簡単にわかる。普段能天気な彼女とて、最悪の事態を考えてしまうと足がすくむのもムリはない。それでも、彼女は自分よりも他人の安全を優先した。

(勇気、あるなあ。怖いものから逃げないで戦ってる。オレだって最初はすっげえビビってたのに)

小金井は、暗殺部隊『麗』の一員になるための訓練を幼いころから受けていた。今でこそ自分より何倍も何十倍も大きな敵を相手どることができると、昔はただただ怯えていた。

『ムリだよオ。勝てっこないよ』

ひたすらに泣きじゃくって、紅麗に助けを求めている。

だが、佐天は違う。怖い、逃げたい、そんな気持ちを押し殺して、一歩間違えれば死ぬかもしれない状況で、爆弾という見えない恐怖に必死で抗っている。

そんな佐天が、小金井にはとても眩しく見えていた。

「お兄ちゃん」

幼い声が、自分を呼ぶものだと言うことに気づくのに数瞬の間を要した。見ると、ブサイクなカエル人形を抱えた少女がトテトテ駆け寄ってきている。少し遅れて、どっかの誰かを彷彿とさせるウニ頭の少年と、彼に手を引つ張られる御坂美琴も走っていた。

「どしたの!?? お兄ちゃん? に何の用?? お兄ちゃん? に!!

まだ避難出来ていない人がいたことなどお構い無しで、息を荒げて『お兄ちゃん』を連呼する小金井。これは彼が妹萌えだとかでは断じてなくて、単純に?歳上?として扱われることが嬉しいからだ。前の世界にいた年下の幼女には呼び捨てにされていたし。

「はいセンパイ、落ち着きましたよーねー?キミ、早く避難しないとダメだよ。ここは危ないんだから」

興奮冷めやらぬ小金井を押し退けて、少女に注意を促す佐天。が、少女は屈託のない笑顔を浮かべて小金井にゲコ太モドキを差し出した。

「ハイッ!メガネのお兄ちゃんが風紀委員のお兄ちゃんに渡してっ
て!」

その時、佐天は通話状態でポケットに突っ込んでいたケータイの存在を唐突に思い出した。

虫の報せ、というヤツだろうか。本当に、風が吹く時のように何の予兆もなく、だ。

「もしもし、初春?」

『あぁっ、やっと出た！佐天さん、落ち着いて聞いてください！』
落ち着けと言いながら、初春自身の声は上ずっている。呼吸するのを忘れたかのように初春は矢継ぎ早に叫んだ。

『犯人は現場の風紀委員を狙ってます！今度のターゲットは薫センパイなんです！！』

瞬間、カエル人形の顔がベコツと凹んだ。まるでその部分にだけとてつもない圧力がかかっているかのように。

小金井の行動は早かった。幾度となく死地を潜り抜けて来た彼は、人形に込められた強い殺気を感じ取って、それを彼方へ弾き飛ばして、庇うように少女を強く抱き寄せて、叫んだ。

「伏せるーーーーーッ！！！」

いち早く反応したのは、美琴だった。彼女は小金井の前に躍り出ると、弾丸となるコインを取り出すべく、ポケットに手を滑り込ませる。

（この距離じゃ逃げても間に合わない！）

だから、爆発する前に超電磁砲で撃ち抜く！

単純かつ効率的な策だった。

スピードは音速の三倍。命中率は百発百中。失敗する要素は一つもない。

……そう、思っていた。

だが、美琴は失念していた。どれだけ速い一撃も、絶対に外れない一撃も、弾丸の装填に失敗すれば全くの無力だということに。

緊張していたのか、はたまた焦っていたのか、或いはその両方か。美琴がしっかりと握っていたハズのコインは、無情にも彼女の手を滑り落ちた。

(しまっ……！)

刹那。轟音を響かせて、『殺意の爆発』が炸裂した。

其之肆拾：虚無の暴発？弱者の在り方（前書き）

ゲストとしてチヨロっとおの方々が出てきます。

其之肆拾：虚無の暴発？弱者の在り方

突如として爆音が轟き、爆風が店のガラスをコナゴナに吹き飛ばした。キラキラと日光を反射しながら降り注ぐ鋭いガラスの雨を、表通りを歩いていていた学生たちは必死で逃れる。

周囲は一時的にパニックに見舞われたが、我が身を傷つけるものがないとなると、喧騒も次第に止んでいった。被害者たちは一転、野次馬と化してセブンスミスト前に人混みを作り出す。

「何なのよ、一体？」

「結局、電気系統の不備じゃなかった訳？」

「どうやら最近超話題の連続爆破テロみたいですね」

「……南南西から信号をキャッチした。あの中にはまだ風紀委員も含めて何人が残ってたハズだよ」

こんな内容の会話が人混みのそこかしこから聞こえて来る。

皆がこれだけ落ち着いていられるのも、災厄が己に降りかかるなどとは微塵も思っていないからだ。

そして、その判断は正しい。

この爆発、並びに今話題の連続爆発事件の犯人である少年・介旅初矢は、たった今見届けた爆弾の威力に満足して、人知れず帰路にくところだった。

（いいぞ……ッ！今度こそ逝っただろう！）

薄暗い路地裏で、介旅は小さな、それでも確かな狂気を顕にして、口を三日月のように歪ませた。

「スゴイっ！スバラシイぞ僕の力！徐々に強い力を使いこなせるようになってきたッ！」

胸中の呟きが、思わず口をついて出る。別に、隠そうとも思わなかった。

「もうすぐだ！あと少し数をこなせば無能な風紀委員も」

その時、介旅は感じ取る。本能の奥底に直接刺激を与えてくる重苦しいプレッシャーを、自分をそのまま喰い殺してしまいそうなほどの恐怖を。

意識は自然と目の前へと推移する。誰もいないハズの、その場所に。

「随分と楽しそうだな？」

誰もいないハズの場所には、一人の男が立っていた。漆黒のスーツを身に纏い、素顔を隠すようにサングラスとガーゼで顔面の露出を減らしている。

それでも、男の放つ殺気は欠片も隠れていなかった。

切り裂きジャックだとか、人斬り以蔵だとか、『殺人鬼』と呼ばれた人間に出会った者はこんな感覚なのだろうか。足がすくみ、肩が震え、拍動が爆発的に加速する。

拳動の一つでも相手の気に障れば、たちまち物言わぬ肉の塊にされそうな気がする。というよりも、そうとしか考えられない。

介旅の肌に大粒の汗の玉が浮かんで来たところで、男は静かに介旅に言った。

「残念だったな。あの爆発で死人を出す算段だったようだが、生憎と死傷者は一人もないようだ」

男が介旅の背後を指差す。介旅が恐る恐る振り返ると、そこには、

「ヤッホー」

介旅のターゲットの少年が、死んでいるハズの少年が、それなのにカスリ傷一つない少年が立っていた。

「用件はわかるわよね、爆弾魔さん？」

少年と共に爆発に巻き込まれたハズの、常盤台の少女が立っていた。

「そんなバカなっ！！僕の最大出力だぞ！！」

信じられない事実には、介旅は思わずして叫んでしまう。それを聞いて少年と少女の顔が怪しい笑みを形作った。

「あっ、い、イヤ。外から見てもスゴい爆発だったんで……」

自身の失言に気づいて、吃りながらも、誤魔化しの愛想笑いを浮かべて、介旅は自分のエナメルバッグに密かに手を伸ばした。中身は大量のアルミスプーン。彼の能力『量子変速』シンクロトロンの種となる小道具だ。このまま能力を発動してスプーンを投げつける。そうすれば、風紀委員の少年は木端微塵に吹き飛んで、己の目的は達成される。

スプーンは既に介旅の手に収まった。後はコレを放るだけ。
だが、男はそんな介旅の行動を見逃しはしなかった。

男が人差し指を立て軽く手を振るうと、介旅の握っているスプーンが突如としてドロリと形を失った。

「ヒッ!？」

情けない声をあげながら、介旅は慌ててスプーンから手を放す。液状化するまで熱せられた金属が肌に付着すればヤケドでは済まない。スプーンはベチャツと地面に落ちて、その状態で固まった。

「悪あがきは止める。今度は貴様がこうなるぞ」

男の一言が、もう一度カバンに手を伸ばした介旅の動きを牽制する。

またか

介旅の中で、さまざまな感情がグルグルと巡る。落胆、絶望、恐怖、そしてそのどれよりも大きな 憎悪。

また、力のあるヤツに擦じ伏せられるのかッ!

音をたてて、何かガキれる。介旅は乱雑な所作でバッグに手を突っ込むと、スプーンを7、8本同時に掴んで引っ張り出した。

「オマエみたいなヤツがいるからいけないんだ!オマエみたいなヤツが僕たち弱者を虐げるから、こんなことになるんだ!」

いつだって、そうだ。

街を歩いていたら云われのないインネンをつけられる。
クラスの奴らに、サイフと言われて金をむしり獲られる。

力があれば、こうはならなかった。

ケンカを売ってくる不良は片っ端から叩き潰すし、カツアゲをする
ような輩には制裁をくわえてやる。

「僕を救えなかった風紀委員なんて消えればいいんだ！僕なら救え
る、僕を救えるんだッ！！」

自分の言葉は正しい。正義を振りかざして何もしいない風紀委員なん
かよりよっぽど正しい。

そう思っていた。なのに、だというのに。

「くだらんな」

男は、それを鼻で笑い飛ばした。

「要するに貴様は、臆病だったただけだろう。立ち向かうことを恐れ
て、絶対に自分のキズつかない道を選択したワケだ。他者を……犠
牲にしてな」

介旅の頭に血液と怒りが昇ってくる。介旅は感情に身を任せたまま
怒り狂った。

「黙れっ！僕は臆病なんかじゃない！力さえあれば、オマエなんて
いつだって「だったら」

男が、介旅の言葉を遮った。

「だったら、何故そうしない？」

一拍の間をおいて、男は紡ぐ。

「風紀委員を狙うなどと回りくどい手段を使わずとも、貴様のその能力で貴様の言う『強者』を潰せばいい。貴様にはそれだけの力がある。なのに、何故そうしない？」

介旅からの返答はない。

「結局、貴様は何一つ変わってはいないよ。本当に憎い相手からは尻尾を巻いて逃げるクセに、自分を守ってくれようとした風紀委員には難癖をつけて牙を剥く。弱者ですらない、敗者だ」

『オレは teme エなんかちつとも怖くねえぞ！』

絶望的な実力差を前にしても、アイツは諦めなかった。殺されそうな状況になっても、アイツは拳一つで闘った。力など関係ない。ただ、大切な少女のために。

それが、？強さ？だ。

「違うツ！僕は敗者じゃない！僕は、僕は………！」

認めない、認められない。認めてしまえば何かが終わってしまうような気がした。

だから、介旅は叫んだ。意固地になって、男の言葉を否定した。

男は、微かに笑ってこう言った。

「ならば、試してみるか？貴様の持っている？力？とやらが一体どれ程のものなのか。この私に向けて放ってみるがいい」

この言葉で、『学生ではない紅麗が超能力を使っている』ことに絶句し思考が停止していた美琴が再び口を開く。

「ちょっとアンタ何言って……！」

が、言い切る前に隣に立っている小金井が手でそれを制した。

「ダメだよ、美琴ちゃん。それに、兄者なら大丈夫」

美琴には小金井の言葉が理解できなかった。

『大丈夫』 何の根拠があつてそう言える？ 喻え紅麗が超能力を使えたとしても、あれ程の一撃を防ぐことは容易ではない。それこそ、『超能力者（LEVEL5）』でもない限り。

紅麗はなおも介旅を挑発し続け、介旅はそれに反発し続ける。

「どうした？やはり貴様は敗者か？」

「……違う、ヤメロ」

「違わんな。私を恐れて動けなくなる……敗者の証としては十分すぎるとは思わんか？」

「……僕は敗者じゃない……恐くなんてない」

「いいや……貴様は敗者だよ。敗者であり、臆病者であり、救いよ

うのない……？悪？だ」

僕は、？悪？なのか？ただ傷つくのが怖かったただけなのに……
ただ傷ついたことに苛立ったただけなのに……

ああそうか、と介旅は理解した。

己の行いは悪だ。

己の行いは臆病風に吹かれた故だ。

己の行いは……他者を傷つけ、それを正義だと思い込んでいた己の
心は……何者よりも愚かな 敗者のものだ。

介旅の理性は脆く崩れ落ちた。

「う……があああああああ！！」

演算を開始する。数日前の介旅では考えられないような速度と処理
能力によって、彼の右手に収まっていた七本のスプーンは全て凶悪
な爆弾へと変質した。

それらを全て、紅麗の方へと投げつける。出力調整に拠る爆風の方
向指定は済んでいる。術者自らが爆発に巻き込まれるようなマヌケ
な結末には決してならない。

瞬間、眩い閃光が炸裂し、凄まじい轟音と衝撃が大気を震わせた。
紅蓮の熱風は黒いスーツの男を確かに呑み込んだ。

なのに。

「その程度か」

一瞬で爆炎は霧散し、白煙は消滅する。その中に立っていた紅麗は、全くの無傷。

サングラスとガーゼが吹き飛んでいるものの、スーツにも彼自身にもホコリー一つついてはいない。

美琴は二つのことに絶句した。

セブンスミストのワンフロアを吹き飛ばすような爆発をマトモに受けて、ノーダメージの紅麗に。

そして、その紅麗の左目を覆うようにしてついた、大きな大きな古いヤケドの跡に。

「……？力？を欲するということは、間違いではない」

紅麗は、介旅の下へ歩み寄る。

「どれだけ崇高な理念も、立派な志も、それを叶えうる？力？がなければ絵空事でしかない」

地面を踏みしめるザリ、ザリ、という音が、先ほどの轟音よりも大きく、クリアに聞こえる気がした。

「だが、履き違えるなよ？？強者？が生きるとは、決して容易なことではない。？力？を持つのなら、覚悟しろ。悪意も善意も、全てを黒く塗り潰さねばならんこともあるのだからな」

紅麗にとっての？力？とは、己が生き延びるための『糧』であると共に、己を、そして大切な人を蝕み続けた『病』でもあったのだ。

？力？がなければ、自分と母が迫害を受けることはなかった。

？力？がなければ、愛する人が悪魔に命を奪われることはなかった。

だが、それでも紅麗は止まらない。そこで止まってしまえば、紅麗のために生きて死んだ者の思いを無下にすることになってしまうのだから。

紅麗は茫然と立ち竦む介旅の目の前で立ち止まると、

「それを知って、身の振り方を考えた上で、もう一度這い上がってこい」

介旅の脳天に、強烈な拳骨をお見舞いした。幾分加減したとはいえ、それでも其処らの体育教師よりも数倍重い一撃に、少年はもの見事に昏倒した。

「い……生きてるわよね？」

「当たり前だ」

恐る恐る尋ねる美琴に、紅麗はさも当然のように答える。が、あれだけの爆発を受けてピンピンしているような人間の言葉では説得力などカケラもない。

結局、自分で生体電気の流れを確認し、安堵の息を吐いた。

「……はあ、全く心配させないでよね。こっちの心臓が止まりそうになったわよ」

「そーそー、あんまりムチャしたらダメだよ。烈火兄ちゃんじゃあるまいし」

「……やっぱりアイツそういうタイプなのね。ナニ？ウニ頭ってムダに熱いって法則でもあんの？」

不要な心配をかける二人の言葉には耳を貸さず、紅麗はじつと精神を研ぎ澄ます。

彼が鋭敏に感じているのは、殺気。先ほどからずっと自分をつけ狙う、どす黒い感情。

「薫、後は任せた。私は少々用事ができた」

「えっ、ナニが……って兄者あ!？」

小金井の返事も聞かずに、紅麗は消えるように駆けていき、手頃なポリバケツを踏み台にして大きく飛び上がった。

たった一度の跳躍で、20メートルほどあった建物の最上階までの距離はゼロとなる。

屋上へと降り立った紅麗を、一人の男が待ち受けていた。

紅麗がずっと感じていた殺気の発信者であったその男は、白い髭を蓄え、古びた道着や袴を纏い、履き物は草履と、科学の街には似つかわしくない風貌であった。

まるで『仙人』のような姿形をしているが、神聖さなどは微塵も感じない。男の心は野心と物欲が溢れ、醜悪な笑みは蛇蝎の如し嫌悪感を覚えさせる。

「久しいのオ、紅麗」

男の名は幻獣朗。

元麗十神衆の一人であり、元裏麗の一員であり、そして紅麗たちをこの世界へと招いた張本人であった。

其之肆拾：虚無の暴発？弱者の在り方（後書き）

なぜだろう。上条さんはあんなに動かし難かったのに、美琴は結構扱い易い。

なぜだろう。紅麗様サイドはもっと短くするはずだったのに、思いの外長くなりそう。

其之肆拾巻：狂幻師は告げる

「これはまあ……なんとも酷い有り様ですこと」

爆発事件の現場にいち早く到着した風紀委員の白井黒子は、その惨状を目の当たりにして思わずそんなことを口走った。

数日前に自分が店を訪れたとき、店内は小綺麗に整えられ、ホコリの一つもなかった。

それが今や見る影もない。床のタイルは根こそぎ剥がされ、爆心から広がるようにして黒い焦げがフロアー全体を覆い尽くしている。陳列されていた商品も全て炭化してしまっただらしく、これまた真っ黒なマネキンや陳列棚が虚しく転がっていた。

が、黒子が本当に目を疑ったのはそんなある種？当たり前？な結果に、ではない。それよりも、

（なんですの？床についたこの不自然な焦げ目のような痕は）

黒子の足下には、まるで放物線を描くようにして、床が黒焦げの部分と全くの無傷の部分との、境界線が生まれていた。

爆心と放物線の頂点との距離は20mとあったところだ。

（佐天さんは、きっとお姉様が守ってくれたんだ、と言ってましたの。小金井薫という人も、一緒にいた高校生も無能力者らしい、とですが……一体どのように能力を使えばこんなことになりますの？）

美琴の能力で爆弾から身を守るには、方法の一つ。超電磁砲で爆発前に消し飛ばすのみ。だが、それに成功していればそもそも爆発は

起きていない。

なら、若干照準がズレて爆弾の少し手前に着弾し、爆弾が遠くに弾き飛ばされた可能性は？答えは『0%』だ。ワンフロアー丸ごと吹き飛ばすような一撃を、少し逸らしたくらいで凌げるハズもない。それに、仮にそうでも、床についた放物線の説明がつかない。

（果たして偶然か、必然なのでしょうが……）

いくら考えたって、一向に答えが見つかる気配はなかった。

いつもの公園の、いつもの自販機の近くの、いつものベンチに腰掛けて、美琴はぼんやりと考えを巡らせていた。身を焦がす灼熱の日射しも、今の彼女はほとんど感じてはいなかった。

現在、黒子の頭を悩ませているものの正体を、美琴は知っている。といっても、もちろん美琴の能力などではない。そもそも、美琴はあの時コインを取り落とし、能力を発動仕損じたのだから。そう。美琴や少女たちを守るため、フロアーを丸ごと発破するような一撃を防いだものの正体は……

「あーあ、事情聴取とかで時間喰っちゃった。今日は特売だったのに……不幸だ」

コイツだ。

バカみたいなことをぼやきながらバカ面引っ提げて歩いてくるバカ。コイツが爆発から自分たちを守ったのだ。

美琴はコラリと立ち上がると、自分をスルーして目の前を通過しようとする上条の前に立ち塞がる。

「ちょっとー。相も変わらずシカトしてんじゃないわよ。アンタはそんなに私と関わりたくないのかしら？」

「ウゲ、ビリビリ……自覚してんじゃねーか」

上条のイヤミに対する美琴の返答は、超強力な電撃の槍。常日頃から出会うたびにそれを喰らわされそうになってる少年は、最早美琴が予備動作に入った時には右手を突きだし、電撃を打ち消す体勢に入っていた。

介旅の仕掛けた爆発を防いだ時と同じようにして。

(コレが……この能力がっ！)

昨日の決闘でも、それ以前からずっと続けてきた小競り合いでもそうだった。

電撃も、砂鉄の剣も、美琴の能力はすべからく上条に無効化されてきた。

正体不明のこの能力によって。

「こん……のおっ!!」

白い電光が上条を襲う。が、電撃の槍はまるで避雷針に吸い込まれるようにして少年の右手にぶつかって、雲散霧消してしまった。

「危ねえな teme! 出会い頭に電撃とはどういう了見だよ チクシヨ

ウー！傷心の上条さんにトドメを刺す気が！！」

至極真つ当な文句を並べ立てる上条。心なしか、トレードマークのウニ頭が怒りでいつもより尖っているように思える。

「るっさいわね。いーじゃない別に！アンタ電撃効かないんでしょ！」

「そーゆー問題じゃねえんだよ！直接喰らわなくても、ケータイは壊れるわ卵は全滅するわで散々なんだよ！！」

いがみ合う二人。別段、珍しくもない光景だ。

いつもと変わらない。いつもと何一つ変わらない。

美琴と下らない言い争いをする時も、美琴をからかう時も、四人の命を救った後だって、少年は？いつも？とまるっきり同じだった。

「……………いいの？」

不意に、声のトーンを落として美琴が尋ねる。

質問の意味を理解出来ない少年は、短く聞き返した。

「……………ハイ？」

「みーんな私のお陰だって思ってるみたい。今名乗り出れば、アンタヒーローになれるわよ？」

美琴の記憶が正しければ、上条当麻は『無能力者（LEVELO）』
。この学園都市では、名声とも富とも最もかけ離れた存在だ。

だが、もしも上条が『佐天らを守ったのは自分だ』と名乗り出て、

それが実証されれば、彼はそんな生活とはオサラバだ。
少なくとも、分不相応に卵の特売で悩むようなことはなくなるだろ
う。

『LEVELE5を打ち負かす男』として、ある程度は実力に見合っ
た評価を得られるだろう。

なのに。

「はあ？ ナニ言ってるんだ、オマエ」

ソイツは、鳩が豆鉄砲喰らったような顔でそう言った。美琴の言葉
が全くの予想外だったという風に。

美琴は最初、こう思った。『まさかこのくらいの事にも考えが及ば
ない程にバカだったのか？』と。

「全員無事だったんだから、それで何の問題もねーじゃんか。誰が
助けたかなんて別にどーでも良いことだろ」

美琴の考えはたったの二秒で改められた。

コイツはバカなんかじゃない。救いようのないバカなんだ。目
の前に困ってる人がいたら、無我夢中に右手を伸ばす、そんな大馬
鹿野郎なんだ。

「話はそんだけか？ 上条さんは騒がしい隣人共と野暮用があるんで
失礼しますよーっと」

手をヒラヒラ降って、スタコラ去っていくウニ頭。その背中が米粒
くらいのサイズになるまで見送ったところで、

世の中には幾らでも存在する。そうでなければ、戦争なんてものはとっくの昔に消えて無くなっているだろう。

だけども、アイツならなんとかしてくれる気がした。下らない価値観や型にはまった道理なんて、そんな幻想げんじつはぶち殺してくれるような、そんな風に思えた。

そして、紅麗はそんな上条と全くの対極に存在する。

『?力?を持つのなら、覚悟しろ。悪意も善意も、全てを黒く塗り潰さねばならんこともあるのだからな』

まるで世の不条理を全て知っているかのような言葉を、美琴の脳が再び反復する。

紅麗の言葉も、あの大きなヤケドの痕も、美琴の脳裏に焼き付いたまま、消えずにずっと残っていた。

季節は夏。それに相応しく、400平方mほどのその空間は、照りつける太陽によって熱せられ、火にかけた鉄板のようなとてつもない灼熱の地に変貌を遂げていた。

だが、物理的な気温は40 を上回りそうなその空間は、凍てつくような殺意の渦に呑み込まれていた。殺意をぶつけ合うのは二名。

紅麗、そして幻獣朗だ。

紅麗が、微かに口元を歪めて言葉を発す。

「ククク……相も変わらず愚かなことだな幻獣朗。意地汚い物欲にまみれた貴様の殺気を、この私が見落とすとても思ってたか？」

同時に発せられるのは、アイスピックのように鋭く尖った殺意の念が、常人なら一瞬で射殺されてしまいそうなほどに凶悪な気も、幻獣朗は軽くいなして口を開く。

「僕とて貴様をそこまで見くびってはおらぬ。仮にも一度は完敗を喫した身。貴様の強さは僕もよく知っておる。烈火ごときに敗れたのが、未だに信じられぬわ」

「その？烈火ごとき？に左腕を斬り落とされた分際で、大口を叩くな。ヤツは強い。貴様らザコが束になってかかったところで、一秒で灰にされるのがオチだ」

紅麗の反論に、幻獣朗は愉快そうに口角を吊り上げた。

「クヒヒヒヒ……『殺したいほど憎い相手』を、随分と買っておるようじゃのう？あの紅麗も丸くなったものじゃ」

それは、嘲笑だった。以前の臆病で小狡い翁からは考えられない。紅麗を前にしての、大胆で不敵な余裕の笑み。

「いや、元の姿に戻った、と言った方が適切か？反目しあっているも、貴様も烈火も根っこは変わらぬ。愚直で愚鈍なお人好しじゃよ。そして、そんな貴様らに追従する者共も愚かの極みよ。烈火には火影、そして貴様には……音遠たちか」

己が最も信頼した者の名を、幻獣朗のように劣悪な人間が口にしたことで、紅麗の顔が不快感を露にする。それに気づかずか、それと

も気づきながらもわざとなのか、幻獣朗の饒舌な口は休まず動き続ける。

「思えばきやつらも哀れよのう。貴様のために命を賭しても、報われることはなかった」

「黙れ」

低く、押し殺したような声で紅麗は呟いた。しかし、それでも幻獣朗の口を縫い止めることは出来ない。

「音遠は二度も儂を仕留め損ね、雷覇は風子の小娘に敗北した。そして磁生は　笑いが止まらんかったわい。？アレ？の無様で滑稽な死に様にはのう」

瞬間、両者の間合いはゼロになり、炎を纏った紅麗の手刀が幻獣朗の首を焼き斬っていた。

「『黙れ』と言った」

男の声色にハッキリ混じった一つの感情。仲間を侮辱されたことへの？怒り？だ。

怒りの一閃を喰らい胴から分断された老人の首は、ゆっくりと宙を舞い、地面に落ちると同時に霧のように消失した。数瞬遅れて胴体も消え去る。

「感情表現が上手くなったものじゃのオ。それも烈火から学んだことか？」

背後からの掠れた声を、紅麗の耳は確かに捉えた。本来ならあり得

ないような現象にも、紅麗は取り立てて驚くことはない。何故なら、彼はそのトリックを知っていたから。

「…………『別魅』か」

「貴様ほどの男がこうも容易く欺かれるとはの。くく……………気を落とすことはない。この術の祖は儂じゃ。儂が貴様よりも熟練させておるのは道理よ」

己と全く同じ姿形をした分身を生み出す術。それが別魅。この術のお陰で、幻獣朗は音遠の処刑から逃れたこともあった。

「まあ、そう急くな。今日はただ、貴様に伝えることがあって現れたまですよ」

「伝えることだと……………？」

「左様。なに、大したことではない。貴様と火影、そしてこの学園都市への 宣戦布告！」

もう一度、全てを引き裂く炎の手刀が幻獣朗を絶命させるべく振り抜かれた。しかし、それを予測していた老人は軽やかな動作で背後に跳んで、かわす。

何事もなかったかのように、幻獣朗は続けた。

「これは、天堂地獄の大いなる意志だ！何人たりとも拒むことは出来ない！」

幻獣朗は叫ぶ。天に向かって、そこに存在するかも知れない『神』に向かって。

狂笑は、いつまでも続いた。

其之肆拾巻：狂幻師は告げる（後書き）

はい、というワケでアンケートの結果はカガヤさんの『ヘル・ミュージアム幻魔機関』
となりました！

カガヤさん、その他の皆さん。本当にありがとうございました！こ
れから先もご協力いただけますよう、お願いいたします！

其之肆拾貳：調査開始（前書き）

この話に出てくる『白髪の男』は、超電磁砲で黒子をボコってたヤツです。セロリータさんではありません。

あと、キャラクターインタビューもずっと募集してるんで、気が向いたら好きなキャラをどうぞ。つまらないからやめろ、とか言っちゃイケナイ。

其之肆拾貳：調査開始

学園都市郊外のとある研究所の仮眠室。たくさんの観葉植物に囲まれたその場所で、永井木蓮は覚醒した。

ベッド代わりに利用している大きめのソファからゆっくりと起き上がる。寝起き特有のノドの渴きを感じた彼は、すぐ側のデスクに置いてあったミネラルウォーターのペットボトルに手を伸ばし、口の中に流し込んだ。

「……なんだよ、まだ六時じゃねエか」

デスク上のデジタル時計を見て、低い声でボソリと呟いた。別に苛立ったワケではなく、単純に感嘆が漏れただけの話だ。

？この体？になってからもうすぐで一ヶ月になる。初めは色々と苦労もあつたが、今となっては便利なものだ。まず、食事と睡眠がほとんど必要なくなった。水と日光さえあれば、おそらく二週間は生き延びられるだろう。

痛覚もほとんど消え、四肢を千切られてもすぐに再生する。

それが『人間を辞めた』という証であることも、彼にとっては些細なことだ。

木蓮には『目的』があつた。幻獣朗の傘下にいるのは、利害が一致したからに過ぎない。そしてそれは木蓮に限つた話ではなかつた。キリトも、他の二人もそうだ。

唯一幻獣朗に忠実な門都にしても、ほとんど洗脳と同じだ。瀕死の状態で見つかったあのケモノは、幻獣朗の？治療かいぞう？を受けた。破壊と殺戮を繰り返す裏麗最強の戦士は、幻獣朗の？飼犬？と化してしまつた。

もつとも、幻獣朗の被験者となつたのは木蓮も同じだ。

ウエポンドームの崩落に巻き込まれた木蓮が発見された時、彼はまさに？ズタボロ？だった。内臓のほとんどはグシャグシャに潰れ、左腕以外の四肢は骨と肉を磨り潰されて再起不能になっていた。

それほどまでに凄惨な状態に追い込まれても、彼は生きていた。幻獣朗に洗脳を施されそうになっても、彼は自我を失わなかった。

木蓮の意識を繋ぎ止めたのは、彼の持つ『目的』。即ち 火影の抹殺。

『土門だけは殺すな』という？仲間？の言葉など関係ない。全員この手でバラバラの肉塊に変える。木蓮にとって、それはもはや使命とも言えた。

「待ってる、見せてやる。糞ムカつく火影の糞共をバラバラのぐちゃぐちゃにしてやる。見てろよ 命」

死ぬまで己を愛し続けたバカな女に向かって、木蓮は誓った。

「うーむ」

風紀委員一七七支部。パソコンのディスプレイを睨みながら年頃の乙女らしからぬ唸り声をあげるのは、同支部のエースかつ問題児・白井黒子。

そんな彼女に、隣でディスプレイを覗き込んでいた美琴が尋ねる。

「どう？何かわかったの？例の『レベルアップ幻想御手』とかいうモンについて」

幻想御手。

使用者の能力レベルを上げる魔法のアイテム……らしい。というのも、美琴と黒子も今日佐天に聞いてその存在を知ったばかりなのだ。黒子はワシヤワシヤ頭を掻きむしりながら答えた。

「なかなか見つかりませんの。……そもそも、ホントにそんなモノがあるんですの？こう言ってはなんですが、佐天さんの言ったことがそこまで信頼出来る情報とは思えませんの。ご本人だって、タダのウワサだと言っておられましたし……」

「『火の無い所に煙は立たぬ』って言うでしょ？それに、そうじゃないと昨日の介旅とかいう爆弾魔の能力に説明がつかないじゃない」

介旅初矢　昨日、虚空爆破事件の犯人たるこの少年に関する驚くべき事実を黒子は発見した。

それは、介旅の能力強度。セブンスミストのワンフロアを丸ごと吹き飛ばすような威力を誇る彼の能力が、『バンク書庫』によればたったの異能力（LEVEL2）、つまり日常生活でも役に立たない程度だと記録されていたということだ。

美琴の見立てでは、あの能力は確実に大能力（LEVEL4）クラスだったという。

書庫のデータとの食い違い。考えられるとすれば、システム・スキャン身体検査から事件を起こすまでに急激な成長を遂げた可能性。だが、コレは限りなく低い。

身体検査が行われるのは、学校によって誤差があるものの、大抵どこも七月に入ってからだ。さらには、虚空爆破事件が最初に起きたのは今から十日ほど前のこと。僅か一週間以内に強度が二つも上がるなど、考えられない。そうになると、幻想御手によるドーピングを行った確率は俄然高くなる。

「ま、なんにせよウワサの真相は確かめておきたいしね！」

そう言つて力強く拳を握る美琴。いつものことながら、この溢れんばかりのフロンティアスピリッツはなんなのか、と黒子は頭を抱えながらマウスを操作する。

カチカチと、時計が針を動かすように、クリックの音がしばらく一七七支部の部屋に響く。

と、黒子はそこで発見した。

「んん？……ありましたわよお姉さま！」

有益な情報というヤツを。

黒子に呼ばれて、美琴も画面をじっと見据える。そこは掲示板だった。

その中に幾つか見られる一つの単語　幻想御手。黒子と美琴が探し求めている魔法のアイテムだ。

「ビンゴ！うわ、ラッキー　実名で書き込んでるヤツばっかじゃん」

ネットの利点の一つである匿名性を自ら殺すネット初心者たちに感謝しながら、美琴は黒子を促した。

「黒子」

「わかってますの」

言われるまでもない、という風に短く返して、黒子は画面をスクロールさせていく。

目的とする書き込みはすぐに見つかった。

「……ありましたわ。今夜七時にファミレス『ジョナサン』に。どうやらここに書き込んでるのは全員知り合い同士のようですの」

「よし、直接乗り込んで情報聞き出すわよ!」

「んなっ!?!」

唐突に叫ぶ美琴に顔を引き吊らせた黒子は、すぐに反論に転じた。

「ダメですよっ! いつもいつも言ってるでしょう! 民間人が風紀委員の「まーまー聞きなさいって!」

がなりたてる黒子の口を美琴がガシツと防ぐ。彼女はこう続けた。

「覆面捜査ってヤツよ。私がネコ被ってそいつらから幻想御手に関する情報を引き出す! 黒子は風紀委員だし、面が割れる可能性が高いからね」

確かに効率的な手段には違いない……が、黒子の懸念事項はそんなことではない。

「お姉さまにそんな我慢強いマネができますの? 途中でキレて不良

共を黒焦げにする未来が、黒子にはハッキリと見えていますわよ？」

「ぬぐ……言うじゃない」

凶星を突かれているだけに、美琴に反論の余地はなかった。このままではこの件から手を引かねばならなくなる。

そう悟った美琴は、咄嗟にこんなことを言った。

「だったら付き添いを連れていくわ！私が熱くなったらそいつに宥めてもらったら良いのよ！」

美琴的にはこれ以上ないほどに機転を利かせた打開策も、鼻で笑い飛ばす黒子。

「はんっ、お姉さまに意見出来るような強者が、お姉さまのご友人にいた記憶はありませんけど。行っておきますが、佐天さんや初春はダメですよ？これから行う調査は危険なもの。不良くらい軽くのすことが出来る方でないと、同行は認められませんわ」

的確に美琴の進路を断っていく黒子。

美琴の友人で高い戦闘力を持つのはおそらく自分くらい。まさか婚后光子を呼んだりはいしないだろう。そんな風に、タカをくくっていた。

だが、美琴は不敵に笑う。

「ふっふっふっふー！残念だったわね、黒子！私にはちゃんとおるわよ。『強くて私を止められて信用に足るヤツ』のアテがね！」

美琴は大袈裟に胸を張って声高らかに宣言した。

黒子は焦りながら叫ぶ。

「そつ、そんなっ！？まさかお姉さまと婚后光子の間にその様な繋がりか！あんな女をお姉さまに近付けてしまうなんて、白井黒子一生の不覚ですのおおおッツ！！」

あまりのショックにエクソシストのようなポーズでシャカシャカ室内を駆け巡る。が、美琴は落ち着いた様子で、

「え？婚后さん？違う違う。私、あの人とはほとんど話したこともないわよ」

ピタッ！と黒子の動きが停止した。首だけギチギチと美琴に向けて、黒子は尋ねる。

「……ホントですか？」

「ウンなんてつかないわよ」

「では一体誰が？」

美琴に近い存在で、さっきの条件を備えている人間など黒子にはもう思い付かない。それなのに、美琴は余裕綽々といった様子で自慢のゲコ太ケータイを操作している。

電話帳で、探していた名を見つけた美琴は手を止めて、

「これを見よーっ！！」

ズビシツとそれを黒子の眼前に突きだした。そこに書かれていた名は 佐天涙子。

夕陽が街をオレンジに染めるころ、ガサガサと、ミンチ肉やらタマネギやらが詰め込まれた白いビニール袋を揺らしながら、肩に大きめのエナメルバッグを引つ提げて、小金井薫は帰路につく。

今日は珍しく佐天や初春と一緒にではない。というのも、初春は風邪でダウンし、佐天は看病のために先に帰ったからで、仕方のない話であった。

「って、ありゃ？オーイ涙子ちゃん！」

と、ふと前方を横切る友人を発見、声をかける。向こうもこっちに気づいてパタパタと嬉しそうに駆け寄って来た。

「どしたの？飾利ちゃんのカンビョーは？」

「ゴハン食べてお薬飲んだら寝ちゃったんで、夕飯だけ用意して来たんです。熱もいい具合に下がってましたし。先輩はお買い物ですか？」

「そだよ。朝チラシで見たらこの近くのスーパーが安かったんだ！」

二へー、と屈託なく笑って右手の袋を掲げて見せる小金井。

それから二人は他愛ない話をしながら共に歩く。完全下校時刻が近いためか、次第に辺りの人影が少なくなっていく。もっとも、一時間や二時間過ぎた程度なら基本的になんのオトガメもないため、馬鹿正直に帰宅するのは小学生以下の子供が相当なマジメちゃんくら

いのものだ。

「イヤーそれにしても昨日は色々タイヘンでしたね。私、事情聴取なんて初めて受けましたよ！」

「オレもオレも！でもカツ井は出てこなかったね〜」

「またベタなセリフを……先輩って、小さいワリによく食べますよね。てゆうか、よく食べるワリに小さいですよね」

「あー、またバカにされたあ！いいモン、なれたモン！その程度ぢやキズつかないモン……グスッ」

（泣いた先輩も可愛いナア）

すっごい今更ながら、佐天は自身の中でDSの扉が開かれていくのを感じた。むしろ常に全開なのだが。

ともかく、ずっとメソメソされているワケにもいかないので、適当にフォローを入れて立ち直らせる。単純なモノで、一分間ほど褒めていたら勝手に機嫌を直してくれた。

（こーゆートコモ子供っぽいんだよねー）

笑って、泣いて、怒って。わずか数日の間に、一体小金井の表情をどれだけ見ただろう。歳上相手におかしな話だが、佐天にとって小金井は弟のような存在だ。実家に暮らしている実弟と全く変わらな
い。
なの。

昨日はなんだかカッコ良かったなあ。

野良犬を救った時に見せた表情。少女を庇うように抱いた動作。不覚にも、ちよつとだけ見直してしまった。

「ちゃん。涙子ちゃん？」

「ふえっ！？ ななな、何ですか！？」

名前を呼ばれて動揺してしまう。

小金井は小首を傾げながら彼女の背後をスツと指差し、

「寮、過ぎちゃったよ？」

「あっ……」

佐天は自分の顔が紅潮するのを感じた。なんだか知らないが、異様に恥ずかしかった。慌てて振り返り、ソソクサと立ち去ろうとする。

「アハハハ、それじゃ先輩！ また明日ー！」

「あっ、危ないよ！」

小金井のそんな声が聞こえた瞬間、佐天は体に大きな衝撃を受けてよろめいた。

「きゃっ！」

短い悲鳴を上げて、アスファルトに尻餅をついてしまう。見上げると、後ろにたくさんの仲間を引き連れたガラの悪い白髪男が、鬼のような形相を向けていた。着ているシャツに、ベットリとアイスク

リームとオマケにコーンまでくっ付けて。

「……ナニしてくれてんだ糞餓鬼」

おそらく、自分がぶつかつたせいで彼の持っていたアイスが服についてしまったのだろう。全面的にこつちが悪い。そう感じた佐天は、立ち上がって頭を下げると、誠心誠意に謝罪した。

「ごっつ、ごめんなさい！本当にごめんなさい！！」

「ゴメンで済むと思つてんのか！……どーしてくれんだよ、この服高かつたんだぞ？洗つても落ちねエだろーし、こりゃ弁償だな」

「あつ……は、はい！おいくらですか？」

「んー、そうだな。オレへの慰謝料含めて……占めて二十万つてトコだな」

「なつ……！！」

どう考えてもおかしい。たかだかアイスをくっ付けたくらいで、そんな大金は発生しない。そもそも、男のシャツがそんなに高級品には思えなかった。昨日セブンスミストに行った時に、セール品のワゴンに同じようなシャツをたくさん見かけた。

佐天の不満が弾けた。

「ちよつと待つてよ！二十万なんておかしいじゃない！それに、そのシャツそんなに高くないでしょ！！」

「あ？」

態度の悪い返事の直後、男の平手が佐天の頬を打った。佐天の体が

もう一度、アスファルトの上に崩れ落ちる。
男は佐天の髪を掴んで頭を持ち上げると、

「生意気言ってるじゃねーよ。オレが『払え』って言ったら、テメーは黙ってサイフ差し出せ。どうせテメーも無能力者だろ??この街?じゃ、無能力者は虐げられてナンボなんだよ!」

取り巻きの一人が、下品な声で笑いながら佐天の下へ歩み寄る。

「へへへ、そーゆーことだ。なんなら、オメーが体で払ってくれてもいいんだぜ?」

そう言つて、佐天のセーラー服に手を掛けようとしたその時、

「ボーン」

「グゲツ!?!」

小金井のドロップキックがソイツの顔面にクリーンヒットした。小柄とはいえ、一人の体重が乗った蹴りを喰らった男はキレイに吹っ飛んで、後ろにいる仲間たちのところに突っ込んだ。

「まーったく。ダメだよ、兄ちゃんたち。女の子に乱暴したりして、烈火兄ちゃんだったらぶちギレてたよ?だいたい、自分たちだって余所見しながら歩いてたじゃん」

「……っナニしゃがんだクソチビ!」

仲間をやられて激昂した一人が、小金井めがけて渾身の拳を繰り出す。そのままいけば小金井の顔面を捉え、小さな体を吹っ飛ばすことができただろう。

しかし、そんな体重差のある重いパンチを、小金井は軽く片手で受け止めた。

「んなあつ!？」

「全然ダメだね。月白でももうちょっとマシなパンチ打てたよ」

小金井の拳が、男の鳩尾に突き刺さる。体躯に見合わぬほどに重く、鋭い一撃で、男は苦しむ間もなく意識を失った。

男を軽々放り投げると、小金井は可愛らしく笑って、残った三人の不良に問いかけた。

「どう?まだやるっ?」

返答は、ない。その代わりに、不良の一人は近くを通った清掃ロボに手を翳す。すると、まるで見えざる巨大な手に掴まれたように、重たい清掃ロボが宙に浮かんだ。

(ミスター・マリック!?!……いや、テレキネシス『念動力』ってヤツか)

下らない思考を止めて、目の前の鈍器がどう動くか、そのみに意識を集中させる。流石の小金井もあんなモノをマトモに喰らって無傷ではられない。

「?アレ?、使おっかな」

呟いてから、小金井は、肩から提げていたエナメルバッグのジツパを開き、その中に手を突っ込む。

同時に、空中で待機していた巨大な鉄の塊が動き出す。

物理法則をねじ曲げる力によって操られた清掃ロボが、小金井を叩き潰さんと猛然と迫り来る。もはや、避けきれぬ距離ではない。

「先輩！危ない！！」

喉が裂けんばかりの佐天の声が、小金井の耳に届いた。

小金井は、一瞬だけ横目で佐天を眺めると、優しく微笑んだ。その笑顔は、言外に佐天にこう伝えた。

『大丈夫だよ』

瞬間。小金井の手が振り上げられると同時、一筋の閃光が見えたかと思うと、清掃ロボが真つ二つに引き裂かれた。

二つに分かれた金属のボディは勢いを失って、ハデな音と共に地面に激突する。バチバチと、危険な音をあげるその切り口はとても美しい。

そこで、佐天と不良たちは気づいた。

小金井の手から、まるで天を指すように掲げられたその武器に。

美しい金色に、薙刀のようなその形。錬金術に隕鉄まで用いて作られた金属の体は、決してキズつくことはない。

小金井薫の持つ、唯一にして最高の相棒。

己の手足の一部ともいえる魔導具を一瞥したあと、小金井は敵を見据えて相棒の名を呼んだ。

「さあ、行くよ 鋼金暗器！！」

其之肆拾参：無能のチカラ（前書き）

久々の戦闘描写。上手く書けたかな？

其之肆拾参：無能のチカラ

「小金井薫、いつきまーす！」

力強く地面を蹴って、小金井は風のように駆ける。その両手に携えるは、全てを斬り裂く金色の刃。

小金井は猛スピードをそのままに、鋼金暗器で地面を斬りつけた。

「ぐあつ！？」

砕け散ったアスファルト片が散弾となって、予備動作に入っていた念動力者に降り注ぐ。男が怯んでこちらに向けていた手を下ろしたスキに、小金井は鋼金暗器の柄でその顎を跳ね上げた。

鋼鉄よりも硬い一撃をマトモに喰らった男は、昏倒してアッサリ崩れ落ちた。

もうこの男は戦えないと一秒足らずで判断し、小金井は素早く振り返る。

もう一人の男が金属バットを振りかぶって襲い掛かってくる。

「おっと！」

高く掲げられたバットが降り下ろされるよりも早く、刃を振り抜いた。すると、バットは根元から分断され、上半分が甲高い音と共に地面へと叩きつけられる。

「なっ！？」

グリップだけになったバットを驚愕の表情で見ってしまう男の顔面に、

小金井の鋭い蹴りが叩き込まれた。男は軽く弾けとんで、意識を失う。

「へっへー、あと一人だよ」

「す……すごい……！」

無邪気に笑う少年に、佐天の口から思わず感嘆が漏れた。

いくら武器を使っているとはいえ、能力者を含めた複数名を瞬殺し、無傷どころか息一つ切らしていない。まさに、鬼のような強さだ。

小さな『鬼』は、鋭い刃をただ一人倒れていない白髪の男に向けて、問い掛けた。

「『剣道三倍段』って知ってる？剣を持つてる相手に素手の人が勝つには、三倍の段数があるんだって。アンタたちじゃあ十人いたってオレに勝てない。だから さっさと消えるんだ」

普段は能天気な少年の語気が少なからず荒くなっているのが佐天にはわかった。

友を傷つけられたことが、小金井に怒りを与えているのだ。

「ひやはははは！なんだそりゃ？脅してるつもりかよ！」

だが、怒気の対象である白髪の男は笑った。小金井など、全く恐れなかった様子もなく。

「まあ、確かにオレは段位なんて持ってねーけどよ、テメエの三倍優れてることだってあんだぜ？『能力』だよ」

小金井は何も言わず、ただ白髪に視線を向けている。

「見たところテメエ、無能力者みてーじゃねエか。だったらテメエはオレに勝てねえ！1と0にはそんぐれえの差があんだよ！剣道三倍段だかなんだか知らねーがな、無能力者が能力者に齒向かおうとしてんじゃねえよ！！」

「反省……する気はないみたいだね」

「ハッ、たりめーだろ。なんならそのガキに謝って欲しいくらいだぜ？『無能力者がナマイキなこと言ってすいませんでした』ってなあ！」

次の瞬間、小金井の体が地面を蹴りつけて白髪に迫る。その動きは並大抵の者では見切ることも叶わぬほどの速さだ。佐天はもちろん、白髪の男にも小金井を捉えることなどできなかった。人知れず宙に飛び上がった小金井は、重力を味方に鋼金暗器の柄を白髪へと叩きつける。幾分加減したとはいえ、友人を侮辱された分強めに力を込めた一撃が、男の脳天に直撃する……ハズだった。なのに、

「っ！？」

小金井の一撃を喰らったのは、アスファルトの地面。粉々に砕かれた細かな破片が宙に舞う。それらが落ちきるより早く、小金井の右脇腹を強い衝撃が襲った。

「があっ……！？」

一瞬浮かんだのを感じた直後、小金井の体は勢いよく地面を転がっ

ていた。やっと止まったと思えば、右脇腹に激痛が走る。そう重くないとはいえ、無防備な部分を狙った一撃は、小金井の体力を確かに削り取った。

(くっ……なんで！？確実に？当たる？ハズだったのに……！)

結果として、鋼金暗器は空を切った。痛みを堪えて立ち上がると、思考を巡らせる。

(かわされたワケじゃない。もしそうなら、反撃が早すぎる。だったら、能力を使ってオレの動きをねじ曲げた……？)

かわされてはいない。ならば、考えられるのは念動力か何かを使っ
て小金井の動きをムリヤリ操作した可能性。だが、それにも違和感がある。

(あの時、オレの動きを制限するような力はナニも感じなかった。むしろ、オレが初めから違うトコを狙ってたみたい……幻覚を生み出した？でも、それなら本体のアイツも見えるハズだ)

「ボーツとしていいのかよ!？」

男が接近して来たかと思うと、固く握られた拳が小金井の顔面に迫った。

大してスピードもないパンチを、小金井が屈んで掻い潜ろうとしたその時。グニヤリと、男の腕が不気味に曲がって、小金井の額に突き刺さった。

「んなッ……!」

崩れそうになった体勢を必死で保つ。追撃の蹴りをバックステップで回避して、距離を取った。

(どうする、どうやって闘う!?ほとんど姿が見えないのも同じ相手に……待てよ、『姿が見えない』?)

小金井は過去、姿の全く見えない相手と闘ったことがある。

裏武闘殺陣準決勝、火影vs麗(魔)の先鋒戦。月白の魔導具『朧』を使った奇襲戦法。

あの時、月白は言っていた。『朧という魔導具は、光の反射と屈折をほとんどゼロにする』、と。

『反射』と『屈折』。もしも、その二つをゼロにするのではなくねじ曲げることができたら? そうすれば……

(答えを……確かめる!)

小金井が掴んだのは、道端に転がっていた何の変哲もないタダの小石。それを、白髪の男に向かって投げつける。小石は130キロを雄に超える速度で男の方へ突き進む。

と、即席の弾丸は男にぶつかる直前に、そのスピードではあり得ないようなカーブを描いて、男を避けるように彼方へ飛んだ。

「やっぱり、やっぱりそうか……!」

推測は確信に変わる。小金井は、男の能力のタネを掴んだ。

「涙子ちゃん!」

「ハ、ハイ!!」

固唾を飲んで小金井と白髪男の闘いを見守っていた佐天は、急な呼び掛けに声を裏返してしまう。小金井は人差し指を唇に当てて、

「ちよっち静かにしててね！」

鋼金暗器を構えたまま、ゆっくりと瞼を下ろした。

(何やってやがんだ？あのクソガキ……)

急に目を閉じ、動きを止めた小金井に、白髪男は疑念を抱かざるを得なかった。

(トリックがバレたか？)

『トリックアート 偏光能力』。それが、男の持つ能力の名だ。

効果はごく単純で、反射や屈折を操って自分の周囲の光をねじ曲げ、位置を誤認させるといっただけのもの。子供騙しでしかないものの、奇襲をかけるにはうってつけといえる。特に、無能力者が相手ならば攻撃などそうそう喰らいはしない。

故に、無能力者である小金井に負ける道理などない。男はそう思っていた。

(奇をてらって動揺誘ってやがんのか？いいぜ、そっちがそのつもりなら、オレも容赦無くブツ殺してやんよ)

男は懐に手を突っ込んで、忍ばせていたナイフを取り出す。それを見た佐天が慌てて小金井に伝えようと口を開くが、直前の指示のせいでどうすべきか判断しかねて声を出せずにいた。男はこれを好機と捉えた。

（一回刺しゃあ、あの女も流石に伝えるだろうが、そんな時やガキはよくても重傷。この勝負、オレに負けはねえ！）

男はゆらゆらと千鳥足のような動きで小金井に少しずつ近づく。真正面から攻めれば、リーチの分だけ相手にも反撃の機会が生まれる。だからこそ、位置を特定させないことが重要だ。そうして、小金井の背後に回った男は、ナイフを振り上げ、少年の体に突き刺そうと振り下ろす。

男の腹に、重い鈍痛が走った。

「か……はっ……!？」

視線を落として確認すると、鋼金暗器の柄が腹に深々とめり込んでいた。痛烈な一撃は男に立つことすら許さず、弱々しくヒザをつかせた。

「な……んで……!？」

口から胃液を吐き出し、苦痛に悶絶しながら男は尋ねる。小金井は鋼金暗器を高く振りかざし、

「剣道三倍段　これは、涙子ちゃんの分だよ！」

渾身の力で男の頭に叩き込む。白髪の男は顔面からアスファルトに

めり込んだ。ピクピクと小刻みに震える男に向けてビシツと中指を立てる。

「オレだって兄者にめっちゃくちやシゴかれたんだ。な・め・ん・な・よーだ」

小金井が目を閉じたまま白髪のを倒せたのには、まさしくタネも仕掛けもない。ただ、？集中していた？だけの話だ。

敢えて視覚を封じて聴覚を研ぎ澄まし、衣擦れや地面を踏みしめる音で位置を特定したに過ぎない。

裏武闘殺陣では、会場の雑音や曲がりなりにもプロの月白が相手だったこともあって、気配を読むのは容易でなかった。しかし、麗の兵隊として訓練を積んできた経験は伊達ではない。

一般人の不良相手に遅れなどとするハズもなかった。

(す……ごい。能力者相手に……勝っちゃった！)

少し離れた場所で小金井の闘いを見届けた佐天は、胸中で呟いた。憧憬の感情が少女の瞳を輝かせる。年相応のキラキラした視線は、それ以外にも別の何かを含んでいるようにも思えた。

「先輩！」

呼ばれて気づいた小金井が、ブイサインを作りながらテクテク歩いてくる。

「ぶいつ！勝ったよ！」

「ごめんなさい、アタシのために！ケガ、大丈夫ですか！？」

「別に大したことないよ！それに、女の子助けてケガしたんなら、名誉の負傷！問題なしっ！にやはははは！」

朗らかに笑う小金井の姿は、佐天の目には眩しく、力強く映った。こんなに小さくて、こんなに幼いのに、小金井は強い。それは、戦闘能力ではなく、心を差している。

友のために闘う心。それを当たり前だと受け止められる心。誰もが持っているワケではない。

その心こそ、小金井薫の持つ強さだと、佐天は心の底で感じていた。

「あのっ……先輩」

口を開いたその時。無粋ともいえるケータイの着信音が佐天の言葉を遮った。

人気アイドル——の歌声が知らせるのは、友人からの通知。ディスプレイに表示されたその名は 御坂美琴。

其之肆拾参：無能のチカラ（後書き）

？「本日は変態という名の淑女、白井黒子さんにインタビューです！」

黒子「よろしくですの」

？「読者の皆様も気になっているでしょう、御坂美琴さんの下着の柄は？」

黒子「まあ、幼稚なものですよ。ゲコ太ーだとかピヨン子ーだとか。常盤台のエースには相応しくないお子様パンティですの」

？「それでも集めてしまうのは変態の性ですか？」

黒子「変態とは聞き捨てなりません。黒子の愛はピュアな乙女のモノ……変態的情欲などこれっぽっちもございませんわ。下着はパクッ……拝借してますけど」

？「ちなみに隠し場所は？」

黒子「フッフッフツ！それについては抜かりありませんの！ベッドの下に隠されたエロ本が見つかるのは世の常！しかし、黒子はそれを逆手にとったんですの！まさに、灯台もと暗し！」

美琴（乱入）「へえ……私の下着そんなとこに隠してたんだ」

黒子「ええ！これぞわたくしの発想の転……換んんん！？おおおおお姉様まままま！？」

美琴「道理で最近数が減ってると思った。さーて……覚悟はいいかしらあ！……？」
「ビリビリビリビリい！」

黒子「ぐぎゃああああー骨エエ鯖アアアア！もっと強くウウウ
うー！……」

黒子、トリップする。インタビュー続行不能。

探している集団はすぐに見つかった。見るからにガラの悪い男が三人、テーブルを囲って食事を摂っている。

その三人を視認できる範囲のテーブルに黒子を残し、小金井と美琴は接触を開始した。

「あの一すいませーん」

「ああ？」

愛想笑いを振り撒きながらの美琴の呼び掛けに、不良の一人が反応を示す。美琴の言葉を引き継いで、小金井がこれまた満面の笑みで尋ねた。

「兄ちゃんたち、幻想御手のこと掲示板に書いてたでしょー？オイラたちにも教えて欲しいんだー」

不良はめんどくさそうに手を振りながら、

「ダメだダメだ。こっちも情報手に入れんにエラク苦労したんだ。ガキは帰って寝てろ」

話を聞く気すら感じられないその態度に、黒子と小金井は早くも計画の頓挫を予感した。

だが、美琴とてそこまで甘くはない。彼女は顔の前で両拳を握ると、可愛らしく小首をかしげて、

「えー、私そんな子供じゃないよお」

と、語尾にハートマークがつきそうな勢いでブリツ子モード全開となった。付き合いの長い黒子は愚か、昨日会ったばかりの小金井ですら、身の毛がよだつのを感じた。

（こええええ！風子姉ちゃんの猫なで声くらいこええええ！）

（あばばばばば！なーんかしーあーわーせ）

恐怖する小金井や壊れていく黒子に気づいた様子もなく、美琴は全力を以て作戦に臨み続ける。

「ねーねーいいでしょー？教えてよー」

黒子や小金井を戦かせるその姿も、普段の彼女を知らない者からすれば十二分に愛くるしいものであり、見事に不良の一人が食いついた。

「やっぱりタダってわけにはいかねえなあ？」

「えっとお、お金なら少しは出せますう〜」

「金もいいケド、こういう時はやっぱりコツチの方かねえ」

ニヤニヤと笑いながら、不良は美琴の肩に手を回そうとする。が、美琴はスルリとそれを掻い潜った。

「そーゆーのはやっぱり怖いしい、お金じゃダメえ？」

「ダメダメ。ガキじゃねーんだろ？」

美琴の？正体？を知らず、ただのか弱い少女と思い込んでいる不良は、自分が命の綱渡りをしていることにも気づかずトンでもない要求をしてのける。

(……知らないって、哀れなことだなあ)

不良の辿る末路が容易に想像できた小金井は、人知れず彼らに黙禱を捧げる。

と、不意に美琴がガバチヨツ！小金井を抱き寄せた。

(にゃっ！？ナニナニ！？)

(骨エ鯖アアアア！？あばばばばばばは！！)

「グスツ、ごめんね薰う〜！お姉ちゃん、アナタの夢を叶えてあげられそうにないわあああ！！」

混乱する味方を余所に、今度は涙まで流し始める美琴。

全く理解の追いつかない小金井の耳元で、彼女は小さく呟いた。

「私に話を合わせて」

小金井は理解した。

つまりは泣き落とした。情に訴えて情報をもぎ取ろうという腹なのだ。

決して頭の回転が遅くない小金井は瞬時に、『庇護欲を誘ってやまないシヨタ小僧・カオリン』の仮面を心の中で装備する。

「世知辛いよオお姉ちゃん！ボクたちは同じ境遇の人からも見放

「されてしまっただねー!!」

「そつよー！死んだ父さんとの約束も守れやしないのよー！」

ガシツと力強く抱き合う似非姉弟。視界の端に激しく吐血する黒子を見た気がするが、気にしていられない。

「もうダメだ！心中するしかないよー！」

「大丈夫よー！お姉ちゃんが一緒なら怖くないわー！」

「お、おいちよつと待てよ。なあ、少しくらいなら教えてやってもいいんじゃないか？」

美琴たちの迫真(?)の演技が功を奏したか、あるいは心中という物騒なワードに反応してか、不良は美琴たちを制止して仲間に問い掛ける。

仲間に言われて、不良二人は互いに目を見合わせると、小声で二言三言会話を交わして、小金井と美琴に言った。

「チツ、しゃあねーな。わかったよ、少しくらいなら教えてやるよ」

「タダじゃねーぞ？金はきっちり払ってもらっからな」

(よっしゃー!!)

美琴と小金井は二人同時に胸中でガツポーズを取る。実際のところ、二人のやり取りに心打たれて……などでは全くなく、単純に常盤台の制服を着ている美琴をいい金づるだと判断してのことなのだ。

ともあれ、情報さえ手に入れば理由などどうでもいい。

「どのくらい出したら良いですかあ〜？」

ミッションコンプリートを心に掲げて、ゲコ太のサイフから躊躇いなく諭吉さん数人を引つ張り出そうとするぶるじよわ美琴。たまにしか出番のない一葉さんと自販機くらいでしか利用されない英世さんに、慶應義塾創始者が別れを告げようとした、まさにその時。

「これこれ童子ども」

聞こえた声に、ヒクツと美琴の顔が引き吊った。

出会ってから何度聞いたかわからない声。

一昨日も昨日も美琴の神経を逆撫でしまくった声。

美琴の脳内で毎夜のように再生されている声。

その声の主は……

「よってたかって女の子のサイフを狙うんじゃないやありません」

ミスターウニ頭にして第一級フラグ建築士 上条当麻その人であった。

同刻 美琴たちのいるファミレスからそう遠くない雑居ビルの一室。必要最低限の生活雑貨しかない簡素な部屋で、永井木蓮は心底つまらなそうに座り心地の悪いソファーに腰かけていた。

両耳を押さえる安っぽいヘッドホンから伸びるコードは、こ洒落た

ガラステーブルに置かれた最新式の携帯用音楽プレイヤーに繋がっている。

今聴いている曲の名は『花と散る処女』。彼自身が？作死殺曲？した、お気に入りなのナンバーだ。

耳をつんざくような、若い女性幾人分もの断末魔の叫び。それがただ延々と繰り返される？だけ？のシロモノを、彼はこれまで何度となく繰り返し聴いた。当たり前かもしれないが、絶叫の内容は一人一人全く違う。

目を閉じて、耳を傾ける。そうすると、断末魔の主との？殺りとり？が、まるで昨日の出来事のように鮮明に映し出される。

ああ、アイツは案外あっさり壊れたな

ああ、アイツはみつともなく命乞いしてきたな

ああ、アイツは見た目のワリに刺し心地が悪かったな

常人なら五分も聞けば気が触れてしまいそうな狂った音の集まりも、彼にとつては川のせせらぎのように心落ち着くBGMだ。それぞれころか、絶頂を促すほどに蠱惑的な囁きにすら感じられた。そう、少し前までは。

足りねえよ。こんなモンじゃ全然足りねえ。

こんなものはタダの機械音声でしかない。木蓮の心にポツカリ空いたスキマを埋めるには到底足りはしない。

柔らかい肉の感触。

そこから伝わってくる血の温かさ。

顔を涙と鼻水でグシャグシャにしながら漏らす苦痛の喘ぎ。

これらの条件を全て満たしたとしても、きっとこの狂人が満たされることはない。

烈火を殺し風子を殺し土門を殺し水鏡を殺し小金井を殺し柳も紅麗も殺す……そうすることで、木蓮の中にある虚無感は消えてなくなる。彼はそう信じていた。

それなのに

「……クソッ！」

木蓮はおもむろにヘッドホンを外して立ち上がると、思い切りガラステーブルを蹴り飛ばす。テーブルは勢いよく壁にぶつかって、真ん中から半分に叩き折れた。テーブルの上にあった音楽プレイヤーは床に落ち、拍子でコードが抜けてしまう。悲痛な叫びが、部屋中を呑み込んだ。

狂人を支配する感情。それは、言い様のない苛立ち。

「目と鼻の先に火影がいるってのに、ガキの拉致だあ！？ざけてんじゃねーぞジジイ！！」

分断されたガラステーブルに近づくと、怒りのままに踏みつける。何度も、何度も。

甲高い断末魔とガラスの砕ける音が重なりあつたメロディは、この部屋を訪れた者全てを卒倒させてしまいそうほどの威力を持っていた。

始めのうちはベギンボギンとハテナ音をたてながら砕けていたガラス片も、その体積に比例して破壊音、そして木蓮の憤りを小規模な

其之肆拾肆：二つのプロセス（後書き）

なんか悪役が笑ってばっかだな……

其之肆拾伍：潜在能力（前書き）

皆様ご存知かと思いますが、3月11日、宮城県を震源として日本の観測史上最大のマグニチュードで地震が発生いたしました。

幸いにも私の住む大阪府では大した被害はありませんでしたが、東北地方を中心に大変な惨事となっているらしく、既に死者行方不明者は一千人を上回る模様です。

読者の皆様。もしご無事で余裕がございましたら、どうかぎんぎらぎんにご一報くださいますよう、お願い申し上げます。

其之肆拾伍：潜在能力

「不幸だあああああ！！」

これまでの人生で、何度吐いたかわからないくらいに使い古したセリフを叫びながら、上条当麻は夜の街を駆ける、駆ける、駆ける。どうしてこうなった！？と彼は今日一日の自分の行いを顧みる。もちろん、脚は脱兎の如しスピードで動かし続けたままで。

朝は珍しく目覚まし時計が誤作動を起こさず、お隣に越してきたウニ頭二号とその恋人と一緒に定時通りに登校。小萌先生に褒められた。

休み時間にはいつも通り土御門や青髪ピアス、ウニ頭二号と馬鹿話（干支コスプレの素晴らしさについて）議論。これまた珍しく吹寄の鉄拳制裁はなかった（ウニ頭二号は恋人にしばかれていた）。放課後、バカルテット唯一の彼女持ちであるウニ頭二号が旧デルタフォーラス構成員たちに襲われていたのを庇ってやった。例の如く、珍しく変態コンビが大人しく引き下がった。

上条は思った。『今日のオレは半端なくついでるんじゃないか？』と。明日から夏休みが始まることも手伝って、少年の勢いを止めるものはなかった。

だからこそ彼は、金に余裕もないのにファミレスに行き、『ゴーヤとエスカルゴの地獄ラザニア』なんてキワモノ臭がプンプンするメニューを頼んでしまい、そして

「不良を守って善人気取り？熱血教師ですかあ？」

不良に絡まれている知り合いのお嬢様（+）を見かけて（不良た

ちを)、助けてやるっかなーなんて思ってしまったのだった。

いつの間にこんなとこまで走ってきたのか、周りを見れば既にファ
ミレスから3kmほど離れた鉄橋の上。

目の前で前髪をバツチンバツチン白く弾いている平成版だっちゃん
娘に、逆諸星あたるは冷や汗を流しながら尋ねる。

「えーと……てことはオレを追っ掛けてたアウトローなお兄さんた
ちは……？」

「メンドクサイから私がヤツといた」

『焼き殺した』と書いて『ヤツといた』と読みながら、学園都市の
誇るLEVEL5第三位の御坂美琴は不敵に笑う。そう、まるで二
十年ぶりに親の仇を見つけ出した復讐鬼のように。……まあ上条は
美琴の両親になど会ったこともない上、そもそもビリビリペアレン
ツはまだバリバリ元気に生を謳歌しているので、彼にとってこんな
笑顔を向けられる謂れはこれっぽっちもないのだが。

端正ながらもこれ以上なく凶悪な笑顔に背筋を凍らせながら、上条
はシャウトした。

「チキシヨオオオオ！せつかく今日は不幸なことナッシングでいら
れると思っただのにいいいい！！」

「ナニよソレ！私と出会ったことが不幸だとも言いたいのか！？」

「出会い頭に電撃ブチ込んで来る女とエンカウトして喜べるほど、
上条さんはマゾヒストじゃありませんのことよ！？」

わかっていた。ああわかっていた。自分が犬も歩けば棒に当たるレベルの不幸人間であることなんて、平仮名が書けるようになるより早く理解していた。

それでも、頭で理解していても、納得出来るかどうかは全く別の問題だ。

だから彼は夜の空に向かって今一度咆哮した。

「不幸だあああああああああ!!」

「……ねえ。『レールガン』って知ってる？」

嘆きの上条に向かって、不意に美琴がそんなことを訊いた。頭上にクエスチオンマークを浮かべるお馬鹿なウニ頭に、天才少女は言葉を紡ぐ。

「別名『超電磁砲』。超強力な電磁石を使って金属の砲弾を打ち出すらしいんだけど」

言いながら、美琴はスカートのポケットから何かを取り出す。暗がりによく見えないが、それは上条も頻繁に利用する、ゲーセンのコインのようだった。

230万の頂点の一人である少女はそれを軽く親指で弾く。サツカ一の試合なんかで行われるコイントスのように、空中で二転三転する金属のメダルは、

「こういうのを言うらしいのよね!!」

もう一度少女の指に弾かれて、秒速1000mを上回る弾丸と化した。

ケンカ慣れしているとはいえ一般人の上条にそんなスピードは捉えきれない。電光の槍はコンマ一秒足らずで上条の頬を掠めて、上条の三十メートルほど後ろに着弾した。

轟音が鳴り響く。恐る恐る振り返ると、着弾点であろう場所は、アスファルトが粉々に砕けて路面に生々しいキズアトを残していた。

目に焼き付いた光の残像を辿りながら、上条はギチギチと砲台たる『超能力者』^{バケモノ}の方に向き直った。

もうこのセリフは今日で最後にしたいなあ、と思いながら、でもやっぱりこれから未永くお付き合いしなきゃイケないんだろーなあ、と諦めの感情を胸に抱いて、上条は小さく呟いた。

「不幸だ……」

(今のが『超電磁砲』^{レールガン}ってヤツかあ。スツゲエ威力……。それはそうと、あっちの兄ちゃんって昨日美琴ちゃんと一緒にいた人だよな？)

電撃お嬢様と幸薄ウ二頭の(一方的な)痴話喧嘩を橋の端(ギャグに非ず)からひっそり眺めつつ、小金井薫は『超能力者』というヤツの強さにキモを冷やしていた。

さっき闘った不良とはまるでケタ違いだ。烈火クラスを相手取っても善戦出来るかもしれない。

そう思わせるだけのものが、LEVEL5第三位『超電磁砲』にはあった。

「しかもまだ全力じゃないんだよね……オレ、勝てるかなあ?イヤ、

オレだって今までたくさん強いヤツに勝ったんだ!!」

予想を遥かに上回りそうな美琴の戦闘力に、若干ブルーになってしまふような小金井は、自身を奮起するため今までの戦闘経験を思い出す。そのせいでサイボーグ式モヒカン同性愛者のトラウマを呼び起こしてしまったのはまた別のお話。ともあれ、ある程度は自信が戻ってきた。

元気が湧いた小金井再び美琴と、ウニ頭の方を見やって、

「んな!?!」

目玉をひん剥きながら鼻水を垂らすこととなった。

彼の視線が向かうのは、御坂美琴……の遥か上空に立ち込める、真っ黒な雷雲。美琴が生み出したものか、あるいは彼女の発生させる強力な電気に吸い寄せられたか。

いずれにせよ、落雷を呼び起こす巨大な自然の要塞は、たった一人の少女が操るにはオーバースケールが過ぎる。

これがLEVEL5。これが『超電磁砲』。これが……御坂美琴。

小金井は本能的に感じ取る。少女の持つ『潜在能力』を。

十神衆、死四天……そんな次元は超越している。

いずれはあの雷霸すら上回ってしまふような、それだけの?力?と可能性?が美琴からは滲み出していた。

そして。

美琴の強さを認める、ということとは、相対的に彼女のチカラの矛先となっていて少年の評価をも上げることとなる。

美琴は決して、命さえ奪いかねないようなチカラを弱者に向けることはしない。彼女がその絶大な実力を行使するということは、即ちあのウニ頭がそれを凌げるほどの強者であるという証に他ならない。今更ながら、小金井は戦慄を覚えた。

（兄者の言ってた下剋上……カンタンにはいかなそうだな）

アレイスターの保有戦力。美琴と同等のLEVEL5があと六名。それに加え、230万もの『歩兵』たち。

もちろんそれら全てが敵となるとは限らない。それでも、彼我の戦力差は歴然としている。

これが、火影の誰よりも『実戦』経験豊富な小金井の見立て。

彼は三度、『金将』たる美琴と、裏返せば『と金』と成り得るウニ頭へと目をやった。

瞬間。電光が閃いた。

視界が全て眩い純白に覆われた直後、雷鳴が轟いた。術者である美琴以外は、もはやその場所に生命が存在する余地はない。喩え烈火でも、紅麗でも、マトモに喰らえば命があるかすら疑問に思えるほどの破壊力。

しかし、小金井の耳は確かに捉えた。

LEVEL5の一撃を、十億のチカラを一瞬で零にする、理不尽な暴力を理不尽に消滅させる、幻想殺しの破壊音を。

鉄橋から少し離れた場所に、漆黒のスーツを纏った一人の男と十人ほどの不良たちが存在した。不良たちは黒焦げで、意識を保っている者は一握り。そしてその一握りは、男に胸ぐらを掴まれ尋問を受けている。

「『レベルアップ幻想御手』の取り引きが行われるのは、その場所で間違いないな？嘘をつけばどうなるか……わからんワケではあるまい」

「うっ、ウソじゃねーよ！明後日、その場所で確かに取り引きがある！」

それを聞いて、スーツの男・紅麗は不良から手を離す。尻から地面に落ちた不良は慌てて紅麗から離れた。

（御坂美琴……どうやら予想以上のチカラを持つようだ）

僅かに口元を歪ませながら、紅麗は地面に転がっている不良たちをじっくり観察する。上手い具合にスタンガンを少し上回る程度の電圧に加減したらしく、気絶こそすれど後遺症が残るようなことはなさそうだ。

ただ破壊するのみでなく、TPOに応じて能力を絶妙に調節してみせる。これもまた、御坂美琴がLEVEL5たる由縁か。

（フム……面白い）

この不良たちによると、美琴も幻想御手について聞き出そうとしていたらしい。

(LEVEL5のお手並み拝見といくか……)

それは、来るべき決戦への備えでもあり、単純に紅麗の興味本意でもあった。

一個軍隊に匹敵するほどの能力を持つLEVEL5。その第三位の能力とあれば、闘争本能が疼かないはずもない。無抵抗なムシケラをいたぶるよりも、細いキバで必死に抗う痴れ者をゆっくりとひねり潰す方が愉快というものだ。

しかし、果たしてそれだけか？

紅麗の中に、小さな疑念が生じる。それが果たして何なのか、紅麗にはわからない。

「うあああああ!!」

背後から、振り絞ったような叫び声が聞こえた。紅麗は僅かに身を擦って、その方向に若干の意識を向ける。

ホースで吐き出した水のような炎が迫ってくるのが見えた。次の瞬間には紅麗は？それ？に対する興味を失った。

まるで羽虫を払うように手を振るう。たったそれだけでか細い炎は霧散した。

怯えたような声が聞こえた。おそらく炎を放ったのは不良たちの一人で、今の声もそいつが発したものだろう。だが、どうでもいい。

今、己は『美琴に強くあつて欲しい』とすら思った。この感情はなんだ？

極の異なる磁石が引き合うのにも似ている。相反する二つの想いが、

互いに惹き付けあっている。

えもいわれぬような不思議な感覚だ。

紅麗は、美琴や小金井が走って行った方向に目を向ける。同時に、彼もまた、美琴が生み出した雷撃を視認した。

其之肆拾陸：幻想御手（LEVEL UPPER）（前書き）

やっと来ました脱ぎ女。

後書きでアンケート採るんで、ご協力をば。

其之肆拾陸：幻想御手（LEVEL UPPER）

時は 来た。

今、目の前には愛しのお姉さまのプリチーな唇。何度体を揺すつても目を覚まさないこの状況。

大義名分は出来た。情熱的かつエロティカルな己のヴェーゼでお姉さまの純潔を奪うには、今この時を置いて他にない。

ツンと尖らせた唇が、半開きになった無防備な唇に近づいていく。

10cmが5cmに、5cmが3cmに、3cmが1cmに、そして1cmがゼロになろうとした刹那

ガッーン！

星が飛んだ。

水穂機構病院内に、乙女の純潔を奪われかけた電撃少女から奪おうとした変態淑女への怒声が響いた。

「普通に起こしなさいよッ！」

「起きなかつたではありませんの〜」

怒りの鉄槌を振り下ろして今尚ご立腹の美琴に、黒子は弁明の言葉を返した。が、そもそもがとんでもない理論飛躍から生じた行動なために、情状酌量の余地はないだろう。

（コワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ）

二人のやり取りを見て、ガタガタと怯えているのは小金井少年。どうも美琴のクチビルを奪おうとした黒子とサイボーグなオカマさんの姿がダブって見えてしまったらしい。

今日、美琴や小金井がここに来たのは、黒子がこんな情報を運んできたからだ。

『爆弾魔の少年 介旅初矢が突如、意識を失った』

その話を聞いた時、美琴と小金井は真っ先に、紅麗が介旅をぶん殴つてたことを思い出した。

なにせ、素手で人を解体バラすることが可能な腕力を誇るのだ。どついた拍子に頭蓋骨にヒビでもいれてやしないかと不安になるのもムリはない。

が、その可能性は医師の口から否定された。

介旅の身体に異常は何一つ見られない。そして、同じ症状の患者が既に何人も担ぎ込まれている、と。

そこから導き出される一つのアイテム。そう 『レクルアップ幻想御手』。

「君が担当の風紀委員かな？」

美琴たち（というか黒子）に声をかけたのは、ウェーブのかかったロングヘアに、目の下の大きなクマが特徴的な、白衣を纏った二十代後半くらいの女性。

振り返ってその姿を視認した美琴は、目を大きく見開いて叫ぶ。

「あぁっ！？この前の……！」

「……ああ。この前道案内をしてくれた少女か。その件では世話になっただね」

二人のやり取りを聞いて、小金井と黒子は顔を見合わせる。

「（知り合いなの？）」

「（さあ。わたくしはぞんじませんの）」

ボソボソと小声で会話を交わす二人の様子に気づいてか、女性は軽く咳払いして切り出した。

「では、改めて自己紹介といこうか。水穂機構病院から招聘を受けた、木山春生だ。大脳生理学を研究している」

「風紀委員の白井ですの」

「小金井でイーっす！」

「白井に小金井……そして君が御坂美琴か」

名乗る前に名を呼ばれ、開きかけていた美琴の口が塞がった。面喰らっている美琴の代わりに、小金井が尋ねる。

「オバサン、美琴ちゃんのこと知ってるの？」

「お、おばっ……」

ドゴン！と美琴と黒子の拳骨が小金井の脳天を直撃した。巨大な夕

ンコブを二つこさえて頭からプスプス煙をあげる小金井を放り投げ、美琴は木山に続きを促した。

「なに、あの後気になって調べてみただけだよ。LEVEL5ともなるとすぐに情報が見つかったよ」

八人しかいないLEVEL5の中で、美琴は最も名と顔の知れてる存在だ。常盤台中学の制服を頼りにネットで検索をかけるだけで、かなりの情報を容易に集められだろつる。

とまあ、そんなお姉様の有名人っぷりに鼻を高くしながらも、黒子は任務を遂行すべく、木山に訊いた。

「ところで、『幻想御手』はご存知ですか？」

柵川中学女子学生寮の一室。キャスター付きのイスに全体重を預けながら、佐天はぼんやりと天井を眺めていた。

シミ一つない純白の塩ビクロスのスクリーン。映し出されるのは、昨日行われた小金井と不良の一連のやり取り。能力を持たない小さな少年が、能力者たちを撃退する場面。

見る者に勇気を与えてくれるような光景だ。佐天だって、例外ではなかった。

「ホント……ちっさいクセにカツコよかった」

だが、果たしてそれは勇気から来る行動なのか？

無能力者とはいえ、あの動きは素人目に見てもタダモノではなかった。野良犬を救った時にも見せた、素早く、鋭く、力強い動き。

小金井の取った行動は、そんな？力？があつたからこそではないのか？

私、イヤなヤツだなあ。

助けてもらっておいて、こんなことを考えてしまっている。人の厚意を無下にして、スナオに勇気を認めることも出来ない。

最低だ。自己嫌悪する。

「あーあ、ヤダヤダ！」

こんなことを考える自分が、考えさせてしまう自分の無力がイヤに

なる。

「私にも超電磁砲！とか第四波動！とかあつたらなあー」

そう言えばこの前のニュースでやってた『新しいLEVEL5』ってどんな人なんだろー、と思い、反らしていた上体を起こしてピンと背筋を伸ばす。デスクに向き直ると、目に入るのは山積みの教科書・プリントに、備え付けのデスクトップパソコン。科学の街だけあって、その辺は平凡な中学でも徹底している。

電源を入れ、ネットに繋ぐ。検索ワードは『LEVEL5 発火能力』。

数秒のローディングの後、たくさんのサイトが羅列した。めばしいサイトにカーソルを合わせてクリックしてみる。表示されるのは名前、性別、年齢、序列e t c……

「ふーん、『花菱烈火』って言うんだ。ハデな名前」花火屋でもやったら良いのに、などと笑う佐天は、もちろん彼が花火屋の息子だということなど知る由もない。

ついでに顔と学校も確かめてやろう、と佐天は片っ端からクリック、クリック、クリック。だが、さすがにそこまでの個人情報も載っていない。花菱とやらがLEVEL5になって、まだ日が浅いことも関係しているのだろう。

「ちえー。つまんないのー」

興を削がれて、グデーツと背もたれに勢いよく体重をかける。勢いよすぎて、そのまま大きくバランスを崩した。

「によわああああ！？」

ガシャーン！とハデな音が響いた。その上、転ぶときにつま先が引っ掛かったせいで、机の上のプリント類まだ雪崩のようにバサバサ降ってきた。

「イチチチ……誰よ、こんなトコにプリント置いたのは」

ブックサ文句を垂れながら、プリントを払い除けて起き上がる。

そして、何気なくディスプレイに目をやると、

（あれ？いつの間にやら違うページに……）

プリントが雪崩れた拍子に隠しページでもクリックしたらしく、見たこともない音楽ダウンロードサイトに繋がっていた。

(どーせだし、――の新曲でもとろっかなー)

直接、曲の選択ページにリンクされていたようで、既にそこにはダウンロード決定の項目も存在した。

一体どんなアーティストの曲か、画面をスクロールさせていった佐天は絶句した。

アーティスト名の欄は『UNKNOWN』。

そして、曲名の欄にタイピングされていたのは 『LEVEL UPPER』。

美琴や小金井が必死に情報を収集している魔法のアイテム。『幻想^{レベル}御手^{アップ}』そのものだった。

「形状も媒介もシステムも不明、ね……すまないが、さすがにそれでは判断しかねるな。もう少し具体的な情報がなければね」
知っている情報を洗いざらい(といっても使用者の能力強度が上がることくらいだが)を話した黒子に、木山はそう返した。

当然と言えば当然だ。いかに専門家とはいえ、これだけの情報では答えを導き出すことなど到底不可能だろう。

(あまり期待はしてませんでした……)

(実際に成果ゼロだとやるせないわよねえ……)
だはああ、と常盤台のお嬢様コンビは重い息を吐く。

この気分で炎天下を歩いて帰らねばならないと思うと憂鬱でたまらない。ついでに、未だ気絶している小金井というお荷物までついてくる。

「むう……それにしても暑いな。昨日の落雷のせいで停電でもしているのか？」

二人の思考とリンクしたように、木山も額に滲んだ汗を袖で拭いたり、羽織っていた白衣を脱いでソファアの上に置く。さらにはネクタイも緩め、カッターシャツのボタンに手をかけて

「すとおおおおつぷ!!」

巨大な美琴ヴォイスが木山の手を止めさせた。

「こないだも言いましたよねえ!?!どこでもそこでも服を脱ぐなあ!!」

「しかし、起伏に乏しい私の肢体を見て劣情を催す男性がいるとは……」

「趣味嗜好は人それぞれですよ!!」

変態淑女な黒子さんもツツコミに加勢する。?人それぞれな趣味嗜好?の代表格の御言葉だけあって、説得力はバツグンだ。

学園都市の都市伝説にもなっている脱ぎ女もダブルでお説教を喰らっては引かざるを得ない。

「下着を付けていてもダメなのか……」

などと世迷い言を吐いてはいたが。

しょうがない、と言って、木山はソファーに置いた白衣を脇に抱える。

「喫茶店にでも行って続きを話そう。こう暑くては、脳も働いてくれないからね」

美琴たちとしても、それは願ったりなので素直に従うことにした。放って置くわけにもいかないので、小金井も美琴（じゃんけんに負けた）がおんぶしていく。

少女に背負われた小さな少年を見て、木山は人知れず呟いた。

「永井が言っていたのも……小金井」

「どうかしましたの?」

「……イヤ。なんでもないよ」

怪訝な顔で尋ねてくる黒子にそう返して、木山は美琴の後を追う。

黒子も小首を傾げてそれに続いた。

渦巻く陰謀。交差する物語。

幻想殺しの少年と異世界から来た少年が、禁書目録の少女と出会ってから数時間後の出来事だった。

其之肆拾陸：幻想御手（LEVEL UPPER）（後書き）

これからの展開についてのアンケートです。

実は、超電磁砲編が終わったあと、天堂地獄編と銘打ったオリジナルストーリーに移行します。

謎の究明、風子の戦闘、敵勢力の判明が主な目的です。

で、それが終わってからなんですが、そのままアクセラ編に突入か、ステイルさんやインなんとかさんを活躍させるオリジナルストーリーに移るか迷ってます。

そこでお伺いッッ！！

？禁書目録編であまり目立たなかった私にスポットライトを当ててほしいかも！！

？ナメたこと又かしてンじゃねエぞ三下ア！さっさとオレを出しやがれエ！！

？折衷案で。私を出すのがいいと思う。そうすれば。丸く収まるし。

？は冗談として（オイ）、？と？どちらがいいでしょう？

断っておきますと、どちらもいずれば必ずやるつもりです。

長いか短いか。早いか遅いか。それだけのことだろ？by研究員のオッサン

其之肆拾漆・乙女戦線（前書き）

お待たせしました！

今回は妙にギャグ色が強いです。特に前半。

其之肆拾漆：乙女戦線

夏休み初日　多くの学生たちが『退屈な授業』という名の束縛から肉体的にも精神的にも逃れることが可能な日。どれだけ優秀な学生も、この日だけはまだ見ぬ魅惑のホリデーに想いを馳せ、甘美な夢に酔いしれる。

と、そんな桃源郷にセーラー服などという無粋な、同時に少年たちの希望を膨らますものを着用している者が約一名。

風紀委員　初春飾利だ。

「んー、遅いなあ佐天さん」

駅前などでよく見かける、何がしたいのかよくわからないようなオブジェの前で、初春はぼんやりと呟いた。

佐天からこの場所に呼び出されたのは今から三十分ほど前のこと。

『見せたいモノがある』というので、それを口実に風紀委員の仕事をサボってここに来たというのに、呼び出した本人はまだ来ていない。

(むうー、このままじゃ私の可愛いお花たちが萎れちゃいます!)

さっさと来るように促そうとケータイを開いたその瞬間、

「うーいーはーるーん!」

バツサアー!と、初春の下半身の花畑が公衆の面前に晒された。

「お、今日は花柄かぁー。初めて見たなあ」

はなおもニヤニヤ笑いながら続ける。

「佐天さんにいくら言ってもやめてくれませんしい、薫センパイに頼むしかありませんよ。センパイなら優しいから私の味方してくれて、その後は……」

実際問題、力関係ではすでに小金井<佐天のヒエラルキーが形成されている。小金井ではドラえもんにはなれない。せいぜいスネ夫が関の山だ。

だがしかし！耳年増な花瓶女・初春飾利は佐天から小金井への隠れた感情を過敏に察知していた。花瓶だけに。

そこさえ掴めばあとは赤子の手を捻るようなもの。無力なスネ夫は、ジャイアンにとっては命より大事なジャイ子へと変貌を遂げるツ！しかもしずかちゃんのように優しい小金井のこと。きつと佐天の行いを見咎めるだろう。そうすることで、初春（のび太）は佐天から無血の勝利を奪い取ることができるのだ。

唯一にして最大のウィークポイントをのび太に握られたジャイアンは、ただただ悔しそうに、

「ッ……わかったよ！もうしません！」

かくして、佐天初春スカート捲り戦争はここに終結したのだった。

と、勝者である初春は思い出したように、項垂れる項垂れる敗者に尋ねた。

「ところで、結局見せたいものってなんなんですか？」

「あ！そーそー、それなんだけど……って、あの人は……」

若干の喜色を取り戻した表情でズボンのポケットに手をつ込んだ佐天は、ある人物を発見した。

「で、同程度の露出でも、何故水着はよくて下着はダメなのか「いやそつちでなく」

喫茶店の窓際に着席して開口一番の木山のボケを、美琴と黒子は即座に切り捨てた。

本人的にはフザけたつもりは一切ないらしく、木山はとぼけた顔で首を捻っている。余計に始末が悪い。

（大丈夫かなこの人……）

一抹の不安を感じる美琴。変人と天才は紙一重と言うが、彼女からは変人な要素しか見受けられない。

美琴が木山に呆れた視線を向けている横で、黒子は思考していた。先ほどの、木山の言葉について。

（木山さんは先ほど、『小金井』という名前を知っていたようなことを呟いていた……小金井さんは木山さんのことを知らなかったといますのに）

小金井という名字自体は、別段珍しいものでもない。単純に木山の

知り合いに同性の人物がいただけの可能性だつてある。だが、風紀委員としての経験に因るものか、黒子は直感的に何か怪しいものを感じ取っていた。

少女は、制裁の拳骨を受けて未だに眠つたまま向かいに座る、小金井を見やる。

（木山さんと小金井さんの間には、何か繋がりが？）

本人同士に面識がなくとも、第三者の介入によつて人間関係が構築されることだつてある。そう、例えば『永井』という人物によつて。

（……なんだかキナ臭い予感がしますの。杞憂だと信じたいものですわね）

熟考を解いて、黒子は注文したアイスティーに手を伸ばす。結露した水滴に掌を濡らされながら、渴いたノドを潤そうとアイスティーを口に含んで、

「ハンバー……ツツグ……！」

思いきり吹き出した。

「うひゃっ、冷たッ！？……つて、ありゃ？ここどこ？」

店内全てを震わすような大声で奇妙な寝言を口走つた少年は、黒子からの水鉄砲にビククリしてキョロキョロ辺りを見回す。

周囲への被害は甚大で、美琴は『びよっ！？』という奇声を上げながら耳の穴を指で塞いでテーブルに突つ伏し、木山は驚いた拍子にアイスコーヒーをスカートにぶっかけてしまつていた。

他のお客は避難していき、店員さんもそこに突っ込む勇氣は持ち合わせてないため右往左往している。一行の中で唯一冷静な木山を頼るうにも、彼女もまた、なんかスカートを脱ぎ出しているために近寄りがたい。

壮年の経営者は途方にくれる。この店が崩壊した未来を想像した彼がガツクリと崩れ落ちた直後。

「貴様ら、ナニをしている？」

救世主が現れた。

まず真つ先に、小金井の動きがフリーズした。引き吊った表情でギチギチと声が出た方を向く小金井に釣られて、美琴と黒子もそちらに目をやる。

そこにいたのは佐天に初春。そして、般若よりも恐ろしい無表情を浮かべる常盤台中学の臨時講師　紅麗。

ザッと、三人は血の気が引くのを感じた。

それから五分後。

床に正座させられているのは、頭のテッペンに特大のタンコブをこさえたLEVEL5の超電磁砲に、風紀委員のエース格、ついでに無名の無能力者という異色のトリオ。

ついさつきまで彼らが座っていた場所には、若干気まずそうに苦笑する佐天・初春と、惘然とした表情でコーヒーを啜る紅麗が陣取っ

ていた。

「……ほう。それで貴女はこの馬鹿共に話を訊きに來たと。何か有益な情報は得られましたか？」

「いや、話を始める前にさっきの騒動があつたのでね」

素直すぎる木山の返答に、紅麗はジロリと反省組を睨み付けた。ガタガタ震える三人からすぐに目を逸らし、紅麗は懐から名刺を取り出した。

「申し遅れました。私、小金井紅麗と言います。以後お見知りおきを」

「おっと、これはご丁寧に……木山春生という。申し訳ないが、私は名刺を持ってないんだ。あまり社会人の常識というヤツが身に付いていなくてね」

「気にする必要はありません。私もあまりマナーに煩い方ではないのでね。むしろ、堅苦しいのは苦手です」

そう言つて紅麗は笑みを浮かべる。もちろん、心からのものではない。見る者によつては、一目で敵意を露にしそうな偽りの笑みだ。木山は僅かに紅麗の表情を眺めた後、思い出したように小金井を見て、訊いた。

「……おや？小金井と言うと、確かその彼も……」

「ああ、薫は私の弟です。いつまで経つても幼稚な愚弟で、お恥づかしい限りです」

その言葉に正座中の小金井は憤慨するが、紅麗が怖いために反論は出来ない。

「あ、あのー。ちょっといいですか？」

弱々しく手を挙げながら、初春が会話に加わってくる。紅麗に続きを促されて、初春はおずおずと尋ねた。

「お二人は幻想御手についてお話されてるんですよね？お訊きしたいんですけど、所有者が見つかった場合ってどうすればいいんでしょう？」

「保護するのが一番ですの」

真っ先に答えたのは、正座状態にある黒子だった。

「まだ調査中ではありますが、使用者に副作用が出る可能性がありますの」

「何より、虚空爆破事件みたいなコトするヤツが、他にいないとも限らないしね」

神妙な顔つきで美琴も続く。マンガのようなタンコブに、正座中の二人が真面目な顔でそう言うのは若干シニールだった。

「結論 さっさと回収しちゃうのがベターってことだね。ひよつとしたら、それが犯人の手掛かりに繋がるかも知れないし、ね？」

言いながら、小金井は紅麗に片目を瞑って見せた。

紅麗は何も答えない。それが肯定の証だと、彼と長い付き合いの小

金井は知っている。

「でっ、でもさあ!」

急に佐天が声を張り上げた。

「ち、ちよつとくらいは大丈夫なんじゃないかなあ? ほ、ほら! 無能力者の人たちにもたまには美味しい思いさせてあげたいですし!」

「佐天さん」

黒子が、普段の彼女らしからぬ強い口調で佐天を制す。

「後手後手に回っていては、いつまた被害者が出るかもしれませんの。佐天さんのお気持ちは十分に理解出来ますが、ここは我慢していただきたいんですの」

「……はい」

当たり前すぎるような黒子の正論に、佐天は押し黙るしかなかった。

美琴たちが喫茶店を出た頃には既に十八時を回っていた。空は朱色に染められて、端の方は闇に侵食されている。紅麗は木山に向かって小さく頭を下げた。

「お忙しい中、ありがとうございます。また是非ご連絡をよろしくお願いいたします」

「いや、こちらこそ色々ご迷惑をお掛けした。……それに、教鞭を振るっていた頃を思い出せて楽しかったよ」

「きよ、教師をなさってたんですか？」

正座の後遺症に悶絶しながら木山に尋ねる美琴。木山は少し笑うと、遠い目をして答えた。

「昔……ね」

その時の木山の表情が、紅麗にはとても悲壮で、とても儂く、刹那的なものに見えていた。

まるで、何かを失ったようだ。

去っていく木山の背中を眺めながら、美琴はポツリと呟く。

「ちょっと変わった感じの人よね」

「でもさ、イイ人っぽいよ。なんとなく最澄に似てる気がする！」

「さ、最澄？天台宗？」

「違う違う。オレの友達の名前だよ。すっごく強くて俳句が好きなんだ！」

完全に歴史的人物の名を思い浮かべている美琴に、小金井が『空』

の最澄について補足説明する。もともと、最澄が詠んでいたのは俳句ではなく短歌なのだ。

そんな会話が繰り返り広げられている隣で、初春は思い出したように佐天に訊いた。

「あ。そう言えば佐天さん。見せたいものってなんですか？」

「え！？あ、ゴ、ゴメーン！私用事あったんだ。また今度ね！じゃあバイバーイ！」

「えっ、あっ……行っちゃった」

何やら焦っている様子だった佐天を訝しげに見送りながらも、追求する間もなく駆けて行ってしまった。彼女のことなのでどうせ大したことはないだろうと結論づけて初春が振り返ると、美琴と紅麗の姿も消えていた。

「あれ？お二人はどうなさったんですか？」

「さあ？」

「お二人共、少し目を離れたスキに消えてましたの」

取り残された三人は、一様に首を捻っていた。

（見つけた、見つけた、見つけたア！！）

夕焼けの街を、美琴は駆ける。その様は、まるで獲物を捕捉した女豹のようにしなやかで鋭い。見つけたのだ。いつも張り合っているウニ頭を。

美琴は、常にレーダーを張っている。彼女の能力から来るそのレーダーはかなり精巧で、喻え視界が覆われていても、ミリ単位で相手の動きを知ることが可能だ。

もちろん、そんなレーダーも万能ではない。そこに人がいることはわかってても、それが誰なのかなんて、自分と全く同じ電気信号でも持っていない限りは判別出来ない……ただ一人を除いては。

例えば、鉛筆で真っ黒に塗り潰された画用紙があるとする。

その一部に、消しゴムをかけた場合、そこには違和感が生じる。真っ黒であるハズの場所が、白くなっている。そんな違和感が。

同じことだ。

まるで、真っ黒な画用紙の一枚所だけに消しゴムをかけるように、ソイツは美琴のレーダーの一部を打ち消すのだ。

それが美琴の中で違和感となって、その人物の特定を可能とさせる。

ソイツを発見した時、美琴は思わず笑っていた。

今日はなんてついてるんだろう。

美琴の目に映るのは、よく見知ったウニ頭。

そして、つい先日、銀行強盗二人を倒し、常盤台中学のプールを破壊し尽くしたウニ頭。

そう、上条当麻と花菱烈火がそこにいた。

ガタンゴトン

時々、電車が通って水面みなもに影を作り出す。高架の下には常に日から逃れられる場所がある。

紅麗はそこに立っていた。

ケータイを開いて、暗証番号を打ち込む。このケータイはプライベート用とは別の物だ。すなわち、『暗部』の仕専用。

着信履歴を開くと、同じ番号ばかりが羅列している。当然だ。同じ番号にしかかけていないのだから。

通話ボタンを押す。ツーコールほどで、目的の人物がそれに応じた。

『ハイハイ。こちらみんなのお悩み相談、「教えて！土御門先輩！」です！』

ブツツ！ツー、ツー……プルルル！

『急に切るなんて紅麗ちゃんヒドイにゃー。土御門さん泣いちゃうぜい』

「その呼び方は止める。虫酸が走る」

下らないやり取りに辟易しながら、怒気のコもった声で紅麗は告げる。それを察したのか、それとも単に飽きたのか、（おそらく後者

だろう。) 土御門は普段のフザけた口調を終えた。

『で、何の用だ？スマンがこっちも色々忙しくてな。同僚がこれから一仕事するらしくてね、後処理の準備があるんだが』

『同僚』という単語に引つ掛かるモノを感じながらも、紅麗は無然と答える。

「手間は取らせん。木山春生について調べて欲しい」

『木山春生……？一体なんの「幻想御手事件の重要参考人だ」

土御門の言葉を遮って告げた。金髪の男は、電話越しに数瞬考え込んで、

『……了解した。だが、今言ったようにこちらも色々やらなきゃならんことがあるんだ。少し遅れても問題ないか？』

「構わん。その？遅れ？がこの街にどんな結果をもたらそうと、私には関わりのない話だ」

『……チツ、痛いトコをついて来やがるぜ』

苛立ちながらそう返して、土御門は通話を終了した。

ケータイを上着のポケットに挟じ込んで、紅麗はその場を離れて行った。

(幻想御手の方は近い内にカタがつく。……さて、首を洗って待っている幻獣朗。貴様の野望が潰えるのも、そう遠くはないかも知れんぞ?)

紅麗が去った数十分後、その場所でLEVEL5二人が激突した。さらにそれからしばらく経って、第七学区の学生寮から謎の閃光が発生するのを多くの学生たちが目撃することとなる。

其之肆拾漆・乙女戦線（後書き）

烈火VS美琴の話が禁書、電磁両サイドでやっと繋がりました……
ッ！

まさかここまで話数と時間がかかるとは……。

其之肆拾捌・KILLING DOCTOR(前書き)

黒子、行きます

其之肆拾捌：KILLING DOCTOR

『努力すればなんでも出来る』

ありがちで月並みな言葉だ。だが、そんな幻想を信じていられるのは果たしていつまでだろうか？

頬のアザを綺麗に消し去る治癒能力。

乗用車を一撃で吹き飛ばす超電磁砲。

昨日見た、レーザー砲のような謎の閃光。

そんなものが努力した程度で手に入ると本気で信じているのは、小学生かよほどの楽道家くらいのモノだろう。

別に、『努力』いうものを軽んじているワケではない。

例えば、プロ野球選手なんて青春を全て野球に打ち込んできたような連中だし、事業を興して成功を収めるにはそれこそみんなが遊んでいる時も勉強を続ける忍耐が必要だ。

しかし、それは『才能』あつての『成果』だ。

青春全てを野球に打ち込んで、プロ野球選手どころかベンチ入りすることも出来ない人はごまんという。どれだけの勉強を積んでも、突飛なアイデアを生み出せなければ、せいぜい優秀な一社員どまりだ。

結局、『才能』ないものに明るい未来は訪れない。

炎天下のアスファルトをどこへ行くでもなくさ迷いながら、佐天は暗い面持ちで手の中の携帯音楽端末に目を落とす。

(幻想御手……か)

少女の掌にすっぽり収まるような小さな機械には、今学園都市中の無能力者たちが喉から手が出るほどに欲している幻のデータが眠っている。

昨日コレを見つけた時は、夢のようなアイテムだと歓喜した。だが(やっぱり、リスクなしじゃ強いチカラなんて手に入らないのかな?)

使用者に発生するかもしれない副作用。それは、とてつもなく恐ろしい。

そもそもが、製作者不明の謎の塊みたいなプログラムだ。こんなエタムの知れないモノを使うのは、正直言ってイヤだ。それに、苦労もなしに能力を手に入れようなんて考え自体、褒められたことではない。

でも。

努力しても、どうにもならない壁。

『?この街?じゃ、無能力者は虐げられてナンボなんだよ!』

小金井と戦った男の言葉が胸に突き刺さる。あの時も、自分は何も出来なかった。

小金井のお陰で事なきを得たものの、一人だったら最悪、一生残るキズをつけられたかもしれなかった。

生まれ持った才能の差は、受け入れなきゃいけないってこと?

同じ無能力者の小金井だつて、戦闘においては非凡な才の持ち主だ。低能力者の初春も、コンピューターに関しては他の追随を許さない。真正正銘の凡人は自分一人というワケだ。無力感が、疎外感が、孤独感が、心の底から湧き上がってくる。言い様のない感情に身を任せ、すぐ側の壁に手をついたその時。

「そんなつ、話が違つじやないかつ！」

近くにある取り壊し予定のビルの辺りから、そんな言葉が耳に届いた。

「まーったくもう！面倒ですの！」

大声で愚痴を溢しながら、白井黒子は学園都市を文字通りに？飛び回る？。

黒子の持つ能力、『空間移動』^{テレポート}を利用した高速移動術。空路を利用し、定められたルートを辿ることも、渋滞や信号に邪魔されることもないため、自動車よりもよっぽど便利だ。

天馬のように空を駆ける黒子の手には、一ヶ所で留められた書類の束。昨日黒子が？平和的に？得た情報を基に初春が調べ上げた、取り引き場所を記したものだ。

全十七箇所あるその現場を、黒子は既に四つ潰している。三箇所ほどで物知りなスキルアウトが、黒子の顔を見ただけで戦意を喪失してくれたからこそその仕事の速さだ。ちなみに残る一箇所を取り引きを行っていた勉強不足なスキルアウトには血を見てもらった。

(今日の取り引きは次の場所で最後ですわね。仕事が終わった暁にはお姉さまと二人で……グへ、グへへへへへ)

よからぬことを妄想しながら、一七七支部のエースは天を舞う。

「もっ、もうやめなさいよ!」

一体ナニをやっているのか。自分自身にもわからない。

幻想御手を売ると言われて騙されて。騙された男の人は騙した男
一 昨日小金井にやられた白髪 にボコボコにされて。自分な
かに何か出来るワケもないから見捨てて逃げて。

それでよかったじゃん。

「その人、ケガしてるし……」

全く面識のない赤の他人なんだよ?

「す……すぐに警備員が来るんだから!」

なんで逃げないのよ。なんで助けようとしてんのよっ!?

「おや……? テメエ、こないだのクソアマじゃねーか。お強いナイ
ト様はどうしたよッッ!」

男の脚が、佐天の背後のフェンスを踏み抜くように叩きつけられる。男は佐天の髪を乱暴に掴んで、下卑た笑いを浮かべながら、

「今度こそ、殺されたいってか？」

佐天の体が硬直した。次の瞬間には、足がすくみ、肩が震え、全身の血が冷えた気分だった。殴られていた男性も、腰を抜かしてガクガクと怯えている。

「ヒヒ、威勢よく出てきたと思ったらコレかよ？」

男は脚を引き、佐天の華奢な体を思い切り蹴り飛ばそうとして、

「テメーらか？変なトコで流れ止めてるポケナスは」

そんな言葉に、動きを止めた。

白髪の男と殴られていた男性はほぼ同時に、佐天は二人に釣られる形で少し遅れて、声がした方を向いた。

そこに立っていたのは、二十代後半から三十代ほどの男。左目を隠す髪は女性のように長く、白衣を羽織っている。だが、清潔感はほとんどなく、どこか周りを不快にさせるようなオーラを放っている。白髪の男が啖呵を切った。

「オイおっさん。テメー、警備員かなんかか？このオレのジャマしやがって、覚悟できてんだろーなあ！？」

対して、長髪の男はこちらに歩きながらただ面倒そうに、

「ったくよオ、折角昨日風子のアマぶつ殺してやれそうだったのによ。キリトのジャマ入って、しかもその理由が糞みてーなモンだったんだ」

「オイ！シカトしてんじゃねーぞポケ！ナメてんのかコラ！？」

聞くに耐えない暴言などまるで聞いていない様子で、白髪の前に立ち止まる。そして、肩を掴んで、

「何し「テメーらが、テメーらみたいなカス共が……小遣い欲しさに余計なことしたせいなんだよオオオ！！」

鬼の形相で、手に隠した鋭いナイフを、白髪の男の腹に突き刺した。

「あ………がつ？」

一瞬、白髪の男は何が起きたかわからない様子だった。佐天の髪から手を離し、両手で自分の腹に生えた突起物を撫でるように確かめる。そして、その場所へ視線を落として、

「あっ、えっ………？ぎっあ………ぎゃあああああああああ
！………」

漸く自身の置かれた状況を理解した。

「黙れ」

冷たい声の後、長髪の男は苦痛に泣き叫ぶ白髪を躊躇なく殴り飛ばす。

白髪は地面に崩れ落ち、血ヘッドを吐き散らしながら今なお悶絶して

いる。

「あつ……があ、だ、だのむ。いい……イノ、チは……」

「チツ、るツせえな。急所ハズしてんだから死ぬワケねーだろ低能が」

口汚く罵倒しながら白髪のを容赦なく踏みつけ、地面ににじりつける。男は、グルンと首を回して、佐天の方を向いた。

「ヒツ!?!」

佐天と男性の短い悲鳴が重なった。どちらも力なく地面にへたりこんでしまっている。ムリもない。平気で人を刺すような人間が目の前にいる。しかも、次にターゲットになる確率が高いのは自分たちなのだから。

長髪の男は笑いながら佐天に、

「よお嬢ちゃん。トシ、幾つだ?」

「へっ?」

佐天には質問の真意が理解出来なかった。

何故今この場面で佐天の年齢などを尋ねるのか。馬鹿正直には答えず、ウソをついた方がいいのではないか。

今までの人生で最大の危機と言っていいこの場面で、彼女の頭は自身を救うために最良の選択を吟味する。

しかし、

「オレあ今ムカついてんだ。ウソついたらどうなるか……わかるよなあ?」

選択の余地などなかった。

男の見せた凶悪な眼光が、獰猛な笑みが、佐天から冷静さと反抗心を削ぎ落とす。

佐天は歯をカチカチと鳴らしながら、今にも泣き出しそうな表情で答えた。

「じゅ、十三歳……中一です……」

男は佐天の表情を見て、より一層笑みを深めながら、佐天の答えに頷いた。

「ほー、イイね。もうちつと上かと思ってたんだが、小金井よりも年下かよ」

佐天の知る名が男から出てきたが、耳には残らない。こんな狂人と？彼？に繋がりがあるとは到底思えないからだ。

それよりも今は、男の魔の手から逃れる方法を一つでも考えなければいけない。

そんな佐天の心情を知ってか知らずか、男は少女にこう告げた。

「十三だつてんならしょうがねえ。許してやるよ」

男が何を言ったのか、一瞬理解できなかった。

男が白髪の間から足を退けて、背を向けて歩き出した段階で佐天はやつと意味を掴んだ。

(助……… かった?)

れんだぜエ？」

愉悦と恍惚の表情で、男は続ける。

「でよ、面白エことに、年齢によっても若干反応が変わってくんだよ。まあ、思い出やらなんやらの量にも違いが出るしな。……ンでなあ、嬢ちゃん。オレ、中学生はまだ殺したことねーから楽しみなんだ。思春期入りたてのガキってなあ、恐怖と苦痛に駆られた時、どんな声で啼いてくれんのか。聞きたくてたまんねエんだ」

「い……や」

か細い声で、佐天が拒絶を示す。無論、男はそれを無視した。

「どうやって殺されたい？×××からオレの木突っ込んで、ゆ〜っくり脳天抉ってやろうか？それとも、四肢を一本一本締め付けて干切り落として欲しいか？」

イヤだコワイイヤだコワイイヤだコワイタスケタスケタスケタスケタスケタスケタスケタスケタスケタスケタスケテ

「誰かつ、助けて！！」

悲痛な叫びは、虚しく辺りに響くだけ。

男性はあまりの恐怖に立つことすら出来ないようだし、白髪男は失神中。

オマケに、長髪男は佐天にしか興味がないようで、意識を反らす様子は微塵もない。

るため。

「『ジャッジメント風紀委員』ですの!」

風紀委員・白井黒子、出陣!

其之肆拾捌・KILLING DOCTOR(後書き)

カッコいい黒子が書けたらいいなあ

其之肆拾玖：木人（前書き）

文章へタクソでわかりにくいシーンがあるかもなので、もしあったらお気軽にご質問どうぞ。

其之肆拾玖：木人

「つてえなあ。不意討ちたあやつてくれんじゃねえか、嬢ちゃん」

ユラリと、先の一撃などまるで意に介した様子もなく、男は起き上がる。

黒子は僅かに舌打ちした。

(くっ、キレイにキマったハズなのに……！見た目のワリにタフですこと。……相当の修羅場を潜ったと見て、間違い無さそうですの！)

女子中学生のウエイトとはいえ、全身の力を使った一撃がまるで効いていない。

纏っている気からして、男のソレは常人とは明らかに違った。人の命を奪うことに全く抵抗のない、殺戮者のモノだ。

おそらく、否、確実に今まで黒子が闘った誰よりも強く、残虐。少しの油断が、文字通り命取りとなる。

(……それにしても)

黒子は、男の風貌を注視する。どう見ても、男は？学生？とは思えなかった。

(ですが、あの木の動き方は間違いなく能力によるもの……念動力の類いでしょうが、あの男は何故能力を使ってるんですの！?)

『超能力』は、学園都市にいる学生のみには許されたチカラ。それ以外の者の使用は、絶対にあり得ない。

黒子のそんな考えを見透かして、男は薄ら笑いを漏らした。

「ひひっ……言っとくが、オレのチカラは超能力じゃねエぞ？かといつて、もちろん機械なんぞでもねえ」

「あらあらご親切にありがとうございます……超能力でも機械でもないなら、一体なんだって言いますの？まさか、魔法でも使ってるワケじゃありませんわよね？」

「魔法、魔法ねえ……ククク、それに近えのかもなア。まあむしろ、忍術？つっべきか？」

「なにせよ わたくしには関係御座いませんの！」

次の瞬間、長髪男や佐天の視界から黒子が消失した。

「こつちですよ？」

挑発的な声が出したのは、男の右側。脇腹に学生靴の痛打をもらい、再び男は吹き飛ばされた。

「白井さん……強い」

佐天の口から、感嘆の声が漏れた。流石は大能力者と言っべきか。だが、

「なかなか便利な能力だな。テレポートっつーのか？」

やはり、男には効いていない。

「じゃあ次は……オレの番だ！！ヒヤハアっ！」

男の体を突き破るようにして、無数の木が鋭く黒子に迫り来る。そのスピードは、人間のカラダ程度なら簡単に決りとれそうなほど。

「喰らわなければいい話ですのっ！」

黒子の姿が再び消える。目標を失った木は、アスファルトに突き刺さってそれをコナゴナに砕いた。

「はあッ！！」

黒子が飛んだのは、男の背後。肘鉄が無防備な背中に突き刺さる。が、

「効かねえー！ー！ー！！」

雄叫ぶ男の背中から、剣山のように木が飛び出す。柔肌を貫かれそうになるも、紙一重でレポートする。場所は、男の十メートルほど先。

「ひゅう　なかなか楽しませてくれるねえ？認めてやるよ、オレは永井木蓮だ」

木蓮は愉快そうに名を名乗る。すなわち、黒子を敵として認めた証。

「それはどーも。ちつつつとも嬉しくありませんのッ！」

対して黒子は、歯を剥き出しにして敵意を放つ。相手が愛しのお姉さまならいざ知らず、野郎に、それもあんな外道に認められたところで何の自慢にもならない。

(蹴った時も、殴った時も、明らかに人間の体の感触とは違った…
…鉄板でも仕込んでますのかしら?)

鉄板は冗談にしても、学園都市製の対衝撃素材でも身につけているのかも知れない。とすれば、いくら風紀委員で鍛えていても、黒子の細腕では少しも効かないだろう。
ならば。

「今度は直接、ぶち抜いて差し上げますのッ!!」

学生靴を放り投げ、太ももに巻いたベルトから専用の金属矢を数本引き抜く。

黒子の能力 空間移動。それは決して、攻撃補助に止まりはしない。その特性は、『転移先の物体を押し退ける』というもの。
すなわち、紙切れでダイヤモンドを切断する事だって可能なのだ。

「ちょっと痛いですが、ガマンしてくださいましっ!」

転移先は、木蓮の両腕。致命傷には程遠い上、男の戦意を殺ぐほどのモノでもない。

それでも、激痛は相手の集中を乱し、スキを生み出す。男の能力の正体はわからないが、上手くいけば精度を落とすくらいは出来るかも知れない。

刹那の攻撃。木蓮の両腕に計五本の金属矢が出現する。男は、激痛に悶えて動きを止める。

その、ハズだった。

「効くかよ、カス」

だが木蓮は、苦痛を訴えることも、動きを止めることもなく、金属矢を生やした手を振るって木の槍を撃ち出した。

「なっ!？」

思いもよらぬ事態に、咄嗟の判断が利かなかった。黒子はテレポ―ト出来ずに、慌てて身を擦る。

木の槍は、黒子の左肩に突き刺さった。

「あぐっ……!」

「ヒヤハツ、もう一発喰らいなあ!」

第二撃が唸りをあげて黒子の顔面を貫かんとする。咄嗟に足元の鞆を掴んでレポートさせる。

激痛のせいで演算に狂いが生じるかと思っただが、鞆は見事に黒子に刺さった木を千切った。

黒子はその場にしゃがみこんで、木の槍を回避する。槍は、宙に残った鞆を貫き、中に入っていた櫛や筆箱を散乱させるだけに終わった。

黒子は素早く足で距離を取り、佐天たちに叫んだ。

「そこでノビてる人を連れて、逃げてくださいますっ!」

「はっハイッ!」

佐天たちは慌ててその場を離れて行く。自分たちは足手まといだと

理解しているのだろう。

その姿を横目で見送った黒子は、左肩に突き刺さったままの木を引き抜いた。

「あ……ぐっ！」

鮮血が噴き出し、激痛が走った。頭を揺さぶられた感覚がする。それでも、黒子は歯を喰い縛って木蓮を見据えた。

「なんで痛がる素振りもしねエのか、気になつてる顔だな？」

どうも、黒子の思考は木蓮に簡単にバレてしまっている。隠す必要もないので黒子は素直に頷いた。

「ええ……ご名答ですの。今わたくしは肩を貫かれてとても痛いんですの……なぜ、貴方はそんな素振りすらないのでしょうか？」

苦痛に息を荒らげながら、黒子は金属矢を構える。

木蓮はそんな黒子に警戒する様子もない。

「……まあ、バラしたところで意味があるワケでもねえ。イイぜ、教えてやるよ」

何を思ったか、木蓮は懐からナイフを取り出すと、それを自身の胸元に突き立てる。

「しっかり見てな！」

そして、服ごと胸を縦に引き裂いた。

「ハア、ハア、ハア……ここまで来れば、大丈夫だよね」

黒子の下から直線距離で百メートルほど離れた地点で、佐天と男性は停止した。男性の背中には、木蓮に刺された白髪男がおぶさっている。

「あの、平気ですか？」

「はっ、はっ、あまり、ゲホッ……平気とは、えほっ、ゴホ！言えな……オエッ……」

あまり運動が得意そうでない体型をしてはいるが、まさかここまでとは思っていなかった。

息絶え絶えな男性を見て、佐天は率直にそう思った。

「とっ、とにかく警備員と救急車呼んどいてください！私、白井さんのトコに戻りますから！」

「ま、待って！」

駆け出そうとした佐天の腕を掴んで、彼女を引き止める男性。佐天は、苛立ちながら、

「今こうしてる間にも白井さんがやられちゃうかもしれないんですよ！？早く行ってあげないと……！」

「……君も、無能力者なんだろう？」

その一言に、佐天の動きが止まった。

「見ただろう、さっきの。あんなのに巻き込まれたらタダじゃ済まない。手助けしようにも、僕らはむしろ足手まといだ」

確かに、そうだ。

仮に佐天が援護に向かって、果たして何かできるのか。否。佐天には、木蓮が操る無数の木を防ぐことも、黒子の攻撃を援助するようなマネもできない。むしろ黒子に余計な手間をかけるだけ。

「こんな時、LEVELOに出来ることなんて、何も無いんだ」

男性の言葉が、佐天に突きつける。見たくなかった、聞きたくなかった、思い出したくなかった、？己の弱さ？を、？弱者に出来ることはない？という現実を。

佐天には、唇を噛み締め、拳を握ることしか出来なかった。

目の前の光景を、黒子は俄に信じられなかった。

引き裂かれたシャツの穴から覗いたのは、案の定木蓮の素肌ではなかった。それは、木。

木を鎧のように纏って防御力を向上させていたのだ、と黒子は最初そう思った。

だが、違う。

ナイフは軽く10cmほどの深さで突き刺さっており、衣服のみでなく、木の鎧、さらには木蓮自身の体をも傷つけていなければおかしい。

なのに。

引き裂かれた傷痕からは、木蓮の肌も、内臓も、血液すらも見えなかった。

(一体、どうなってますのっ!?)

理解不能。木蓮がどれだけ痩身であっても、あれだけ深く斬って肌にかすりもしない訳がない。

困惑を見せる黒子に、木蓮は面倒臭そうな様子で、

「んだよ、まだわかんねえか………だったら、これでどうだ？」

ナイフを、自分の体のある箇所に深々と突き刺した。

「………どうだ？理解したか？」

「………どうなって………!？」

黒子はますます混乱した。

クレイジーな行動に、ではない。胸の中心の少し左、つまり？
心臓を貫かれて今尚生きている？木蓮自身に。

「ま………さか。まさか………!」

其之伍拾：勇敢なる友のため（前書き）

なんかパツとしない……文章で虚をつくのは難しいですね）．．．

あつ、そついや何気に五十話突破（プロローグもカウントしたら五十一だけど）。

其之伍拾：勇敢なる友のため

木蓮の躰から射出された無数の木の槍は天に向かって伸びると、そこから重力を味方に急降下する。

豪雨の如く降り注ぐ無数の凶撃を、黒子はテレポートで掻い潜る。後方に、ではなく木蓮の真上へと。

黒子の狙いは木蓮の頭。体を全て木にすげ替えてどうやって生きているか、どんな理屈で動いているのかはわからない。

だが、

（頭まで木になっているワケはない！脳ミソは人間のモノに決まっておりますの！）

木蓮が？人間？である限りは、頭は生身のモノに決まっている。だからこそ、頭部への攻撃は効くはずだ。

完璧に不意をついた一撃。黒子は渾身の蹴りを木蓮に繰り出す。

それを、木蓮は首を捻って軽くかわした。

「なっ！？」

空を切った黒子の両足を、木蓮の肩から生えた触手が絡めとる。華奢な体は、そのまま勢いよくアスファルトに叩き付けられた。

「っ……フッ……！？」

背中から内臓に大きな衝撃が伝った。咄嗟に後頭部は庇ったものの、

マトモに受け身もとれていない。黒子の負ったダメージはとてつもない。

「ひひ、イ〜イ感触だなア。骨が何本かイツちまったんじゃねえか？」

「な……んで……？」

「ああ？簡単だよ。頭あ狙うのわかってて、避けらんねえワケねーだろだろタコ」

単純な話だ。木蓮には、黒子の攻撃が読めていた。むしろ、？この展開？を望んでいたと言ってもいい。

格下の黒子が、格上の木蓮に勝つ唯一の可能性が『頭部への攻撃』だ。黒子の狙いは正しかった。誤算があるとすれば、火影という『格上』をずっと相手どってきた木蓮にとって、『格下』の戦法など容易に想像がつくという点。

これが、黒子と木蓮の『経験値』の差だった。

触手の拘束を解いて、木蓮は黒子を胸ぐらから持ち上げる。

(テレポート……しなければ……)

だが、激痛が演算を妨害する。抉られた肩や、骨が砕けているような背中の痛みでトビそうになる意識をなんとか保つのが、黒子に出来る精一杯の抵抗だった。

「そそる力才だねえ。もうちょい楽しんでたいくらいだぜ。……ま、だが警備員やらに駆けつけられても厄介なんで」

木蓮が先ほど断たれた腕にその断面を向けると、両側から蔓のように細くしなやかな枝が伸びて、互いに絡み合う。そして、結合された腕はアイスピックのように鋭く尖った形状に収束した。

「そろそろ殺すか」

「くっ……！」

黒子は必死に身を擦って木蓮から逃れようとするが、傷だらけの体ではロクな抵抗にはならない。

木蓮はそんな黒子を前に、愉悦の表情で、

「オラ、もっと抵抗してみろよ！もっとオレを楽しませてみやがれ！ひやははははははは！」

歪んだサディズムが黒子に与えるのは言い様もない屈辱と不快感。死への恐怖もさることながら、こんな男がその下手人であることに怒りすら覚える。

そんな力才すら、木蓮にとっては快感を増長させるモノでしかない。

鋭利な触手が黒子の胸に軽く触れる。制服と下着に極小の穴を空けながら、それは黒子の素肌に僅かに突き刺さり、布に小さな血のシミを作った。

木蓮の手が少し進めば、黒子の心臓に風穴が空く。その状態で、男は下劣な笑みを浮かべながら告げた。

「反抗する気力もねえってか？まあいいや　アバヨ」

ゆっくりとした動作で黒子の心臓を貫こうとして、

ガキン！

甲高い音が聞こえた直後、首元を締め付けられる感覚がなくなるのを黒子は感じた。傷ついた体は力なく地面に崩れ落ちる。

「ぐっがああ……!？」

悶絶するような声を木蓮が発した。ムリヤリ体を奮起させ、上体を起こした黒子が見たのは、

赤く滲んだ後頭部を押さえて片膝をついている木蓮と、その辺りで拾ったのであろう鉄パイプを片手に震えながら息を荒くする佐天の姿だった。

「さ……てん、さん？」

「大丈夫ですか!？」

不安から安堵に声色を変えながら、黒子に駆け寄る佐天。

「よかった……私、白井さんが心配で……」

佐天は膝をついて鉄パイプを地面に放り、抱き締めるように黒子に寄り添う。その目には溢れんばかりの涙が浮かんでいた。怖かったのだろう。こんな男に近づくのが、あんなモノで人を殴るのが、それでも佐天は勇気を振り絞った。だが、

「なんで……なんで戻って来たんですのっ……!」

そんな勇気に、黒子がかけたのは叱責の言葉だった。

「危険ですよ！？一歩間違えば命だって落としかねない……なのになんで！」

本来、こんな役目は佐天に押し付けられるものではない。彼女は一般人であり、無能力者だ。

風紀委員であり、大能力者である己が守らねばならない『弱者』なのだ。

己の無力が佐天に武器をとらせてしまった。それが、黒子には堪らなく悔しかった。

パン！

小気味よい音が響いた。それが、自分が佐天に叩かれた音だと黒子が気づいたのは、頬に熱い感覚が走ってからだだった。

「そんなの……危険なのは白井さんだって一緒じゃないですか……！！」

佐天の声は震えていた。瞳からはポロポロと大粒の涙を溢していた。両手は黒子を一層強く抱き締めていた。

佐天から伝わってくるのは、恐怖でも悲愴でもなく、確かな怒り。

「死んじゃうかもしれないのは白井さんだって一緒じゃないですか！か弱い女の子なのは白井さんだって一緒じゃないですか！少しくらい頼ってくれてもいいじゃないですかっ……！！」

「佐天……さん？」

「確かに私はLEVELOで、白井さんや御坂さんみたいに強くないけど……でも！友達が苦しんでる時に力になれないなんて、見て

みぬフリをするなんて、絶対イヤなんですっ!!」

叫ぶだけ叫んだ佐天は、黒子の胸に顔を埋めて嗚咽を漏らし始めた。黒子はただ黙って佐天の背中に手を回した。

「なら二人一緒に死ねや」

その瞬間、黒子は佐天を抱えたまま痛みも忘れて力一杯横に跳ねる。0・1秒待たずして、黒子たちのいた場所に木の槍が突き刺さった。

「ぐっ……!!」

「白井さん!?大丈夫ですか!？」

どうやら骨が折れたというのは本当だったらしい。紙一重で木蓮の攻撃を避けた代償は、身体中を軋ませるような激痛。

苦悶の黒子やそれを案ずる佐天の姿に、木蓮が見せたのは、憤怒。

「ナメやがって……テメエら二人共、仲良くあの世に送ってやらあ!!」

木蓮が腕を振るう。極太の木の鞭が、佐天の側頭部を捉えて、か細い体を吹っ飛ばす。

「あっつ……!!」

「佐天さん!」

「他人構ってるヨユウあんのか!!」

黒子の体も大きく弾かれた。まるでゴム毬のように地面を跳ねる少女の体は、既に満身創痍となっている。
木蓮はそんな黒子に近づいて、端正な顔を踏みにじった。

「誰か来ても面倒だからラクに殺してやるうかと思っただが、ヤメだ。合体ロボみてえにバラバラにしてやる……！」

木蓮は怒りに任せてより強く黒子を踏みつける。少女の頬が薄汚い地面と擦れあう。

そんな状況でも、黒子の意識は木蓮の方へなど向いていない。黒子が見つめるのは、自分の十メートルほど先で意識を失っている佐天の姿だった。

わたくしは、どれ程愚かだったんでしよう。

「友達が苦しんでる時に力になれないなんて、見てみぬフリをするなんて、絶対イヤなんですっ！！！」

友達を信じることもロクに出来ないなんて、風紀委員どころか、人として失格ですの……。

だからこそ、負けられない。

今ここでわたくしが死ねば、次の矛先は佐天さんに向かう。それだけは……それだけは阻止しないと……！！

風紀委員としての正義感ではない。大能力者としての責任感ではない。

ただ、大切な友を守るために。体の痛みを、頭を支配する焦燥を、全てを忘れて演算を開始する。

一秒後、木蓮の足下から黒子が消えた。

「ほう……まだ動きやがるか」

「生憎ですけど、貴方なんぞに殺される気はこれっぽっちもありませんの」

黒子がテレポートしたのは、先の攻撃で転がっていった鉄パイプのすぐ側。腰を落として、それを拾い上げる。

「今から貴方の小賢しい策を撃ち破って差し上げますわ」

「へッ、おもしれえ……やってみやがれ!!」

幾度目かの凶撃。自身に迫る木の槍を、黒子はテレポートで回避する。

飛んだのは、木蓮の真上。

「ハッ、バカの一つ覚えだな!」

そこで、木蓮は思い出す。黒子が鉄パイプごと飛んでいたことを。

(ソイツを直接オレの頭にブチ込むつもりか!? いい考えだが詰めが甘めえ!)

黒子が飛ぶのを何度も見て、木蓮は空間移動の欠点に気づいていた。それは、能力発動までのタイムラグ。複雑な演算を要するために生まれる、大きなスキ。

それさえ掴めば、相手の狙う箇所が限られている以上は回避は容易だ。

黒子の手から鉄パイプが消えるよりも一瞬早く、木蓮は体を一步移動させる。もちろん、木蓮は無傷だ。

「残念だったな！串刺しになりやがれ！」

重力にしたがって落下する黒子を尖った左手で貫こうとして、ガクン、と。後ろから頭を引っ張られた。

「なあっ!?!」

混乱が生まれ、混乱がスキを生む。

自重と引力を最大限に利用した肘鉄が木蓮に迫った。

そうだ、忘れてた。

確かに、木蓮にとって黒子は格下だ。だが、木蓮は今までずっと見てきていた。

『今日のオレは絶好調……アイツは弱い、オレは強え!!!』

『疾き事風の如し！風子ちゃんふつかああっ!!!』

『質よか量でゴアイサツだ！オラ来い!!!』

いつだって格上を相手どって、いつだって勝ってきたヤツらを。慢心は、最大の敵だということを。

「ああああああ!!!」

黒子の渾身の一撃が、木蓮の脳天に炸裂した。割られた頭蓋をさらに責められた男は、ゆっくりと地面に崩れ落ちた。

再び背中から地面に着地した黒子は、恐る恐る木蓮に目をやった。

「やり……ましたの？」

あの鉄パイプは、そもそも木蓮の頭を狙ってはいなかった。真の狙いは、木蓮が鉄パイプをかわしてから。先ほど引き裂かれたカバンから散らばった持ち物の中に混じっていた櫛で木蓮の後ろ髪を絡めとり、櫛を突き刺した鉄パイプの重みでスキを作ること。

「うぐっ……ツツ、よく成功しましたの……」

自分の勝負強さに心底感服する。針の穴を通すような業を、極限のプレッシャーの中、激痛に耐えながらやってのけたのだから。

そして、

（ありがとうございます、佐天さん。貴女のお陰で黒子は勝てました！）

無能力者であり一般人である佐天は守るべき者で、彼女を危険に晒してしまうようなことは恥だ。ついさっきまで、そう思っていた。だが、違った。

弱い部分を補い合って、辛いときには互いに頼って、友達とはそういうモノですね。

やはり自分はまだまだだ。誰かに教えて貰わねば、こんな事にも気づけないのだから。

(さて。とりあえず救急車を呼びますの。大したことはないと思いますが、佐天さんは頭を殴られましたし、わたくしもボロボロですし……お姉さまに知られると厄介ですけど)

それでも背に腹は代えられない、とスカートのポケットからケータイを取り出して、

黒子の後頭部を強い衝撃が襲った。

「え……？」

全身から力が抜け、バランスを失った体が糸を切ったように前めりに崩れ落ちる。

「……油断してたぜ。流石にガキにここまで手こずるなあ思わなかった……だが、もう慢心はねえ」

頭部に強烈な攻撃を二発も貰って、夥しい量の血で紅く染まりながら、それでも木蓮は立ち上がった。

(ま……さか、そんな……！)

薄れ行く意識の中、黒子は戦慄する。男のタフネスに、それを支える鬼神の如し執念に。

(立たないと……！このままでは佐天さんまで……！)

だが、黒子の体は既に限界を迎えていた。曲がりなりにも火影という猛者と闘った木蓮と、せいぜいがその辺のLEVEL3程度が上限の黒子。

同様のダメージを受けて、どちらがより早く倒れるかなど自明の理。

「チツ。……まあ、木山のお膳立てもここまでだ。後は好きに殺らせてもらうかね」

(木……山?)

木蓮が何気なく呟いたその名が、黒子に疑心を抱かせる。大して珍しくもない苗字。普段なら、軽く聞き流していただろう。だが、

『永井が言っていたのも小金井……』

昨日、木山の口から漏れた二つの名。永井と小金井。

一つは、木蓮と同じ苗字。そしてもう一つは……

(小金井さんのこと……?)

思考しながら、黒子の意識は緩やかに闇へと堕ちて行った。

亡骸のように眠る少女に向けて、狂人は木の槍を向ける。

「火影と殺り合う前のイイ肩慣らしになつたぜ」

今度こそ黒子の心臓を貫かんと、木の槍を天へと掲げる。より鋭く、より破壊力を増すべく強い気を練り込んで。

「……だからせいぜいハデに逝けや!!」

振り下ろされる凶撃。勇敢に闘った少女の体は今まさに蹂躪され、朱色に染められようとして、

紅蓮の奔流が、槍を呑み込んだ。

「!?!」

その正体は、炎。

槍は一瞬で炭化し、ボロボロと溢れ落ちた。耐熱性を極限まで上げ、LEVEL3程度の炎なら簡単に封じる木の槍が、だ。木蓮の知る限りでは、これ程の威力の炎を操る者は？二人？しかない。

烈火ではない。あの少年の炎はもつと明るくて、もつと希望に満ちていて、もつと木蓮を不快にさせる『生者』の炎だ。

対して、今木蓮を焼いた炎は、暗く、冷たく、絶望を具象化したような、同属を感じさせる『亡者』の炎。
すなわち

「弱者を踏みにして悦に入る。相も変わらず小さき男よ、木蓮」

紅麗の炎。

其之伍拾・勇敢なる友のため（後書き）

これからもどつかご鼻眞に。

其之伍拾巻・奇立ち（前書き）

木蓮のキャラが定まんない（・・・）

其之伍拾巻：奇立ち

魔術師・シエリー・クロムウエルと火影忍軍・石島土門の闘いが行われてから未だ二十四時間経たぬうちに、戦場であった廃ビルの前で対峙する二人の男。

どちらも異能のチカラをその身に宿し、かつては『仲間』という間柄であった。……もっとも、互いに信頼など皆無であったが。

「……久しぶりだなあ、紅麗さま？」

上っ面だけの敬意を表しながら、木蓮は殺意のこもった笑みを、目の前に立つスーツの男　紅麗に向けた。

対して紅麗は、サングラスとガーゼで隠れた表情を少しも歪めることなく、冷淡な声色で、

「……貴様と言い、幻獣朗と言い、弱いクセに生命力だけは大したモノだ。……だが、貴様もここで終わりだ」

言葉と共に、紅麗の身体中から刺すような覇気が発せられる。ビリビリと大地が揺らぐように錯覚する。もし木蓮に発汗機能が残っていれば、冷汗が流れていたことだろう。

蛇に睨まれた蛙のような状況で、木蓮は思考を巡らせる。

（さて……どう逃げる？ 癩だが今のオレじゃあヤローの相手は出来ねえ……）

仮に木蓮が万全だったとしても、？ 切り札？ が未完成である現状、紅麗ほどの危険人物を相手取るのは自殺行為も同然。戦闘はなんとしても避けるべきだ。

交渉 通じない。いくら有益な情報を持っていても、それを聞いて素直に敵を見逃すほど紅麗は甘くない。

人質 これも望み薄。側にいる二人の少女が紅麗の知り合いである可能性は限りなく低い。喻え無関係な一般人であろうと、紅麗が動じるとは思えない。

そうすると残る手は

(戦闘に持ち込んで、スキを見て逃げる)

決断するが早いか、木蓮は腕を天に掲げる。体から伸びた触手が木の槍に巻き付いて、それをより巨大に作り替えた。

騎士が操るランスのように太く巨大になった木の槍を、木蓮は突き出した。

豪快に風を切って、紅麗の体を喰い千切らんと迫る木蓮の攻撃。

紅麗は、その場から動くこともせず、左手を構えて、

紅蓮の炎で、迫り来る巨大槍を焼き尽くした。

「ちっ!!」

両腕を失った木蓮が慌てて追撃を放とうとするが、

「遅い」

紅麗は一瞬姿を消すと、それよりも早く間合いをゼロに詰めて、今度は木蓮の右足を焼き斬った。

痛みはない。が、足を片方失ったということは、当然バランスを失
つて……

「うおっ……！」
転倒。

それでも必死でもがく木蓮の左足までも焼失させ、紅麗は初めて表
情を変えた。

「さて……達磨の完成だな？」

？弱者をいたぶる愉悦？へと。

力量差は歴然だった。

炎を生み出す左手が、血で汚れることも厭わないで木蓮の頭を掴む。

「貴様なら今？この状況？の意味がわかるな？もし私の機嫌が良け
れば、命くらいは助けてやるかも知れん。だから答えろ。」木

山春生を知っているのか？」

「……ああ」

木蓮は素直に返答した。下手を打てば頭を消し飛ばされかねないこ
の状況では、当然というべきか。
紅麗は続けて問い掛ける。

「『ヤツは何を企んでいる？』」

「さあてねえ。オレはただ、計画のお膳立てをしたただけだ。細かい
ことは知らねえなあ」

嘘ではない、そう判断する。自分の命と計画の成功を天秤にかける

ような男ではないと知っているから。

「なら、最後の質問だ。『貴様たちの目的はなんだ?』」

「……天堂地獄は」

「何?」

「天堂地獄は、?二つ?ある。幻獣朗はその二つを『融合』させるつもりだ」

二つの天堂地獄の融合。

その事に紅麗が抱いた感情は、恐怖でも、絶望でもなく、疑問だった。

(?二つ?……だと?)

天堂地獄。魔導具をこの世に生み出した?天才?の一人・海魔の最高傑作にして、『海魔自身』とも言える、最凶最悪の魔導具。

食物連鎖というこの世の理を根底から覆すその魔導具は、しかし二つと存在し得ない。一つは幻獣朗が持ち込んだモノだとわかる。そしてもう一つは……

(まさか……!だから幻獣朗は?この世界?に飛んだのか……!?)

紅麗の脳に浮かんだ一つの可能性。それは、考えつる中で?最悪?のシナリオ。
すなわち

(天堂地獄は……この世界にも存在する……！)

火影忍軍 織田信長に滅ぼされ、歴史に埋もれて然るべきであったその遺産は、何の因果か？紅麗のいた世界？では、裏社会を生きる者の武器として、再び猛威を奮っていた。だが、それは本来なら？在ってはならない？こと。

常盤台中学の臨時講師となった紅麗は、全科目の教科書に一通り目を通してゐる。当然、日本史分野も。

そして、確かにこの目で『織田信長』の名を見つけたはずだ。

織田信長が存在した。つまり、？この世界？と？紅麗の世界？は。

「く……くくくく……」

不意に、木蓮が気味の悪い薄ら笑いを漏らした。

「……何がおかしい。恐怖のあまり気でも触れたか？」

「なあ、オイ。オレみてーな悪人が素直にテメーの質問に答えるのはどんな時だと思うよ？」

「さてな。貴様の心情など知ったことではない」

「ヒヒ、まあそう言わずに聞いとけや。それはなあ テメエみたいにスカした野郎をブツ殺せる時だよ！！」

ベギン！と紅麗の背後のアスファルトが豪快に砕かれ、そこから伸びる木の巨大槍。一瞬の間に背中から紅麗の体を貫いた。

「ギャハハハハハ！どうしたよオ！紅麗様ともあるうお方が、ズイブン初歩的な手に引つ掛かるじゃねエか！？」

消滅したハズの四肢が断面から生えてくる。細胞が焼き殺されたことで、また新たに体を作り替える。植物の生命力と、魔導具『木霊』が組み合わさったことで生まれた、脅威の回復力。

五体満足を取り戻した木蓮は、串刺しになった紅麗を木の豪腕で弾き飛ばす。

「おいおい紅麗よお。オマエ弱くなってねエか？昔はオレなんかじや逆立ちしたって敵わなかったテムエが、マヌケにも不用意に近づきすぎてこのザマだ。逃げるつもりだったが、あまりにスキだらけだったんでつい手が出ちまったよ」

言いながら、木蓮は右手を突き出し木の槍を構える。照準は、紅麗の頭。

男は口角を三日月のように一層吊り上げて、

「死ね！紅麗！！」

勝利を確信した笑みを浮かべて、凶撃を標的に射出する。より惨たらしくエモノを？殺す？ことに特化させた一撃が紅麗の首を抉りとり、

紅麗の体が、霧散した。

「マヌケは貴様だ」

ほぼ同時に背後から声がしたと思うと、次の瞬間には木蓮の顔面は

勢いよくアスファルトにめり込んでいた。

「ゴブツ……………」

歯と鼻がへし折られ、男の顔面は朱に染まる。オマケに割れた頭蓋を圧迫されて、またもや鮮血が吹き出した。

何者かの手が髪を掴んで木蓮の頭を持ち上げる。その主は、紅麗。

「て……………メエ、なぜ……………」

「貴様のような男に近づくのに保険もかけぬと思ったか？まあ、あの程度の不意打ちなら別魅を使う必要もなかったがな。得意になっている貴様は失笑モノだったよ」

次元が違う。この男が烈火に負けたとは思えなかった。

残虐性も狡猾さも、自分とは比べ物にならない。想像の遙か上を行く、鬼神の如き強さ。

これが　紅麗！

「訊きたいことは訊いた。これ以上貴様を生き永らえさせても私には何の得もない。だから　燃え尽きろ」

炎を纏った紅麗の手が、木蓮の身体を焼き貫かんとした時、

「んー。こっちは困るんですよねー」

声がした。同時に、紅麗の動きが止まる。

？止めた？のではなく、？止められた？。

「えい」

場違いな程にお気楽な掛け声と共に、紅麗に捕らえられていた木蓮の身体が、糸で引つ張られるように離れていく。その先に立つのは、喪服のように黒いワンピースを纏い、眼鏡をかけた十代半ばの少女。

「どーもはじめマチテ。元裏麗死四天、現『ヘルミュージアム幻魔機関』構成員のキリトと言います」

スカートの裾を軽く摘み上げながら、朗らかな笑顔でそう名乗る少女。しかし、その笑顔の裏の確かな狂気を紅麗は感じていた。

「キリト……何しに来やがった」

キリトの足下まで引き摺られた木蓮が、息絶え絶えにそう尋ねる。キリトは頬を膨らませ、

「むうー。せつかく助けに来てあげたのに、いくらなんでもその態度はヒドイです」

言いながら、キリトは紅麗に向き直って彼の足下を指差した。示すのは、紅麗の影とそれを縫い留めるように地面に刺さった、珠つきの針数本。珠に書き込まれた文字は『縫』。

「動けないでしょう？それ、『影縫い』って魔導具なんです。効果は今体験してもらってる通りです」

「……裏麗死四天。森の配下だった者か」

「あつたりー？今？は幻獣朗さんのオトモダチですけどね」

その返答に、紅麗はつまらなそうに鼻を鳴らして、

「それは結構。ところで　こんな玩具で私を止められると本気で思ったか？」

ブチン！と、影縫いの一本が弾け飛んだ。同時に、紅麗の左腕が自由を取り戻す。身を擦ると、立て続けに地面から弾かれて行く魔導具たち。最後の一本も簡単に外れ、紅麗は完全に自由を取り戻した。

トリックなどない。全てタダの？力業？だ。

「……すっごーい」

感嘆を漏らすキリト。しかし、表情から余裕は消えない。

「お目にかかるのはお初ですけど、ウワサ通りの強さですね。やっぱりココは逃げるが吉！」

パチン、と指を鳴らした瞬間、空間に小さな穴が開いた。紫電を迸らせながら、まるで布を捻ったように少しずつ面積を広げていく。

「黙って見逃すと思うか？」

紅麗の左手が炎を纏い、キリトへと向けられる。下手に動けば3000　クラスの灼熱がキリトと木蓮を焼き尽くすだろう。だが、キリトは動じない。

「……じゃあ、こついつのはどうですか？」

懐から取り出したのは、二挺の拳銃。キリトはそれらを諸手に構えて、意識のない佐天と黒子に銃口を向けた。

「さて、どーしますか？私、戦うのはニガテだけど銃の扱いは結構得意なんです。二つ同時に撃つても外さないと思いますよ？」

「フン。貴様が引き金を引く前に、私が貴様を焼き殺せば済む話だ」「ハツタリは通じませんよ」

その言葉に、紅麗の眉がピクリと反応する。

「銃弾つて音より速いんですね。アナタならそのくらい知ってるハズですよ？アナタの炎と銃弾と、どっちが速いかなんて文字通り？火？を見るより明らかです」

「……ちっ」

打つ手なし。そう判断した紅麗は、力なく手を下ろした。紅麗のその行動に、木蓮が反応を示した。

「……へエ、トコトン甘くなったモンだねえ。女子供にも容赦しなかったテメエが、ガキ二人を人質に取られて身動きとれねえとはよ」

木蓮は、醜く顔を歪め、さも滑稽な様子で

「まさかテメエ、『誰かを守るう』なんて考えてやがんのか？」

「……」

紅麗は固く口を結んで何も言わない。木蓮はそれを肯定と受け取った。

「大方烈火の野郎に感化されちまったんだろがな、元部下のよしみで忠告してやるよ。んなもん、やるだけムダだ。テメエはオレと『同類』だ。火影とは、烈火とは棲む世界が違っただよ」

「……………！黙れ！！」

怒りに任せて炎を撃とうとするが、キリトの構えた拳銃が目に入り、
またも動きが止まる。

そんな紅麗に、木蓮はつまらなそうに告げた。

「嘆かわしいねえ。オレあ初めて会った時からテメエがきれエだったがよ、相手の弱みを嬉々として抉るような態度には共感してたんだぜ？……………まあイイ。じゃあな」

それだけ言い残して、木蓮は空間の穴に呑み込まれるようにして消えた。次いでキリトも、紅麗への警戒を緩めぬまま、背中から穴に飛び込んだ。

二人が去った後、穴は徐々に小さくなっていき、泡が弾けるように静かに消えた。

取り残された紅麗の胸に押し寄せるのは、言い様もないような苛立ち。

そらは果たして、敵を逃してしまった己の詰め of 甘さを悔いるモノなのか。

それとも、別の何かに因るモノか。

紅麗には到底わかりそうもなかった。

其之伍拾貳：虚しい？無？（前書き）

佐天さんの心理描写が自分的には過去最高の出来だったり。それでもシヨボいですが。

其之伍拾貳：虚しい？無？

ハーレム。それは、主に思春期の男児が思い描く儂い理想郷。多種多様な美少女を侍らせ、その愛全てを一身に受ける。

しかしながら、それは男だけのものでも、相手が異性でなくてはならないものでもない。

「うっひよおおお！ですのー！ー！ー！ー！ー！」

お嬢様的には落第点も良いところな欲情のヴォイスで叫びながら、桃源郷の中心に白井黒子は立っていた。

彼女を囲むように形成されたハーレム。その構成員はみな同じ顔で、同じ声で、同じ体で。

「ねえねえ黒子ー」

「黒子ー。聞ってるのー？」

「黒子、今日は帰りたくないの……」

「お願い黒子……あなたの全てを私に頂戴！！」

てゆうか、全員御坂美琴だった。ちなみに着ているモノはバラバラで、普通の学生服からナース服からチャイナドレスから、果てはSM嬢のようなボンテージを纏った個体も存在する。

「ああつ、イケませんのお姉さま方！黒子の躰は一つしかございませんのおおお！！」

文字通りに嬉しい悲鳴をあげながら、黒子はへびみたいに身をくねらせて悶絶する。

黒子の黒子による黒子のためのお姉さまハーレム、略して『KOH』。創立者たる少女の心はまさに幸せの絶頂だった。

「ぐへへへ、いけませんのお姉さま……」

「……なんつー夢見てんのよ」

花も恥じらう乙女とは思えない下品な寝言に若干貞操せいそうの危機を感じながら、それでも美琴は簡素なベッドで安らかに眠る黒子の頬を撫でてやる。

『白井黒子さんと佐天涙子さんが搬送されました』。

第七学区の大病院からそう連絡が届いたのが、今から二十分前とあったところか。たまたま近くで立ち読みに耽っていたため、途中で小金井や初春と合流して、すぐに病院までやって来れた。その二人はと言うと、黒子を美琴に任せてついさっき佐天の様子を見に行つたところだ。

「ああん、お姉さま！もつと強くう！」

相も変わらず甘い声で寝言を発し続ける黒子に、これなら問題ないだろうと判断し、ジューズでも買いに行こうかと美琴は病室を後に

する。

「ハア……」

自販機で『黒豆サイダー』を購入し、美琴はため息をついた。主に、三つのことに対して。

一つ目は、昨日の敗北。新しくLEVEL5第八位に序列された少年は、実力でも度量でも己の遙か上を行っていた。新しいライバルが出来て嬉しい反面、『アイツ』の前で未熟さを露呈してしまったことがちよっぴり悔しい。……オマケに庇ってもらったし。

二つ目。これも昨日、まるでレーザーのような無数の光線を目撃したこと。

それは、直前に見た第八位の能力によく似ていた。今朝の新聞にはガス爆発と書かれていたが、そうではないと確信を持って言える。

おそらく、昨日？アレ？を目撃した者全てが同じ意見だろう。

となると　花菱烈火は何かの事件に巻き込まれていると考えるのが妥当だ。

そして、三つ目。他にもない、黒子をあれだけボロボロにした人間について。

黒子は強い。そんなことは自分が誰よりも知っている。なのに、あの有り様だ。

実写版ゲコ太みたいな名医によると、後遺症が残るモノでも命に関わるモノでもないらしいが、それでも黒子はボロボロだ。頭と身体中に包帯を巻かれ、元気そうとはいえ意識を失っている。あの実力者が、だ。

そんな、黒子と佐天を痛め付けたという相手が、怖い以上に憎らしい。

私の友達に手エ出すとはイイ度胸してんじやない……！

バチバチと身体から電磁波が漏れるのを感じた。怒りのあまり、『自分だけの現実』を制御しきれていないらしい。というより、最初から？制御しようと思っていらない？。

見てなさいよ……黒子をあんな目に合わせたツケは、利子ごと耳揃えて払ってもらおうから。

LEVEL5の怒り。それは、街一つを壊滅させる核弾頭のようなモノ。きけんでキケンで危険な代物。

もつとも、彼女の仇敵たる男は、ある意味それ以上に？危険？な存在なのだが。

黒豆サイダーを一気に飲み干し、空き缶をゴミ箱に放ると、美琴は一旦空気を入れ換えようと、病院の外へと向かった。

……ちなみに、今の電磁波の影響で自販機が狂い、それが後々彼女に報復として返ってくるが、それはまた別のお話。

ここは、病院の正面玄関に入ってすぐにあるロビー。平日とはいえ夏休みであるためか、往來の患者がそれなりに多いその場所で、熱く議論する男女が三名。

「つまり……！」

ズパン！と、どこからか運んできたホワイトボードに手を叩きつけるのは小金井薫。反対の手には、掲げるようにしてあるものに乗せている。

「こーなるワケです！！」

？あるもの？の正体。それはルービックキューブ。しかも、そこら辺にある立方体のモノではない。学園都市の技術をムダに注ぎ込んだ、正二十面体のベリーハードなルービックキューブだ。

……しかしながら、一面三枚の正三角形の板に色ムラなど存在しない。物の見事に完成していた。

「「おおーっ！！」」

ちばちばちばー、と病的控えめな拍手喝采を行うのは黒子たちの見舞いに来た初春＋ナースの観察日記をつけようと病院まで足を運んだ青髪ピアス。小金井は懐から取り出したマジックのキャップをきゅぽんと開いて、ホワイトボードに何やら書き込む。

『カオリンの二十面体って崩したくないよネ！』

「ブラジャーや！」

「ブラボーですよ」

興奮のあまり（彼の場合あまり関係ない気もするが）称賛を送るつもりが、間違えて女性用下着の名を叫んでしまった青髪ピアスに初春が訂正を入れる。が、青髪はそんなことなどどうでもよい様子で、

「君、タダのシヨタっ子とちゃうなあ！ええでええでー！僕の萌え

身長相応に長いリーチを誇る両腕が、小金井の小さな背中に迫る。10cm、5cm、3cm。両者の間隔は次第に狭まっていき、ついに変態のダブルハンドが小金井を掴まんとして、

「貴様は『病院では騒ぐな』ってルールも知らないのかしら？」

凜とした女性の声と共に、横合いから弾かれるように飛び出して来た拳が青髪ピアス顔面にジャストミートした。

「げぶふああ!？」

大男はギョルンギョルン回転しながら、頭から壁にめり込んで、ビクビク痙攣したかと思うと動かなくなった。

「……へ？」

チエイサーの存在がなくなり、小金井は足を止めて恐る恐る背後を確認する。

そこに居たのは、仁王立ちで両手をパンパン払っている高校生くらいの少女。ちよつと広めなオデコと巨乳が特徴的な少女は、今度は小金井の方に鋭い視線を送ってきた。

「少年！」

「は、はい！」

少女に呼ばれて、小金井はシャキーン!と背筋を伸ばす。少女から立ち込める、まるで怒った風子のようなオーラが彼の生存本能にスイッチを入れたのだ。彼だけでなく、初春や他の患者たちもフリーズしてしまっている。

「ココはケガや病気の人が集まる場なの。かくいうあたしも風邪気味だからやって来たわ。大方トモダチのお見舞いにでも来たんだろうけど、健康優良児の遊び場じゃないのよ？あまりはしゃぐな！わかった！？」

「ら、らぢゃー！！」

思わず敬礼してしまう小金井。少女は満足げに鼻を鳴らして、

「分かればヨシ！」

ズボツと青髪ピアスを壁から引っこ抜くと、彼を引きずって自動ドアから病院を後にした。

「ブ、ブラジャー」

静まり返ったロビーに、初春の拍手が虚しく響いた。

日本の夏は、不快だ。

地面に照りつける真っ赤な夕焼けも、熱気を孕んで生温くなった風も、耳をつんざく蝉たちの共鳴も、何もかもが苛立ちを助長する。

「はぁ……」

病院の敷地内にある、木陰に隠れたベンチに座って、佐天は重い息

を吐いた。

ゆっくりと側頭部に指で触れてみる。ザラザラした包帯の感触に、先ほどの出来事を回想する。

『少しくらい頼ってくれてもいいじゃないですかっ！』

乾いた笑いが小さく漏れた。それは、自分のあまりの滑稽さに対して。

結局、ただの足手まといだったじゃん。

自分が何の役にも立たなかったことは、身体中に包帯を巻かれた黒子を見れば簡単にわかった。

つまりは、自分はその程度の存在でしかないのだ。

友達が自分のために必死に戦っていても、それを傍観しているだけ。痛みを肩代わりしてあげることすらできない。

ちっぽけで無力な、この街では何のチカラも持たないLEVEL0。

私、わたし……

「あれ？佐天さんじゃない」

不意に、自分を呼ぶ声がした。俯いていた顔をゆっくりと持ち上げると、そこに立っていたのは……

「御坂さん……」

「どーしたのよ、こんなトコで？初春さんたちと一緒にじゃないの？」

「あつ、えーと……あはは、ずっと病院いたら寒くなっちゃったんですよ」

「ああ、わかるわかる。確かにあの病院クーラー効きすぎよね。病院が夏バテ増長させてどーすんだっつーの」

そう言いながら、美琴は佐天の隣に腰を下ろした。なんとなく、佐天は気まずくなってしまう。

「「あの」」

なんとか重い空気を打破しようとして声を絞り出すと、間の悪いことに美琴の声と重なってしまった。

「あつ、ごめんなさい！お先にどーぞ！」

「もー。ナニ畏縮しちゃってんのよ！いつもはもっとサバサバしてるクセに！ま、お言葉に甘えさせてもらっわ」

軽く笑いながら、美琴は遠慮せずに口を開いた。

「ありがとね」

「えっ？」

「詳しいことはわかんないけどさ、黒子のこと助けてくれたんでしょ？」

「な、なんで……」

まだ誰にも話していないのに何故そんなことがわかるのか。尋ねる前に、美琴はさも当然のように答えた。

「だってさ。そうでもなきゃ、あの子が佐天さんにケガ負わせるよ
うなへマするワケないもん。きつとアナタのこと信頼して、力にな
ってもらったんじゃないかな？」

信頼。その言葉が、佐天の胸にチクリと刺さる。

あの時の白井さんは、私のこと信頼してくれたのかな？

あるいは、ありがた迷惑だと感じていたかもしれない。そう思うと
心が苦しい。

だが、美琴はそんな佐天の不安を消し去るように告げる。

「黒子はきつと、嬉しかったと思うよ？」

「嬉し………かった？」

「うん。ほら、あの子風紀委員なんてやってるから。たとえソレが
私でも、『一般人』は守るべき対象じゃない？……おくびにも出さ
なかったケド、きつと色々ツライ部分もあったと思うんだ」

だけど、と美琴は言葉を紡ぐ。

「佐天さんが黒子のこと助けてくれて、ソレでほんの少しの間でも
あの子は『風紀委員』っていう立場じゃなくて、『友達』として佐
天さんのこと守ろうとしたんじゃないかな？」

使命感ではない。ただ、一緒に遊んで一緒に笑って。たったそれだけ

のことがしたかったために、黒子はあの狂人に立ち向かったのだらう、と。美琴が伝えたいのは、きつとそういうこと。だが、だからこそ。黒子？も？自分を友達と思っていたからこそ。

私だって、守ってあげたかった……！

単なるワガママなのだろう。

だけど、それでも、だからこそ。黒子を助けたかった。黒子の力になりたかった。

でも、なれなかった。

「……御坂さんは」

「ん？」

「御坂さんは、なんでLEVEL5になろうと思ったんですか？初春から聞いたことあるんです。御坂さんは、最初はLEVEL1だったって」

佐天の問いに、美琴は照れ臭そうにはにかんだ。頬をポリポリと爪で掻きながら、

「えっと、恥ずかしながら私って別に大層な理由でLEVEL5になれたワケじゃないのよね……」

美琴はベンチから立ち上がって、東の空を見上げる。佐天も釣られて眺めると、そこはうつすら黒くなっており、一番星が目に入った。

「最初はさ、布団の中で電気をパチパチやってたの。そしたらソレがお星様みたく見えてね。頑張ったらいつかは満天の星空を作れる

んだーって信じて、目の前のハードル飛び越して。で、いつの間にやらLEVEL5。だから、正直言ってレベルなんてどうでもいいモノでもあるんだ」

美琴は佐天に向き直る。その顔が、佐天にはどこか寂しそうにも見え、それでも羨ましかった。

「……親の期待が、重いときもあるんです。お母さんなんかお守りまでくれちゃって！学園都市なのにヒカガクテキッたらないですよね！」

「いいお母さんじゃない」

「まつさかー、心配性なだけですよ！」

佐天は笑顔で美琴の言葉を否定した。まるで、空転するタイヤのように虚しげな表情で。

佐天はクルリと体の向きを反転させ、顔だけ美琴の方に向けて、

「じゃ、私特売があるんでお先に失礼しまーす。初春たちに伝えといてください！」

「あっ、ちょっと佐天さ……」

「さいならー」

呼び止める間もなく、佐天は病院とは反対側に走っていった。その背中が、美琴にはとても哀しく感じられた。

其之伍拾参：儂い人の夢

結論は、最初から決まっていたのかもしれない。

小金井の戦闘や黒子の負傷。佐天を守るうとした行動は、皮肉にも佐天の？間違った？決意を後押ししてしまった。

すなわち 幻想御手を使うことを。

「キヤーっ！アケミすごーい！」

「ねえ見てよルイコー！私紙コップ持ち上げんのがやっとだったのに！」

すぐ近くで、？元？無能力者の友人が？能力？を使って清掃ロボや他の友人を持ち上げている。この公園に来る途中、佐天に出会って共に？無能力者を脱却？すると決めた友人たち。「能力」が使えることにはしゃぐ彼女らを見て軽く微笑むと、掬うような形で合わせた両手に、その中にある一枚の葉っぱに視線を落とす。

(集中…… 集中…… 集中……)

ゆっくりと瞼を下ろすと、脳内で演算を開始。そして、驚くほどあっけなく終了。掌に意識を集中させて、恐る恐る瞼を上げた。

「あ……」

彼女の目に映ったのは、掌から少し浮いて、くるくると回転している葉っぱ。掌から発生しているのは、ウチワで扇ぐよりもっと小さな風。

初めての能力。

佐天は、しばし口を金魚のようにパクパクさせて、

「あつ、いつ、やや……やったああああ!!」

まるで幼子のように、両手を上げて飛び上がった。

これだけ嬉しかったのはいつ以来か。

テストで100点取って褒められた時より、誕生日に熊のぬいぐるみをもたらした時より、今の方がずっと嬉しい。ひよっとしたら、弟が生まれた時くらい嬉しいかもしれない。

白井さんや御坂さんに比べたらささやかな力だけど。他人から見ればなんといい事もない力だけど。

佐天の得た力は、スプーン曲げにも、マッチの火にも劣る程度のモノ。

葉っぱ一枚飛ばしたところで、友達を守るどころか、イタズラにも使えはしない。

それでも。

私、能力者になったんだっ!!

それでも、その小さなそよ風は少女が手にした確かな『力』。無力な少女が、友達と同じラインに立つための第一歩。

自分自身のアイデンティティーの証明たるそよ風は、少女にとって何よりも大きく、何よりもありがたい贈り物だった。

少女は今、希望に満ちていた。

友達を守る、友達の力になれる。

力を得ても、彼女のパーソナリティは変わらない。私利私欲ではない。ただ、友達のためを思い続けている。

……それが、酷く儂い虚構の希望だとは知らずに。

「お姉さまは！？黒子のお姉さまたちはどこですのー！？」

「御坂さんなら今薫センパイとコッチに向かっています！大人しくしてくださいってば、白井さん！」

「ウソおっしやい、このお花畑！ついさっきまで黒子の周りにはよりどりみどりのお姉さま方がいらっしやっただんですのッ！……嗚呼麗しのお姉さま、黒子はここにいますのよ？恥ずかしがらずに出てきてくださいまし！！」

第七学区にある大学病院の一室で着衣を乱しながら揉み合っているのは、頭に花が咲いた少女と頭の中が百合の花で埋め尽くされている少女。

つまり、初春と黒子の風紀委員ズ。

事の次第はこうだ。

黒子が目覚めたという報告を受けて、まず初春がやって来た。何やらナースが取り乱していたが、気にせず入室すると、そこにはベッ

ドに立つて虚ろな瞳で『お姉さま、お姉さま』と繰り返す黒子の姿。面喰らいながら、とりあえず意識を呼び戻そうと名を呼ぶと、

『お姉さまをどこへやったああああ!!??』

と、飛び掛かれてこの有り様。

ちなみに黒子はただ寝惚けているだけだが、目覚めたタイミングが悪かった。12人の美琴たちとの甘い新婚初夜を楽しむ直前に現実に呼び戻されたため、混乱して凶暴化してしまっている。

「この泥棒猫があああ！黒子とお姉さまの愛を引き裂こうとは不屈き千番！火星に変わって折檻ですのおおおお!!」

「炎を操る神社の娘みたいなこと言わないでください！あなたは髪型的に主役のドジッ子中学生です！きつとタキシード着た変態マスクが迎えに来てくれます!!」

互いに某有名少女マンガを意識したセリフを吐きながら、女子プロレスのように地べたで組み合う少女たち。

普段なら初春の腕力で黒子に敵うハズもないが、火事場の馬鹿力というヤツか。本来95万パワーしかない初春が、今は7000万パワーにまで急成長している。

「わたくしのお姉さま愛をナメるなああああ!!」

お姉さまのことになれば、黒子のパワーは某宇宙の帝王を軽く上回る。

ガシィッ！と初春の両腕が地面に押さえつけられた。

「しっ、しまった！」

慌てて脱出を試みるも、地力の差がそれを許さない。今の初春はまさしく『まな板の上の鯉』。

「ふふ、ふははははは！人の恋路をジャマするヤツは、馬に蹴られて死んじまえですの！！」

恋する変態・白井黒子が、初春にトドメを刺さんとした刹那。

ガチャリ。と、何の前触れもなくドアが開いた。

そして、その先に立つのは。

「お、お、おおおおお姉さまああああ！！」

敬愛するお姉さま（御坂美琴）。

「お姉さま、お姉さま、お姉さまああああ！！」

その瞬間、まるでスプリングが弾けるような勢いで変態美少女が美琴へと突進を繰り返す。しかし、美琴は上体を反らしてそれを避けると、勢い余った黒子の胴体を両手でがっちりホールドし、

「大人しくしとけえええええええ！！」

そのまま黒子の脳天をリノリウムの床に突き刺した。

「ゴフツ………刺激的………的」

そう言い残して、黒子はポテツと力尽きた。

「おお。ジャーマン」

少し離れてそれを見物していた小金井は小さな拍手を送った。

「違うんですの。ちょっと興奮したのと寝惚けてたせいであって、決してお姉さまをどうこうしようとしたわけではありませんのよ？いえ、まかり間違ってもわたくしは変態などではありませんの。強いて言うならそう……変態という名の淑女とでも申しましょるか？わたくしが愛しているのはお姉さまだけでして、初春に劣情を催したワケではないんですの。あっ、もちろんお姉さまのことも純粋にお慕い申し上げてるんですよ？断じて、お姉さまの歯ブラシで歯を磨いたりとか、お姉さまの残り湯をペットボトルに入れて保存したりとかは……イヤ例えばですわよ？そんな、わたくしが憧れのお姉さまにそんな無礼なことをするハズがないですの。つまり何が言いたいかと言いますと……「長い」

「ごめんなさいですのー！」

ズバツ！という効果音が聞こえそうな勢いで、復活を遂げた黒子はサラリーマンも真つ青な土下座を決める。

それを見下ろしながら、美琴は小さく息を吐いた。

「はぁ……アンタの謝罪聞くのもコレで何回目かしらねえ？今回は過失ってことで許してあげるけど、次同じことしたらどうなるかわ

かるわよね?」

そういう美琴の目は、殺人鬼のように凶悪だった。

「いえすさー!」

素早く立ち上がり、敬礼する黒子。美琴の許しを得て、ベッドの上に腰掛けた。

「にしても……黒子ちゃん回復早すぎない?あれだけキレーにジャーマンキメられたのに……」

「フフン!甘いですよ小金井さん!黒子にとってお姉さまの暴力は何物にも替えがたいカイカンですよ!」

腰に手をあて、断崖絶壁な胸を張る黒子を見て、いい加減ガチで部屋替えすべきかと頭を抱える美琴。

と、これまでさして描写する必要のなかった初春が声を張り上げた。「ところで白井さん。起きてすぐのところ悪いんですけど、早速昨日の件について教えてください」

その言葉で、三人の顔つきが変わる。

「……わかりましたの」

前置きして、黒子は昨日の経緯いきさつを一つ一つ語り始めた。

幻想御手の取り引き現場を片っ端から潰していたこと、その中で狂人に襲われる佐天を発見したこと、そして……狂人の名は永井木蓮ということ。

その名を聞いた小金井の表情が驚愕に染まった。

(木蓮……!?)

一昨日の？閃光？を、小金井は見えていない。ただ、第七学区の学生寮が全壊したと新聞で読んだだけだ。

だが。

木蓮の名を耳にした瞬間、小金井の脳にある可能性が浮上した。

『幻獣朗は既に動き出している』

例えば、木蓮が柳を狙えば、烈火は全力でそれを阻止しようとするハズ。それこそ、『虚空』だろうが、『刹那』だろうが容赦なく召喚するだろう。

火影にとつての『永井木蓮』とは、そういう相手だ。

(つまり、寮は烈火兄ちゃんが自衛のためにブツ壊したってことか)

彼の推理は概ね正しい。間違っているのは、？もう少し複雑に勢力図が絡み合っている？という点のみだ。

そんな風に思考する小金井を、黒子は目敏く観察していた。

(あの反応……おそらく小金井さんは『永井』について何か知っていますの)

多分、友好的関係とは言い難いものであるが、それでも彼は？知っている？。あの人を人とも思わぬような男と繋がりがある。

聞けば、能力者数名を返り討ちにして佐天を救ったとも言っ

悪人ではない。そのくらいの判別はつく。
しかし。

（小金井さんと仲の良い初春も佐天さんも、彼のことについてはあまり知らない……。念のため、警戒はしておいた方がいいですね）

黒子の疑心は深まっていった。

小金井はすぐに病院を後にした。
木蓮の件を紅麗に報告するためだ。

（兄ちゃんたち、大丈夫かなア……）

ひよつとしたら、自分も助太刀に向かうべきかもしれない。
此度の戦闘おそろくで烈火たちの負ったダメージは決して少なくないと思われる。仮にも相手は元十神衆の幻獣朗一味。そう簡単に勝てる相手ではない。
しかし。

「『余計なお世話だ！』ってぶん殴られちゃうかな？」

火影は強い。それは、自分がいなくても変わらないだろう。
紅麗の館で、裏武闘殺陣で、封印の地で、SODOMで、幾多の敵を倒し、幾多の困難を乗り越えて来た。

そんな彼らだからこそ、今自分の助けは必要としていないはずだ。

(よっしゃー！こっちはこっちの問題解決を頑張ろう！！)

信頼ゆえに、小金井は仲間の身を案じない。

考えてみれば簡単だった。烈火が、火影が幻獣朗如きに負けるワケがないのだ。

柳ちゃん守るのは任せたよ、みんな！

「……………にしてもあつちいなあー」

カッコよくキメた小金井は、直後あまりの暑さにぐでえーっと頂垂れる。天気予報によると、今日の気温は39 の猛暑日らしいのでムリもない。

自販機でジュースでも買って帰ろうと思い、すぐ近くの公園に立ち寄ったところ、見知った顔を見つける。

「おお？アソコにおわすは涙子ちゃん！オーイ、涙子ちゃん！」

「うひゃっ！？……………ってセンパイ！」

何故だか佐天はかなり驚いて、手に持っていた音楽プレイヤーを落としてしまった。現在進行形で再生中のようで、イヤホンから僅かに音が漏れている。

「ナニ聞いてんのー？」

プレイヤーを拾い上げ、イヤホンを耳につけようとすると、物凄い勢いで引ったくられた。

「ダッ、ダメですよ！女の子の聞いてる音楽盗み聞きするなんて、デリカシーないです！」

ガガーン！と佐天の言葉がハンマーのように小金井の頭をぶん殴る。少年はガクツと頂垂れた。

「そ、そんな……デリカシーないのは烈火兄ちゃんの専売特許のハズなのに……」

本人が聞いたなら間違いなく怒り狂うようなことを言いながら、小金井はヒザをつく。

佐天的には誤魔化しのもりで言ったことが、予想外の大ダメージを与えてしまったため、慌ててフォローに奔走。

「あー……ほら！男らしくて豪快ってコトですよ！流石センパイ、オトナのオトコ！」

「えへへ、そーかな〜？」

単純なお世辞は予想以上に効果絶大。ものの五秒で小金井は立ち直る。

本人は全力で否定したがるだろうが、この少年の単純さは某モヒカングリラさんと大差ないかもしれない。

「……ところで涙子オジヨースン、なんだか嬉しそーだね」

不意に、小金井はそんなことを呟いた。

「えっ？そうですか？」

「うん。なんだか昨日会った時は寂しそうな力才だったのに、今日はほとんどそんなコトないよ」

「うーん、イイコトあったからかな？ようやくみんなと一緒に立てて」

「？なんの話？」

「……なんでもないですよ！えへへ」

「？」

どこか腑に落ちないような表情の小金井にウインクして見せた。そんな佐天に、小金井は満足の笑みで答えた。

「ウム！悩みがないならそれでヨシ！んぢゃ、オレは兄者に伝えなきゃなんないことあるから家に帰るよ。涙子ちゃんも寄り道しちやダメザマスよー？」

フザけた口調でそう言いながら、小金井はタツタ力駆け出し佐天に手を振った。佐天はそんな小金井に手を振り返しながら、

「センパイ！これから、これから私も……みんなを守れるように頑張りますからー！ー！ー！」

「応援してるぜベイビーー！！」

米粒のようになった小金井の背中に、佐天は手を振り続けた。いつまでも、いつまでも……

その翌日、佐天の友人三名が意識不明の重体に陥った。

其之伍拾肆：大事なモノ（前書き）

かなり前から伏線として用意していた台詞をやっと出せました。
：イマイチ上手く決まらなかったけど（・・・）

其之捌：共闘、逃亡

を読んでいただいたらわかりやすいと思われれます。

其之伍拾肆：大事なモノ

「私が教師……ですか？」

木山春生は、目の前の上司が言うことを理解出来ないうでいた。軽く、ため息を吐きながら、

「何かの冗談ですか？」

彼女は、一言で表すなら？無愛想？な人間だ。他人に興味を持つことも、自分に興味を向けさせようとすることもしない。それは、自分より一回り以上小さい子供に対しても同じだ。

教師などから一番かけ離れた人種であるうに。だから、大きなデスクを挟んで向かいに座る老人の言葉も、季節外れのエイプリルフールにしか聞こえなかった。だが、老人は彼女の弁を聞き流す。

「君は教員免許も持ってたはずだし、教鞭を取ってもおかしくないじゃないか」

「アレは、ついでに取っただけで……今は研究に専念したいのです」

「何事も経験だよ、木山君」

「聞いてください」

木山の訴えを、上司は座っているイスをクルクル回しながら完璧にスルー。木山は再度ため息をついた。

イスが三周ほどしてから、老人は木山とは反対方向　つまり、窓の方を向いて立ち上がり、紐を引いてブラインドを巻き上げる。

「まあ聞きたまえ。別に研究を離れる、と言ってるワケではないよ」
言いながら、老人は窓の外を指し示す。木山が覗いてみると、運動場で十人程度の子供たちがサッカーに興じていた。

「『置き去り（チャイルドエラー）』は知っているだろ？」

『置き去り（チャイルドエラー）』　何らかの事情で学園都市に
置き去り？にされた子供を指す。

何らかの、と言ってもその多くが学園都市の仕組みを利用した、所謂『捨て子』だ。

無責任な大人の哀れな被害者である彼らだが、やはり木山に然したる関心は湧いてこない。

「彼らが何か？」

「これは統括理事会肝いりの実験、そして彼らがその被験者で君の受け持つ生徒になる」

『統括理事会』の名に、木山の表情が確かな変化を見せるが、老人は変わらぬ調子で説明を続ける。

「実験の成功には被験者の詳細な成長データが必要なんだ。だったら、君が直接担任を受け持ったら手間が省けるでしょ？」

「はあ……しかし……」

依然として木山の態度は煮え切らない。人付き合いのニガテな彼女としては、出来る限り避けたい仕事なのだろう。

そんな木山に、老人は 木原幻生は念を押すように再び言った。

「何事も経験だよ、木山くん？」

「アケミさんたちが倒れた!？」

風紀委員177支部のオフィスに、珍しく初春の大声が響いた。

その被害たるや甚大で、固法はムサシノ牛乳を吹き出し、驚いてスツ転んだ黒子は全身を走る激痛に悶絶し、一緒にパソコンを眺めていた美琴と小金井は強かに額をぶつけ合った。

が、初春は気づかず大声を張り上げる。

「な、なんでですか!？」

「なんで……と言われても知らないが、最近よく見る患者たちと同じ症例なのは間違いないね？おそらく、例の「幻想御手」^{レベルアップ}を使ったんだと思うよ？」

電話越しで初春の疑問に答えるのは、初春の友人たちが運ばれた病院の医者だ。何故だか語尾が全て疑問系になっている。

「患者の私物を漁るのは趣味じゃないが、一応報告すべきだと思っ
てね？申し訳ないが、彼女らのケータイで真っ先に目についた君に
かけさせてもらったよ？」

「そつ、そんなことは良いんです！アケミさんたちは……アケミさんたちは無事なんですか！？」

心底切羽詰まったような初春の声に、医者も若干声のトーンを落として応じる。

『……何を以て？無事？と呼ぶかによるね？』

その声が、初春には酷く冷たいものに感じられた。

『身体的ダメージが有るワケではない。三人共、至って健康体だ。脳だつて生命活動は停止していない。……ただ、いつ目覚めるか、果たして？いつかは目覚めるのか？それはわからない』

つまり、と医者は間を置いて、

『ノンレム睡眠のようなモノだね？彼女らは、患者たちは今深い眠りの底にある』

「……なんとか治してあげられないんですか？」

『？患者自体？に問題があるのなら、なんとか出来たと思うよ？しかし……』

どこか物悲しそうな医者の声が、初春に次の返答を予測させる。最悪の答え、というモノを。

『何度も言うが、患者たちは至って健康だ。おそらく問題があるとするれば患者の方ではなく、その外側からのモノだよ？』

「外側……？」

『そう。幻想御手がどういったモノかは知らないが、アレは多分使用者だけに作用するワケじゃない。外側から何かを作用させ、それが副作用となつて彼らを眠らせているんだね？残念ながら、僕は患者を治せても、患者に害を及ぼす元凶を討つことはできない』

「だったら……」

『だから』

どうすれば良いのか。そう訊こうとした矢先、初春を制止するように、医者は強い語調で言った。

『君がそれをすればいい。友達を苦しめてる幻想御手の作り手を見つけ、解決の糸口を見つけるんだ。それが君の仕事だろう？「風紀^{ジャック}委員^{ジメント}」の初春飾利さん？』

「へっ……？なんで私が風紀委員だって……」

初春の疑問に、医者は電話口で僅かに笑いを漏らして、

『なに、一昨日診た患者が……佐天くんと言ったかな？嬉しそうに君のことを話してくれてね？』とても優秀な風紀委員』だそうじゃないか？』

「佐天さんが……？」

『ま、なにせよ友達を助けたいなら、犯人を見つけるのが一番の

近道だと思うよ？期待しているからね？』

「は、はい！ありがとうございます！！」

『では、失礼するよ？』

そして、ブツツという音がして通話が切断された。

初春は、携帯電話を強く握り締める。

友人までもが巻き込まれた憤り、それを察知できなかった悔しさ、そして、絶対に犯人を捕まえるという決意を胸にして。

「私、佐天さんに話を聞いてきます！アケミさんたちのこと、何か知ってるかもしれません！」

そう言い残すと、初春は彼女らしからぬ風のようなスピードで、電子ロックのドアから出ていった。

三人はそれを呆然と見送っていたが、小金井がハッと気づいて、

「オ、オレも行ってくる！」

彼もまた、素早く初春の後を追った。

二人が出ていき、静かな機械音と共に電子ロックの自動ドアが閉じられる。固法がポツリと呟いた。

「……初春さん、ずいぶん張り切ってるわね」

「なんか、ムリしてる感じでしたよね……」

続けて、美琴も不安げにそうこぼすと、

「大丈夫ですよ」

黒子が大声を張り上げた。

「初春は見た目も中身もお花畑ですが、公私は混同しませんの。御友人が倒れたことだって、あの子にとってはカンフル剤みたいなモノですよ」

黒子の声色からは、不安も心配も、微塵も感じられなかった。それだけ『風紀委員』初春飾利を信用しているということだ。

「ところでお姉さま。小金井さんと一体ナニを調べてらしたんですの？」

「別に。アイツが『この街にある研究施設が知りたい』って言うから、私も隣で眺めてただけよ」

「研究施設……ですか」

美琴の答えに、黒子は視線を落として何かを思考したかと思うと、不意に美琴の腕を掴んだ。

「えっ？な、何よ？」

「固法先輩。わたくし、警らにいつて参ります！」

困惑する美琴を無視して固法にそれだけ告げると、返事も待たずに黒子は美琴と一緒に177支部からレポートする。転移先は、雑居ビル前の大通り。

「うおっ！？なんぢやいきなり！ちよつとビックリしちゃったじゃねえか！！」

急にその場に現れた二人に、道行くゴリラ男（モヒカン頭）がクレームをつけるが、黒子は完璧にスルーして美琴の手を引いて再びレポート。それを何度か繰り返して、到着したのは普段美琴が蹴り飛ばしている自販機のある公園。

黒子はキョロキョロ辺りを見回して、人がいないことを確認してからベンチに腰を落ち着けた。

「もーっ、何なのよ急に！警ら行くんじゃないの！？」

ワケもわからぬままに振り回されて、少々ばかりご立腹の電撃娘。

黒子はシレッと答えた。

「ああ、アレはウソですよ」

「はあっ！？」

怪訝な顔の美琴をヨソに、黒子はチョイチョイと手招きのポーズでベンチを指差す。

腑に落ちない部分はあるものの、美琴はそれに従いベンチに座った。太陽光によって熱せられたベンチは、スカート・短パン・下着と三つの布地を貫いて美琴の素肌に焼き付いた。短パンを穿かず、下着だって面積の小さなモノを着けている黒子はもつと熱いことだろう。しかし、黒子はそんな些事など全く気にせず口を開いた。

「……この話は、固法先輩にも、他の誰かにも聞いて欲しくないんですの」

「だからこんなトコに連れてきたってワケ?……まあいいわ。アンタが意味もなく風紀委員のシゴトサボったりしないだろーし」

で?と一言入れてから、

「話って何なのよ?」

黒子は、もう一度だけ辺りを見回してから、重々しく口を開く。

「……木山春生と小金井薫について、お姉さまにお伝えしようと思いましたが」

電気も点けずに薄暗い部屋は、少女の心のようにだった。瞳から止めどなく流れる涙は、一杯になった心から溢れる少女の悲しみだった。音楽端末の液晶に表示された『LEVEL UPPER』という文字は、少女が求めた虚構の希望の証だった。

佐天は苦しかった。

苦しくて、苦しんで、苦しみから逃れようとして、また苦しんで。そんな彼女を待っていたのは、絶望という名の?苦しみ?だった。

最初から解っていたことじゃないか。

幻想御手を使った者は皆倒れていくと知ってたし、いつかは召し上げになることも予測できた。

なのに。

なんでこんなに苦しいの？

悲嘆に暮れた、その時。

ピンポーン

澄んだ音色が聞こえて、

「ヤッホー、涙子ちゃん！」

「佐天さん、ちょっとイイですかー？」

友人たちの声も届いた。

二人とも何しに来たの？

佐天は一瞬考えて、すぐに答えを導き出した。

そっか、私のことを責めに来たんだ。

幻想御手を隠し持ち、さらにはそれを使い、挙げ句トモダチまで巻き込んだ。

罪状なんて知らないけど、きっと初春と薫センパイは私のことを捕まえに来たんだ。二人には、私の気持ちなんてわかりっこないモンね。

ワタシノ気持ちナンテ、ワカリツコナイカラ……！

「帰ってよ!!」

その声が自分自身のモノだなんて、佐天は思いもしなかった。

「佐天さん……?」

「もー、どーしたの涙子ちゃん。オレたち別に「帰ってって行つて
るでしょ!!」」

ドア越しに聞こえるお気楽な声に、再び怒声が口から飛び出た。

「二人にはわかんないんだよ!私の気持ちなんて、わかるワケない
んだ!!」

チガウ、ヤメテヨ。

「初春はコンピューターで白井さんのサポートができる!先輩は能
力なんか無くたってすごく強い!何も出来ない……誰の役にも立
てない私のことなんてほつといてよツ!!」

コンナコト、イイタクナイヨ。

「二人とも、私のこと見下してるんですよ!蔑んでるんですよ!?
白井さんにケガさせて、役立たずの私が無傷なのが気に入らないん
でしょ!!」

ソナナワケナイ。アノ二人ガ、ソナナコトオモウワケナイ。

言いたいことが言えないどころか、口をつくのは罵声と悪態ばかり。
これも彼女の本心には違いない。

ただ違うのは、矛先が向くのが自分か初春たちかという点のみだ。

「初春も薫センパイも！キライ、大キライ！帰ってよ！二度と私に話しかけないでよ！……お願いだから、お願いだからほっといてよ
お……」

嗚咽が漏れた。ダムが決壊したように、涙が一際盛大に流れる。

こんな姿は見て欲しくない。こんな自分を、『佐天涙子』だと思っ
て欲しくない。

まるで幼児がダダを捏ねるように、佐天は訴えた。
しかし。

「ヤダ」

小金井はその申し出をキツパリ断った。

「涙子ちゃん、幻想御手を使ったんでしょ？」

返事はない。小金井は沈黙を肯定と受け取った。

「やっぱりね。あの時、妙に嬉しそうだったからね。でも、アケミ
ちゃんたちが倒れて怖くなった。友達を巻き込んでまでズルをした
自分が許せなかった。チガウ？」

「……」

「別にさ、そんなに重く受け止める必要ないじゃん。ズルはいけな
いコトだけど、涙子ちゃんは今回の件でそれがわかったんでしょ？
だったらいいじゃん。次、おんなじ失敗しなけりゃオツケー！」

そう言つて、小金井はブイサインを作つた。扉に阻まれているのはわかつてる。それでも、きっと佐天には見えていると信じて。

「……ねえ、センパイ」

佐天が自分から声を発する。小金井は優しく微笑んで、

「なに？」

「LEVEL0つて、欠陥品なのかな？」

逆に、初春の表情が固まつた。

「友達を助けたくても助けられなくて、逆に私を守るために傷つけさせて、それでもものうのと元気にいる……もし私がLEVEL5なら、ううん、LEVEL0のままでも、何か少しでも能力が使えるたら……白井さんだつて、少しは痛い思いさせなくて済んだかも知れないのに……」

辛かつたんだらう、悔しかつたんだらう。ひしひしと、佐天の思いが伝わってきた。だから、初春はこう言おうとした。

『佐天さんは、欠陥品なんかじゃありません！』

そして、彼女を元気付けてやろうとした。だが。

「だろっね」

小金井が、あまりにもアツサリと、認めてしまった。
佐天涙子は『欠陥品』である、と。

「涙子ちゃんが闘えたら、きつと木蓮を倒せただろーし、黒子ちゃんだってあんな大怪我しなかったと思うよ」

「センパイ！言い過ぎです！」

捲し立てる初春に、しかし小金井は片目を瞑って、

「でもさ、それで良いと思うよ？」

さらにアツサリと言ったのけた。

「オレの友達に、似たような境遇のコがいるんだ。そのコは悪者に狙われてて、オレはみんなと一緒にそのコを守るために闘った！……なんでかわかる？」

金なんて貰えないし、名誉が手に入るワケもない。

それでも、火影は闘った。佐古下柳という、たった一人の少女のために命を懸けた。

理由はただ一つ。単純なモノ。

「『守りたかったから』だよ。柳ちゃんを悲しませたくなかった、柳ちゃんにずっと笑って欲しかった。だからオレたち、頑張ってたんだ」

『黒子は「友達」として、佐天さんのことを守ろうとしたんじゃないかな？』

小金井と美琴の言葉が、重なったように思えた。

黒子だって、闘った理由は小金井と一緒にだ。ただ、？友達として？、『友達』を守りたかったから。

「人間なんだもん。完璧じゃなくなつて気にしないよ。オレの友達なんてさ、烈火兄ちゃんはバカだし、風子姉ちゃんはガサツだし、水鏡は毒舌だし、土門兄ちゃんなんてゴリラで腐乱犬でフランスモアイで……数えきれないくらい欠点だらけだよ!？」

ガシツと固く拳を握り締め、そんな兄貴分たちにいじめられた過去に涙を流しながら小金井は語る。

「でも、良いとこだつてたくさんあつた!みんなすつごく頼りになつて、すつごくカッコいいんだ!……涙子ちゃんだつて同じだよ!虚空爆破事件の時も、最後まで避難誘導に付き合ってくれたし、イザツて時は女の子を庇ってくれてた!あの時の涙子ちゃん、スツゲーカッコよかつたよ!」

小金井の言葉の一つ一つが、複雑に絡み合つた糸を解いていく。絶望を打ち消し、希望を与える。

「……私でも良いんですか?センパイの、初春の、御坂さんの、白井さんの……大事な友達で、良いんですか?」

最後に一つだけ残つた、固い固い結び目。それをほどくのは、小金井の役目ではない。

彼はそつと、親指でドアを指した。つまり、初春に最後の一言を頼んだ。

「……佐天さん」

「初春、全然喋らなかつたね。ねえ、初春。私、アンタの友達なのかな？スカート捲るし、セクハラするし、拗ねてメーワク掛けちゃうけど、友達だって言ってもらえる？」

初春は、笑った。初春は、泣いた。

満面の笑みを浮かべながら、涙をポロポロ溢しながら、初春は言った。

「佐天さんは、人のスカート捲るし、お風呂で抱き着いてくるし、ちよつとイヤなコトがあつたらすぐ拗ねるし……ハッキリ言って、ダメダメです！でも、でも……」

声はグシャグシャだった。嗚咽のせいで、マトモに喋れたかは怪しい。

だが、初春は確かに、心の底から叫ぶように。

「みんなに言います！佐天さんがお医者さんに言つたみたいに、私だって佐天さんのこと……『自慢の友達』だって言つてやります！」

「……えへへ、初春は私がいなきゃ……ダメだもんねえ」

佐天の体から、力が抜けていく。ゆっくり、ゆったり、まるで眠りに落ちるように、穏やかに。

いつだったんだろうか。

銀行強盗から子供を庇つた時、ケガを治してくれた少女の言葉。

『さつきはすつごくカッコよかつたよ』

やっと、あの意味がわかった気がする。

今にでも消えてなくなりそうな意識の淵で、佐天はほんの少し踏み止まって、小金井と初春に告げた。

「あと、よろしくね」

こうして、佐天涙子もまた、深い深い眠りについた。

其之伍拾伍・運命（前書き）

なんか最近スランプ気味……

幻想御手編もクライマックス近いというに）・・（

其之伍拾伍・運命

一日が過ぎた。

今、美琴はいつもの病院にいる。ついこの前までは？稀に？しか来なかったこの施設が、この数日で？いつもの？と呼べる場所に変化した。

お世辞にも『良いこと』とは言えない。

佐天が眠る病室の前のソファで、美琴は自らの右手を開いてじっと見つめる。

その気になれば十億ボルトもの電圧を生み出す右手は、今の彼女にとって『宝の持ち腐れ』にしか思えなかった。

また、私の知らないところで友達が傷ついた。私はそれに気づけなかった……！

忌々しげに右手を思い切り握り締める。掌にツメが食い込むのを感じた。

黒子だって、佐天だって、友達を守るために命懸けで戦った。

なのに。

LEVEL5の自分はその間に何をしていた？

ム力つくウニ頭や他愛ない不良共以外に、この能力を行使すべき相手はいなかったのか？

あまつさえ、心無い言葉で佐天を傷つけてしまった。

「何が『レベルなんてどうでもいい』、よ。私の無神経な言葉が…

…佐天さんを追い詰めたんじゃない……！！！」

何が？常盤台のEース？だ。

何が？LEVEL5の第三位？だ。

友達一人救えない自分が情けない。

これなら、佐天の気持ちをも、痛みをも、苦しみを知って彼女に手を差し伸べたアイツの方が　小金井薫の方がよっぽど大きな人間だ。

「美琴ちゃん」

その声に、心の奥深くに沈みかけていた意識が呼び起こされる。顔を上げると、缶ジュースを二本持った小金井が立っていた。

「ジュース買ってきたよ　ヤシの実サイダー買おうとしたんだけど、なぜか『きな粉練乳』が出てきちゃった」

軽く笑いながら、小金井は美琴にジュースを差し出す。美琴も礼を言いながら愛想笑いを少し返して、黒子との会話を思い返す。

『小金井さんには、十分に注意しておいてくださいまし』

下らない、と一蹴しようとした。考えすぎだ、と黒子を宥めてやりたかった。

しかし、それは結局出来なかった。

何故か？

美琴自身も、小金井薫という少年に疑念を抱いているからに他ならない。

美琴の猜疑心を増長させている原因は二つ。

第一に、小金井の強さ。

犬を救った時に見せた俊敏な動きや、能力者数名を倒したという戦闘能力は、本来なら一介の中学生が持つようなモノではなかった。それこそ、『暗殺者』^{アサシン}としての訓練でも受けたかのような。

二つ目。『紅麗の存在』。

美琴は、紅麗をどうにも好きになれない理由を、単純に性格が合わないためだと思っていた。

だが違う。美琴は感じているのかもしれない。紅麗の心に僅かに潜む狂気や、修羅のような冷徹さを。

『きな粉練乳』が収まった両手に力が入る。

隣に腰掛けた小金井を、美琴はチラリと横目で眺めてみる。

「むむっ！……まじい……」

『きな粉練乳』の異様な甘さに顔をしかめる少年は、どこからどう見てもタダの中学生だ。

？信じたい？。その気持ちは確かにある。が、？信じられない？のもまた事実。

相反する感情が、美琴の中でぐにゃぐにゃと混じり合う。

幻想御手に花菱烈火にムカつくアイツに……ここ数日は色々なことがありすぎた。

(……退屈しないで済むのはありがたいけど、こつも一度に押し寄せられてもねえ)

掌に包まれたアルミ缶は、結露して水滴まみれになっている。折角奢ってもらったモノを飲まないワケにもいかないので、美琴はプル

タブを引っ張ろうとして、

ゲコゲコ ゲコゲコ ゲコゲコ

急な着信に、危うく口の開いたカンを取り落としそうになった。

「ちょっとゴメンね。……あつ、黒子からだ」

「……それ着信音なの？」

なんだかとてもなくビミョーな顔で尋ねてくる小金井に『ほっとけ』と短く返して、美琴は通話ボタンを押した。

「もしもし、どうし『大変ですのお姉さま!!』……ッ！いきなり大声出すな!!」

黒子のシャウトに鼓膜を思いっきり刺激され、ややご立腹の美琴。しかし、黒子はそんなことに気を回すほどの余裕がないようだった。

『初春が……初春がさらわれましたの!!』

「初春さんが!?!」

驚愕のあまり、美琴の体が跳ねるようにソファーから立ち上がる。小金井は目を丸くして、血相を変えた美琴を見ていた。

「どづいづいとよ!?!」

『正確にはまだわかりませんが……ただ、固法先輩が「木山春生に

会いに行った初春と連絡が取れない」と……』

不覚だった。まさか木山が自分から行動を起こすなど、思いもよらなかつた。

いや、もつと言え、黒子の予感が的中してしまったことが最大の不幸か。

「それで！？今初春さんはどこにいるの！？」

『今街中のカメラの映像を集めております。警備員も動き出しますし、場所はじきわかるハズですの』

「……わかつた。私も木山の後を追うわ。情報が入り次第、ナビよろしく頼むわよ！」

その言葉は黒子にとって予想外のモノだったらしい。電話越しに『え？』という声が聞こえた。

『しかし、一介の研究員に過ぎない木山が警備員を退けることなど……万全を期すのはわかりませんが……』

黒子の言うことはもつともだ。本職が教師とはいえ、対能力者に備えて訓練された警備員が？能力を持たざる？木山を取り逃がすとは思えない。ただ。

「イヤな予感がするのよ……とびつきり、ね」

美琴の心に漠然と湧いた不安。単なる杞憂で済めばいい。が、

(なんか知らないケド、行かなきゃヤバい気がする)

『し、しかし……でしたらわたくしが……!』

「黒子」

黒子の煮え切らない言葉に、美琴は優しく彼女の名を読んだ。

「アンタ、この前たくさんたくさん頑張ったわよね？ポロポロになって、キズだらけになって、人を殺すことを躊躇わないようなヤツと戦った」

だから。

「今度は私が頑張る番よ！絶対に初春さんを救い出すから、アンタはそこで待ってなさい……こんなときくらい、『お姉さま』に頼んなさい！」

『……わかりました。後はお任せしますわ』

平静を装っているものの、その声はわずかに震えていた。美琴は少し微笑み、

「任しときなさい！」

そう言って、ケータイを閉じた。

歩き出す美琴。その肩を掴む者があった。小金井だ。

「……なんかわかんないケド、めちゃくちゃヤバい感じだね。オレもついてって良いかな？」

『小金井薫に注意しろ』

脳内で危険信号が瞬いた。
だが。

「……オツケー。ナニがあるかわかんないんだから、氣イ抜くんじやないわよ?」

美琴が選んだのは、共闘の道。

危険人物かも知れない。自分たちの敵になるかも知れない。

それでも、敵の手駒がわからぬ以上は、こちらとしても最善を尽くすべき。そう判断した結果だった。

信頼などない。打算に妥協を重ねた結果。

自己嫌悪が胸を突くが、迷ってなどいられない。

美琴と小金井は共に行く。

木山を打倒し、勝利を掴みとるために。

己の選んだ道は、後々大きなキズを残すことも知らず

。

とつくの昔に放棄されたハズのその施設は、未だ機能停止に陥っていないかった。

そこには、二人の男が立っている。

共に薄暗がりでサングラスをかけている以外は、二人の容姿に共通点は見出だせない。

かたや、金髪アロハのチンピラ崩れのような男。

かたや、冷たさすら感じさせる漆黒のスーツに身を包んだ、黒髪の男。

二人の男は、ホコリとクモの巣にまみれたキーボードを叩いて、ディスプレイに表示される何かを眺めていた。

「どうだ？お探しの情報は見つかったのか、紅麗？」

金髪アロハの男、土御門の問いに、紅麗はわずかに首肯する。

「思った通り……足跡を辿れば、いつかはその主を見つけ出せる。少々手荒ではあったが、情報収集の甲斐があったようだ」

指を止めて、紅麗は土御門の方に向き直る。

「木山が何を求めているのか掴めたよ。幻獣朗につけこまれるハズだ……アレも結局、甘くて愚直な人間だったようだな」

「そうかい。オマエの『弟』とやらも、相当甘いようだかね」

土御門が発した『弟』というワード。

紅麗にとって『弟』にあたる存在は二人いる。だが、紅麗は敢えて確認をとることもなく答えた。

「……それでいい。『ヤツ』は？甘くていいんだ？」

どこか寂寥を感じさせる紅麗の言葉に、土御門はおかしな感覚を憶えた。

問いたださうかと思ったその時、彼の携帯が振動した。携帯を開いて、通話ボタンを押す。

「どうした？……ナニ？……了解だ、すぐに向かわせる」

二言三言交わして、通話は打ち切られた。ポケットに携帯を押し込みながら、土御門は紅麗に告げた。

「仕事が入った」

「……了解した。で、内容は？」

「木山春生の捕縛及び尋問だ」

運命は手繰り寄せろ。

三人の人間を、大きく大きく手繰り寄せろ。

待ち受けるのは幸か不幸か。

ただ一つ言えるのは、それを境に、三人の運命は大きく変わるといふことのみ……。

他に通る者の見当たらない学園都市の高速道路を疾走する車が一台。基本的に合理主義である持ち主の性格とは裏腹に、その車はレーシングカーをモチーフにした、非合理のカタマリのような代物だ。

ハイウェイを疾風のように駆ける姿は見るものを魅了し、青い曲線には美しさすら覚えてしまう。

ただ、流麗な青いボディが織り成す爽快感に反して、車内のムードは険悪そのものだった。

「ウカツだったよ……もう少し目につかない所に資料を隠しておくべきだった。普段は私の部屋に来客などないものでね……」

この車の持ち主にしてドライバーの木山春生は右側の助手席に座る初春飾利に話しかける。

「……………」
「が、返事はない。」

初春はあくまで敵意のこもった視線を木山にぶつけるだけだった。

（ウカツだったのはこっちの方です……！こんなにカンタンに捕まっちゃうなんて……）

初春は胸中で毒づいた。

彼女の細い手首には、無骨な銀色の手錠が嵌められている。さらにいえば、木山の腰の左側には拳銃が挟み込まれており、ヘタな抵抗の出来ない状況に陥っていた。

「ところで……以前から気になっていたんだが、その頭の花はなんだい？君の能力に何か関係があるのかな？」

木山はといえば、車に乗った時から、こうしてずっと下らない質問を続けている。危害を加えるつもりがないことをアピールするためか、はたまた単に研究者としての性分か。いずれにせよ、今この状況に対する憔悴は見られなかった。

「そうそう、君のお友達に小金井くん……という少年がいたと思うんだが、彼は今どこにいるんだい？」

木山の一方的な質問に、いい加減辟易した初春は顔を背けてハツキリ言った。

「お答えする義理はありません！」

明確な拒絶。当然の反応ではあるが、それでも気分がいいモノではない。木山は小さくため息をついた。

「そんなことより、幻想御手って何なんですか？どうしてこんなことしたんですか？眠った人達はどうなるんですか？」

今度は初春が、今までの鬱憤を晴らすかのように矢継ぎ早に質問する。

木山はまたもため息を溢して、

「こっちの質問には答えてくれないのに……」

だが、本人としても対して気にはしていないため、簡単に応じる。

「まず『レベルアップ幻想御手』だが、アレは複数の人間の脳を繋げることで、高度な演算を可能にするモノだ」

「繋げる……？」

「ああ。ネットワークを形成すると言った方が分かりやすいかな？ 複数人の脳波を集めることで、より効率的な演算を行えるんだ。まあ、結果的に使用者の脳波をネットワークに取り込んでしまい、昏睡状態に陥らせてしまうんだがね」

そして、と木山は言葉を繋ぐ。

「私はあるシミュレーションを行いたいんだ。『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の使用申請は却下……だから代わりになる演算機器が必要でね」

「それで能力者を……？」

『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』 学園都市の打ち上げた人工衛星『おりひめ？号』に搭載された超高度並列演算機。

その用途は多岐に渡り、天気予報から果てはとあるLEVEL5のクローン生産などと聞いたこともある。

その性能は向こう25年は上回ることが不可能とされるほどで、能力者を百や二百集めたところで到底追い追いつけるモノではない。そう、少なくとも

「一万人。この計画のために一万人の力を借りた」

初春は絶句した。あまりにも膨大な数に？

否、木山の？軽い？口振りに。

「借りたんじゃなくて、奪ったんじゃないですか！！」

次の瞬間、口をついた怒りの声。

が、木山は動揺した様子もなく言う。

「そんなに怖い顔をしないでくれ。シミュレーションが終わればみんな解放するさ」

「信用できません……！」

「……なら、君にこれを預けよう」

木山は白衣のポケットから何かを取り出し、初春の膝の上に置いた。黒くて四角いその物体は、何かのデータチップのように見えた。

「幻想御手の治療用プログラムだ」

「！？」

「それを使えば眠っている学生たちは目を覚ます。後遺症は残らないよ」

「……そんなの、十分にデータも取れてないモノなんて信じられませんか！！」

「ハハ、手厳しいな……」

乾いた笑いを漏らしながらも、木山の目付きは真剣そのものだった。

彼女は、付け加えるようにして告げる。

「だが、既に幻想御手に関して残っているデータはそれだけだ。警備員が所定の手順を踏まずに機材を作動させれば、他のデータは全て消える。大切にしまえ」

それだけ言うと、木山はハンドルを握り直して前方を見据える。

単調な光景がいつまでも続く高速道路も、研究者として？待つ？ことを覚えている彼女にはさして苦痛とはならない。

恐ろしいのはむしろ、研究に悪影響を与える『イレギュラー』の方だ。

（永井の言っていた危険因子は六名。うち四名は別の案件に関わっているようだが、残りは今どこにいるのかわからない……厄介なことだな）

木山にとっての『イレギュラー』。『魔導具』の存在。

複雑な演算を必要とせず、ただ念じるだけで異能の力を行使できる
武器　それが魔導具。

一部のモノはLEVEL5にも匹敵する力を秘めるといふソレは、今回の計画に大きな支障を来す恐れのある厄介極まりない代物だ。

（一応、私も一つ預かってはいる……ただ）

面倒なことに、危険因子のうち四名はその『魔導具』の使い手だといふ。

そうすると、相当な差がなければ魔導具を用いたのみで木山が勝つことなどまずあり得ない。

(……いや、臆する必要はない。第一、魔導具を使うのは奥の手。なるべく私自身で成し遂げようと決めたハズだ)

己の選んだのが茨の道だということくらい、とうの昔に理解している。

今さら迷うことも、恐れることも必要ない。

必要なのは、執念。目的のために心を悪魔に売り渡すほどの、執念のみだ。

と、木山の目が前方200メートルほど先に何かを捉えた。

三十程度の人間に、同じくらいの警備ロボ。大型の特殊車両も数台。自衛隊のような防護服に身を固め、手に持つ盾には三ツ又の矛をモチーフにした紋様。

『ジャケット風紀委員』と双壁を成す学園都市の治安維持部隊『アンチスキル警備員』だ。

進路を断たれた木山は、ブレーキをかけて警備員から30mほど離れた位置に停車する。

それを見て、女性の警備員が一人、拡声器を手に出る。

『木山春生だな？オマエは既に包囲されている。大人しく投降するじゃん！』

凜とした声で宣告する警備員。

木山はつまらなそうに呟く。

「……上から命令があった時だけ素早いヤツラだな」

「どうするんですか？逃げ場はありませんよ？」

挑発的にも思える初春の言葉にも、木山はさして動じない。

それどころか、女はまるでせせら笑うように口角を吊り上げた。

「幻想御手は……」

その表情は、抵抗を諦めた敗者のものではない。

それはまさしく……

「使用者に面白い副産物をもたらすモノでもあるのだよ」

それはまさしく、『警備員など相手にもならない』という、？勝者？の表情だった。

「あー、今日から君たちの担任になる木山春生だ。よろしく」

「よろしくお願いしまーす！」

気だるげな自分の声とは対照的に、どこまでも元気潑刺な子供の声
が幾重にもなつて木山の耳に響いた。

本日付で正式に『教師』となった女性研究員は、心中でガツクリと
頂垂れる。

（本当に厄介なことになった……な）

子供はキライだ。

「やーい！引つ掛かった引つ掛かったー！」

「こらー！男子ー！！」

騒がしいし。

「センサーってモテねーだろ。オレが彼氏になってやるよ」

「……大きなお世話」

デリカシーはないし。

「えー、次は32ページを……ひゃあっ！？ムム、ムカデ！？」

「あははは！また引っ掛かってやんのー！！」

悪戯するし。

「ううっ、えぐっ、うえっ……」

「ど、どうしたんだ？どこか痛むところでも……」

「うえっ、ふえええええん……！！」

論理的じゃないし。

（げっ、人参……端っこに寄せておこっ……）

「あー、好き嫌いしてるー！！」

「センサー、好き嫌いダメなんだよ！！」

「うっ……」

馴れ馴れしいし、すぐになつてくる。

子供はキライ……だ。

タクシーに乗って木山を追っていた美琴と小金井が見たのは、ハイウェイで起きた爆発と、立ち上る黒煙だった。その瞬間、タクシーは急ブレーキで停車する。

「な、なんだありゃあ……?」

ドライバーの男も目を丸くしている。美琴が懐から万札を取り出しながら、焦りきった様子で叫ぶ。

「ありがとう、ここまででいいわ! オツリはいいから! 行くわよ、あんた!」

「あいよ!」

「えっ、ちょっとお客さん!」

呼び止めようとする運転手を無視して、二人はハイウェイに繋がる連絡階段をかけあがる。

「たかだか研究員一人を捕まえるだけにしては……やることハデすぎない？」

先に行く小金井が美琴に尋ねる。小金井の肩には、布にくるまれた大きく長い武器のようなモノが担がれている。

「いくらなんでもここまでしないわよ！多分、木山がなんかの武器で反抗したんでしょよ！！」

少し離れたところを走りながら返答する美琴。彼女もまた、戦闘準備を確実に済ましており、スカートの両ポケットからはジャラジャラと重量感のある音がしている。

万全の態勢の両名。彼らにしても、大した戦闘力もない一介の研究員を相手どる？だけ？にしては、過剰がすぎる念の入り用。

美琴と小金井は、感じていたのだ。この日この場所で、？何か？がある。

そしてその予感が正しかったことは、すぐに判明した。

「な………によ、これ………？」

階段を上りきった美琴と小金井は目にした。

戦闘不能となった警備員の面々。

ズタズタに引き裂かれた警備ロボ。

真ん中から両断されている大型車両。

そして………そして、掌から『超能力』と思われる炎を生み出す木山春生を。

「やあ、遅かったじゃないか。」

「木山……春生……！」

「……飾利ちゃんはどこにいんの？」

小金井の問いに、木山はある方向を指差す。その先にあるのは、青く光沢のあるボディを誇るレーシングカー。さらに、その中に初春が乗っていた。

「初春さん！」

「安心なさい。眠っているだけだ」

言いながら、木山は炎を収束し、掌から消し去った。

「御坂美琴に小金井薫…… LEVEL5に危険因子が一人ずつ、か。これだけで済んで、まだマシと言うべきかな？」

美琴と小金井。この二人の強さを重々理解しながら、木山の表情から余裕は消えない。それは即ち 絶対的な自信の証明！
しかし。

「ヨユー出してられんのも今のうちだよ。オレたち、めっちゃくちゃ強いんだから……！」

「アンタが何をしたのか……カラクリは知らないけど、何をしようが叩き潰してやるわ」

『絶対的な自信』を持つのはこの二人も同じこと。

かたや、暗殺集団『麗』の戦闘員として訓練され、幾度も強敵を破ってきた少年。

かたや、LEVEL5の超電磁砲として名を馳せ、一個軍隊にも匹敵する能力を持つ少女。

迷いのない二人の眼を見て、木山は呟いた。

「君たちに……一万の脳を統べる私を止められるかな？」

「上等！」

二人同時に、弾けるように始動した。

戦いは……始まった！

其之伍拾漆・HIGHWAY BATTLE? TRANCE FORM(前書き)

ごめんなさい、めっちゃ時間かかりました(´・`・´)

「おりゃあああああああ！！！」

小金井が猛然と木山に飛び掛かる。

岩をも斬り裂く金色の刃が、木山の脳天に振り下ろされた。……が。

「うぐっ……！？」

「残念……届かなかったようだな」

木山が手を翳すと、鋼金暗器共々、小金井の動きがピタリと止まった。まるで、強力な糸で身体を固定されたかのように。

木山が思い切り手を振るう。同時に小金井の身体も投じられ、野球ボールのように美琴目掛けて飛んでいく。

「ちよっ、こっちくんなあ！！……あだっ！！」

「ぎゃふんっ！！」

勢いよく衝突した中学生コンビはマヌケな悲鳴をあげながらゴロゴロと雪玉のように転がっていき、壁にぶつかって動きを止めた。

「アデデデデ！チキショー、なんだよ今の！！」

「念動力……？どついうことよ……」

テレキネシス

美琴の顔に生じた翳りを、小金井は見逃さない。

鋼金暗器の刃を木山に向け、警戒を持続しながら美琴に問う。

「……あのチカラのカラクリはわかる？」

「私らの使ってる『チカラ』と変わんないわよ。多分、LEVEL 3程度の念動力だと思う」

テレキネシス 念動力。『超能力』と呼ばれる力の中では比較的ポピュラーなモノだ。それはこの学園都市においても同じで、ほとんどの『水流操作』ハイドロハンド や『発火能力』パイロキネシス など、様々な能力の基盤となっている。

そう、念動力自体はさして珍しい能力ではない。ただ、

「なんで学生でもないアンタが能力を使えんのかしら……？」

念動力に限らず、そもそも『超能力』とは学園都市の学生のみに許されたチカラ。

本来なら、？一介の研究員？が扱えるシロモノではない。

口元を妖しく歪めて、右手を警備ロボの残骸に向ける。ズタズタになった鉄のカタマリが、軽々と宙に浮かんだ。

「良かったじゃないか、世間知らずのお嬢様。また一つ……知識のハバが広がったな！」

木山の腕に連動し、巨大砲弾が射出される。小金井は即座に飛び退いたが、美琴はその場に佇んで、避けようとする気配すらない。

「アブナイッ、美琴ちゃん……！」

驚愕混じりの叫びが、小金井の小さな体から発せられる。援護に向かおうにも、既に逆方向に跳ねた体はそう簡単に軌道修正出来ない。少女の華奢な肢体が、凶弾に蹂躪されるかと思っただ瞬間

「……世間知らずとか、」

小金井の視界の端から、また一機、警備ロボの残骸がとてつもないスピードで飛んでいく。美琴のメートル先で二つの金属塊が衝突し、鮮やかながらも激しい火花が散る。重厚な音をたてながら二台の警備ロボが墜落した。

「アンタに言われたくないっつーの!!」

紫電が弾ける。

LEVEL5が生み出した電光の矢が、木山春生を貫かんとして、まるで彼女を避けるかの如く四散した。

「なっ!?!」

驚愕する美琴に、灼熱の火玉が迫る。その出所は……木山の右手。

「くっ……!!」

今度こそ、小金井が美琴を押し倒して木山の攻撃を回避させる。

火玉は彼らの背後の壁に直撃し、霧散した。

美琴と小金井は素早く起き上がり、次の一撃に備える。

「……ッ、どーなってんのよ……!?!」

美琴が忌々しげに舌を打つ。

今、己の電撃をねじ曲げたのは、おそらく誘電力場のシールド。そして、木山の撃った炎に、先の念動力。

？自分たちが見たのは三つ？。

そして、斬り刻まれた警備ロボや、大きくネジ曲がった警備員の銃などから察するに、？木山はまだ能力を持っている？。

それは、あり得ない？ハズ？だった。

喩え、木山が能力開発を受けていたとしても、だ。

学園都市の学生が能力を発動するにあたって、重要となる要素は二つ。

『演算能力』と『自分だけの現実』パーソナルリアリティ。

『演算能力』に関しては、まだムリヤリながらも説明はつく。例えば、木山が何らかの演算補助を利用している可能性。究極的には、？とてつもなく頭の回転が早ければ？、複数能力の同時使用も不可能ではない。

問題となるのは、『自分だけの現実』の方。

これは、頭が良いとか、才能があるとか、そういう問題ではない。

例えるなら、『右を向きながら左を向け』というような矛盾。前進しながら後退は出来ない、そんな世界の理。

すなわち、実現不可と謳われた『多重能力』デュアルスキル。

それを今、木山春生は実現させている。

「くく……どうも、私のチカラが気になるようだね？」

焦燥、疑念、困惑。そんな美琴の感情を見透かして、木山は薄い笑いを漏らした。

「『教えて』って言えば、素直に教えてくれんのかしら？」

「別に構わないさ。教えたところで、どうとなるワケではない。これは……『幻想御手』レベルアップがもたらした副産物だ」

「幻想御手が……？」

「私には『目的』がある。そのために一万の学生の脳を繋いで、ネットワークを構築した。それを利用すれば、使用者全員分の能力を掌握できるんだよ。名付けるなら、そうだな……『多才能力』マルチスキルと言ったところか」

単純なことだった。

右と左を同時に向けないのは、頭が一つしかないからだ。前進と後退を両立出来ないのは、自分が一人しかないからだ。

ならば、増やせばいい。

一万の脳を集めれば、一万の演算能力と、一万の『自分だけの現実』を掌握できる。

わかりやすい、足し算だ。

『多才能力』を手にした女は呟いた。

「私は……戦わなければならないんだ」

瞬間。木山の立っている地点が大きく陥没した。

それを中心にして地面に亀裂が走る。亀裂はまるで蜘蛛の巣のように広がって美琴と小金井の足元にまで到達し　地面がコナゴナに砕けた。

ガレキの雨と一緒に、15mほどの高さから三人は落下する。が、その程度で戦闘不能に陥るようなことはない。美琴は磁力を操って地面への激突を防ぎつつ、巻き込まれた警備員も磁力で柱に縫い止める。小金井は持ち前の運動能力で軽やかに着地した。その光景に、木山は舌を巻いた。

「スゴいな……想像以上だ」

「そんなこと言ってるヨユーないよ!!」

再び小金井が仕掛けた。

目にも止まらぬ速さで地を駆けて、金色の刃で空気を薙いで斬り払う。……が、またしても見えざるチカラが小金井の動きを封じ、大きく弾き飛ばした。

「くっ……!!」

今度は倒れることなく、両足で地面を踏み締めてなんとか体勢を立て直す。しかし、じり貧なのに変わりはない。

「無駄さ。言っただろう？私は今、一万の脳を統べている。一万対二……考えるまでもない。君たち二人に勝ち目はないんだ」

「んなこと知るか!!」

美琴の怒号が響いた。

「アンタの目的は知んないケドねえ、コレだけはハッキリ言ってるわ。』人のチカラ奪っというて、エラソーなコトほざいてんじやな

いわよ』！！」

「奪った……ねえ」

木山は両目を瞑って前髪を掻き上げながら、崩壊したハイウェイを指差した。

「彼女にも、同じことを言われたよ。案ずる必要はない。全てが終われば、みんな目覚めて元に戻る。誰も何も、？失うことはないんだ？」

「フザケンなっ！！！」

木山に反発する怒声。それを発したのは、小金井。

「何が『失うことはない』だよ！アンタは知ってるのか！！涙子ちゃん、涙子ちゃんは……スゴク喜んでたんだ。みんなのチカラになれるって、みんなを守るって、スゴク、スゴク嬉しそうだった……アンタはそれを奪ったんだ！涙子ちゃんの心を踏みにじったんだ！！！」

小金井が示した『怒り』の感情。それを目の当たりにした美琴は、あの忍者バカの少年との決闘を思い出す。

あの時と同等か、それ以上に感じられる威圧感。

そして怒りの原動力となるのは、佐天涙子の想い。

(アイツ……佐天さんのために……？)

小金井は鋼金暗器を構える。右手は刃に添えるように、左手は柄を握り締めるように。

「負けないよ、絶対！アンタのしたコト、後悔させてやる！！」

次の瞬間、小金井は右手と左手を大きくスライドさせた。少なくとも、その場にいた美琴と木山には？そう見えた？。

その認識が誤りだと気づいたのは、彼の手に握られた武器を確認した時。

刃が添えられていた右手には、巨大な鎌。そして鎌から伸びる鎖が、左手に握られた柄の部分と繋がっている。

薙刀だったハズの鋼金暗器が、鎖鎌に？変形していた？。

鋼金暗器の持つ特性。それは、『変形』。数多の細かいパーツの組み合わせが、六つの『型』を生み出す。

本来なら手慣れた者でも十秒程度の時間を要するその複雑な変形過程も、パズルに関して天才的な才能を持つ小金井にかかれば、その間実に 0.6秒！

「鋼金暗器 一二之型『龍』！鎖鎌だあ！！」

変形した鋼金暗器を携えて、小金井が選んだのはまたもや直進。その行動に、木山は呆れたように、

「何度やっても同じだよ」

再び両者の間に形成される、念動力の壁。

が、小金井は口元を歪めて、スピードをほとんど緩めぬまま後方へ思い切り跳ねる。

「何度も同じ手は喰わないよ！！」

同時に右手から放たれる鎖つきの鎌。先ほどとは違い時間差を巧みに利用したフェイント戦法。
しかし、そんなものは子供騙しに過ぎない。

「見くびられたモノだな」

投ぜられた鎌は、木山に致命傷を与えんと高速で飛来し、
彼女を避けるようにあらぬ方向へ逸れてゆく。

「トリックアート 偏光能力」だよ……残念ながら、君のしている私は実像では……
っ！？」

木山の頬を、後方から飛んできた何かが掠め、少量の血が飛んだ。
木山の顔を斬り裂いたその物体は、今しがた大きくコースアウトしたハズの鎌。鎌は鋭い動きで小金井の右手に収まった。

「まだまだあ！！」

地面を踏み抜いて大きく跳躍し、天から木山に斬り込む小金井。木山はそれを、好機と捉える！

（速さもトリッキーさも一級品だ。だが、防御は脆い……跳んでしまえばコチラのものだ）

目に入った中で一際大きかったガレキを砲弾とし、小金井目掛けて撃ち出す。一人を雄に超える体積の砲弾は、薙刀や鎖鎌で防げるシロモノではない。

小金井の戦闘不能を確信する木山だが、小金井は舞いながら笑みを浮かべる。

「三之型『極』！大鋏！！」

鎖鎌が、今度は特大の鋏へと変形する。
鋏の刃は二つともガレキに突き刺さり、勢いよく柄が閉じられるの
と同時に固い砲弾を斬り砕く。

「もらつたああー！！！！」

重力を味方に、激しい勢いで木山の真上から落下してくる小金井。
計算外の強さに驚く木山だが、そんな余裕はない。

「くっ……！！！！」

慌てながらも、冷静に念動力を送って再三小金井を止める。
しかし、警戒すべき敵はまだいる。

「ちよろつとー」

振り返った木山が見た少女の表情は、狂暴な笑顔。全身に迸る雷光
を纏ったその姿は、まさに雷神の如し。

「私のこと」

（マズイっ……シールドを……！！）

「シカトしてんじゃないわよっ！！！！」

放たれた雷撃の槍が、木山の体を貫いた。

「かつ……はあ……」

LEVEL5の一撃をマトモに受けた女は崩れ落ち、小金井を束縛していた能力も強制解除される。

「ナイススタッグー!!」

右腕を上げてガッツポーズをとる小金井に、美琴はただ頷いてみせるだけだった。

(アイツは佐天さんのために怒った。危険も省みずに木山に向かっていった)

それなのに、未だに小金井を信用出来ずにいる自分がいる。

ナニ考えてんのよ。素直に喜べばいいじゃない。アイツは、敵なんかじゃないんだ。

そう自分に言い聞かせ、小金井の下に歩み寄ろうと一歩踏み出……

ホントにそうなの？

……すことは出来なかった。

アイツはどこから来たの？何であんなに強いのか？何で黒子をロボロにしたヤツのことを知ってるの？

私は知らない。アイツのことを、何一つ知らない。

いくら考えても答えが出るハズもなく、疑心は新たな疑心を生むばかり。どうしようもないスパイラル。そこから逃れる術など、美琴は持ち合わせてはいない。

「美琴ちゃん？」

黙りこくったまま動かない美琴を訝しく思った小金井が彼女に駆け寄りうとするが、その足は美琴同様、途中で動きを止める。

小金井はゆっくりと振り返り、背後を見た。

そこに立つのは、満身創痍の木山春生。

「なっ！？アレを喰らってまだ……！！」

美琴の口から思わず驚嘆の声が飛び出す。

衣服はスタボロ、肌の一部は黒ずんで、見るからに危なっかしい足取り。それでも、女は立っていた。

「まだやるの？アンタ、さっさと病院行った方がイイんじゃない？」

小金井の言葉に、木山は震える唇で弱々しく、

「私は……私は負けられないんだ。あの子たちの笑顔を取り戻すまで、絶対、絶対、倒れるワケにはいかないんだ……！！」

いつ意識を失ってもおかしくないような状態。それでも、木山の眼光は鋭く強い。

強固な覚悟を宿したその眼は、今まで小金井が共に闘った火影の面々と同じ。

「私は決めた……あの子たちを救うためなら悪魔に魂を売り渡しても構わない。この街の全てを敵に回してでも……私は闘う！！」

白衣のポケットに手を突っ込むと、そこからナニかを取り出す。小金井たちが視認する間もなく、ソレは木山の首に嵌め込まれた。

ソレは、チョーカーのようだった。
中心には、宝珠が埋め込まれていて、そこにはこう書かれている。

『言』

小金井の記憶が、危険を伝える。

「や……ばい！美琴ちゃん！耳をっ！！」

「刮目しなさい」

忠告するも、時既に遅し。

魔導具『言霊』が発動する。

其之伍拾捌・HIGHWAY BATTLE?秘めたる覚悟(前書き)

めちゃくちゃお待たせしました!

何気に一周年な当作品。

これからもよろしく願っています!!

其之伍拾捌：HIGHWAY BATTLE？秘めたる覚悟

その日は、雨が降っていた。思えば、教師になって初めての雨だ。新任二日目にイタズラ好きな男子生徒に受けたバケツトラップの洗礼を思い出しながら、木山は水浸しになったタイル張りの地面を歩く。

（さて……帰ったら例の研究の続きに取り掛かるか）

教師となってからは色々和多忙になり、ロクに研究を行うこともできない。

上手く言いくるめられてしまった、と木山は後悔混じりのため息をこぼした。

だが、今更嘆いたところでどうしようもない。今は教師として、『置き去り』の子どもたちのデータを採りながら研究に貢献するだけだ。

少し意気を取り戻し、さっさと帰ろうと足を早めた木山は、視界の端に見慣れた姿を捉えた。

「あたた……うー……」

地面にへたり込んで、泥だらけの体をさすりながら唸っているのは枝先絆理という少女。木山が受け持つ生徒の一人だ。放っておくワケにもいかないので、近づいて声をかける。

「どうした、枝先？」

「あっ木山センサー。えへへ、ぬかるんでて転んじゃった」

絆理は誤魔化すように笑ってみせる。

少女は結構ハデに転んだらしく、見事に濡れ鼠と化していた。このまま帰して風邪を引かれても困るので、木山は絆理に提案する。

「……私のマンションはすぐそこだが、風呂を貸そうか？」

「いいのっ!？」

反応は、予想以上に大きかった。

正直な話、社交辞令のつもりだったが、こつも喜ばれてしまったのはそうも言えない。やむなく、絆理と一緒に自宅へと向かった。

「わぁー！お風呂だぁー!!」

何の変哲もない浴室を見た絆理の第一声はこうだった。

何をそんなにはしゃぐ必要があるのか。疑問に思った木山は何気なく尋ねてみる。

「何か珍しいのか？」

「うん！だってウチの施設、週二回のシャワーだけだもん。ホントに入っているの？」

「……ああ」

「やたっ！みんなに自慢しちゃおーっ！」

再度許可を得た絆理は、服を脱ぎ捨てて上機嫌に浴室へと入っていく。

木山はドロドロになった洋服を指で摘まんで洗濯機に放り込み、壁に寄りかかった。

（案の定というか……彼女らの扱いはあまり良くないようだな）

当然といえば当然だ。

学園都市としては、育てても一銭の得にもならない『LEVEL0』にかける金などないのだろう。そんなハイリスクを犯すよりは、現存するLEVEL5のクローンでも作った方がマシというものだ。結局、学園都市にとって『置き去り』たちは、何かあっても誰も何も言わない、手頃な被験者？でしかない。

「……ねえ、センサー。私でも頑張ったらLEVEL5になれるかなあ？」

「……今の段階では何とも言えないな。生まれ持った資質にもよるが、今後の努力次第といったところか」

端的に、真実だけを述べる。

『嘘も方便』というが、科学者である彼女にとっては目に映る真実にこそ価値がある。故に、主観を混ぜることはしない。

「高レベル能力者に憧れてるのか？」

「んー、もちろんそれもあるけど……私たちは学園都市に育ててもらってるから。この街の役に立てるようになりたいなーって」

多分、その言葉にはそこまで大きな意味があるわけではない。

絆理にとつての『親』は学園都市。つまり、『親孝行』をしてやるうというだけのことだ。『親』の考えていることなど、彼らは知る

由もないのだから。

結局、その日は研究に手をつけることは出来なかった。それでも、不思議と気にならなかった。

「刮目しなさい」

木山が呟いた直後、尋常ならざるスピードで小金井は木山に斬りかかる。

？アレ？は危険だ。もし発動が成功されれば、？厄介？程度ではすまない。

だから、発動条件を満たしてしまう前に術者を倒す！

素早い判断に、素早い一撃。

鋼金暗器を一之型に変形し、木山に向けて振り下ろす。

だが、届かない。念動力の障壁が鋼金暗器の一閃を阻み、小金井を大きく弾き返した。

木山の口が怪しく歪んだ。

『残念だったな』

言外にそう告げて、木山は言葉を紡ぐ。

「極寒だ。凍てつく寒さが君たちを襲う。全てを凍らす絶対零度が君たちに牙を向く」

その瞬間、美琴は？世界が変わる？のを感じた。

ガレキの山が消えた。代わりに眩い白銀が視界を覆った。

身を焦がす暑さが消えた。代わりに猛烈な吹雪が肌を刺した。

『勝利』を確信した爽快感が消えた。代わりに言い表すことの出来ないような不快感が彼女を呑み込んだ。

(遅かった……！)

心中で毒づきながら、小金井は着地する。

固いコンクリートの上に……ではなく、踏めば体が沈むほどに柔らかい雪の上に。

「なななな何よこれえ！？天候を操る能力なんてあああんの！？」
歯をガチガチと鳴らし、体を震わせながら尋ねる美琴。小金井は寒さに凍りつきそうな唇を必死に動かした。

「ちがうよ……木山は天気を操ってるワケじゃあない。こ、この吹雪も、寒さも、全部幻覚なんだ……！」

「幻覚う！？な、ナニいつてんのよ！ホントに幻覚なら、この寒さはなんだってのよ！」

至極全うな疑問。

この光景がツクリモノだというなら、美琴たちを襲う極寒は一体なんだというのか。

それに答えたのは、木山春生。

「間違いないよ、コレは幻覚だ。この魔導具で作り出したモノだ」
「まどーぐ……?」

首につけたチョーカーを指でコツコツとつついて見せる木山。
聞き慣れぬ単語に、美琴は怪訝な表情を示した。

「な、なんなのよそれ……!」

「さあて、私もよくわかっていないんだ。念じるだけで、まるで学^{きみ}生^{たち}のように能力を操ることの出来る……一種のオーパーツだな」

言いながら、木山はその細い指を小金井に、否、彼が握り締めている武器に向けた。

「キミの持っているそれも、魔導具なんだろう?」

「……へえ、お姉さんよく知ってるね。幻獣朗の入れ知恵力ナ?」

「そんなところだよ。どうも、君たち『火影』は私の目的の障害になりそうなのでね」

『目的』 木山の口から度々発せられるこの単語。女が眼に宿した悲痛な覚悟が、小金井にも見てとれる。
だからこそ小金井は木山に問う。

「アンタの『目的』ってのはなんだい?」

しかし、木山は鼻で笑ってこう返す。

「答える義理はないよ。コレは？私の？問題だ」

「……ガンコ者。ま、いいや。意地でも暴いちやる！！」

小金井は声高にそう宣言すると、地面を踏みしめ跳ぶように駆ける！……が。

「ぶべっ！！」

三歩ほどで雪に足をとられ、見事に顔面からスツ転んだ。

「コラーツ！真面目にやれー！！」

「ぶあはっ！やってるよー！」

「てゆうーかなんなのよコレー！？幻覚じゃなかったのー！？」

相も変わらず我が身を凍てつかせる吹雪に、美琴は疑問を訴える。彼女の疑問は尤もだ。コレが幻覚なら、寒さも痛さも感じるハズはないのだから。

頭を振るって雪を払い落としながら小金井は答える。

「……？錯覚？させてるんだよ」

「錯覚……？」

「そう。普通は『痛み』って、体が受けた刺激を脳に伝えて、そこで初めて感じるものでしょ？言霊は逆に脳に『痛い』って情報を伝えて、それを体に送るんだ。……だよ、木山センサー？」

「ほう……よく知っているね。君も使ったことがあるのかな？」

「へへ、オレは鋼金暗器一筋だよっ！魔導具の？スペシャリスト？に聞いたんだ」

この世界でも、陽炎の知識に助けられるとは思わなかった。

『年の功だね』などと本人に絶対に聞かせてはならないことを口走りながら、小金井は鋼金暗器を構える。

「さて……今度こそ行くよ！」

「待ちなさいよ、アンタどうやって……！」

美琴の言葉を、小金井は手で制し、告げる。

「カントンだよ。脳から直接刺激が送られてるんだ、だったら？それ以上の刺激をこっちから送ればいい？んだ」

小金井は悴む右拳を強く握る。そしてそれを……自分の頬に思い切り打ち付けた。

「んなあつ!!!?!」

突然の奇行に困惑を隠しきれない美琴。

だが、小金井は赤い筋が零れた口角を吊り上げ、

「いよっしやあああ!!」

今度こそ、自身のスピードを最大限に発揮して木山に接近する。

(やはり速い！コレで無能力者か……!!！)

恐るべき身体能力だ。武器を持たなくても、LEVEL3程度なら敵ではないだろう。

迎撃せんと右手を振るう。木山の頭上で風が塊となって、斧のように降り下ろされる。風の斧は、小金井もろとも地面を抉った……かに見えた。

「う・し・る」

背後からの声、同時に木山の背中を強い衝撃と激痛が襲った。

「がっ……」

脚から力が抜けて、膝から崩れ落ちる。なんとか地面に手をついて倒れまいと踏ん張るが、それが限界だ。

「あっ、戻った!!」

美琴の声でそう聞こえた。どうやら幻覚を維持することも困難になったらしい。

雷撃と痛打を一発ずつ。研究員である木山には重すぎるダメージだ。

「やったね！後は皆を起こす方法を聞けば一件落着っ！」

自分から離れる足音と、勝利を確信したであろう小金井の言葉も聞こえる。

当然だ。殺人のプロを相手にしてきた彼にとっては、自分ごとき相手にもならないだろう。

これ以上やってもムダだ。ほぼ無傷の実力者二人に、ノックアウト

死んでも構わない。死など恐れていない。
その態度と覚悟に、小金井は再び感じた。

まるで、花菱烈火のような。霧沢風子のような。石島土門のような。
水鏡凍季也のような。そして……小金井薫のような。
大切な者を守らんとする、強さを。

「刮目、しなさい」

木山の口が発するキーワード。

美琴も小金井も、攻撃しようと思えばできたはずだった。だが、木山の気迫がそれを許さない。

「現れるのは……君たちが、君たちが？もっとも強い？と思う人間だ。その人間たちが、君たちに牙を剥く……！」

言霊の核が、光を発する。思わず目を閉じてしまう美琴と小金井。彼らが再び瞼を開いた時、そこには二人の少年が立っていた。

共に、よく似たツンツン頭。年の頃は15、6といったところ。
満月のようにどこか気だるげな瞳と、太陽のようにキラキラと輝く瞳。対照的な瞳は、しかしどちらも強い意志を秘めている。

上条当麻と花菱烈火。

美琴と小金井が思い浮かべた『最強』が、確かにそこに存在した。

其之伍拾玖：HIGHWAY BATTLE？過去は語らず

炎の刃を右腕に纏い、急接近するウニ頭。よく知る少年と全く同じ姿の？ソレ？に、小金井は容赦なく鋼金暗器を振り下ろす。

ガギーン！

頭の芯を揺さぶる音の衝撃。？ソレ？は、小金井の一撃を正面からマトモに受け止めてもビクともしていなかった。

「き式、崩ッ！！」

よく知る声が叫ぶと同時に、小金井は素早く後ろに跳びすさる。直後に飛来する灼熱の玉。小金井は鋼金暗器に力を加え、変形させる。

「四之型『三日月』！武羽冥乱！！」
ブーメラン

小金井の手から、三日月型に変形した鋼金暗器が放たれる。巨大なブーメランと化した鋼金暗器は高速回転によって満月を描きながら、崩の火玉を破壊しつつ、烈火に向けて飛んで行く。

（当たれっ！！）

しかし。

両者の間に障壁が発生する。亀の甲羅のような形の半透明の膜が、鋼金暗器を受け止めた。

『結界王』 円の炎。

結界とぶつかり合った鋼金暗器は激しい火花をたてるも、弾き返され小金井の足下に虚しく突き刺さった。

「 やっぱ、そうカンタンにはいかないよね」

？笑いながら？小金井は呟いた。

烈火は強い。十神衆だって、死四天だって、あの紅麗だって倒した。

それでも……それゆえに？面白い？。

「勝つよ、兄ちゃん！勝ってオレの強さを証明してやる！！」

鳥肌が起つ。身体が昂る。脳ミソからアドレナリンが分泌されているのがわかる。

『戦士』としての本能？否。

それはまるで、スポーツでもやっているような感覚だった。

野球小僧が野球をするように、サッカー少年がサッカーをするように、小金井はあくまで？楽しむ？。

相手と打ち合う衝撃を。相手の一撃をかわすスリルを。相手を倒した時の爽快感を。

だからこそ、強い。

戦いを楽しむ。

それが、小金井の強さ。

「三之型！『極』！行くよ……兄ちゃん！！」

飛ぶようにして、小金井は駆ける。

LEVEL5の第三位、『超電磁砲』の御坂美琴。『電撃使い』の最高位にいる少女。

その強さは尋常ではなく、軍隊一つを相手にできると言われる程だ。現に、彼女の通り名となった『超電磁砲』を始め、十億の電圧を誇る電流や磁力で操り自由自在に変形する砂鉄の剣、そしてそれらを巧みに使いこなす卓越した頭脳。確かに少女は強い。

しかし。

目の前にいる少年は、そんな御坂美琴と幾度も対峙して、未だに力スリキズ一つ負ったことがない。

その理由は彼の持つ不思議な『チカラ』。

砂鉄の剣も、雷撃の槍も、十億ボルトの雷も。どれひとつとして、少年にダメージを負わせたことはなかった。

その全てが理不尽に『消滅』させられて。

「まさか、こんなカタチでまたアンタと戦えるとは思わなかったわ。今までのツケ……」

美琴の指先が青白く閃いた。人差し指に纏われるように弾ける電撃が……

「返してやるわよ!!」

放たれた!

速さは光。電圧は十億。

? 普通? の人間にどうにかできる一撃ではない。

なのに。少年に到達しようとした電撃は、空間を砕いたような音とともにまるで線香花火のごとく儂く消え去った。

「やっぱりアンタ……? 普通? じゃないみたいね……!!」

いつぞや聞いた都市伝説。

『全ての能力を消し去る能力を持つ男』

それが今。魔導具『言霊』による幻覚とはいえ、確かに目の前に存在する。

いや、今だけではない。

連続爆破事件の時も、第八位との決闘の時も、いつだって『アイツ』は美琴の前に現れた。

『無敵』ともいえるその能力で、二度も美琴を救ってくれた。

? だからこそ? 勝ちたい。

勝って『アイツ』を見返してやりたい。

御坂美琴が守られるほどに弱い存在でないと証明してやりたい。

LEVEL5第三位、『超電磁砲』として。

「みてなさい……今日こそ、今度こそ、アンタに勝つわよ!」

美琴は気づいていなかった。

自分が心に抱えた、大きな大きな『矛盾』に。

「う、ぐあ……はっ、はっ、はっ……」

脳を襲う激しい痛み、木山春生は苦悶の表情をしめした。頭はふらつき、呼吸は乱れ、足下さえも覚束ない。

『言霊』の力を限界まで引き出すために、木山もまた限界を越えていた。

「くっ……」

脚から力が抜ける。まるで糸を切られた人形のように、木山は力無く膝をついた。

（さすがに、無理をしすぎたか……この数日はロクに寝てもいないからな……）

薬を飲んで騙し騙しやってきたものの、もともと彼女は単なる研究員に過ぎない。度重なる疲労に加え、美琴と小金井に痛打をもらい、さらには魔導具まで使っている。

未だに意識を保っているのは奇跡……否、『気力』の賜物だ。

『せんせー、木山せんせー』

「……ああ、そうだな」

木山は立ち上がる。彼女にもまた、守らねばならぬモノがあるから。

「うああああ!?!」

木山の耳に絶叫が届いた。音源を見ると、目に入ったのは左足からおびただしい量の血を流す小金井と、腕に炎の刃を纏う、木山の産み出した『幻覚の少年』。

「……どうやら、私の考えは正しかったらしいな」

人間という動物は、物事を『主観』でとらえるものだ。程度の差こそあれ、そのことはねじ曲げることの出来ない事実だ。

だからこそ、『最も強いと思う人間』などと曖昧な言葉で幻覚を作った。

『最強』という言葉で生まれた幻覚が持つのは、各々がその人物に對して抱く『最強』の所以たる部分のみ。言うなれば、? 思い込み? による強さだ。

思い込みは時として、その人物に実力以上の力を発揮させることがあり、逆に実力の半分も出せなくさせることもある。

今の美琴と小金井は、そのどちらも当てはまる。木山はそう考えていた。

自身の思う『最強』の存在。

『強いに決まっている』 『自分なんかじゃ敵わない』 『勝てるハズなんてない』

固定観念が、幻覚をより強い存在に作り替えてしまう。

ネガティブな感情が、己の力を束縛してしまふ。

兵法の基本ともいえる単純なやり方だが、単純であるが故に効果的だ。

終わりだ。おそらく後数分もたないだろう。

そう思つて、目を伏せたとき……

「な……めんなあああああああ！！！！」

とてつもない爆音が轟き、辺り一面が眩い光に呑み込まれた。

「な、なんだ……！？」

目を焼く閃光と体を吹き飛ばされそうな衝撃に思わず腕で顔を隠しながら、木山は驚愕する。

爆音はまるで五月雨のように一瞬で治まり、発生源から人影が姿を現す。

全く無傷の 御坂美琴が。

「そんな……バカな……！？」

木山の脳裏を一つの考えがよぎった。

(まさか、さっきのあの少年のように自分自身にダメージを与えて……！)

しかし、その考えは一瞬のうちに除外される。

(あり得ない……あの幻覚は私が全霊を込めて作ったんだ！いくら電撃を浴びせたところで、解けるわけがない……！)

そもそも、そんな手荒な策をとったなら無傷ですむはずがない。ならば、ならば……！

「言っとくけど、小細工なんて使ってないわよ。ただ単純に、思いっきり撃って幻覚を？吹き飛ばした？だけだから」

つまりは、力。御坂美琴は、自身の圧倒的な力でもって己の中の『最強』を擦じ伏せたのだ。

「なぜ……！」

「負けらんないからだよ」

木山に語る声が一つ増えた。視線を向けると、小金井が左足を引き摺りながらこちらに近づいてくる。彼の相手だった少年は既に姿を消していた。

「オレたちは友達を助けるためにここに来た。飾利ちゃんに、黒子ちゃん……みんな涙子ちゃんのために頑張ってた。オレたちだって、やらなきゃいけない。ねえ、もっぺん訊くよ、木山せんせい……」

『木山せんせい』

その単語が、木山の心を抉り、脳に突き刺さり、

「あんだ、なんのために闘ってるの？」

小金井のその問いが、木山春生を大きく揺さぶった。

「なんとなくだけど、オレにはわかる。アンタはオレと一緒になんだ。大切な人がいて、その人のために戦ってるんだよね？……だから、言うよ。こんなやり方じゃなくなつて、大事なモノは守れるよ！！」

小金井は知っている。

あくまで己の道を歩み、あくまで己の信念に従つて、大切なモノを守り通した一人の忍を。

だからこそ、今の木山のやり方は酷く切なく、心苦しい。

「誰かを傷つけなくたって、きつと、きつと守れるんだ！だからオレに教えてよ！オレは、オレたちはきつとアンタの助けになるから！！」

そう言つて、小金井は右手を差し出した。

それは、救いの手だ。木山にとつて、彼女の大切なモノにとつての、大きな力だ。

助けてくれる……？

こんな私を、あの子たちを、ホントに救ってくれる……？

この街に裏切られたあの子たちのために、闘ってくれる……？

だったら、助けてもらえばいい。

そうだ、それが一番確実な方法だ。

タダの研究者に過ぎない自分と、無能力で驚異的な強さを誇る小金井。

どちらが真に役に立つかは、考えるまでもない。

この手をとれば、そうすればあの子たちを救ってもらえる。

ゆっくりと、木山の手が小金井の手に伸びてゆき、手と手が重なりあう……

『私たちは学園都市に育ててもらってるから。この街の役に立てるようにになりたいなーって』

その直前、手を引っ込めた。

「なっ……！？なんで!？」

「……すまないが、それはムリだ」

驚く小金井に、木山は低く呟く。

「『この街』は、裏切ったんだ。役に立とうと、恩を返そうとしたあの子たちを裏切ったんだ……信用なんてできるハズないだろう!」

今まで出したことの無いような大声が、自然に腹から吐き出されて

いた。

「私は決めた！ 喻えこれが間違った選択だろうと、許されないような悪事だろうと……絶対にやり遂げてみせる！！ そのためにも、君たちに話すワケにはいかない……！」

「……なるほど。引けない事情つてのがあるワケね」

「ただ、と美琴は言葉を紡ぐ。

「私たちも、やらなきゃいけないことがあるの。何でも思い通りにいくと思わないでよね……！」

その言葉に、木山は薄く笑いを漏らす。

「くくつ、わかっているさ。一筋縄でなんとかなる相手じゃあ……ないことくらいね……！」

木山が地面を踏みつける。同時に、突風が美琴と小金井を襲った。

「うぐつ……！」

「キヤツ……！」

まるで嵐のように暴力的な風の壁が、体重の軽い二人を軽々吹き飛ばした。際限なく飛んでいきそうになるが、美琴は磁力を操り、小金井は地面に鋼金暗器突き刺してなんとか持ちこたえた。だが、木山は休む間もなく追撃を仕掛ける。

「刮目しなさい。炎だ。全てを焼き尽くす炎に包まれる」

円を描くようにして、二人の周りに炎が走る。それはバツクドラフトのように爆発的に膨張し、一瞬のうちに二人を灼熱の牢獄に閉じ込めた。

ジリジリと、2000 は下らない炎の余波が二人の身を焦がした。

今二人がいるのは、ちょうど台風の目にあたる場所。

炎の壁を突き破るのはまず不可能。壁の厚さはおおよそ一メートル、高さは十五メートル以上。超電磁砲では穴を開ける前にコインが溶けてしまうし、かといって鋼金暗器や電撃で脱出口など作れない。上を見ても、視界に映るのは抜けるような青空だけ。鎖鎌を突き刺すことも、磁力を操って天井に張り付くこともできない。ましてや、飛び越えるなど持つての外だ。

「万事休す、ってヤツかしら？」

「だね。さーて、どうしようか？」

刻一刻と命が尽きんとしているにも関わらず、二人に憔悴はなかった。

そこにあるのは『諦め』ではない。それは、今の状況を『好機』と捉えた表情だった。

「……終わりだ。彼らも、そして私も」

炎の壁は、すでに十五メートルほどの高さになっている。しかも、
上に

とうとう自分は人殺しにまで落ちぶれた。もはや、『あの子たちに会うことは許されない存在だ。』

「すまない、枝先、みんな……私は、私はもう……」

「終わってなんかないよ」

声が聞こえた。聞こえるハズのない声が、聞こえるハズのないところから。

木山は驚きのままに上を見上げる。

目に入ったのは、鋼金暗器を振り上げた体勢で空から降りてくる、小金井の姿だった。

「なっ……に……!？」

驚愕が木山の心に焦りを生む。

(しまった!あの武器は金属、磁力で操って……!)

演算ができない、幻覚を作るスキもない。

結局、木山が何一つ策を講じれぬ間に、小金井は木山の背後に降り立つと同時に、木山の首に鋼金暗器を?降り下ろした?。狙いは木山の首……ではなく、言霊の連結部分。

甲高い金属音が響いて、巨大な刃が、その大きさに見合わぬ細かいモノを真つ二つに分断した。

木山の首から言霊が外れ、弾けるように宙を舞う。小金井は僅かに笑って、片足で勢いよく?跳んだ?。

「言霊、もらいーっ!!」

「しまっ……!!」

木山も慌てて手を伸ばすが、時既に遅し。小金井の右手が一瞬早く、言霊を掴んだ。術者の手を離れたことで、幻覚も消える。炎の渦は消失し、美琴も無事解放された。それを確認した小金井は着地して、叫んだ。

「刮目しろっ！木山春生の過去を映し出せ!!」

「なっ……待てっ……!!」

木山の制止は間に合わない。

言霊の核が光を発し、辺り一面を支配する。

光が消えた時。小金井と美琴が目にしたのは、照れ臭そうに笑う木山と、それを笑いながら取り囲む小さな子供たちの姿だった。

其之伍拾玖：HIGHWAY BATTLE? 過去は語らず(後書き)

烈火vs小金井、美琴vs上条……最初はもつと詳しく書くつもりでしたが、なかなか内容が思い付かなかったのと早く話を進めるためにあんな感じになっちゃいました(´・`・´)

其之陸拾：木山センサー（前書き）

久しぶりの更新……！

其之陸拾：木山センサー

「言霊」は、一定の空間内に存在する者の脳に干渉し、術者の想像したイメージを直接相手の脳に送る魔導具だ。だが、イメージを形にできるのは術者の脳に止まらない。

例えば、亜希との闘いにおいて巨大な氷を具現化させた土門のように。

例えば、先ほど木山が生み出した、美琴と小金井の思い浮かべるそれぞれの「最強」の存在ように。

そして今、美琴と小金井の前には彼らの知るべくもない光景が広がっている。

「あー、センサー好き嫌いはダメなんだよー」

「やーい、センサーが引つ掛かったー」

「センサーモテねーだろー。オレの彼女にしてやるよー」

「あのねあのね……わたし、センサーを描いたの……！」

「センサー、お誕生日おめでとうー」

嬉しそうに、楽しそうに、極上の笑みを浮かべる子どもたちの姿。そして、

「……あ、ありがとう」

ぎこちなく、拙く、それでも心の底から小さく微笑む木山春生の姿。

それが、言霊の読み取った木山の過去の情景だった。まるで絵本のページを捲るように、場面は次々と換わっていく。

春を過ぎし、夏を過ぎし、秋を過ぎし、冬を過ぎし。

絶えることのない笑顔。

尽きることのない喜び。

端から見てても微笑ましい光景は、しかしそう長くは続かなかった。

木山が教壇に立ってから、およそ一年が経過した。

生徒たちの側で過ごし、毎日の体調変化や精神状態の機微まで詳細にデータをとり、何度も何度も計算とシミュレーションを繰り返して万全を期した計画がとうとう実行される。

(先生ゴツコも今日まで……か)

最初はイヤイヤやっていた教師の仕事もこれでお仕舞いとなると、どこか寂しさを感じてしまう。

(果たして本当にそれだけか……?)

ふと、頭に浮かんだ考えはかぶりを振って否定する。

(馬鹿馬鹿しい……ただ慣れた仕事を放れるのに違和感があるだけ

だ。一週間もすれば、こんな思いは忙殺されてしまっさ……）
らしくない、自分でもそう思う。

そうだ、こんなものは勘違いだ。勘違いに決まっている。
頭を揺さぶられているのも、胸を締め付けられるのも、目の奥が熱
いのだって。

「何もかも、タダの勘違いだよ……」

誰に聞かせるワケではない。

強いて言うなら自分自身に語りかけるように、木山は小さく呟いた。

研究所の中央にあるのは巨大な実験場。そこに備えられた靴のよう
な形の機材に、子どもたちが寝かされている。

「チクツとするよ」

「あたっ！」

木山は生徒一人ひとりに声をかけながら、精神安定剤を注射して回
っている。

その度に、一年間の思い出が走馬灯のように駆け巡る。

『やーい、引っ掛かった引っ掛かったー』

『オレが大きくなったらセンサーのことお嫁にもらってやんよ……！』

『やったー センサーニンジン食べられたじゃん』

『わたしね、将来は木山センサーみたいなセンサーになるんだ!』

『見てみてセンサー! 空き缶浮かせられるようになったよー!』

『わたしたち、センサーの生徒になれてすっごく嬉しかった!』

「……ッ」

「どーしたの? センサー、大丈夫?」

僅かに顔が歪んだ木山を、最後に注射を打たれる絆理が心配そうに覗き込む。

木山は大きく息を吸って、

「……ああ、問題ないよ。さあ、腕を出して」

「うんっ!」

木山がそう言うと、絆理は元気良く腕を突き出す。

失敗の可能性が低いとはいえ、これから始まる実験は幼い子どもにとっては恐ろしいに違いない。なのに、絆理の顔に曇りは見られない。

いや、絆理だけでなく、生徒たち全員がそうだった。まるでいつもの授業を受けるときのように、当たり前のように笑っていた。

「……枝先」

「なあに?」

「怖くはないか？」

木山は思わずそう尋ねていた。少しは悩むかと思っただが、返答は思いの外早く得られた。

「全然！だって、木山センサーの実験なんですよ？」

首肯すると、絆理は目を細めて朗らかに

「センサーのこと信じてるもん。怖くないよ！」

これでおしまい。

その言葉がより一層ハッキリと響いた気がした。

研究所中の機材がけたたましくブザー音を奏で、赤いランプの点滅がエマーゼンシーを知らせている。

「……のドーパミン値、低下中！」

「抗コリン材投与しても効果ありません！」

「広範囲熱傷による低容量性ショックが……」

「乳酸リンゲル液輸液いそげー！」

「無理です！これ以上は……」

バタバタと忙しく走り回りながら大声を張り上げる研究員たち。その顔は皆一様に青ざめている。本来ならその中に加わるべきハズの木山はただ呆然と眺めていた。……生徒たちが今まさに生死の境をさ迷う実験場を。

『安全』じゃなかったのか？

そのために私は時間をかけて彼らのデータを集めたんじゃないのか？

なんで……なんで……？

科学は数学とは違う。

机の上で紙に書かれたイレギュラーの全くない数式を相手にするのはワケがちがう。

？絶対？は？絶対？にない。

解りきっていたことだ。

どんな実験にも『万が一』はあり得る。

本来なら冷静に、迅速に、事態の収束に向かうべきだ。

それなのに動けない。

皮肉にも、その事実が木山と子どもたちの間にある、『科学者』と『実験体』以上の絆の証明となっていた。

そして。

その場にいた者の中で、木山と同じく動こうとしなかった老人が一人存在した。

ただし。その理由は木山とは全く異なる。

「早く病院に連絡を……！」

「あー、いいからいいから」

ただ一人、落ち着き払った声でその老人は手を振るう。

「浮き足立ってないで、データをちゃんと集めなさい」

「し、しかし……！」

「ほほう、これは……！」

研究員の言葉にも耳を貸さず、老人はじっとモニターを眺めてその場にいた全員に告げた。

「この実験については所内に緘口例をしく。実験はつつがなく終了し、君たちは何も見なかった。いいね？」

「は……はい」

しぶしぶと言った風に頷く研究員を尻目に、老人は立ち尽くす木山に歩み寄る。

「木山君、よくやってくれた。彼らには気の毒だが、科学の発展に犠牲はつきものだ」

何を言ってるのか、木山には理解できなかった。老人の言葉は木山の脳を素通りしていく。

「今回の事故は気にしなくていい。君には今後も期待してるからね」
耳障りだ、とすら感じない。
なんでもいい……なんでもいいからなんとかして欲しい。

「じゃ、あとはよろしくー」

軽く手を挙げて退室する老人には目もくれず、木山は焦点の合わない目で実験場の方を眺め続ける。
少し経つと救急班が現れ、子どもたちをストレッチャーに乗せて行く。
まるで夢遊病のようにふらつきながら通路に出た木山は、子どもたちの変わり果てた姿を見て……

う、そだ……。

力なく崩れ落ちた。

言霊の光が鈍くなる。映像は少しずつ消失し、やがて小金井たちの眼前にはさつきと同じ風景が広がった。

(これが……木山春生の……?)

今観た光景を、美琴は信じられなかった。

人体実験。映画で観るようなおぞましく、凄惨なものではなく、自

分たちの受けた『能力開発』と何らかわらないような
だからこそ、恐ろしい。

「くっ……観られた……のか!？」

「バツチリ、ね」

小金井はそう答えて、苦虫を噛み潰したような顔になる。

「思った以上に胸糞ワリーや……」

「何で、あんなこと……」

「くっ、フフフフ」

美琴の問いに、木山は軽く笑いを溢した。
割れるように痛む頭に手をやる。

「あの実験の正体は『暴走能力の法則解析用誘爆実験』……能力者の
AIM拡散力場を刺激して暴走の条件を探るものだったんだ。あ
の子たちを……使い捨てるモルモットにしてね」

「人体実験……」

美琴の口から出たそのワードに、小金井は思い出す。

SODOMで出会ったZという名の『ヒト』を。彼を始めとした、
異形の『ヒト』たちを。

彼らもまた、?天堂地獄の細胞を植え付ける?という人体実験の犠
牲になった。

異世界に来て、小金井はまたしても人間の悪意を目にした。

小金井の手が小さく震えた。

「だ、だったらそれこそ警備員に……」

「23回」

「え……？」

「あの子たちの快復手段を探るため、そして事故の原因を究明するシミュレーションを行うために、『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』の使用を申請して、却下された回数だ。……統括理事会がグルなんだ、警備員が動くワケがない」

「でも、それじゃアンタのやってることも同じになっちゃ「君に何がわかるっ！！！」」

美琴の言葉を、木山の叫びが掻き消した。

「あんな悲劇は二度と起こさせない！そのためなら私はなんだってする！悪魔に魂を売ろうと、この街の全てを敵に回そうと！私は止まるワケにはいかないんだ！！」

闘えない。

大切な教え子たちのため、木山は闘っている。

そんな木山と自分は闘えない。

これが、小金井の弱点だった。

烈火や土門なら、ただ単純に己の想いをぶつけるだろう。

水鏡や風子なら、シビアな考えの下に己の目的を遂行しようとするだろう。

だが、小金井にはそれが出来ない。
彼は、烈火や土門ほどバカでもなければ、水鏡や風子ほど賢しくもない。

そして何より、彼は優しい。それこそ、元相棒の木蓮に情けをかけ、自分のせいで瀕死になった最澄を思い実力を発揮できず、天堂地獄の被害者である私たちを前に闘うことを放棄する程に。

「がつ、ああああああ!!」

木山の悲痛な絶叫が辺りを揺るがした。苦痛に悶絶するあまり、木山は地面に倒れ込みそうになる。

「あつ、ぐうっ!……はあつ、はっ!!」

頭蓋にノミでも突き立てられているような激痛が木山の頭を支配する。

(これは……一体!?)

頭の中で言葉を紡ぐことすらままならない。

一際大きな激痛が走った。

「ギッ、あああああああああああああ!!……!!」

ノドが裂けてしまいそうなどこかザラつくような苦痛の訴え。
そんなノイズにまみれた空間に、?それ?は生まれた。

其之陸拾巻・誰がために(再)(前書き)

『速さが足りない』……ストレイト・クーガー

其之陸拾巻：誰がために（再）

「オイ、大丈夫か！？起きるじゃん！」

「うつ、うつん……」

ドン、ドン、とガラスを叩く音と、腹に響く大声に気絶していた初春は目を覚ました。

寝惚け眼に映るのは、艶やかな黒髪を後ろで縛った警備員の女性。研修生の時にお世話になった……確か、黄泉川愛穂といっただろうか。

「大丈夫か？ケガは？」

「あつ、いえ、私は大丈夫ですけど……」

言いながら、初春の視線は黄泉川の額に向かう。彼女の額からは、赤い液体が流れていた。

「あの、それ！」

「ん？ああ、さつき頭ぶつけた時のキズかな。ただのかすり傷じゃん」

あっけらかんとした様子で黄泉川は初春の言葉を軽く流し、彼女を促す。

「それより、さつさとロック外して車から降りるじゃんよ。さつきまで下でドンパチやってたみたいで、ここもいつ崩れるかわからな

いじゃん」

「あつ、ハイ！」

黄泉川の言葉を聞いた初春は手錠で繋がれた両手を使い、慌ててドアロックを解除して車を降りる。

車外に出た初春がまず目にしたのは、ごっそりと一部が大きく抜け落ちたハイウエイの姿。相応のダメージを受けなければビクともしないハズの堅固な道は、まるで川の氾濫に巻き込まれた木橋のようにその体を喰い干切られていた。

「うわあ……」

「……どうも、君の友達が木山とドンパチやってたみたいじゃん」
顔を引き吊らせる初春に同調したように、黄泉川は苦笑しながらそう告げる。

こんなもの、壊そうと思って壊せるものでもないだろう。

「本来なら、能力者を巻き込まないようにするのが警備員の役目なんだけどね。結局最後は子供に委ねる……情けない話じゃん」

自嘲気にこぼす黄泉川の横で、初春はいつぞやの銀行強盗退治を思い浮かべながら、改めて？LEVELE5？というモノの恐ろしさを再認識した。

警備員とて、決して無能なワケではない。それは暴走した能力者やスキルアウトの検挙率という形で証明されている。

ただ、それ以上に木山と美琴（LEVELE5）が異常なだけだ。

と。そこまで考えたところで、

「え？ていつか御坂さんがココに来てるんですか？」

「そ。あともう一人、ちびっこい男の子も一緒らしいじゃん」

「薫センパイもですか!？」

『ちびっこい男の子』と聞いてすぐさまその名が飛び出すあたりに初春が小金井をどのように認知しているかが伺える。

「まあ、どうやらかなり優勢だったみたいだから心配はいらないじゃん……っと。ゴメンね、ちょっと待つじゃん」

黄泉川の左肩に備えられた無線機のランプがチカチカ点滅している。黄泉川はそれを右手に取って、声を張り上げる。

「こちら黄泉川。どうした？何か問題でもあったじゃん？」

『こ、こちら鉄装！た、た、大変ですセンパイ!』

無線から聞こえるのは、焦燥した女の声。

黄泉川は眉を潜めつつそれに対応する。

「なんだ鉄装？怪我人運ぶのは済んだんじゃん？」

『それどころじゃないんです！き、木山が、木山春生が……きゃああっ!?!』

「おい、鉄装どうした!？何があった!？」

無線に向けて叫んでも、返ってくるのは砂嵐のようなノイズばかり。

「くそっ！」

吐き捨てて、黄泉川が連絡階段の方へと走り出すと、初春もそれに倣う。

そして、連絡階段を駆け降りた二人はその先にあるモノを見て啞然とした。

そこに存在したのは、『バケモノ』。

生物か、無生物かもわからない。

まるで胎児のような体から無数の触手を生やし、天使を彷彿とさせる輪を頭上に浮かべた『バケモノ』だった。

「い、たたた……ナニが……？」

自身を覆うガレキを押し退けながら、小金井は激痛を訴える頭を擦る。

持ち上げた視線の先には、グロテスクな風貌の胎児の姿。解れていた記憶の糸がほどかれていく。

（そうか、木山が急に苦しみ出して、そしたら？アレ？が木山から生まれて……）

最初に仕掛けたのは美琴だった。

十億ボルトの雷撃の槍がバケモノを貫くと、意識を取り戻した警備

員たちもそれに続いて弾幕の嵐をバケモノに浴びせた。
バケモノの皮膚は爛れ、四肢は千切れ、誰もが？これで終わる？、
そう確信した……その瞬間。

バケモノが、？産声？を上げた。

直後に放たれる念動力の弾丸^{タマ}。それは、その場にいた意識を保つ人間全てを襲った。……戦意を失い、武器を取り落とし、スキだらけとなっていた小金井も例外とはせず。

だが、弾丸が小金井を弾き飛ばすことはなかった。

（あの時、急に鋼金暗器が宙に浮いて、オレを押し退けるみたいに……まさか！）

？あの？動き方は、ついさっき木山攻略に使った戦法に通ずる。
つまりは、

「み……美琴ちゃん！」

アレは美琴の能力だ、行使するには多少なれど意識を向ける必要がある。

さらには、？あの程度なら軽く回避出来るハズの美琴の姿が見当たらない？。

「チクショウっ……まさか……！」

辺りを大きく見回す。視界に映るのは、妖しく蠢くバケモノか、倒れた警備員か、無造作に積み上がったガレキの山……そして、ガレキのスキマからはみ出している見慣れた服の切れ端。

「くそツツツ!!」

鋼金暗器を拾い上げ、全速でそこへ駆けて行く。
左足を激痛が襲い、走る姿を不恰好なモノにするが構わない。

唇を噛み締めてそこへたどり着き、歯を喰い縛って鋼金暗器でガレキを払い除ける。大した量のなかったガレキは、ほんの二振り程度で除去できた。

そして、その中から姿を現すのは意識のない美琴。

「美琴ちゃん!!」

息はしている。目立った外傷はない。骨や内臓にダメージがありそうな様子もない。

美琴が眠っている場所は、中学生くらいなら余裕を持って入れる程度の窪みの中。おそらくは、後頭部をぶつけて気を失ったところにフタをするような形でガレキが覆い被さったのだろう。お陰でダメージは最低限で済んだ。

しかし。小金井が抱いた感情は安堵ではなかった。

「オレを……守るために……!!」

本来なら美琴はこんな攻撃を喰らわなかったはずだ。
戦意をなくした自分を庇って、下手をすれば命を失いかねないような目に遭ったのだ。

「オレのせいだ……!!」

『トモダチを守る』

そのために自分は闘っていた。それなのに、結果的にはトモダチを危険に晒してしまった。

もしもこれが、小金井が木山を倒そうと全力を尽くした結果なら、彼はきつと苦しまなかった。

美琴に感謝し、より一層の力を得て闘ったことだろう。

だが、これは違う。

敵を想い、敵の気持ちを考えて、その結果。つまりは、単なる『裏切り』に他ならない。

オレは何のために武器を取った？

それは、拐われた初春のためであり、命懸けでトモダチを守った黒子のためであり、トモダチを想ったために傷ついた佐天のためでもある。

確かに木山の過去には同情する。もし自分が同じ立場になったら……など、想像するだけで恐ろしい。だが。選べる道は一つだけ。

SODOMでの、Zたち異形の『ヒト』との戦いで風子は言った。

『困ってる人全員なんて救えない……救えるワケ、ないよ……』

それが真理だ。

所詮自分は人間。目の前の全てを救うほどの強さなど、持てようはずもない。

「ごめんよ、みんな。オレには……。」

暗くて重い感傷に苛まれたその時。

『LEVEL0って、欠陥品なのかな……？』

闘う意味が、脳裏に浮かんだ。

そうだ。

見えかかっていた炎が、再び勢いを強くする。

変わらない。柳ちゃんを守ってた時と一緒だ。

小さな戦士は立ち上がる。己の世界を守るため。

「クツ、ハハツ、アハハハハハ！」

自分から生まれたバケモノを見て、木山春生は笑った。

幻想御手の生んだ副産物。

『幻想猛獣（AIMバースト）』とでも呼ぶべきそれは、まるで自我を持った生物のようだった。

「学会で発表すれば表彰モノだ……。」

「木山先生！」

皮肉げに呟いたところで自分を呼ぶ声を聞き、木山は振り返った。そこにいたのは、手錠を嵌めたままの初春と頭から血を流す警備員の女性。

「やあ、目覚めたんだね。手錠を嵌めっぱなしでは動きづらいだろう」

言いながら初春に歩み寄り、懐の鍵を使って手錠を外してやる。

木山が初春に近寄ったとき、警備員の女性は一瞬間に割って入ろうとしたが初春がそれを制止した。

「ずいぶんと……」

外した手錠を鍵ごとその辺に放って、木山は呟いた。

「ずいぶんと警戒心が薄いようだね。また私が君を人質に取るとは思わなかったのかい？」

「だってそっちはもうボロボロですし。私だってそう何度も捕まりません！」

それに、と初春は続ける。

「木山先生は嘘をつきませんか！」

木山は一瞬目を丸くした後、僅かに頬を弛めて

「……本当に、根拠もなく人を信用する人間が多くて困る」

『木山センサーの実験なんですよ？センサーのこと信じてるもん。怖くないよ！』

この街もまだ捨てたモノじゃない。僅かだが、そう思えた。

「ところで、？アレ？を止める方法はあるんじゃない？」

幻想猛獣を顎で示しながらシビレを切らした様子で、黄泉川が二人の会話に割り込んだ。

「ちよつとばかり急がなきゃ、ヤバいことになっちゃうじゃん……！」

「へ？それって……」

言葉の意味を理解出来ない初春に、黄泉川は何も言わずにある方向を指差した。

示した方向に見えるのは、大きな塀で四方を囲まれ、ドーム状の建物がたくさん集まった広い工場のような場所。幾度かニュースで見たことのあるその名を、初春は思わず口走る。

「まさか……原子力実験炉……？」

「確かに、急がねばならないようだね……」

怪獣映画のようなシチュエーション。下手を打てば最悪の事態に陥ることは、想像に難くない。

残存戦力が僅かである以上は、足止めも期待出来ない。

「確証はない……ただ、可能性があるとするれば……」

木山の視線が、初春の視線とぶつかる。

「さつき君に預けたモノを使うんだ。あのバケモノは幻想御手の産物……ネットワークを破壊すれば止めることが出来るかもしれない」保証はしないがね、と付け加える。

あんなバケモノが生まれることは全くの想定外。ネットワークの破壊が果たしてどれほどの効果を及ぼすかは未知数だ。事態悪化を招く恐れもある。

しかし、初春らのすぎる道はそれしかない。

「私、行きます！黄泉川先生、プログラムの中身を学園都市中に流すにはどうすればいいですか!？」

「……ああ。本来なら警備員のトレーラーに備わってるんだけど……残念ながら、アレは今使えないじゃん」

黄泉川が天を仰ぐと、初春もそれに釣られて顔をあげ、崩落した橋の一部が目に入った。

「階段がすぐ側にあるのはコッチ側、トレーラーがあるのはアッチ側。アッチ側の階段は1キロくらい先じゃん。近道とは言えないね……」

自分の後方と前方へ交互に目を向けながら、黄泉川は苦々しい表情を浮かべる。

だが、初春は諦めない。

「それでもいいです！こんなトコで腐ってるくらいなら、往復2キロ走ってきます！」

言うが早いか、駆け出そうとする初春の腕を黄泉川がガシッと捕まえる。

「落ち着きなさいって。もう一つだけ選択は出来るじゃん」

「なんですか!?!」

興奮気味に問う初春。黄泉川は再度原子力実験炉を指で示す。

「?アソコ?なら、多分通信機器もあるし、そのデータなんかもすぐにバラ撒けるじゃん」

「わかりました!?!」

またもや意気揚々と駆け出そうとする初春を、黄泉川はこちらもまたもや首根っこを掴んでつなぎ止めた。

「待ちなさいって。持久走ビリの君には荷が重すぎるじゃん」

「はうあっ!?!?そんなハッキリ言わなくても!?!」

ガビーンとショックで固まる初春。しかし、黄泉川はそんな彼女の頭に手を乗せて言った。

「だけど、任せた。そのデータを託されたのは君。私にそれを横取りする資格はないじゃんよ」

ガシャン、と重厚な金属音が響いた。黄泉川の足下に放られたサブマシンガンのたてた音だ。

投げたのは、ついさっきまで意識をなくしていたメガネの女性警備員。彼女もまた、大人しそうな外見に似合わない鋭い銃を構えている。

「援護は私らに任せるじゃん。警備員の底力、見せてやるじゃんよ！なあ、鉄装!？」

「は、はい！」

力強い呼び掛けに、どこか頼りない返事。だが、両者の熱意は初春にも届いた。

「……はい、お願いします!!」

黄泉川は頭から血を流している。

鉄装は全身ポロポロで、至るところに傷がある。

そんな状態になっても弱音を吐かない二人に、初春は心底感服した。彼女たちもまた、無力な自分を悔いて、自身の出来ることをしようとしているのだ。

初春はスカートの端を千切って、出来た布切れを黄泉川に手渡す。

「傷口だけ縛つといてください。しっかり守って貰わなくちゃいけませんからね！」

その言葉に、黄泉川はニヤリと笑って布切れを鉢巻きのように頭に巻き付ける。

「よしっ、行くじゃん!!」

「ハイッー!!」

力強く声を交わして、アンチスキル ジャッジメント警備員と風紀委員は立ち上がる。それぞれの守るべきモノのために。

(彼女らも……戦っているんだな)

走り去る二人の後ろ姿を眺めながら、木山は胸の中で呟いた。

「オイオイ、なんだよありゃあ。超能力ってなあ、集めりゃあんな気色ワリいバケモノが出来ちまうのか?」

「ほオ、奇怪なモノよのう。アレが収束したAIM拡散力場の姿か」
件の原子力実験炉。

その中で最も背の高い建物の上から見下ろすように、二人の男がハイウェイ付近のやり取りを観察していた。
木蓮と幻獣朗だ。

「で?アレならテメエも満足するのかい?」

「ホッホッ。最初は信じていなかったのがのう……アレなら儂の計画の一つを十分達成させられそうじゃ」

「そうかい、そりゃ良かったな。お陰でオレは死にかけたぜ」

上機嫌の幻獣朗とは対照的にイラついた様子の木蓮。
幻獣朗は戒めるような口振りで、

「『不要な戦闘は避ける』、そう命じたハズじゃ。修復してやった
だけありがたいと思え」

「あ？」

木蓮の語気が荒くなった。

「オイ、ジジイ。オレはテメエの下についた覚えなんざねエ。あん
まり調子乗んじゃねエぞ……！！こちとら殺しもロクに出来ねーで
ムシヤクシヤしてんだ。ブチ殺されなくなきゃ偉そうなクチ聞くん
じゃねエぞ！！」

「弱い犬ほどよく吠えるのオ。儂の改造を受けてようやく戦える駄
犬が……覚えておけ。キサマに利用価値がなくなれば、儂はいつで
もキサマを殺せるんじゃ」

「おもしれエ……なんなら今殺ってやろうか？」

一触即発。殺気と殺気が渦を巻き、その空間を支配する。
が、

「チツ……ヤメだ」

木蓮はすぐさま殺気を収めた。

「てめエなんざ、殺したところで面白くもなんともねえ。オレの夕

「ゲットは女か火影だ」

身を翻して、木蓮は建物の端に立つ。

そして、憎々しげな顔を幻獣朗へ向けた。

「これだけは言っとくぜ。火影も……紅麗も……殺すのはオレだ。テメエにはくれてやらねエぞ、絶対にな！」

そう言い残し、男はフワリと飛び降りた。

そちらへ視線一つ向けずに、幻獣朗は忌々しげな表情で呟いた。

「チィ……クズが。まあよい。ヤツや火影がどう動こうが、最後に笑うのはこの儂じゃ。……見ておれよ、アレイスター……!!」

風が一陣吹き抜ける。

次の瞬間には、その場に幻獣朗の姿はなかった。

其之陸拾貳：BOTH A AND B（前書き）

お待たせしました（、・、・）+

其之陸拾貳：BOTH A AND B

『幻想猛獣（AIMバースト）』。

幻想御手から生まれたバケモノは、周りにあるAIM拡散力場を吸収して肥大化していく。

亡霊のようにさ迷いながらも、目指す先はただ一つ。その行動に意味があるのかなど、わかるはずもない。

一昔前の怪獣映画のように、異形の怪物は原子力実験場へと進撃する。

瞬間。

激しい音と光の爆発がバケモノに炸裂した。

スタングレネード。音と光で相手を無力化させる、殺傷力は皆無の光学兵器だ。

「今だ！」

黄泉川の合図を皮切りに、初春と鉄装が実験場へ向かって駆けると、一歩遅れた形で警備員専用の巨大な盾を構えた黄泉川も二人を追走する。

人間を一瞬で昏倒させる閃光弾。喻え人外が相手でも、スキを作る程度は可能なはずだ。その間に一歩でも、一メートルでも目的地への距離を縮める。

限られた戦力で行う作戦。ベストではないが、ベターな選択。

……三人はそう思っていた。

幻想猛獣の、本体同様肥大化した触手が鋭くうねって、

「きゃあつ……!!」

「鉄装オオ……!!」

鉄装を弾き飛ばした。

華奢な体が宙を舞い、地面に落ちて二、三回ほど跳ねて、動かなくなつた。

そもそも、前提が間違っていた。

幻想猛獣には視覚も聴覚も存在しない。御坂美琴の電磁波のように、本体を中心としたリーダーで物体を認識している。故に、スタングレネードなど幻想猛獣には何ら効果を及ぼさない。

触手による二撃目が黄泉川に迫る。

「くっ……!!」

なんとか盾で受け止めるが、勢いまでは殺しきれず吹き飛ばされる。体勢は立て直したものの、盾は手元から弾かれ数メートル後方の地面に突き刺さっている。今や黄泉川の身を守るモノは一つもない。

「先生ッ!!」

先に行く初春が足を止め、黄泉川に駆け寄ろうとするが、

「来るな!私は良いから、さっさとプログラムを流して来るじゃん!!」

ほんの一瞬、初春は迷う素振りを見せた。

しかし、大きく頷いて再び実験場へと走り出す。

(良かった……好判断じゃん)

薄情……ではない。

自分のすべきこと、出来ることをちゃんと理解している。さらには、自分の無力さも。

「ううっ……先生……!!」

初春の瞳にじわりと涙が浮かんだ。それでも足を止めるワケにはいかない。

自分にも力があれば。

そう思わずにはいらなかった。

「タダでは……殺られないじゃん!!」

黄泉川はマシンガンの引き金に指をかける。

直後に乱射される銃弾の雨。普段の対能力者用の模擬弾ではなく、真正銘の実弾。

しかし、弾幕はバケモノの胸を僅かに傷つけるばかりで、致命傷には至らない。

「ぐあっ……!!」

さらに、幻想猛獣から放たれた衝撃の弾丸が黄泉川を地面に転がす。頭から再び鮮血が流れ、黄泉川の視界を赤く染め上げた。

「くっ……そ……!!」

反撃を試みようとするも、手から鋼鉄を握る感触が消えている。見ると、さっきまで握っていたマシンガンが右前方二十メートルほどの位置に転がっていた。思っていた以上に大きく吹き飛ばされたらしい。

唯一の武器をなくした黄泉川に、巨大な触手が叩きつけられ……

斬！

金色の一閃が触手を両断した。

「あつぶないあぶない。おねーさん、大丈夫？」

黄泉川に背を向けて立つのは、眩い金の薙刀を携えた小柄な少年。

「き、君は……？」

「新生火影忍軍斬り込み隊長　鋼金暗器の小金井薫！！」

「ほ、ほかげ？こーごんあんき？」

聞き慣れない単語を反芻しながら、黄泉川は気づいた。

確か彼は、御坂美琴と共に木山春生と交戦していた少年だと。

さらには、小金井の左足から流れる夥しい量の赤い液体に。

「君、その足！」

「あ。へーきへーき！こんななんてこと……アデデデデ！……」

「どこが平気じゃん！触っただけでこんなに痛がつて……」

急に左足を捕まれて悶絶する小金井。

黄泉川は自身の服の右袖を破いて、小金井の左足にキツく縛り付けた。

「とにかくこれで一旦……」

「つと、危ないっ!!」

不意に、黄泉川を腕を引つ張りながら右へ跳ねる小金井。直後、触手が黄泉川のいた位置に叩きつけられ、土の破片が宙を舞う。

「うつ、ぐああ……!!」

思わず左足で跳んだことが災いし、焼けるような激痛が小金井を襲った。

苦悶の表情を浮かべる小金井に、黄泉川は叫ぶ。

「もうやめるじゃん！足止めは私に任せろ！君はもう十分戦ったじゃんよ!」

だが、小金井は耳を貸さずに、立ち上がって武器を構えた。

「……オレってさ、烈火兄ちゃんのこと言えねーくらいバカなんだよね」

未だ激痛を訴える左足。ちょうど、Zを庇って銃弾を受けたあの時のように。

それを無視して、小金井は続ける。

「頭じゃわかってるんだ。人には出来ることと出来ないことがある。正義のヒーローみたいに困ってる人をみんな助けるなんてムリなんだー、って。……でもさ、諦めきれないんだ」

『あと、よろしくね』

『センサーのこと、信じてるもん！』

「？どつちか？なんかじゃダメなんだ。？どつちも？助けてあげなきゃ、きつとオレはずつと後悔する。『なんであの時助けてあげなかったんだらう』ってね」

だから。

「だから戦う！立ち止まってたって、良いことなんてないもんね。オレに出来るのは戦って、そこから何か見つけることなんだ！！」
「どちらかを見捨て、それで納得などできるハズはない。」

友を守るために道を踏み外した少女。

教え子を救うために道を踏み外した教師。

どちらにも手を差し伸べる。

そのための道は……まだ閉ざされたワケではない！

「っしやあ！いつくぞー！四之型！！」

小金井の手によって、鋼金暗器がその姿を変える。
それはまさしく……

「三日月……武羽冥乱!!」

放たれる黄金の刃が幻想猛獣の触手を引き裂き、本体を抉った。

斬り落とされる触手。

しかし。触手の断面がボコボコと隆起して、切り離された本体へと伸びていく。

「再生した……?」

舞い戻ってきた鋼金暗器を受け止めながら、小金井は驚愕した。

幻想猛獣は完全に接続の完了した触手を、またも小金井に撃ち込んだ。

「くっ……『極』!」

ブーメランを大剣に変形させ、触手を正面から挟み斬る。だが、真つ二つに裂かれた触手は失速することなく小金井の体に左右から巻き付き、締め付けた。

(しまった……!)

必死で振りほどこうとするものの、力強く巻き付いた触手はその程度の抵抗ではどけはしない。

触手に加わった力がさらに強まり、小さな体に多大な負荷をかける。

「ぐああああああ……!!」

全身の骨がミシミシと悲鳴をあげる。手から力が抜けて、鋼金暗器

が滑り落ちてしまった。
二つの刃が地面に突き刺さる。

(くっ、やば……このままじゃ……!!)

触手がより強烈に小金井の体を緊縛し、両腕と背骨がへし折れそうになった瞬間……

銃弾の雨が長く伸びた触手に炸裂し、千切りとった。

自分を縛る力がなくなったのを感じて、小金井は触手を振りほどいて鋼金暗器を回収する。

銃弾の放たれた方向に目をやると、マシンガンを構えた黄泉川の姿。

「おかげで武器を回収出来たじゃん」

「へへっ、ナイスアシスト!!」

黄泉川に親指を立てて見せると、小金井はまたも鋼金暗器を變形させる。

選んだ型は……

「式之型! 『龍』!!」

頭上で鎌を大きく振り回す。遠心力を味方につけた鎌が小金井に迫る触手を豪快に薙ぎ払う。

次いで炸裂する爆音。幻想猛獣がよろめいた。

「鉄装!!」

「ご迷惑、おかけしました……」

歓喜の声をあげる黄泉川に、身の丈に合わせぬ巨大な銃を構えた鉄装は手だけ敬礼のポーズを作ってみせた。

「これなら……！」

圧倒的な優勢に小金井は思った。

これなら間に合う。

これなら初春が実験場に辿り着くまでの時間は稼げる。

これなら……勝てる！

だが。

一万の能力者の、一万の負の感情で生まれたバケモノは、小金井の想像を超えていた。

幻想猛獣の頭に小さな光の玉が浮かんだ。始めはせいぜい野球ボール程度のサイズだった光玉は、ほんの一瞬で半径二十メートルほどにまで膨れ上がり、内側からの圧力に耐えきれなくなったのか……まるで風船が割れるように弾けて

辺り一帯に死の雨を降らせた。

初春は走った。

佐天のため、倒れた人たちのため、あんなに苦しんでいた木山のた
め。

黄泉川と鉄装を信じて、百メートル二十秒台の足を懸命に動かして、
治療プログラムを流そうと原子力実験場へと走った。

「えぐっ……うっ……」

瞳から涙が溢れ出す。

悔しかった。自分に戦う力があれば、と何度も思った。

だが、無い物ねだりに意味はない。

己の弱さを自覚して、一秒でも早く治療プログラムを流すこと。そ
れが、初春に取れる最良の選択。

私だって、私だって……戦います！

それは何も、武器をとってあのバケモノに立ち向かうことではない。

自身に課せられた役割を果たす。

これこそが初春の戦い。

早く。一歩でも早く。一秒でも早く。

初春の足は、決して止まらない。

……ハズだった。

不意に、後方から射す光の激しさに動きが止まった。

「私は、いいです……早く、ち、ちりょうプログラムを……スカ―トのポケット……」

「……わかった！」

嘆いている場合ではない。他の誰一人として動けない今、行くべき人間は小金井しかない。

初春はポケットに手を入れて、指先に触れた固いものを取り出……そうとして、おかしなことに気づいた。

指先に触れる固いものが？二つ？ある。

だがおかしい。ポケットに入れていたのは木山から預かったデータチップだけ。

他に固いものなど入れてはいない。

ま、さか……

朦朧としている初春の頭に、一つの不安が浮かんた。

まさか……！

慌てて指でポケットの中身を掻き出すと、？二つ？の小さくて黒い物体がポトリと落ちた。

「ねえ、飾利ちゃん？それって一体……」

「そ、んな……うそ……」

小さくて黒い二つの物体……それは、半ばほどから真っ二つに折れ

鋼金暗器を握った手が震える。

巨大な氷塊が小金井と初春を押し潰さんとした刹那。

紅蓮の奔流が氷塊を呑み込んで、一瞬のうちに蒸発させた。

「どうした、薫」

ゆっくりと小金井の下に歩み寄る人影があった。

黒いスーツに身を包み、サングラスとガーゼで顔の一部を隠しているその男は、幻想猛獣にも劣らぬほどの威圧感を放っている。

「何を立ち止まっている？」

紅麗が姿を現した。

其之陸拾参：抗う者（前書き）

ついに10月は一度も投稿できなかったorz

其之陸拾参：抗う者

紅麗は問う。

「どうした、薫」

仲間を、母を、そして愛する者を失いながら生きてきた男は、今まさにその状況に立つ義弟に問う。

「何を立ち止まっている？」

酷く冷たく、静かに問う。

「たったこれだけのことで歩みを止めるほど、お前は弱かったか？」

幻想猛獣が巨大な触鞭を紅麗へと叩きつける。強烈な音が響き、砂塵が巻き上がった。

だが、その攻撃は紅麗にカスリもしていない。

「遅い」

砂塵の中を突き抜け、尋常ではない速度で幻想猛獣の触手を駆け上がる影があった。その左腕に、深紅の炎を纏わせて。

次いで放たれた人一人飲み込むほどに巨大な水の弾丸を、紅麗は舞うように跳んで回避する。

だが、怪物はそれを見越していたかのように再び水の弾丸を紅麗に撃ち込んだ。

同様に、紅麗の掌から巨大な灼熱の奔流が生まれ、水の弾丸へと射

出される。

水と炎。ほんの一瞬だけせめぎあった二つの攻撃は、炎が水を貫くという形で決着を迎えた。

紅麗の炎は螺旋状に幻想猛獣を取り囲むと、まるでバックドラフトのように膨張し、一瞬でバケモノの巨体を呑み込んだ。

「すごい……」

初春は驚愕した。

学生でもない紅麗が能力を操っているのはもちろんのこと、それ以上に、小金井や警備員二人が防戦一方だったあのバケモノをわずか数手で圧倒しているその戦闘力に。

しかし。決着はまだついていない。

火達磨と化したバケモノが咆哮を上げる。まとわりついた炎を掻き消しながら沸き起こる、バケモノを中心とした衝撃の波。

「あぶなっ……!!」

小金井が咄嗟に初春を庇うも、体重の軽さが災いし、二人一緒に数メートル吹き飛ばされる。

紅麗もまた、強風に煽られバランスを崩しながら地面へと着地した。そこに生まれた僅かなスキ。紅麗の炎で焼き爛れた幻想猛獣の触手がとうとう紅麗に巻き付き、男を捕縛した。

「紅麗さん！」

「いや……大丈夫だよ」

案ずる初春とは対照的に、小金井の表情に陰りはなかった。

瞬間。爆音が轟き、熱風が起こり、紅蓮の閃光が小金井達の目を眩ませた。

「やはり、所詮は烏合の衆の寄せ集めか……万の力を集めてこの程度とはな」

動きを縛っていた触手を消し飛ばし、しかし自身は火傷一つ負わず、陽炎の先に立つその男。

純粋な強さなら、烈火すら凌ぐであろう。

暗殺集団『麗』、そして裏社会そのものを支配したその力は今も決して衰えてはいない。

紅麗にとっては、力に魅いられ、それを断ち切ることの出来なかった弱者など、万いようが億いようが『烏合の衆』に過ぎない。それは、そんな弱者達の思念体でしかない幻想猛獣も同じことだった。

『 n t s t 欲 k g d 』

唐突に、バケモノがノイズを発した。

『 k g g s 』

『 d k n r 歎 y j t n j 』

「な、なんですかこれ？」

「わかんない……けど、言葉？」

初春も小金井も、その音が何を意味するかはわからない。
ただ、そこからある感情が感じ取れた。
それは……

「……ほう」

紅麗は感嘆の声を口にする。

なぜなら、消滅したハズの触手が、焼け落ちたハズの表皮が、まるで逆再生するかのように修復されてバケモノの体を元に戻したために。

（大した再生能力だな……表面を焦がす程度では効果は薄いか）

紅麗の口が大きく歪む。

一文字に縛られていた唇は上下に別れ、上弦の弧を描いた。

「ならば再生が追いつかぬほどに焼き尽くすまでの話だ……！！」

紅麗の体が十に別れる。

『別魅』……幻獣朗から盗んだ、仙人の扱う分身術。

本来は、たかが齡20の人間が容易く習得できるような技術ではない。
しかし、現に紅麗はそれを体得し、己の思うままに操っていた。

十の紅麗が一斉に散った。

バケモノの体からマシンガンのように念動力の弾が掃射される。しかし、見えざる弾幕はタダの一発も紅麗には命中あたらず、虚しく土煙を舞い上げるばかり。

十の紅麗が同時に炎を放つ。
十方向から襲い掛かる火炎放射を、バケモノは念動力の壁で弾き返した。

続けざまに降り下ろされる二本の触鞭が、二体の別魅を叩き潰す。
別魅は空気に溶け込むように霧散していった。

バケモノはさらに触鞭を横薙ぎに振り払う。

圧倒的なリーチの前に、『後ろに跳んで射程外へ逃れる』という選択肢は存在しない。紅麗は別魅と共に上に跳んで、やり過ぎす。

人に空は歩けない。わずか数秒、紅麗の体から自由がなくなつた。

そのスキを逃さず、バケモノが再び念弾を放ち三体の別魅を消し飛ばす。

残つた五体は着地と同時に、バケモノへ向かつて駆ける。

迎え撃たんとして放たれる氷の礫を全て回避しながら、叩き潰さんと打ち込まれた触鞭を渡つた橋のように駆け上がった。

幻想猛獣は再度紅麗へと氷の礫を放つ。

三体は跳躍し、二体は貫手でそれを破壊。飛び上がった三体の別魅はレーザーのような一撃に体を貫かれ消滅した。

残る二体はバケモノの正面と背後から、左手に炎を纏つて猛進。

正面の紅麗がそのままバケモノの体を貫こうとするも、横合いから別の触手に弾かれて消える。

これで、九あつた別魅は全て消滅した。？十人目？の紅麗が空を走るようにして飛び上がり、バケモノへと必殺の一撃を加えんとする。

あと少し、ほんの少し遅ければその一撃はバケモノの巨大な体に炸裂していたことだろう。

しかし、一撃が届く前に紅麗の体はバケモノの撃つた氷の槍に貫か

れ、

「兄者アアアアアアアア!!」

煙のように消えた。

「へっ?」

太陽に紛れるようにして、?十一人目?の紅麗が天からバケモノの上へ降り立ち、左手で固い表皮を貫き……

「燃え尽きる」

地獄の業火でバケモノを内側から焼き尽くした。

バケモノの身体中の表皮に亀裂が走り、そこから炎が噴き出す。

(そうか……新しい別魅を)

小金井は理解した。

つまりは、バケモノが九体目の別魅を破壊した瞬間を見計らって、新たな十体目の別魅を作り入れ替わったのだ。

バケモノが最初に認識した敵は?十?。自身を新たな?十一?体目と置き換えることで、バケモノの動きにラグを生み出した。

一万の能力を統べる相手にも尚圧倒的な強さを発揮する。

これが……紅麗!

「い、ててて……」

後頭部を走る鈍痛に、御坂美琴は目を覚ました。

「やあ、お目覚めのようだね」

「木山ツ……ってそうだ！あのデカいのは……！？」

「ヤツならあそこさ」

そう言つて木山が人差し指で示す方向を追いかけた美琴の目は捉えた。

あのバケモノと互角……否、それ以上に渡り合っているスーツ姿の男を。

「へえ……タダモノじゃあないとは思つてたけど……想像以上にやるみたいね」

一万対一。そこに発生するのは物量的な差のみではない。手札が増えれば連携や組合せに幅が広がる。実際の手数の差はたったの万倍で済むハズがなかった。

しかし、紅麗はそれを圧倒している。

その動きがいかに人間離れしたのか……素人目にもよくわかった。あり得ない速度で地面を駆り、あり得ない跳躍力で宙を舞い、あり得ないパワーで敵を挟む。

学園都市で作られた『ハードテレーシング発条包帯』でも身に付けているのかとも考えたが、アレは警備員の試験運用からも落ちた欠陥品。あんなものを紅麗が持っているとは考えがたい。

そしてそれ以上に、花菱烈火と小金井薫。彼らの驚異的な身体能力

を目の当たりにしたことが、疑念を払拭していた。

「ってそうだ！小金井に初春さんはどこ！？」

頭の中に浮かんだ名に、共闘していた小金井と救出対象の初春のことを思い出す。

キョロキョロと視線を漂わせ、紅麗とバケモノからそう遠くない位置にいる二人を発見した。

「よかった、初春さん無事だったみたいね……ってなんであんなとこいんのよ？」

グリーンと首を回して木山に尋ねる。

木山は小さく息を吐き、

「あの先にある原子力実験場……あそこの放送機器を使って学園都市中に治療プログラムを流すんだ」

「そうか、それなら……」

それならもう、事件の収束も近い。

佐天達は目を覚まし、木山の罪もそう重くはならないだろう。木山の教え子を救う手段だってきつと見つかる。

とにかく、もうこの事件は終わる。何一つ、誰一人欠けることなく……

その時、美琴は頭の中に一つの違和感が生じる感覚を覚えた。

たった一つの、されど決して見逃せるようなものではない違和感。

何か、何かおかしい！

そうして気づく、違和感の正体。
それは、バケモノの近くに？いつまでも留まっている？小金井と初春の二人。

何故動かない？

バケモノは紅麗の相手に全力を尽くしているようで、小金井達に危害を加える余裕はないようだ。

怪我でもしたのか？諭えそうでも、あの二人が歩みを止めるとは思えない。足を引き摺ってでも実験場に向かうハズだ。現に小金井は足に大きなキズを負いながらあそこまで行ったのだから。

それじゃあ、まさか。

聡明な美琴の頭脳に三つ目の推理が出来上がる。

しかしそれは、信じられなかった。いや、信じたくなかった。なぜなら、それは。その推理は……

「さつき、バケモノの攻撃が彼女を襲ってね。直撃こそ免れたが、衝撃で思い切り吹き飛ばされていた……十分すぎる威力だったと思うよ。あの小さなデータチップを破損させるには、ね」

美琴達を絶望へと陥れるものだから。

「う……そ」

「嘘じゃないさ……でなければ、彼らがあの場に立ち止まる理由はない」

全身の力が抜けて、固い地面に膝をつく。小石や尖ったコンクリート片が足に食い込むが、その痛みすら感じられない。感じている余裕など……ない。

「……謝って済むことでないのはわかっている。だが、言わせてくれ。本当に、本当に申し訳ない……!!」

唇を噛み締め、目尻から木山は懐に懐に手を伸ばす。そして、固く、冷たく、黒光りするそれをコメカミに当てて引き金に人差し指をかける。

「あまり君に見せたくはなかったが、どうしてもあの言葉を聞いて欲しかった……すまないね、さようなら」

ゆっくりと、人差し指に力を込めて撃鉄を弾こうした瞬間……

まるで磁石に吸い寄せられたように拳銃は木山の手を離れ、美琴の手に収まった。

「……返してくれないか？」

「……イヤよ」

「頼むからっ……私にそれを寄越すんだ……!!」

「イヤ!」

「返してくれ!お願いだ!」

「『イヤだ』つつってんのよ!!」

木山はふらついた足取りで美琴に近寄ると、驚くほど強い力で美琴の両肩を掴み叫んだ。

「何故死なせてくれない!? 辛いんだ、苦しいんだ! 私は、私は同じになつたんだぞ!? あの子たちの未来を奪つた悪魔と、同じところまで堕ちてしまったんだ!」

「だから……何よ」

「死なせてくれと言ってるんだ! 私の命で償いきれるとは思わない……だが! せめて自分の手でケジメをつけたいんだ!……でないと、でないと私は……」

「だから何だつつつてんのよ!……!」

美琴の怒号が木山の言葉を遮った。

少女はか細い両手で木山の胸ぐらを掴む。

「何が『償い』よ、何が『ケジメ』よ! 都合の良いセリフ並べて逃げようとしてんじゃないわよ!……!」

「ち、がつ……私は!」

「違うわい!……!」

まるで木山を突き飛ばすように両手を離す。

木山はされるがままに座り込んだ。

「散々好き勝手やって、自分の手に負えなくなったら『ハイさよう

なら』。これのどこが『逃げ』じゃないの？結局アンタは、ただ責
任を押しつけられるのが怖いだけじゃない！皆に責められるのを恐
れてるだけじゃない！！」

「……………がる」

地面に爪をたてながら、木山の口から小さく言葉が漏れた。
それは爆発の予兆。

「君に何がわかる！！？」

決壊したダムのように、科学者は感情をぶちまけた。

「君は何かを奪ったことはあるのか！奪われたことはあるのか！？
奪われる憎しみを知っているのか！！奪ってしまった哀しみをわかっ
ているのか！！？君は本当に逃げずにいられると言うのか！！！」

道理を外れたことばかり捲し立てているのはわかっているだろう。
これが単なる八つ当たり過ぎないことなど重々承知しているだろ
う。

だが、それでも止められないだろう。

理不尽な出来事を、不条理な世の中を、全てを受け入れられるほど
に人は強くはないのだから。

だが、それでも。

それでも美琴は言った。

「逃げない」

奪い、奪われること。

木山に比べれば非常にちっぽけかも知れない。
しかし、少女はその両方を知っている。

「私が、あんなことを言ったから佐天さんは傷ついた」

奪い

「私が、あんなことを言わなければ佐天さんは傷つかなかった」

奪われ

「佐天さんの未来を奪ったのは私。大事な友達を奪われたのも私。
……だけど、だけど私は逃げない」

だけど、決して目を背けない。

「1%でも可能性が残ってるなら、私は絶対に……」

果たしてそれは、美琴の人格のみに由来することだったのか。
はたまた、とある一人の少年の決意が、遠く離れた美琴の心にまで
影響を及ぼしたのか。

正しい答えはわからない。ただ一つわかるのは、

「諦めない!!」

御坂美琴の決意だけ。

「だけど私に、私にあの子達を助ける資格なんて……」

「あのねえ」

ズイツと木山に顔を近づけ、

「資格なんてどーでも良いのよ。あの子達が目を覚ましたとき、目の前にいて一番嬉しいのは誰？親にも学園都市にも見捨てられたあの子達が一番会いたいのは誰だと思ってるのよ？」

『センサー。木山センサー』

『あー、センサー好き嫌いしちゃダメなんだよー！』

『オレ大きくなったらセンサーのことお嫁にしてやるよー！』

『センサー、お誕生日おめでとー！！』

『平気だよ。だってセンサーのこと信じてるから！！』

目の奥が熱い。視界が急にぼやけてきた。生ぬるい何かが、木山の頬を伝った。

「私で、良いのか？あの子達を喜ばせる役目は、私で本当に良いのか……？」

美琴はわずかに微笑んで言う。

「当たり前でしょー！」

のし掛かる絶望。

しかし、まだ確かに。運命に抗おうとする者は存在する。

その先に待つのは、さらなる絶望か、あるいは小さな希望の光か。

その答えを知るものはいない。

其之陸拾参・抗う者（後書き）

ゆで理論炸裂ですな。

あまり深く突っ込まないでくださいWWW

其之陸拾参・FINAL ROUND(前書き)

新約三卷読みづらい……

其之陸拾参：FINAL ROUND

何かないのか。

小金井は必死で脳ミソを稼働させ、道を探る。

烈火や土門ほどでないにしろ、決して出来の良いとは言えない頭だ。だが、何もしないワケにはいかない。

『立ち止まるのか?』

紅麗の言葉。

答えは? NO? だ。

あの時もそうだった。

天堂地獄に魂を奪われそうになった柳を、烈火が、風子が、土門が、水鏡が、そして小金井が呼び戻した。

? もう? なんかじゃなく、? まだ? だ。

新生火影忍軍小金井薫、彼もまた『諦め』などは知らぬ男。
……だが。

(どうすればいい?)

今、小金井の手元にあるのは鋼金暗器に言霊の魔導具。

鋼金暗器はタダの武器で使えない。

必然的にするべきは言霊となるが……。

(言霊で……何ができる?)

鋼金暗器よりは幾分役に立つとは言え、現状は言霊一つで何とかな
るほどに温くはない。

眠っている学生達に言霊を介して『目覚める』とでも言ってみる？
無意味だ。

そもそも言霊は幻覚を見せるための魔導具。いくら脳に作用できる
とはいえ、それだけでどうにかなる問題には思えない。

それに幻想御手使用者はのべ一万。とても一人一人訪ねて回ってい
る余裕などない。

ならば、バケモノに向けて直接使ってみる？
無駄だ。

アレは木山が幻想御手で撃いだ一万人分の脳波が集まっただけの存
在。聴覚などは存在せず、言葉が届くことはないだろう。

『気持ち』は必ずしも『結果』とはならない。

どれだけ足元を探っても、そこから『道』を見つけ出すことは小金
井には出来なかった。

(水鏡がいれば……)

頭の中にふと浮かんだ頭がキレル女顔の剣士の名。彼だけではない。
烈火が、柳が、風子や土門がいれば、きっと何らかの足掛かりを見
つけられたはずだ。

(って、ダメだダメだ!!)

頭を振って、その思いを散らす。無い物ねだりなどなんの意味もな
い。それに、いつまでも仲間かぶりに頼りきってるワケにはいかない。

今この場で、木山を、佐天を、一万の学生達を救ってやれるのは自

分だ、紅麗だ、初春だ。今背中を合わせているのは火影のメンバーではないのだ。

「おい、初春さん！小金井ー！！」

耳に届いた声。小金井と初春はそちらに振り向く。

こちらに走って近づく美琴と木山の姿が見えた。

炎の放出を止め、バケモノの体から手を引き抜いて、ふわりと地に降り立った紅麗は眼前のバケモノを見据える。

紅麗の炎によって裂け、爛れ、今にも崩れ落ちそうなほどにポロポロになった表皮が瞬く間に修復されていくのがわかった。

（焼き尽くすことはムリ、か……）

仮にあのまま炎を流し続けていたとしても、永久に焼き、修復し、その繰り返し。

否、永久ではない。おそらくは、先に紅麗の力が尽きていただろう。

『ki遭bgng』

バケモノが、またも『言葉』を発した。

紅麗にはわかる。そこに込められた感情が。

才なき者が才ある者に抱く羨望が、嫉妬が、何より才ある者に虐げられた憎悪が、バケモノの『言葉』から感じ取れた。

紅麗は呟く。

「くだらん……」

ただ一言で切り捨てた。

「己の無力を呪うのは大いに結構だ。だが、力を得るのに他者の力を借りるのが下らぬとは思わないか？」

貴様らが見下されるのは力がないからではない……自分一人で底辺から這い上がるうとする意思もない、『愚か者』だからだよ」

力なき者の苦悩は、紅麗にはわからない。

だからこそ、ただ手をこまねいてるだけの、与えられた武器を振るうことだけの弱者が気に食わない。

バケモノが雄叫び、宙に野球ボール大のエネルギー弾が無数に現れる。

直後、エネルギー弾はレーザーに変わり、紅麗を貫かんとして豪雨のように降り注いだ。

しかし、紅麗はその全てを回避して、バケモノから距離をとる。

（ヤツの再生力は無尽蔵……ならば恐らくは身体の何処かに『核』が存在するハズ）

魔導具の多くも、核を破壊されない限りは自己修復する。あのバケモノも同じようなものだろう。

（ならば……）

紅麗の背中から、紅蓮の片翼が出現する。

見るもの全てを魅了しそうなその炎の翼は解き放たれたように広が

つて、攻撃の準備を整える。

幻想猛獣を抹殺する紅麗最大の攻撃の準備を。

「『翅炎』^{はえん}」

巨大な翼から炎の翅が散弾のように弾け飛び、弾幕となって幻想猛獣の体に降り注いだ。

先ほどまでの？タダの？炎とは違う。一つ一つが高い貫通能力を持った灼熱の弾丸がバケモノを喰い干切り、土煙を舞い上げる。

土煙が止んだ後、そこにいたのは触手が数本干切れ落ち、蜂の巣となったバケモノの姿。

だが、それもバケモノには致命傷とはならない。ほんの十数秒で干切れた触手は再び繋がり、弾創も全て修繕されていく。

「なかなか運が良いようだが……次は外さん」

紅麗は二撃目を放たんとして……

「御坂さん……に木山先生!？」

「美琴ちゃん、怪我は大丈夫なの!？」

「へーき。頭にデカイコブが出来ただけよ。それにしても……」
美琴は紅麗に内側から業火に焼かれるバケモノへ目を向ける。

「ホント、学生でもないのになんて能力よ。アレならあのバケモノももう……」

「イヤ、無理だ」

美琴の言葉を木山が否定した。

「何だよ？現に今はアイツが圧倒的に押ししてるじゃない」

怪訝な顔で尋ねる美琴に、木山はこう返す。

「幻想猛獣に生物の常識は通用しないよ……いくら体表を焼いたところで、体内に存在する核を破壊しなければ意味はない」

「だったらさっさと教えてやらないと！」

そう言つて美琴が駆け出そうとした瞬間、爆音が轟いた。目をやると、左肩から炎の片翼を生やした紅麗と舞い上がる土煙、そしてその中から現れる身体中を引き裂かれた幻想猛獣の姿。

「な、何よアレ……あいつ、あんなことも出来んの……？」

驚愕する美琴。

久しぶりに見るその炎に、小金井は息を呑んだ。

（前にアレを見たとき、アレは紅の翼だった。でも今は……）

？今は？、紅はいない。

「少いで……ほんの少いで良いからこの人達とお話させてください
っ！……！」

紅麗は何も言わない。だが、攻撃の手を休め、ただ黙って初春を見据える。

小金井も美琴も木山も、何も言わない……否、言えなかった。

「きつと、この人達は待つてるんです！自分達のツライ気持ちを吐き出させてくれる人を！間違った自分達を導いてくれる人を！！だからお願いします……この人達と、お話する時間をください！！！」

そうか。

美琴は気づいた。

私また……。

また、同じ間違いを犯そうとしてしまっていたことに。

力がなくて傷ついた人達なんだもん。力で押し伏せるなんて、しちやいけない。

「私からも……私からもお願いっ！！！！！！
絶対に何とかする！だから……一度だけワガママ聞いて！！！」

佐天が倒れた時だって、自分の無神経な言葉が彼女の背を押してしまった。

だからこそ……話したい。しっかり話して誤解をなくしたい。

佐天だけではなく、みんなと。力無きことに苦しんだ全員と。

少女達の切実なまでの願い。

紅麗は何も言わずに、炎の翼を消滅させた。

「兄者……」

小金井は僅かばかりに微笑んだ。

「……やっぱり、紅麗は優しーや」

以前なら、誰かの指図で攻撃を止めることなどなかった。

紅麗も変わっている。少しずつ、少しずつ。

それはきつと、烈火のせいだけではないだろう。

小金井は美琴と初春に向き直り訪ねる。

「でも、話すってどうやんの？普通に喋っても意味ないだろうし、言霊でも……」

「ウツ、それは……」

どうも、何も考えていなかったらしい。

何というか、この辺がとてつもなく烈火や土門に似ている。

「……同期させることは出来ないか？」

木山がそう呟いた。

初春は小首を傾げながら、

「同期って……幻想猛獣とシンクロしろってことですか？」

「ああ。アレは物体を認識するために電磁波を発している。それとここにいる人間の意識を繋ぐんだ」

「んなもんどーやって……って、あつ！」

それが愚問だと言うことに、小金井はすぐに気づいた。

何故なら、この場にはいるからだ。『電撃使い（エレクトロマスター）』『LEVEL5』。常盤台の超電磁砲が。

「……中々にキツツイ仕事じゃない」

言葉とは裏腹に、美琴の顔は不敵な笑みを浮かべている。だが、

「でも……いくら御坂さんでも一万人分の脳波のパターンなんて……」

初春の弱気な声。

確かにその通りだ。美琴とて、その程度は理解している。

だが、諦めない。ついさつきそう誓ったばかりだ。

そんな美琴に、木山は右手を差し出した。

「私を使ってくれ。一時的とはいえ、ついさつきまで一万人分の脳波を宿していた……まだ繋がりは完璧には絶たれていないハズだ」

続いて初春も手を挙げる。

「私も手伝います！私、コンピューターとか得意ですから！！それ

に……」

初春はほんの少しだけ幻想猛獣に視線をぶつけ、

「私も佐天さんを、『友達』を助けたいんです!!」

美琴は二人の眼をじっと見つめ、やがて小さく微笑んだ。

「……しよーがないわね。時間がないからさっさとやるわよ!!」

両手で木山と初春の手を取った美琴は、もう一度二人に確認する。

「一応訊いておくけど、本当に良いのよね?同期に失敗したらどうなるかわからないわよ。」

特に初春さん。最悪、一万人分の脳波がフィードバックして、脳にダメージを与えるかも知れない。それでも……」

「やります!!」

言い切る前に答えを出された。迷いはない。

「諦めない覚悟を決めたのは君だけではないよ……私も、責任を取りたい」

心に届いた二人の意思。美琴は目を瞑り、大きく深呼吸して、思い切り息を吐き切るように叫んだ。

「そんじゃやるわよ!!」

そのやり取りを横から眺め、小金井は鋼金暗器を握り直した。

(みんな、そっちは頼んだよ。足止めはオレが……！)

修復作業を終了したバケモノは、またも原子力実験場へ進撃する。紅麗は動かない。ただじつと、幻想猛獣を観察してるように見えた。

(兄者の援護は期待出来ない……ま、当然か)

こちらは既にワガママを押し通した身。多くは望めない……が、それでも戦闘意欲は衰えない。

ズキリ、と先の戦いで幻覚の烈火に斬られたキズが痛んだ。ついさっきの初春との行軍の時もだったが、機動力は封じられている。

しかし

(三分。何とかしてアイツの動きを止めてみせる……！！)

小金井薫の闘志が消えることはない。

小金井は大きく空気を吸って肺一杯に酸素を取り込むと、いつも出陣前に聞いていたのと同じように叫んだ。

「行くぞ固羅アアアアア！」

戦いはもうすぐ終わる。

小金井はまだ知らない。

戦いの後に生じる大きな大きな『亀裂』を。

其之陸拾伍：光芒

美琴の手から電流が発生し、それが初春の体に流れ込む。

最初は線香花火のようにか弱い電流を、徐々に強めていく。少しずつ、少しずつ。

そして、僅かばかり気を緩め

「いたっ!？」

ほんの一瞬制御を失った電流が、初春の手に痛みを与えた。

「あっ……しまった!う、初春さん大丈夫……?」

申し訳なさそうな声でそう訊く美琴に初春は笑って答える。

「大丈夫ですよ!それより御坂さん。もう一回やりましょう!」

「……わかった」

再度初春の手を握り、電気を体に流し込む。

今度こそ気を抜かない。

神経を研ぎ澄ませ、集中力を高め、演算を開始する。

ごくごく単純に言ってしまうえば、今美琴がやろうとしているのは歯車を噛み合わせる事。

まず初春と、次に木山と。

しかし、当然ながら話はそう単純ではない。

一つ失敗して初春の生体電流を狂わせれば命すら奪いかねない状況、流石の美琴も額から汗を垂らす。

木山は息を飲んでその光景を見守っている。
LEVEL5の超電磁砲とはいえ、人の脳に侵入しあまつさえ脳波を同期させる経験などあるはずもない。

しかも、美琴が繋げようとしているのは一万人分。いくら木山の中に脳波の残滓があるとはいえ、あまりに無謀すぎる挑戦。
例え美琴であつても

と、そこまで考えて、木山は左右に首を振った。

（何をバカな……信じるしかないだろう。彼女たちが私を信じてくれたように）

可能性はほとんどゼロに等しい。それでも彼女は諦めなかった。
友達を助けるために。

「……繋がった」

初春と手を繋ぎながら、目を閉じた美琴がそう口にした。
木山は息を吐くと、自分も美琴の手を掴む。

「頼むよ」

「任せなさい」

美琴は木山の手を強く掴み直すと、初春にやった時と同様に電流を流し込んだ。

今度は一度の失敗もなく、あっさりと同期に成功した。
初春の演算能力のお陰だ。

『さっすがー 「ゴールキーパー守護神」の異名は伊達じゃないわね!』

『いやあ、それほどでもありませんけど〜』

『ほら、バカやってないでさっさとしなさい』

繋がった脳波の中で、まるでチャットのように会話を交わ美琴と初春は、木山に促されて彼女の脳内にタイプ潜行する。

膨大なデータの海から二人が探すのは幻想御手の残滓。幻想猛獣へと繋がる唯一の道。

『み、御坂さん……コレって』

『ビンゴ 例のデータね』

幻想御手のデータはそもそも木山の脳内にあってはならないモノ。まるで和紙の上に出て来た墨汁のシミのように、それはアツサリ見つかった。

『よしゃ、データ読み取り完了よ!あとは……!』

『幻想猛獣に、ハッキングを仕掛けるだけです……!』

二人は順調に作業を進め、一枚ずつゆっくりと正確に扉を開いて奥へと進む。

ファイヤウォールも迎撃プログラムも、超一流のハッカーコンビの前にはオモチャのように沈黙する他ない。

そうして、遂に到達する最大最堅の壁。すなわち、一万人とのシンクロ。

『行くわよ、初春さん!』

『ハイ、御坂さん!』

情報戦が始まった。

「四之型、『三日月』! 武羽冥乱!」

鋼金暗器を四之型へと変形させ、小金井は右足を軸にその場で独楽のように回転を始める。

「うおりゃあああああああ!」

今、小金井の左足はマトモに動かない。ゆえに、普通にやれば鋼金暗器の威力を殺さず投擲することはできない。

だから回転する。

遠心力によつて、不完全な体で完全な一撃を生み出す!

「いつけえええええええ!」

小金井の手を離れた三日月の刃は進路上にあるバケモノの触手を叩き斬りながら大きく弧を描き、小金井の元へ戻ってくる。

「次は……二之型『龍』だ!」

戻ってきた鋼金暗器を受け止めて、素早く鎖鎌に変形させる。同時に、バケモノが小金井に触手を叩きつける。

小金井は右足一本の跳躍でそれを回避すると、鎌を触手へ投擲し鎖を巻きつけ、刃を突き刺した。

「縮め!!」

小金井のその声に呼応して『金』と書かれた鋼金暗器の核が輝きを発し、胴体が鎖を巻き取って小金井の体を触手へと勢いよく引つ張った。

小金井は勢いに体を預けて触手に飛び乗ると、突き刺さった鎌を掴んで 一気に触手を引き裂いた。

触手に大きな裂傷が生じると、今度は一之型『牙』がそれを抉って触手を完全に両断する。

小金井は分断された触手と共に地面に落下しそうになるが、咄嗟に鋼金暗器を突き刺してそれを免れ、今度は触手を滑り降りて、本体へと突撃!

勢いづいたところで片足の跳躍を繰り出し、重力を味方に金色の刃を振りかぶって幻想猛獣へと向かっていく。

「ああああああああああ!!」

鋼金暗器の一閃が、バケモノの体を引き裂かんとして

「がつ……!!」

しかし、見えざる衝撃が小金井の体を吹き飛ばし、彼の攻撃は防がれてしまった。

空中で大きくバランスを崩した小金井は体勢を立て直すことも叶わず、そのまま落下し地面に激突した。

「アイタタタ……チキショー、やっぱ兄者みたいにはいかねーや」

大の字でそう言いながらも、小金井は笑う。

劣勢を楽しむように、兄の強さを再確認出来たのが嬉しかったかのように。

チラリと紅麗の方を伺う。紅麗に動こうとする気配はなく、ただ黙ってそこに立っていた。

(援護は期待できない。……ま、いいや。てゆーか)

「援護なんていらねーし……!!」

再び迫り来る触手の一撃。

小金井は、体を起こして鋼金暗器を構えた。

「三之型！極！！」

今度の姿は大剣。

単調な攻撃をすり抜けるように小金井は触手を斬り刻む。さらに一本の触手がバラバラに斬り落とされた。

「オレは十神衆にだって、死四天にだって勝ったんだ！わりーけど、そうカンタンにはやられないよ！！」

『ゴルキーパー
守護神』。

数多のハッカー達からそう呼ばれ恐れられている存在、それが初春飾利。

能力そのものはLEVEL1だが、その演算能力は非常に高く、暗号解読やデータ解析に関してはLEVEL5の美琴すら凌ぐ腕前だ。その力は幻想猛獣との同期にも大きく役立っている。

作業開始から45秒が経過した。

小金井の足止めは三分。実にその1/4の間に、美琴と初春は既に3500のデータを解析し終えていた。

『すごいペースよ！これなら……』

『これなら、なんとかかなりそうです！』

嬉しい誤算、というヤツだ。

合わさった美琴と初春の力は想像以上に強く、一万の脳波という壁は思ったより薄かった。

4000、4500、5000……驚くべきスピードで進むデータ解析。

90秒が過ぎた時には、未処理のデータは僅か3000となっていた。

いける……間に合う……これなら、これなら皆を救える……！

希望が力となり、処理速度を促進させる。

同期されていないデータはとうとう2000を切った。

そうして、ラストスパートをかけるべく新たなデータに触れ
瞬間、大量の脳波パターンが美琴と初春の脳内に流れ込んだ。

「あぐうッ……!？」

「きゃっ……!！」

途端、脳に激痛が走った。

美琴は即座に幻想猛獣との接続を断ち、さらに初春との同期も終了
させる。

「くっ……ッ……!！」

二人の少女は膝を折り、力無くその場にへたり込んだ。

「どうした！大丈夫か!？」

突然の強制切断で異変に気づいた木山が、美琴の肩を揺さぶった。
美琴は弱々しく……

「……間に合わない」

そう、返答した。

「わかってたのに……注意しなきゃって。油断しちゃいけないって
……わかってたハズなのに……」

あと少し、あと少しだった。
あと少しで届いていた。

最後の最後で、油断からとんでもない不注意を犯してしまった。きちんと手順を踏んでいれば、あのデータも処理出来たはずだった。なのに……

「なんで、なんであんなトコでミスしちゃったのよ……！！」

美琴は地面に掌を叩きつけ、掻きむしるようにして拳を握った。初春はただ呆然と虚空を見つめている。

「うわあああああ！？」

木山の耳に叫び声が聞こえた。

見ると、小金井が幻想猛獣の触手に吹き飛ばされていた。

土埃を巻き上げながら地面を滑り、実験場の壁に激突して止まる小金井。鋼金暗器を地面についてなんとか立ち上がるが、その足は頼りなくふらついていた。

無理もない。足のケガに加えて、自分と戦った時のダメージもある。もう、足止めは不可能だ。木山はそう結論づけた。

つまりは……

「倒すしか、ない」

力に苦しみ、力無きことに苦しんだ。

そんな彼らを、目覚めさせる方法すら定かではない状況で、もう一度力によって押し伏せなければならぬ。

(……非道な真似だ。そして、その原因を作ったのは他でもない、この私つ……！)

思わず、拳を握っていた。

だが、どれだけ悔やんでも最最後の祭りにしかならない。
放っておけばバケモノは原子力実験場へと突入し、大惨事を引き起
こしてしまっただろう。ならばやはり……

(倒す以外に道は……)

『私たち、学園都市に育ててもらってるから。この街の役に立てる
ようになりたいなー、って』

「……ッ、枝……先……！」

あの子たちは、学園都市に利用されていた。

利用されるだけ利用されて、最後は棄てられた。

もう二度と、あんな悲劇は起こしたくない……！

しかし、彼らを助ける術もない。

データチップは破損し、美琴と初春もグロッキー状態。

力を失った自分にはあのバケモノの足止めすら叶わない。

(せめて、魔導具があれば)

魔導具。

その単語が、木山の中で引っ掛かった。

(魔導具……言霊……！そうだ、これなら……！)

「二人とも、まだ手はある！皆を救う方法はある……！」

「へっ？な、なによソレ……！」

「どーいこうとで……」

「待っている！」

事態を呑み込めていない美琴と初春だが、説明している時間などない。

木山は小金井の下に向かって駆け出した。

（なぜ、気づかなかったんだ……簡単なことだったじゃないか。急いで、急いで実行しないと……）

急いでいく気持ちだが、残念ながら身体は思うようには進まない。元々運動などあまりしなかったこともあるが、それ以上に先の戦闘で負ったダメージの影響が大きかった。懸命に足を動かしても、激痛と倦怠感が身体を襲い、極端にスピードを奪っていく。

「くっ……！」

遂に木山の身体は崩れ落ち、膝を地面についでしまう。だが、それでも彼女は止まらない。

「止まって、たまるか……！」

ふらつく脚を踏ん張って、どうにか立ち上がるうとする。

すると、フツと身体が軽くなるのを感じた。木山の両側から、美琴と初春が彼女の身体を支えていた。

「君たち……」

「どついつワケが知らないケド、アンタの言葉信じさせて貰うわよ！」

「頑張りましょう、先生！」

「……ああ、もちろんだ！」

彼女たちの戦いは、まだ終わってはいない。

「ぐぬぬぬぬ……！！」

鋼金暗器を地面に突いて、小金井は必死に身体を立ち上がらせた。だが、それだけ。

武器をとって戦う程の力は、もう小金井の小さな身体に残ってはいない。

小金井が無力化したとて、バケモノは止まらない。ただ愚直に原子力実験場へと進んでくる。

（この様子だと、美琴ちゃん達はダメだったのかな？……ヤッベーや、もう足止めはムリだしね）

なら、見捨てるしかない。

一万の学生を、佐天涙子を。

小金井にしては珍しく緩やかな所作で鋼金暗器を変形させる。

姿を表したのは、五之型『暗』 即ち、『魔弓』。
全てを射抜く金色の弓矢。

これを使って、幻想猛獣の核を砕く。
そうすれば、全てが終わる。

弓を引き絞り、バケモノの身体の中心に照準を合わせる。
後は、手を放せばイイ。たったそれだけのこと。

だが、それは叶わない。
ゆっくりと弦を緩めて、矢から手を放して地面に転がす。

何かを犠牲にしてまで勝つことなど、小金井薫には土台ムリな話だった。

(紅麗はきつと、『甘い』って言うんだろうな。でも、友達を見捨てるなんてオレには……)

「諦めるのは早い!!」

その声が、深い闇に落ちそうになっていた小金井の心を繋ぎ止める。
美琴と初春に支えられながら歩いて来る、木山春生の声が。

「木山センサー……」

「手はまだあった! 『言霊』を使うんだ!」

『言霊』。自分も一度はその魔導具の使用を考えた。
だが……

「ムリだよ……言霊は耳から脳に作用するんだ。聴覚がないアイツ

には……」

「私が耳になる」

「……えっ？」

「さっきまでとは違う……今、私と幻想猛獣の脳波は繋がっている。この二人のお陰だね」

そう言いながら、木山は美琴と初春に目配せする。

小金井はまだ木山の言葉を理解できていない。

「私に言霊を使うんだ。そうすれば、私を介して幻想猛獣にも言霊の効果が届く！」

それはまさに光芒。

暗い闇の中に射した、一筋の光の道。

小金井も美琴も、その意味を完全に理解した。

「えっ、ええ？言霊ってなんですか？」

ただ一人、『言霊』の存在を知らない初春は困惑している。

そんな少女に、小金井から言霊を受け取った美琴は笑って見せた。

「……今度こそ、佐天さん達助けるわよ！」

それだけ言って、美琴は木山の方へ向き直る。そして、目を閉じた木山へと言霊を突きだし、

「刮目しなさいー！」

キーとなる言葉を叫んだ。

「ホントなら、私ぐちぐち文句聞くのなんかキライだけど……今日は特別よ！アンタらの不満は全部聞いてやるわ！だから……だからぶちまけちゃいなさい！！！」

簡潔な言葉に反応して、言霊の核が光を放つ。

その光は全てを呑み込んでしまいそうな程に大きく広がり、美琴達四人を誘った。

其之陸拾伍・光芒（後書き）

なんか言霊が超万能魔導具になっていくWWW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5119m/>

とある忍術の火影忍軍

2011年12月29日03時39分発行